STUDIA TIBETICA No.11

# 西蔵仏教宗義研究

## 第四巻

—トゥカン『一切宗義』モンゴルの章—

ཐུན་ལུགས་གྲུབ་མཐའ་རྣམ་གྲོལ་གསལ། ।

福田洋一
石濱裕美子 著

財団法人 東洋文庫

1986

STUDIA TIBETICA No.11

# *A STUDY OF THE GRUB MTHAḤ OF TIBETAN BUDDHISM*

## *Volume 4*

*—On the chapter on the history of mongolian Buddhism of Thuḥu bkwan's Grub mthaḥ —*

*Yoichi Fukuda*
*Yumiko Ishihama*

*THE TOYO BUNKO*
*1986*

# ま え が き

これは、東洋文庫において1961年以来行われている「チベット人との協同によるチベットの言語・歴史・宗教・社会の総合的研究」の成果の一部である。本書を執筆するにあたり山口瑞鳳博士には下原稿を御読み戴き、貴重な御教示を多数戴いた。しかし残念ながら時間的な制約もあり、それらを十分活かせなかった。深甚の謝意を表すとともに、深くお詫び申し上げたい。また、吉田順一教授並びに、David Jackson 氏には、史料の収集に際して、多大な便宜を図って戴いた。深く御礼申し上げたい。研究期間中には、東洋文庫所蔵の文献を広汎に利用させて戴いた。東洋文庫当局に併せて御礼申し上げたい。

本書は２人の著者の共同執筆であるが、第１部については、第１章、第４章は福田、第２、３、５章は、石濱が分担した。その他の部分もほぼそれらの内容に準じて分担した。浅学非才なため、様々な遺漏もあるであろうが、それらの点については、先学識者の御示教を仰ぎたい。

1986年 3月

福 田 洋 一
石 濱 裕 美 子

# 目　次

まえがき

目　次

略語表

第一部　研究

第１章　トゥカン『一切宗義』「モンゴルの章」の構成と歴史資料としての性格　1

第２章　青海グンルン寺を巡る交友関係　12

第３章　モンゴル年代記の史料上の性格　21

第４章　サキャ派と元朝の関係　29

1．サキャパンディタ伝の考察　29

2．パクパ伝の比較考察　45

3．チューキ・ウーセル　73

4．『パクサム・ジョンサン』に記述されたサキャ派元朝関係記事の特殊性　76

第５章ゲールク派政権成立時に於けるハルハ=モンゴル部の動静　79

1．16 世紀後半のモンゴル：アバタイ・ハーンとフンドレン・チョークル　79

2．モンゴル諸王侯と紅帽派の関係　82

3．ゲールク派政権成立時に於けるハルハ王侯の動向　84

第二部　トゥカン『一切宗義』「モンゴルの章」訳註

『一切宗義』「モンゴルの章」訳　103

『一切宗義』「モンゴルの章」註　112

第三部　『一切宗義』「モンゴルの章」テキスト　131



Appendix

A：スムパ・ケンポ、チャンキャ、ジクメ・ワンポ、トゥカンの伝記対応表　143

B：チベット語史料とモンゴル年代記の原文の対照テキスト　147

C：パクパ聴聞録における教師のリスト　160

D：『ゴル仏教史』におけるパクパの弟子のリスト　161

E：パクパ『タントラ目録』　162

F：パクパ著作タイトル諸資料　166

G：諸史料に見られるモンゴルの王統表　185

文献表

1．チベット語文献　191

2．モンゴル語文語文献　197

3．欧文文献　198

4．ロシア語及び現代モンゴル語の文献　202

5．漢文文献　203

6．邦文文献　204

## THE LIST OF ABBREVIATIONS

AN = Asaraγci neretü yin teüke. Byamba. 『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』

AQ = Cakravarti Altan qaγan töröl-i uquγulqui Erdeni toli. 『アルタン・ハン伝』

AT = Altan tobci, Lobsang danjin. 『ロブサン・ダンジンのアルタン・トプチ』

BAC = Bodhicaryavatara のチューキウーセルによる注釈 (Cleaves ed.)

BAM = Bodhicaryavatara のモンゴル語訳 (Vladimircov ed.)

CNT(1) = Ngag dbang thub bstan dbang phyug. Nyi ma'i 'od zer.『チュサンワのチャンキャ２世伝』

CNT(2) = Blo bzang chos kyi nyi ma. dGe ldan bstan pa'i mdzes rgyan.『トゥカンのチャンキャ２世伝』

CTK = dKon mchog 'jig med dbang po. dKar chag yid bzhin nor bu'i phreng ba.『チョーネ版目録』

DGT = dKon mchog bstan pa dar rgyas. Deb ther rgya mtsho.『テプテル・ギャムツォ』

DHCB = Dam chos rgya mtsho, ダルマターラの『モンゴル仏教史』

DNG = gZhon nu dpal, 'Gos lo tsa ba. Deb ther sngon po.『青冊史』

DMS = bSod nams grags po. Deb ther dmar po gsar ma.『新赤冊史』

DPS = Sum pa mkhan po. 'Dzam gling spyi bshad ngo mtshar gtam stan. 『世界の構造』

D3N = Ngag dbang blo bzang rgya mtsho. dNgos grub rgya mtsho'i shing rta.『ダライラマ３世伝』

D4N = Ngag dbang blo bzang rgya mtsho.『ダライラマ４世伝』

D5N = Ngag dbang blo bzang rgya mtsho.『ダライラマ５世伝』

D5Z = Ngag dbang blo bzang rgya mtsho. rDzogs ldan gzhon nu'i dga' ston dpid kyi rgyal mo'i glu dbyangs.『ダライラマ５世年代記』

ET = Erdeni yin tobci. Saγang secen.『エルデニ・イン・トプチ』

ETPM = Lokesh Chandra. Eminent Tibetan Polymaths of Mongolia.

GBY = Shribhūtibhadra. rGya bod yig tshang.『ギャプイクツァン』

GRM = bSod nams rgyal mtshan. rGyal rabs gsal ba'i me long.『王統明示鏡』

GKC = Blo bzang chos kyi nyi ma. Chos sde chen po dgon lung byams pa gling gi dkar chag. 『グンルン寺目録』

GSS = Geden Sungrab Minyam Gyunphel Series.

GSM = Blo bzang chos kyi nyi ma. Legs bshad shel gyi me long.『一切宗義』

GTD = 'jam dpal chos kyi bstan 'dzin 'phrin las. 'Dzam gling chen po'i rgyas bshad.『ザムリン・ゲェーシェー』

HDT = Kun dga' rdo rje. Hu lan deb ther.『赤冊史』

HTSB =『白樺法典』

JTT = Jirken-ü tolta yin tayilburi.『ズルヘントルタ』(Pagba ed.)



JHCB = 'jigs med rig pa'i rdo rje. ジクメリクペードルジェの『蒙古仏教史』

JSM = Blo bzang 'phrin las, Ja ya pandita. Thob yig gsal ba'i me long. ザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』

J1N = dKon mchog 'jig med dbang po. Ngo mtshar skal bzang 'jug sngogs.『ジャムヤン・シェーパ１世伝』

J2N = dKon mchog bstan pa'i sgron me. rGyal sras rgya mtsho'i 'jug ngogs.『ジャムヤン・シェーパ２世伝』

KGT = dPa ba gtug lag 'phreng ba. mKhas pa'i dga' ston.『学者の宴』

KJS = Glo bo mkhan chen. mKhas pa rnams 'jug pa'i sgo'i rnam par bshad pa.

KKNT = Chos kyi 'byung gnas. bsGrub rgyud Karma kam tshang brgyud pa rin po che'i rnam par thar pa. 『カルマ派伝記集』

KTM = Ngag dbang blo bzang. bsTan 'dzing gyi skyes bu rgya bod du byon pa'i ming gi grangs.『ロンドル・ラマの聖者名簿』

LBLS = Lam 'bras slob bshad. 東洋文庫蔵。

LBN = bSod nams rgyal mtshan. Lam 'bras rnam thar.

MK = Mingγan kegesütü. Siregetü güüsi Dharma.『金輻千輪』

NCB = dKon mchog lhun grub. Dam pa'i chos kyi 'byung tshul bstan pa'i rgya mtshor 'jug pa'i gru chen.『ゴル仏教史』

RNG = Ngag dbang blo bzang rgya msho. rGya bod hor sog gi mchog dman bar ba rnams la 'phrin yig snyan ngag su bkod pa.『ダライラマ５世の手紙集』

PSJZ = Ye shes dpal 'byor. dPag bsam ljon bzang.『パクサム・ジョンサン』

P1N = Blo bzang chos kyi rgyal mtshan. Nor bu'i phreng ba.『パンチェンラマ１世伝』

SDR = Ngag dbang kun dga' bsod nams grags pa rgyal mtshan. Sa skya'i gdung rabs.『サキャ派年代記』

SKKB = Sa skya bka' 'bum.『サキャ全書』東洋文庫, 1969.

SNT = Ye shes dpal 'byor. sGra 'dzin bcud len.『スムパケンポ自伝』

SPS = Śatapiṭaka Series.

TGK = mGon po skyabs. Chen po thang tar dus kyi rgya tar zhing gi bkod pa'i dkar chag.『大唐西域記チベット語訳』

THL = Vostrikov. Tibetan Histrical Literature.

TLG = Ye shes dpal 'byor. mTsho sngon gyi lo rgyus.『青海記』

TPS = Tucci. Tibetan Painted Scrolls.

T1N(1) = Blo bzang 'jig med. Punda ri ka'i 'khri shing.『ロサンジクメのトゥカン伝』

T1N(2) = dKon mchog bstan pa'i sgron me. Padma dkar po.『グンタンのトゥカン伝』

VSP = Sangs rgyas rgya mtsho. Bai durya ser po'i me long.『ヴァイドゥーリャー・セルポ』

＊注記：本巻では、チベット語の表記は、北村=ワィリー方式、モンゴル語の表記は、おおむねポッペ方式によっている。ただし若干の特殊な字体は、理解を混乱させない範囲で簡略化されている。特にチベット語で、pandita は pandita と略記し、また長音記号も多くの場合表記していない。読者の御寛恕をお願いしたい。



# 第 1 部

## 研 究

## 第１章　トゥカン『一切宗義』「モンゴルの章」の構成と歴史資料としての性格

『一切宗義の歴史と主張を示す善説水晶鏡』Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa : legs bshad shel gyi me long は、その著者トゥカン=ロサンチューキニンマ（Thu'u bkvan bLo bzang chos kyi nyi ma, 1737-1802）が死の直前、病を押して完成した著作である。その後書は著者自身によるもの（GSM, 19b4-21a2）と、その死後弟子の手によって付け加えられたもの２種（GSM. 21a3-4; 21b1-22a2）とから成る。トゥカン自身の後書には完成の日付は、1801年12月８日[1]（GSM, 20b3）と記されている。しかし後に付加された後書によれば、トゥカンは完成の後もなお校訂に努めたが、ざっと目を通したのみで、詳しく検討する暇もなく亡くなったようである。弟子によって付け加えられた最後の後書には次のようにある。

> 知るべき事柄を余すところなく、掌を見るが如くに御覧になった一切智者ジェブツン=ロサンチューキニンマ=ペルサンボこのかたは、初めこの宗義書を新たに著作なさった時、これまでチベットの宗義を解説した者がいなかったので非常に困難であったが、それぞれの主張などを詳しく書き、認められるところ、認められないところの肯定と否定とをそれぞれを混乱せずに提示した。ゲデン派（dGe ldan pa、即ちゲールク派）の章では、それらそれぞれの見解（chos lugs）の承認できるものすべてをゲールク派の見・修・定（lta sgom sbyor）の３つと経・咒の何れの要諦に収めるかということと、その上で〔ゲールク派の主張には他と〕異なる殊勝なる法がどのようにあるかということ、それによって宗義の設定をよく知り、優劣の違いを分けることが重要であること、そして他の〔学派の主張〕についても、それぞれの真義となっているところを、好悪や非難の適切でないところを詳しく提示しなければならない、と何度も何度もおっしゃっていたけれども、所化の業をお考えになって途中から病の様子を示し、1802年６月10日に空行にいらっしゃる（即ち、お亡くなりになる）という御意志は何とお願いしても翻すことのできないものであった。そこで６月８日まで（zla tshes kyi nyin bar du）以前に著作したいくつかのものを校訂し、最後まで書き上げなければならないものを慌ただしく著作なさるなどの中で、この宗義書も簡略にまとめた形で御口述を急いで終わられ、ざっと校訂をなさるにいたっただけであったので、皆その旨を御推察願いたい（GSM, 21b1-22a2）。

トゥカンの最晩年の著作活動の様子がよく示されている。彼は常々ゲールク派を中心としたチベットの諸学派の見解を分析記述したような書物を著したいという願いを漏らしていた。しかしそれをまだ実現する前に病にかかり、死期の近いことを悟って、他の完成を要する著作ともども慌ただしく口述し、ほとんどそれを校訂する間もなく亡くなってしまった。このことからこの宗義書が著者自身の納得のいくような十分な検討を経たものではなかったということを、単なる謙遜でないとすれば、読み取ることもできるであろう。と同時に著作完成の日付も1801年にすべきか1802年にすべきかは単純には決定できないように思われる。

さてこのようにして著された『一切宗義』の全体の構成および性格については既に繰り

返し指摘されている[2]。そこでここでは以下に扱われる「モンゴルの章」の構成とその歴史資料としての性格のみを検討することにしよう。『一切宗義』の Na 章は、インド、チベット、中国以外の国の叙述に当てられている。『一切宗義』自身の科段は、この章を第１モンゴル（Hor yul, GSM, 2b2-10a1）、第２リユル（Li yul, GSM. 10a1-b2）、第３シャンバラ（Shambhla, GSM, 10b2-14b4）に分けている。モンゴルの部分は仏教に関係したところのチベット・モンゴル関係史の歴史的記述であり、リユル即ちコータン（Khotan）の部分は、歴史上の国とはいえ、半ば伝説的な記述になっている。シャンバラの記述は言うまでもなく、『カーラチャクラ=タントラ』の伝承に基づく神話的、黙示録的な内容である[3]。以下では歴史研究の立場からモンゴルの部分を中心に考察を加えたい。

ただしこのモンゴルの章が歴史資料として利用されるという可能性、あるいはその価値はほとんどなく、従ってこれを詳細に分析することにあまり意味は無いと考えられるかもしれない。しかしこの文献の成り立ちの考察をきっかけとして、その先に様々な方向の問題へと研究を展開させて行くことができるのでもある。この章の記述がそのような様々な研究を一つのチベット・モンゴル関係史に結び付ける役割を果たしていると言えるかもしれない。まずは全体の内容の梗概を示しておこう。上に述べたように、トゥカン自身の科段はごく簡略なもので、モンゴル史をひとまとめにしているにすぎないので、記述の内容に基づいて筆者が分節したものを示すことにする。

１．はじめに
２．チンギス・ハーンとクンガーニンポ　（1207年）[4]
３．サキャパンディタとクテン　（1244年-1251年）[5]
４．パクパ、カルマパクシとフビライ　（1253年-1280年）[6]
５．チューキウーセル　（1305年-1321年）[7]
６．ナルタン版大蔵経建立（ナルタン=リクレルとジャンペーヤン）（1300年代前半）[8]
７．カルマ派僧の蒙古巡錫等
　　ランチュンドルジェ　（1332年-1337年）[9]
　　ルルペードルジェ　（1360年-1362年）[9]
８．ソナムギャンツォ、ユンテンギャムツォとアルタンハン　（1577年-1616年）[10]
９．モンゴル大蔵経翻訳史　（1600年－1750年）[11]
１０．ハルハの仏教　（1577年-1723年）[12]
１１．トルゴートの仏教　（1628年-1771年）[13]
１２．ジュンガルの仏教　（1644年-1755年）[14]
１３．グシハーンの業績　（1582年-1642年）[15]
１４．グシハーンの子孫以後　（1654年以降）[16]

個々の内容に関しては第２部の翻訳および訳註を参照して頂きたい。ここに挙げられている年号はそこに記述されている事柄のおおよその年代を示しているにすぎない。

さてこの章も他の章と同様、過去の綱要書や歴史書の要約・抜粋という性格が強い。ほぼ全体にわたって元になったと思われる資料を推定することができる。即ち次の２種である[17]。

スムパケンポ『パクサムジョンサン』（PSJZ, 1748）

コンチョクジクメーワンポ『チョーネ版テンギュール目録』（CTK, 1773）

前者は有名な史書で説明の必用もないであろう。インド、チベット、年表を述べたあとに、中国およびモンゴルの王統史と仏教史をかなり詳しく扱っている。一方後者はその歴史資料としての価値についてすでにヴォストリコフ A.I.Vostrikov, Tibetan Historical Literature に指摘されているが、目録といっても単にテンギュールの書名を列挙したものではなく、全体の３分の２程は、仏陀からはじまりインド・チベットからモンゴルに至るまでの仏教史、いわゆる Chos byung に当てられ、後の３分の１がチョーネ版成立の事情を述べている。そのモンゴルの部分は簡略なものではあるが、特にアルタンハン以後に詳しく、『一切宗義』も上の分節番号12以下は大きくそれに依存している。次にそれぞれの対応箇所の一覧表を挙げておこう。

（表１）『一切宗義』「モンゴルの章」と他資料の対応表

| | GSM | PSJZ, III | PSJZ | CTK | DPS |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1a1-2b3 | | | | 10a2-3 |
| 2 | 2b3-3a1 | 167.6-167.15 | 312b5-312b7 | | |
| 3 | 3a2-3b3 | 167.15-168.19 | 312b7-313a5 | | |
| 4 | 3b3-5a2 | 168.22-170.14 | 313a7-313b6 | | |
| 5 | 5a2-5a4 | 170.15-171.1 | 313b7-314a1 | | |
| 6 | 5a4-5a6 | 171.1-171.8 | 314a1-314a2 | | |
| 7 | 5a6-5b2 | 171.8-171.17 | 314a2-314a4 | | |
| 8 | 5b2-5b5 | 171.17-172.2 | 314a4-314a6 | (183b1-183b4) | |
| 9 | 5b5-6a3 | 172.2-172.11 | 314a6-314b1 | | |
| １０ | 6a3-6b1 | | | | |
| １１ | 6b1-6b3 | | | | |
| １２ | 6b3-7a6 | | | 186a5-187a5 | |
| １３ | 7a6-9a5 | | | 183b4-185b2 | |
| １４ | 9a5-10a1<br>(9a6-9b2 | | | 186a3-186a5) | |

これらの対応箇所のうちには、ほぼそのまま転載しているものから、ところどころ数語を省略する程度で転載しているもの、叙述の内容および順序は同じで、その意味ではそれに基づいているとは言えるが、表現の上ではトゥカンが書き直しているものなど、その依存の程度は一定しない。個々の点において特に注意すべき事は、第２部の訳註において言及することにして、ここでは特徴的な２，３の例を挙げてみることにしよう。

２のジンギスカンとサキャ派のクンガーニンポの関係を述べる部分、即ちモンゴル仏教史の最初の記述の箇所は、『一切宗義』では次のようになっている。

１．stobs kyis 'khor los bsgyur ba Ching gi si

2. Bod du byon / mNga' ris skor gsum / dBus gTsang ru bzhi / Lho khams sgang gsum thams cad dbang du bsdus /

3. gTsang du mi sna byang ste Sa chen Kun dga' snying po la 'bul nod sogs bgyis shing mchod yon du gyur /

4. slad nas Sog yul du gdan 'dren pa'i zhu ba phul /

5. rten gsum 'ga' zhig gdan drangs / de la brten nas Sog po thams cad bstan pa la dad par gyur te dkon mchog mchod pa'i mgo tshugs / dge snyen sogs kyi sdom pa len pa'ang byung nas bstan pa'i dbu brnyes so //

6. 'di sangs rgyas 'das lo lcags 'brug la 'dod pa'i lugs ltar na / lo de nas nyis stong bya bdun dang / me yos la 'dod pa ltar na lo nyis stong zhi gcig pa rab byung bzhi pa'i me yos lo yin la / ... (GSM, 2b3-3a1)

一方それに対応する『パクサム・ジョンサン』は次のようである。

7. chos rgyal Ching ges kyis

8. Bod dBus nas gTsang du mi sna btang ste Sa skya Kun dga' snying po dang mchod yon mdzad de

9. dBsu gTsang nas rten gsum gdan drangs nas

10. sangs rgyas me yos la 'das pa'i lugs ltar na lo nyag nyis stong zhe gcig song pa'i rab byung bzhi ba'i me yos lor

11. Sog po kun gyis mi phyed pa'i dad pa thob ste mchod cing dge bsnyen sogsky i sdom ldan byung ba nas Sog yul du dam pa chos kyi dbu dngos rnyed de ... (PSJZ, Ⅲ, 167.6-12)

1＝7，3＝8，5＝9＋11，6＝10がほぼ対応しているのがみてとれるだろう。しかしまた『一切宗義』には『パクサムジョンサン』にない言葉、のみならず新たな情報も付け加えられていることにも注意しなければならない。このことはトゥカンが下敷にしたもうひとつ別の資料があったことを想わせる。個々の点については、第４章第３節で、『パクサム・ジョンサン』およびトゥカンの、他の資料に見られない情報に関して検討する際に取り上げよう。

また分節番号８のダライラマ３世ソナムギャンツォとアルタンハン、およびダライラマ４世ユンテンギャンツォについての記事の対応箇所は次のようになっている。

『一切宗義』(GSM, 5b2-5)：

1. Thu med kyi Al than han gyi dus rGyal dbang gsum pa bSod nams rgya mtsho Sog yul du byon 'dug cing /

2. Sog po rnams kyis Ong gvong mchod pa'i ched du srog gcod mang po byed pa'i srol bcad /

3. Zhva ser gi bstan pa'i srol btsugs /

4. rGyal dbang de nyid Sog yul du mya ngan las 'das pa'i sprul sku rGyal dbang bzhi pa Yon tan rgya mtsho Sog yul du sku 'khrungs pas lhag par Sog yul du bstan pa dar ba la snam par gyur /



5. Sog po thams cad dGe ldan pa'i sbyin bdag tu gyur.

『パクサムジョンサン』(PSJZ, Ⅲ, 171.17-172.2)：

6. phyis su Thu med kyi Al than rgyl phran gyi dus su rGyal dbang gsum pa bSod nams rgya mtsho sogs dam pa du ma byon nas

7. mu stegs spyod pa pa sogs ltar Od gvud mchod zer nas srog gcod kyi mchod sbyin byed sogs kyi chos log phal cher 'dor du bcug kyang

8. da dung yang cung zad re yod /

9. thams cad mkhyen pa Yon tan rgya mtsho Sog yul du 'khrungs pas lhag par Hor yul gyi bstan pa la sman par gyur zhing

10. Hor mi rnams dBus gTsang gi dGe ldan pa'i sbyin bdag gtso bor yang gyur.

『チョーネ版目録』(CTK, 183b1-4)：

11. phyis su Jing gir rgyal po'i brgyud pa Thu med Al than rgyal pos thams cad mkhyen pa bSod nams rgya mtsho gdan drangs /

12. gson gshin gyi dge bar rlom pa'i srog gcod pa sogs log chos kyi rgyud bcad / dam pa'i chos kyi snamg ba dkar pos khyab par mdzad /

13. rGyal ba'i dbang po 'di la Ta la'i bla ma ba dzra dha ra zhes mtshan gsol te /

14. mnyam med ri bo dGe ldan pa dang mchod yon du 'brel bar gyur /

15. gzhan yang Jing gir gyi brgyud pa Hal ha dang / tsho chen zhe dgur gnas pa'i dpon po rnams kyang dkon mchog gsum bla mar bzung ste bstan pa bstan 'dzin dang bcas pa la gus zhabs kyis mchod bzhin pa'o.

この箇所では『一切宗義』と『パクサムジョンサン』が近い関係にあり、それに対して『チョーネ版目録』は記述の順序がほぼ一致している点、『パクサムジョンサン』を下敷にしなければこのようにはならないと思われるが、表現の上ではかなりの相違を示し、前２者に含まれない情報（ダライラマの称号が付与されたこと、およびハルハの言及）を記している。その上での対応関係は、次のようになるであろう。

1＝6＝11
2＝7＝12
3≠8≠13
4＝9
5＝10＝14
　　≠15

分節番号13のグシハーンの事跡を述べている部分は、さらにコンチョクジクメーワンポが基づいている資料がある。『ダライラマ５世年代記』(1643) である。

この年代記の最後の章がグシハーンの一代記に当てられているが、明確な日付としては著作の前年1642年のことまでが述べられており、単にそのことだけで資料としての真憑性

が保証されるわけではないが、少なくともグシハーンについての最も古い、その意味で貴重な情報と言える。ジクメーワンポは、この『ダライラマ５世年代記』の記述を全体的に簡略にしつつ、たくさん挿入されていた予言を大部分省き、凝った言回しを判り易く書き直している。トゥカンはそのジクメーワンポに基づきつつ、そらに表現に手を加えている。その様子を少し見ておこう。

『ダライラマ５世年代記』(D5Z, 7b3-8a1)：

1．'di ni / gter ston Dri med lhun po'i lung bstan las / spyir yang mtha' dmag lan bdun mtha' ma la // badzra pa ni'i sprul pa'i rgyal po zhig // Bod Khams dar cig bde la sbyor ba 'byung // zhes gsang ba'i bdag po phyag na rdo rje mi'i srid pa'i zlos gar can yin par lung gis zin pas /

2．byang sems 'phags pa snying rje dang smon lam gyi dbang gis 'gro ba'i don du bsams bzhin chos ldan rgyal por skye ba bzung nas phan bde'i 'od brgya phyogs bcur 'gyed pa ste / ...

3．de yang byang phyogs Hor sog gi rgyal khams na sde chen po grangs med pa yod pa'i ya gyal / O rod tsho ba bzhir grags pa'i nang tshan / Ho shod kyi dpon po Ha na'i la jo mo A ha'i ha thun blangs par sras lnga byung ba'i gsum pa rgyal po 'di nyid chu pho rta'i lo la 'khrungs / mtshan Tho rol pa'i hur btags so.

『チョーネ版目録』(CTK, 183b4-184a1)：

4．byang phyogs O rod kyi yul du bstan 'dzin chos kyi rgyal po Gau shri han zhes bya ba byung ste /

5．gter ston Dri med lhun po'i lung bstan las / spyir yang mtha' dmag lan bdun tha ma la // bardza pa ni'i sprul pa'i rgyal po zhig // Bod Khams dar cig bde la sbyor ba 'byung // zhes dpal gsang ba'i bdag po phyag na rdo rje'i rnam 'phrul du lung bstan cing /

6．sar gnas kyi byang sems chos ldan rgyal po'i rnam par byon pa zhig ste /

7． de yang byang phyogs Hor sog gi rgyal khams na sde chen po grangs med pa yod pa'i ya rgyal / O rod tsho bzhir grags pa'i nang tshan / Ho shod kyi dpon po Ha na'i la / jo mo A ha'i ha thun blangs par sras lnga byung ba'i gsum pa rgyal po 'di nyid chu pho rta'i lo 'khrungs / mtshan Tho rol ba'i hur btags so.

『一切宗義』(GSM, 7a6-b2)：

8．O rod tsho bzhir grags pa'i nang tshan / Ho shod kyi dpon po Ha na'i sras Gu shri han bstan 'dzin chos kyi rgyal por grags pa ni / chu pho rta lo 'khrungs / mtshan Tho rol ba'i hur btags /

9．gter ston Dri med lhun po'i lung bstan las phyag na rdo rje'i rnam 'phrul du bshad cing /

10．sar gnas kyi byang sems chos ldan rgyal po'i rnam par byon pa zhig ste /



『チョーネ版目録』の４はグシハーンの名を出すために付加されたものであり、それを除いて考えれば、１＝５、および３＝７がほぼそのまま対応し、２は大幅に書き換えられて６となっているのがわかる。一方『一切宗義』は『チョーネ版目録』の４＋６を８に、５を９に、さらに簡略にし、６＝10をそのまま持ってきている。

さて以上からトゥカン『一切宗義』の文章の成り立ちの大まかなところはおわかりいただけたであろう。しかし一方ではこの『一切宗義』の資料的価値から言えば、このような煩雑な分析をする価値のあるものではないと言えるかもしれない。だがこのような操作から透けて見えてくる問題点がいくつかあるのも事実である。

まず上に言及した人物のうち、ダライラマ５世を別格として、あとの３人、スンパケンポ、コンチョクジクメーワンポ、トゥカンに、チャンキャ=ルルペードルジェ[19]を加えてみると、そこにある共通の雰囲気を纏っていることに気付くであろう。かれらはともに青海グンルン寺の座主を務めている。多少前後しながらほぼ同時代を生き、師・先輩・法友といった個人的な接触を持っている。18世紀の青海は、ロプサンダンジンの乱に代表されるように、清朝・チベット・モンゴルの間の様々な関係の吹溜りでもあった。次章では、そのような背景のもとにかれら４人がそれぞれどのような立場からどのような接触をしていたか、その全貌を明らかにすることはできないが、その一端だけでも垣間見てみたい。

上で簡単に検討した資料ソースとしての真憑性からいって、『一切宗義』に描かれたチベット・モンゴル関係史は大きく２つに分けることができる。即ち元朝時代、とりわけサキャ派との交渉史と、アルタンハン以降のゲールク派との交渉史である。これらはちょうどモンゴルへの仏教の前伝期と後伝期とに対応する。このうち後者に関しては、これらの史書の著作時期と割合近い時代なので、記述内容自体がそれほど破綻を来さず、資料のオリジナリティは少ないが、他の資料と同レヴェルで検討することができる。一方前者はトゥカンやスンパケンポの時代からはかなり隔っており、史実とのずれは大きい。従ってその文献操作の方法も前伝期と後伝期とでは異なってくるであろう。

一般にチベット・モンゴル関係史を研究する際に利用することのできる資料として、モンゴル語文献、漢文文献のほかに当然チベット語文献が挙げられる。チベット語文献に記述されるモンゴル史には次の３つのタイプがある。

１．王統史。モンゴル王統の祖先から始まり、ジンギスカンを経て元朝の諸皇帝、さらにはその末裔たち、諸部族の首領たちの系譜と、場合によっては簡単な事跡が述べられる。

２．サキャ派・カルマ派と元朝の関係史。これにはその両派の個々の僧の伝記の中に関説される場合と、一般史の中に織り込まれて記述される場合とがある。

３．ダライラマ３世以降のゲールク派を中心とした史書や伝記。この時期には一般史よりも個々の僧の伝記が多く、それも２の時代の伝記に比べてかなり大部なものが残されている。ただしそのことはそれらの資料が質、量ともに他の場合を上回るというわけではないことも注意されなければならない。

このうち１については Appendix においてその若干を抽出・検討してみることにしよう。２，３については以下第４章と第５章において、その資料の取り扱いかたも含めて検討してみたい。またモンゴル語資料の取り扱いについてもチベット語資料との比較対照は欠か

せない作業と言わなければならないが、その一つの例を第３章で示すことにしよう。それによって、モンゴル年代記がどの程度チベット語史書に依存しているか、を多少なりとも明らかにしたい。概して以下の研究は、争点となるような問題についての新たな解釈を示すことより、筆者たちの力の及ぶかぎりで文献の価値を注意深く検討した上で、様々な資料を提起しつつ、何らかの歴史像を記述することを主眼としている。



## 註

1）以下本書の中で使われる年号は、正確な西暦の年号ではいない。チベット暦・モンゴル暦・中国暦の60干支による年号を、それぞれの陰暦のまま、一般に用いられている方法で単純に西暦に変換したものである。西暦、あるいはそれら３種の陰暦には、ずれがあるのだから、それらを同一の年号に換算するのは、正確さを欠くことになるが、それを意識していれば、それぞれの暦の中での時間の長さと順序を示すことはできるので、便宜的に使用することにしたい。なお、チベット暦と中国暦の間のずれについては山口（1973）参照。中国暦については西暦との正確な対応表があるが、最近チベット暦についても、D. Schuh によって、コンピューターを利用しての詳細な対応表が公刊された（Schuh, 1973）。しかしそれは必ずしも利用しやすいものではないので、本書では敢えてそれを使うことをしなかった。

2）Smith (1969) pp. 1-3; Vostrikov (1970) pp. 156-158; 立川（1975）pp. 8-10; 西岡（1978）p. 1; 平松（1982）p. 124, 註1 参照。『一切宗義』には、現在入手しやすいものとして、Gedan Sungrab Minyam Gyuphel Series 中にZhol 版トゥカン全集の第２巻としてインドから洋装本で出版されたものと、東京大学所蔵蔵外文献 Nos. 100-111 の dGon lung 版がある。本書は、他の巻と同様、後者を底本として前者と校合した。巻末には、その dGon lung 版の複製を掲載した。Zhol 版の出版年次は、Gene Smith によれば、1934-38年である（トゥカン全集、Vol. 2, Introduction, p. 1, n. 1）。dGon lung 版の出版年次は、現在のところ確認されていない。dGon lung寺はトゥカンが座主をしていたなど、かれと関係が深い、謂わばお膝下の寺院であるが、この『一切宗義』の版本は、必ずしも Zhol 版に比べて優れているわけではない。またこの「モンゴルの章」にはすでに古く Ch. Das によるテキストと英訳がある（Das, 1882, pp.58-73）。しかしそれは厳密な訳ではなく、内容の検討を行ったものでもないので、本書の研究方法とは異なったものとして、特に問題とすることは避けた。さて本書の表面的な形態は、並列された12の章から成り、その章ごとに標題が付けられている。その12章の標題は、Smith (1969) pp. 2-3、西岡（1978）p. 1 に列挙されている。一方、『一切宗義』には通常の sa bcad も付けられている。そのチベットの部の大綱は、平松（1982）p. 124 に示されている。ここでは「モンゴルの章」の位置を確認するために、全体の sa bcad を、適当に要略して掲げておこう。その際一般の便宜を考慮して Zhol 版洋装本のページ数を示すことにする。

A1 : rGya gar 'Phags yul du byung tshul
A1B1 : Phyi pa Mu stegs pa'i byung tshul (11.6)
A1B2 : nang pa Sangs rgyas pa'i byung tshul (24.5)
A2 : Bod du grub mtha' byung tshul
A2B1 : spyir Sangs rgyas kyi bstan pa byung tshul
A2B1C1 : bstan pa snga dar byung ba'i tshul (56.4)

A2B1C2 : phyi dar byung ba'i tshul (60.2)
A2B2 : bye brag tu grub mtha' mi 'dra ba byung tshul (62.5)
A2B2C1D1 : rNying ma pa (63.5)
A2B2C1D2 : bKa' gdams pa (91)
A2B2C1D3 : bKa' rgyud pa (121)
A2B2C1D4 : Zhi byed pa (177)
A2B2C1D5 : Sa skya pa (195)
A2B2C1D6 : Jo nang pa (235)
A2B2C1D7 : Nyi tshe pa (257.2)
A2B2C2 : dGe lugs pa'i byung tshul (261)
A2B3 : 'phros don du mdo sngags rig gnas byung tshul (406.3)
A2B4 : zhar byung du Bon gyi lugs srol byung tshul (407)
A3 : Mahatsi na'i yul du byung tshul (421)
A3B1 : [She'u dang do'u byung tshul]
A3B1C1 : She'u zhes bya ba'i lugs srol byung tshul (424.3)
A3B1C2 : Do'u si zhes bya ba Bon gyi grub mtsha' byung tshul (444.3)
A3B2 : lugs srol nyi tshe ba 'ga' zhig byung tshul (447.6)
A3B3 : chos lugs Jing zhes grags pa Sangs rgyas kyi bstan pa rin po che rGya yul du ji ltar byung ba'i tshul (451)
A4 : yul gru gzhan 'ga' zhig tu byung tshul (483)
A4B1 : Sog yul (485.4)
A4B2 : Li yul (499.3)
A4B3 : Shambhala (500.3)
A5 : Grub don bshad pas mjug bsdu ba (508.4)
[Colophon A (516.3)
B (518.1)
C (518.2-519.4)]

3）リユルおよびシャムバラ、とりわけ後者はチベット仏教のある側面にとって重要な意味を持っており、歴史研究とは全く別の観点から、その伝説史・伝承史・文献史を解明する必要がある。それについては『宗義研究』の別の巻を予定している。

4）ジンキス・ハーンとサキャのラマ、クンガーニンポが施主・帰依処の関係になり、モンゴルに初めて仏教が伝えられたと、トゥカンの主張する年であるが、もちろん史実ではない。以下の註も含め、詳しくは第２部の訳および訳註を参照。
5）サキャパンディタがモンゴルに招聘された年から、モンゴルのリンチュツェで客死する年まで。
6）パクパとフビライの初めての会見の年からパクパが没する年まで。
7）翻訳家チューキウーセルの活動時期として確認されている期間。



8）ナルタン版大蔵経の成立時期ははっきりしていない。少なくともプトンの活躍以前である。
9）それぞれがモンゴルに招聘された期間。
10）ダライラマ３世がモンゴルを訪れた年からダライラマ４世の没年まで。
11）シレートグシの活動時期からモンゴル大蔵経テンギュルの開版の年まで。
12）ソナム・ギャムツォ（ダライラマ３世）がモンゴルのハルハに来た年からジェブツンダンパの没年まで。
13）トルグートがロシアの支配下に入った年とそれを脱する年。
14）ボショクト・ハーンの生年からジュンガル汗国の滅亡の年まで。
15）グシ・ハーンの生年からダライラマ政権の成立した年まで。
16）グシ・ハーンの没年以降。
17）ここに挙げた２つの著作以外に、分節番号１にインド・チベット・中国以外の諸国を列挙している部分は、スムパ・ケンポの『世界の構造』(DPS, 10a2-3) からの転載である。
18）モンゴル大蔵経の成立を述べる段で、トゥカンは『パクサム・ジョンサン』（1748）にはないチャンキャ・ルルペードルジェおよびその著書『正字通達の源』（1741）に言及している。

## 第２章　青海グンルン寺を巡る交友関係

前章において検討したように、『一切宗義』の著者トゥカンはこの「モンゴルの章」を書くに際して、同じ青海グンルン寺（蔵名 dGon lung byams pa gling / 漢名 佑寧寺）の座主を務めたスンパケンポやクンチョクジクメワンポの著書に多くを依拠していた。これにチャンキャ=ルルペードルジェを加えた４人は当時を代表する思想家、著述家として単に著書の上で繋がっていたばかりではなく、ほぼ同時代を生きるものとして具体的かつ深い接触を持っていた。その、かれらの生きた18世紀は、モンゴル・チベット・中国の３国がそれぞれの思惑のもとに複雑に絡み合った時代であった。かれらが住処としていたグンルン寺はそれら３国の境界に位置していたこともあって、その４人は３国を舞台に活躍することになる。またかれらのうち３人までは、文明の交差点に生を受けたにふさわしく、人種的には純粋なチベット人ではなかった [1]。そのことが３国の間に立ってのかれらの立場に微妙な影響を与えていたと言えるかもしれない。以下本章では、グンルン寺の歴史とそこを中心に活躍した４人の実際の交友関係を概観してみよう。

『ザムリン・ゲェーシェー』 によると、グンルン寺は西寧の北にあるチュサンゴン（Chu bzang dgon）の南東半日行程のところに位置している。「そこには僧が二千人近くいて、昔２人のチャンキャ活仏、『黄教仏教史』（Zhwa ser chos 'byung，即ち『パクサム・ジョンサン』）の著者スムパ・ケンポ、トゥカン・ロサン・チューキ・ニーマなど何人かの大人物（skyes bu dam pa）と学者（mkhas pa）もでた」（GTD，p.48; trans. pp. 109-110; cf. p. 196，nn. 760-764）と記されている。

グンルン寺の歴史は『ヴァイドゥーリャ・セルポ』、トゥカンによる『グンルン寺目録』bShad sgrub bstan pa'i 'byung gnas chos sde chen po dGon lung byams pa gling gi dkar chag（GKC）、『アムド仏教史』（DGT）などによって概略を知ることができる。『ヴァイドゥーリャ・セルポ』によるとダライラマ３世がタクギャ（brag rgya）に行った時、パソ・トゥルク=テンパ・ギャムツォ（Ba so sprul pa'i sku bsTan pa rgya mtsho）に地鎮をさせて、後にダライラマ４世がゲルセー=トンユ・ギャムツォ（rgyal sras don yod rgya mtsho）に対し寺廟建立の指示を与えた。工事は1604年に始められ、第１代座主にはこのゲルセー=トンユ・チョーキ・ギャムツォが就任した。青海の他の諸寺院は多くこのグンルン寺の末寺であり、中でも第10番目の座主トンドゥップ・ギャムツォ（Don grub rgya mtsho）が建てた寺ガンデンダムチューリン（蔵名 dGa' ldan dam chos gling / 漢名 広恵寺）は有名である。

以下は、グンルン寺の座主の表である。同様の表がすでに Sagaster (1967) pp. 342-347 および Gene Smith (1969) pp. 12-27 にも掲げられているが、前者はチャンキャ１世の『グンルン寺相承上師請願文「宝鬘」』と『パクサム・ジョサン』 レウミク，後者はトゥカンの『グンルン寺目録』中の座主系譜のみにもとづくだけで、他の文献との校訂をしていない。ここではトゥカンの『グンルン寺目録』中の座主系譜（GKC，pp. 660-766）をもとにして、『ヴァイドゥーリャ・セルポ』（267b4-268a5）『パクサム・ジョサン』 レウミクとによって校訂した。またチャンキャ１世のグンルン寺の座主系譜『グンルン寺相承上師請願文「宝鬘」』（P. No. 6393. Ja帙，122b8-124b8）はトゥカンのものとほぼ同じであったが、若干の語句が付け加えられていることがあり、それは下線を引いて示した。『ヴァイドゥーリャ・セルポ』あるいは『パクサム・ジョンサン』がトゥカンの座主系譜と異なっている場合には前者は< >、後者は{ }を用いてその相違を示した。斜線の前の部分は称号に類するもの、後の部分は固有名である。（ ）は通称を指す。-は-以降のものが省かれていることを、+はそれが付け加えられていることを示している。また同じ括弧のなかに-と+の表示がある場合には、-以下の部分の代わりに+以下の名称が入ることを意味する。年は在位年であるが、生没年が確認できる場合にはそれを括弧に入れて示してある。

(0)　/ Don yod chos kyi rgya mtsho (RGYAL SRAS 3)

(1)　1609-1612 : Lung rtogs mnga' bdag {Sum pa slob dpon} / Dam chos rgya mtsho

(2)　1612-1617 : mKhas pa'i dbang po <Gro tshang> / Phun tshogs rnam rgyal (KA RING DKA' BCU PA)　{確認とれず}

(3)　1617-1621 : Byang chub sems 'byongs {lHa ba chos rje} / bKra shis <-bKra shis, +Dur chos> phun tshogs

(4)　1621-1627 : {Sum pa slop dpon} / Dam chos rgya mtsho（チャンキャ一世の座主系譜には無い）

(5)　1627-1630 : Lung rig smra ba'i dbang phyug <bsam blo> {'Jam pa chos rje} / Chos rgya mtsho

(6)　1630-1633 : bTsun pa'i mchog gyur {lCang skya chos rje} / Grags pa 'od zer

(7)　1633-1637 : mKhyen brtse'i bdag nyid <Kha li tsha pa> {Sum pa slop dpon chung ba} / Dam chos rgyal mtshan

(8)　1637-1639 : mKhas grub chen po {sMon lam rab 'byams pa} / Tshul khrims rgya mtsho

(9)　1639-1648 (1578-1648) : bsTan 'gro'i dpal dgon {Chu bzang sku gong ma} <sTod lung chu bzang ba> /rnam rgyal dpal 'byor (CHU BZANG 1)

(10) 1648-1650 :mKhas pa'i mchog 'gyur <dGa' ba gdong phug pa> {Hor} / Don grub rgya mtsho (BSTAN PA)

(11) 1650　　: bsTan pa'i mnga' bdag {<bSam 'grub sgang pa>} / Blo bzang ngag gi dbang po (Ngag dbang blo bzang dbyangs chos)

(12) 1650-1653 : sMra ba'i nyi ma <Hor> {Har dung} / Don yod rgyal mtshan

(13) 1653-1656 : mDo rgyud mnga' bdag / bKra shis 'od zer <'Od zer bkra shis>

(14) 1657-1661 : Rig lam smra ba <sPag ras> {Thang po chos rje} / bKra shis rgyal mtshan

(15) 1661-1665 : bsLab gsum 'dzin pa {Lu'u kya chos rje} / Don yod chos grags

(16) 1665-1672 : Lung rig smra ba {bDe rgu cha ba} / dPal ldan rgya mtsho

(17) 1672-1675 : sMra ba'i dbang phyug {Thu'u bkwan chos rje} / Blo bzang rab brtan (THU'U BKWAN I)

(18) 1675-1680 : rTog pa mchog brnyes {Li kya dpon slob} / Blo bzang rgyal

mtshan <確認とれず>

(19) 1680-1688 : 'Gro mgon {sLop dpon rin po che <chu bzang sprul sku>}/ Blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan {-Blo bzang} (CHU BZANG 2)

(20) 1688-1690 : {<lCang skya> ta ko shri} / Ngag dbang blo bzang chos ldan (LCANG SKYA 1)

(21) 1690-1693 : sde snod 'dzin pa <Kha le> {rDo ba 'rab byams pa} / dpal ldan rgya mtsho

(22) 1693-1701 : gZhung brgya smra ba {bDe rgu chung ba} / Kun dga' rgyal mtshan {<-rgyal mtshan, +rgya mtsho>} <これ以降なし>

(23) 1701-1704 : {sTag lung zhabs drung} / Blo bzang bstan pa chos kyi nyi ma {-Blo bzang bstan pa}

(24) 1704-1712 (1680-1736) : Sems dpa' chen po / mKhyen rab {bDag gi rdo rje slop dpon chen li tha ma can} / Ngag dbang chos kyi rgya mtsho (THU'U BKWAN 2)

(25) 1712-1723 : {Chu bzang rin po che} / Blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan (CHU BZANG 2)

(26) 1723-1724 : / Ngag dbang bstan 'dzin 'phrin las ('DAN MA GRUB CHEN 2) {確認とれず}

(27) 1729-1734 : 'Dul ba 'dzin pa {Sum pa chos rje} / Phun tshogs rnam rgyal

(28) 1734-1737 : sDe snod 'dzin pa {Wang chos rje} / Grags pa dpal 'byor

(29) 1737-1740 : Byams brtse'i bdag nyid / Ngag dbang rnam rgyal

(30) 1740-1743 : mKhyen rab dbang phyug {bDe rgu zhabs drung} / Ngag dbang dge legs rgya mtsho {-ngag dbang, -rgya mtsho +rgyal mtshan} (BDE RGU3)

(31) 1743-1746 : Lung rig dbang phyug {rGyal tig rab 'byams pa} / Blo bzang don grub

(32) 1746-1749 (1704-1788) : Dam pa mkhan chen / Ye shes dpal 'byor (SUM PA MKHAN PO) {ここまで}

(33) 1749-1754 : Chu bzang sprul sku / Ngag dbang thub bstan dbang phyug (CHU BZANG 3)

(34) 1754-1756 : / Phun tshogs grags pa bstan 'dzin (LI KYA ZHABS DRUNG 2)

(35) 1756-1761 (1704-1788) : / Ye shes dpal 'byor (SUM PA MKHAN PO)

(36) 1761-1762/3 : / Blo bzang chos kyi nyi ma (TH'U BKWAN 3)

(37) 1763 (1728-1791) : / dKon mchog 'jigs med dbang po ('JAM DBYANGS BZHAD PA 2)

(38) 1763/4-1769/70 (1717-1786) : / Rol pa'i rdo rje (LCANG SKYA 2)

(39) 1770 : Ser lding zhabs drung / Ngag dbang chos ldan

(40) 1771-? : / Blo bzang chos kyi nyi ma (TH'U BKWAN 3)

(41) 1775 : rDo ba zhabs drung / Ngag dbang grags pa rnam rgyal

* 本論に関係する四人は、(32) (35) (36) (37) (38) (40) 代目の座主を務めている。トゥカン=チューキニンマ (1737-1802) にとってクンチョク・ジクメワンポ (1728-1791)



はほぼ同世代の法友であり、チャンキャ２世ルルペードルジェ (1717-1786) は２人にとって共通の師匠であった。一方スムパ・ケンポ=イェーシェー・ペーチョル (1704-1788) [2] はチャンキャより多少年配とは言えチャンキャと同世代といってもいい。この４人には次のような、それぞれかなり浩瀚な伝記が残されている。刊本など、より詳しい情報は巻末文献表に譲るとして、ここでは (1) 著者、(2) 題名、(3) 成立年のみを挙げることにしよう。

スムパ・ケンポ=イェーシェー・ペーチョルの伝記

(1) Sum pa mkhan po.

(2) mKhan po erteni pan di tar grags pa'i spyod tshul brjod pa sGra 'dzin bcud len zhes bya ba.

(3) fols. 1-180b1 は73才 (1776年) までの自伝。 fols. 180b1-259b6 は弟子ロサン・ゲレー (Blo bzang dge legs) とダルカン・エムチ・ゲレー・サム・ドゥプ (Dar han emchi dge legs bsam 'grub) によるスムパ・ケンポの死と葬式についての記述。 fols. 259b6-294a6 はスムパ・ケンポ自身による自己の略伝 [3]。

チャンキャ二世ルルペー・ドルジェの伝記

(1) Chu bzang ba Ngag dbang thub bstan dbang phyug.

(2) rDo rje 'chang lCang skya rol pa'i rdo rje Ye she bstan pa'i sgron me dpal bzang po'i rnam par thar pa Dad pa'i padma rnam par 'byed pa Nyi ma'i 'od zer.

(3) 1787年

(1) Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma.

(2) Khyab bdag rdo rje sems dpa'i ngo bo dpal ldan bla ma dam pa Ye shes sgron me dpal bzang po'i rnam par thar pa mdo tsam brjod pa dGe ldan bstan pa'i mdzes rgyan zhes bya ba.

(3) 1794年

ジャムヤン・シェーペー・ドルジェ２世クンチョク・ジクメ・ワンポの伝記

(1) Gung thang dKon mchog bstan pa'i sgron me.

(2) Dus gsum dgyal ba'i spyi gzugs rje btsun dKon chog 'jigs med dbang po'i zhal nga nas kyi rnam thar pa rGyal sras rgya mtsho'i 'jug ngogs.

(3) 1799年

トゥカン３世ロサン・チューキ・ニーマの伝記

(1) Rig pa'i ral gri alias Blo bzang 'jigs med.

(2) dPal ldan bla ma dam pa rnal 'byor gyi dbang phyug chen po Blo bzang chos kyi nyi ma'i thu mong ma yin pa'i rnam par thar pa punda li ka'i 'khri shing zhes bya ba.

(3) 1809年

(1) Gung thang dKon mchog bstan pa'i sgron me.
(2) Rigs dang dkyil 'khor rgya mtsho'i mnga' bdag rje btsun Blo bzang chos kyi nyi ma'i gsung gsum rmad du byung ba'i rtags brjod padma dkar po.
(3) 1815年

スンパ・ケンポとチャンキャは同じグンルン寺の僧であるとはいえ、その成長過程には決定的な違いがあった。スンパ・ケンポの方がチャンキャよりも13才年長であったことが、それ以後の彼らの生きる姿勢を大きく変えてしまうことになる。18世紀前半の青海地方を揺るがした大事件、1723-24年のロプサン・ダンジンの反乱[4]の時にスンパ・ケンポは20才の青年、チャンキャは数え年僅か7才であった。その歳の差がこの反乱による影響の受けかたの違いに反映しているように思われる。チャンキャは事件終了後、物心つくかつかないかのうちに北京の内廷に連れていかれ、そこで成長した[5]。そのためにか彼の生涯は常に中国側の意思を反映した行動に終始し、いわば清朝の対チベット・モンゴル宗教政策の実行人であった。満蒙文大蔵経の校訂、翻訳、北京に派遣するチベット僧の選定、ダライラマやジェブツン・ダンパの認定など彼の生涯に行った諸事は歴史的に見て影響力の大きいものであったが、それらは多く清朝側の要請によるものであった。

一方スムパ・ケンポは、20才の時チベットに行く途上でこの反乱に出会った。彼は、出陣するロプサン・ダンジンに便宜を図ってもらい、無事にナクチュカ (Nag chu kha) に着くことができた (SNT, 30b2-31a1)。彼は紛れも無く戦中派だと言えよう。この反乱の鎮圧は、戦争というよりも、中国勢力による胸の悪くなるような殺戮という性格のものであったが、それがスムパ・ケンポの生涯に与えた影響は決して小さいものではなかったであろうことは想像に難くない[6]。1736年北京から招請の使者がやって来て、翌年スムパ・ケンポは北京に赴いて乾隆帝と会見し、すでに先に中国に来ていたチャンキャとも出会うことになる。その時彼は皇太子より2度もニンマ派の教え (rnying ma'i chos; rnying ma'i gdams pa; cf. Jaschke, A Tibetan-English Dictionary, p. 195b, rnying pa と rnying ma の項) を学ぶよう要請されるが、それを頑なに断り、不興をかっている (SNT. 79a4-81a5)。このエピソードは彼が清朝の思い通りには動かない反骨精神の持ち主であったことを示していよう[7]。

その後もスムパ・ケンポはグンルン寺に住み、トゥカン、チャンキャ、ジクメ・ワンポと関わっていくのであるが、その関わり方は、戦後育ちのチャンキャや、完全な戦後生まれのジクメワンポ、トゥカンの間の密接な関係に比べるとやや距離を置いたものであった。

ジクメワンポは 1748年グンルンに行き、中央チベットのウから戻ってきたチャンキャと初対面を果たす。その後も膝下で聖俗二規にわたる話をしたり、学問を修め、1749年22才のとき、チャンキャのもとで具足戒を受ける。コンチョク・ジクメ・ワンポ=イェーシェー・ツォンドゥー・タクペーデ (dKon mchog 'jigs med dbang po Ye shes brtson 'grus grags pa'i sde) という名もこのときに授かっている (JNT, 38b2-39a4; CNT2, 174b3-6)。

一方この時12才であったトゥカンも、初めてチャンキャと会った。彼はチャンキャの座の右側の隅にすわらせてもらって長い間話をし、沙弥戒もチャンキャに受けている (CNT2, 170a6-b3)。ただし具足戒の方は1755年スンパケンポに受けている (SNT, 119b4)。

1757年ダライラマ7世が死ぬと、乾隆帝はダライラマ8世の認定を行わせるために、その当時北京にいたチャンキャをチベットに送る。チャンキャが入蔵する時に、ジクメワンポとトゥカンはメドル・トク (me gro ru thog) の渡しまでお迎えに行き、共に入蔵した。その際チャンキャは2人にチベットの善知識達の消息を尋ねたという (CNT2, 201a6-b1; 203a3-b2)。チャンキャがチベットにいる間も2人はそろって法を聴聞している (CNT2, 206a4-b4; 212a5-1)。

チャンキャがチベットにいるとき、北京でタツァク・ジェドゥン (rTa tshag rje drung) が死んだという報告を受けたので、故人の代わりにゲンドゥン・プンツォク (dGe 'dun phung tshogs) の化身を送った。しかし、その化身は北京に着くや、土地と水が体に合わないで急逝してしまったため、1760年に北京にもどっていたチャンキャは、トゥカンをチベットより呼びよせることにした。トゥカンはその命に従って1761年北京へ行きトゥカンと北京の間に初めて関係が生まれる (CNT2, 243b2-244a1)。北京の内廷と関係を持つことは経済的、政治的にも非常に優遇されることを考えると、チャンキャのトゥカンに対する寵愛が一方ならなかったことが分かる。

癸未年 (1765年) チャンキャの父がドメー (mDo smad) で死んだため、チャンキャは乾隆帝の許しを得て、モンゴリア (Sog yul) を通ってアムドに来た。その時グンルン寺の僧院長の任にあたっていたジクメワンポを始めとするツォンカ (Tsong kha), ドメー方面のラマ達は盛大に出迎えをした。父の死んだ地で供養を終えたチャンキャはグンルン寺に滞在し、その間毎日のように訪れるモンゴルの遊牧民、青海の王侯と会見をした (CNT2, 246a6-247a4)。甲申年 (1766年) ジクメワンポは自らグンルン寺の座主を退きチャンキャにその職を譲ろうとする。チャンキャは始めのうち、「自分は乾隆帝の命によりすぐに北京に帰らなければならない身であるので座主になっても法も説かずに遠く北京に行ってしまうことになり、それでは仏教に対して害となる」という旨を説いて断ったが、皆に請われて一時 (1764年-1769年) その座に就いた (CNT2, 252a5-b5)。それからジクメワンポが中心となって論理学者を沢山集め、チャンキャの滞在中に、グンルン寺に『量評釈』(Tshad ma rnam 'grel) の教授の伝統を新しく開いた (CNT2, 253a5-254a5)。

以上のように、トゥカン、ジクメワンポとチャンキャの3者は師弟の違いこそあれ、グンルン寺を中心として親密な交際をしており、北京、中央チベットなどに出向いた場合もグンルン寺の化身として育った連帯感から行動を共にすることが多かったようである。

チャンキャは丙午年 (1786年) にその三国をまたにかけた生涯を閉じる。その時のことを彼の愛弟子トゥカンの伝記に、「ある夜に、中国の城で小さな部屋にジクメワンポと一緒に座っているところに、チャンキャがいらして、"私は遠くに行く。(その前に) 汝等2人の息子に会いに戻ってきたのだ。"と仰有って、カター (礼帛) をそれぞれにくださった。御返しを探すうちに遠くに行ってしまわれ、悲しく思われた、という夢を見た。それからまもなくチャンキャの訃報を耳にした」と記している (TNT1, Tha, 34a5-b1)。トゥカン個人の夢であるとはいえ、チャンキャがジクメ・ワンポとトゥカンを息子と呼び別れを告げたこの記事は、実にこの3人の親密な関係を象徴する記述とはいえるだろう。

## 註

1） Chandra Das は、スムパ・ケンポは生まれが古代のスムパ族の系統をひくためにスムパ・ケンポと呼ばれたとしているが（Das, 1889, p. 37)、Pubaev (1981) は スムパケンポの伝記 などに基づいてこの基本的誤謬を正している。スムパ・ケンポはその自伝によれば純粋なモンゴル人であり、父はオイラト四部の一つバートゥド部のタイジの血統のドルジェ・タシ（rDo rje bkra shis)、母はジュンガルの人でタシツォ（bKra shis mtsho）と言う名で見えている（SNT, 10a2-3)。スムパ・ケンポと呼ばれたのは、グンルンのそばにある Sum pa 村生まれの Sum pa zhabs drung の化身とされたためである。

チャンキャも種族（rigs rus）はホル（中央アジアのモンゴル系遊牧民）であり、父はチキャ・ツァンパ・グル・テンジン（Chi kya tshangs pa Guru bstan 'dzin）といい、母はブキ（Bu skyid）という名のみ記されている（CNT2, 28a3)。

ジクメ・ワンポはチベット四大部族の一つドン（lDong）よりわかれたチェン・ツァ（gCan tsha）というチベットの一部族の出である。父は第５代トンコル・マンジュシュリー=ガワン・ソナム・ギャムツォ（Ngag dbang bsod nams rgya mtsho）の弟でガワン・ナムゲル(Ngag dbang rnam rgyal)、母はナム・キ（gNam skyid）と記されている（JNT, 6a3-b5)。

トゥカンは、父系（rus）はチベット大部族のダ（Bra）から出たダティ（Bra sti）出身であり、一方母系はジェウ（rJe'u）の一族である（TNT2, 7b5-6)。

トゥカンとジクメ・ワンポは一応チベット族であるごとく見せているが、生地はいずれも、青海周辺の様々な民族の入り組んで住んでいる場所である。どこまで純粋なチベット人であったかは、判らない。

2）スムパ・ケンポの生没年は従来様々な誤った推定がなされてきた。まず Das が、1702年に生まれ、73才（つまり 1775年）で死んだとしたのを（Das, 1889, p. 39）、Tucci（1949）が生年を1704年に訂正した（TPS, p. 148; p. 195, n. 248)。Petech や Wylie はその著書で Das、Tucciの説を踏襲して、生没年を1704年-1776年としている（Petech, 1959a, pp. xiii-xv; GTD, p. 196, n. 762)。没年を1776年とするのは、スムパ・ケンポの自伝が終わった年だということに基づくのであろうが、実際の没年は彼の弟子の増補になる伝記から1788年であるのが知られる。この正しい生没年は早く Vostricovが述べている（Vostorikov, 1933, p. 151; English tr. 1970, p. 17)。

3） スムパ・ケンポの伝記の構成については、Vostrikov (1970) p. 17と、Pubaev (1981) p. 36 とで見解が異なっている。本文に挙げたのは Vostrikov のものである。Pubaevは自伝を fols. 1-241 までとし、その後に弟子による後半の伝記と（fols. 241-258)、著者による略伝（fols. 258-294）が続くとしている。fols. 180-241 はスムパ・ケンポが口頭で述べたことを弟子が筆写したものなので、Vostrikov と Pubaev どちらが正しいとも言えない。



4）ロプサン・ダンジンの反乱の研究は、『年羹堯奏摺』『世宗実録』『皇朝藩部要略 』『欽定平定準噶爾方略』などの史料を用いて、国内では佐藤（1972)、加藤（1982)、国外では Petech (1950) によってなされている。また、最近になって年羹堯のロプサン・ダンジン討伐に従軍した汪景祺という人物が書いた『讀書堂西征随筆』と言う本が刊行された。この本は清朝の統治者に対する批判の言葉があったため、当時は発行を禁じられていたものである。この本の卓子山番人の章には当時の青海の軍人の横暴を書いており、中でも汪景祺が、「今聞 西番有俘馘者有就撫者路稍寧謐 聞年大將軍將於此月十二三日振旅歸 西番原非人類 中國待之不以理又有文武官之貪淫者 以致梗塞者數千里 此罪豈盡在西番而已哉。」と慨嘆している部分は、いかに当時の中国人が青海で汚職と横暴の限りを尽くしていたかを私たちに知らしめてくれる。

5）『年羹堯奏摺』p. 37、『附奏進勦小張家喇嘛等片』p. 43、『附奏接護小張家喇嘛等片』p. 46「附奏西寧寺院喇嘛不法片」、及び CNT2, 41a2-51a4 等を参照。

6）スムパ・ケンポは『青海記』、『自伝』の２書で反乱の起きた原因を殆ど同じ文章で淡々と述べている。即ち、第７代ダライラマ=ケルサン・ギャムツォの即位に青海人達は力あったというのに、ラサの饗宴では軽んじられたこと、また、青海人が助命を請うたにもかかわらず、中国がジュンガルの傀儡首相タクツェ・デッパ（stag rtse sde pa）を殺してしまったこと、また、ロプサン・ダンジンはラサン・ハンの地位に就く希望があったのに、中国はデッパ・カンチュンネー（sde pa khang chen）を就けたこと、等である。このように中国チベット両者を恨み、青海人としての孤立感を強調する一方で、ロプサン・ダンジンを始めとする青海の王侯についても、婦女や愚者の言葉を信じ戦の仕方も知らないなどの厳しい評価を下している（SNT, 30b2-6 ; TLG, 441)。

7）スムパ・ケンポがニンマ派経典を学ぶのを拒否したこの記事は、当時の清朝がニンマの教えを禁じていただけに興味深い史料である。清朝によるニンマ派禁圧は、宗教的な観点よりも政治的な配慮よりなされたものであったのであろう。スムパ・ケンポがニンマの教えを研究するよう要請された記事を『スムパ・ケンポの自伝』(SNT)より以下に掲げる。

(80b4) De nas rgyal po na gzhon pas de dus mon ghol cor kwan gyi spyi don shes pa'i gtso bo dang dbang che ba'i sras bcu bdun pa'i nang du phyin nas ngo 'phrad byas pas, khyod kyis rnying ma'i chos e shes zhes pa la bslab ma (5) myong zhes zhus. 'o na da dus su slob bam zhes pa la mi slob ces lan phul bas cung zad ma mnyes.

(81a2) lha sras bcu bdun pas kho bo lan gsum gyi bar du nang du bos nas kho la rnying ma'i (3) gdams pa'i dpe cha mang du yod pas slob ces gsungs kyang gtan du de'i ngag ma nyan pa la ma rangs nas bdag la sngar gyi sum pa zhabs drung gi sbyin bdag taa wang gi sras yus ching wang gi lha khang taa wang se gnang nas taa bla ma'i go sa tsam du bzhag. de la rang sems nye ba'i gzhan che phra kun phral du (4) cung zad 'gyod kyang kho bos go sa chung na phyis su dgongs pa zhu

sla snyam nas dga' bas khong nas 'dzum bżhin ba'i ngang du 'di yang chos skyong gi 'phrin las yin pa la the tshom mi dgos snyam nas phugs don la sems bde bar gyur.

これによるとスムパ・ケンポは３回にわたり内廷に呼ばれてニンマ派の研究を迫られ、それを拒んだスムパ・ケンポは、達嚕嚇の位しか授けられなかったという。



## 第３章　モンゴル年代記の史料上の性格

（チベット語文献との比較によるモンゴル語年代記の成立事情）

17世紀に入り、チベット仏教がいっそうモンゴルに浸透するにつれ、より多くのモンゴル人が、チベットに蓄積されていた膨大な宗教文献に接触することになった。その刺激を受けてモンゴルでは、それまでは口承によっていた部族の系譜・伝承を文字にして記録することが始まった。そのためモンゴルの年代記の大多数は、僅かな例を除いて、その成立を17世紀以降にみる[1]。

本論ではとくに『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』を取り上げ、そこに引かれているチベット史料を辿ることにより、モンゴル語年代記とチベット語資料の関係を探ってみよう。また『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』との関係から、もうひとつのモンゴル年代記、ロプサン・ダンザンの『アルタン・トプチ』（或いは、『アルタン・トプチ・ノヴァ』）の成立年代の上限と史料問題についても多少の考察を行いたい。

本題に入る前に、史料について若干の注意をしておこう。チベット文史料として以下比較を試みるのは、『ダライラマ３世伝』(1646)、『ダライラマ４世伝』(1652)および『ダライラマ５世年代記』(1643)である。これらの著作のうち、次に見るように、前２者は明らかに『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』の成立した 1677年以前に開版され、モンゴル人の間に普及していたことが不自然ではなかったことが分かる。『ダライラマ５世伝』1651年５月の記事に、その年から 12年の間にガンデンプンツォクリンでダライラマが開版させた著作が挙げられている。

この年 (1651) よりいつとは指定できない、総じて 12年間に順次 gZung gra snga, 'Jam dbyang chos 'khor, Byang chub lam rim che chung, 'Dul ba'i bslab bya gnam rtsibs steng ma, 一切智者ゲンドゥン・ドゥプ (dGe 'dun grub) が御作りになられた 'Dul ba'i gleng 'bum, ケドゥプ・ノルサン・ギャムツォ (mKhas grub Nor bzang rgya mtsho) が御作りになった Dus 'khor gyi 'grel chen dri med 'od rgyan, レーチェン・クンゲルワ (Las chen Kun rgyal ba) が御作りになった bKa' gdams chos 'byung, 一切智者ゲンドゥン・ギャムツォ (dGe 'dun rgya mtsho) の gSung'bum ５巻、パンチェン・イェシェツェモ (Pan chen Ye shes rtse mo) が御作りになったゲンドゥン・ドゥプの伝記とヤンパ (g-Yang pa) が御作りになったゲンドゥン・ギャムツォの伝記、ソナム・ギャムツォ (bSod nams rgya mtsho) が御作りになった Lam rim gyi khrid, ドルジェチャン・パオンカワ (rdo rje 'chang Pha bong kha ba) が御作りになった sNyan brgyud lta ba spyi khyab, sKyabs 'gro'i rnam bshad, bDe ba can smon lam gyi dikak, Katara'i brda 'grol dang bzhi, Kalapa'i mdo, パンロ (dPang lo) が御作りになった Tshogs gsum gsal ba, シャルロチェン (Zha lu lo chen) が御作りになった Sum rtags kyi 'grel ba, gSar rtsom dbu phar, mNgon pa, rGyal rabs, 一切智者ソナム・ギャムツォ, ユンテン・ギャムツォ、ドルジェチャン・パオンカワ、チャンバ・リクジン・チェンモ (Byang pa

rig 'dzin chen po)、リンメー・シャブドゥン (Gling smad zhabs drung) の伝記などを版木に掘って、のちのちも仏教が永久に続く限り、経論の法施が尽きず増えていくことを望んで、ガンデン・プンツォク・リン (dGa' ldan phun tshogs gling) で開版させた。(D5N, 156a4-b4) (傍線筆者)

『ダライラマ５世年代記』はそれとして言及されてはいないが、rGyal rabs と言われているものがそれにあたるかもしれない。もしここに言及されていなかったとしても、それがこの時期までに開版され、普及していたことは間違えないだろう。

本論で扱うモンゴル年代記『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』の成立年 (1677年) 及び著者名 (チャムバ・エルケ・ダイチン/Byam ba erke dayicing/善巴) の考証は、この書が1960年 Ulaanbaatar で出版されたとき、編者 Perlee によってなされた。岡田英弘氏が同氏の見解を書評で紹介している (岡田, 1965) [2]。また『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』所引の『モンゴル秘史』と『アルタン・トプチ』所引の『モンゴル秘史』との比較研究は、吉田順一氏によって行われている [3]。しかし『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』が典拠としたチベット史料についての考察はまだなされていない。

一方『アルタン・トプチ』についての研究は比較的盛んであり、とくに資料の大部分を占めるモンゴル文史書との関係は、吉田順一氏を始めとする日本の学者によって、ほぼ明らかにされていると言っていい [4]。一方チベット文史料との関係については、ドイツのハイシッヒが研究を行なっていが、ごく一部の対応を指摘するのみで、まだ十分とは言えない [5]。また、その成立年代に関しては、諸説紛々である [6]。

しかし、この２つのモンゴル年代記『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』、『アルタン・トプチ』の間になんらかの関係があることは、多くの学者によって指摘されている [7]。このことから、この２書の関係を解明できれば、書誌学的項目の比較的明らかにされている『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』によって、成立年すら定かでない『アルタン・トプチ』の性格を多少なりとも解明できるかもしれない。本章ではチベット語史料を鍵として、この２史書の比較を行い、この２つのモンゴル年代記間の関係について考察しよう。

まず『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』および『アルタン・トプチ』に引かれているチベット語史料を検討してみよう。『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』の本文に直接見られる引用史料の名は、『青冊史』と『ダライラマ５世年代記』の２つだけである。しかし、筆者の探しえたかぎりでは、『ダライラマ３世伝』『ダライラマ４世伝』が前２書以上の比率をもって引用されていること、また、その引用のしかたも、チベット文史料を逐語訳したといっていいほど正確なものであることが分かった。さらに『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』において『ダライラマ３世伝』『ダライラマ４世伝』を引用している部分は、ほとんど『アルタン・トプチ』にも、同文もしくは短縮した形で見出される。このことは、両者いずれかが他方を資料として用いたことを示している。その論証の前に、『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』中に引用されたチベット史料とそれに対応する『アルタン・トプチ』を対照させた表を次ページに挙げよう。

この表に対応する原文は Appendix に掲載した。番号はチベット語の引用文の塊ごとにつけられている。



(表２) AN, AT 中におけるチベット史書の引用箇所

| | D5Z | DNG | D3N | D4N | AN | AT |
|---|---|---|---|---|---|---|
| (1) | 68a4-5 | | | | p.7.11-19 | |
| (2) | 57a4-b1 | | | | p.43.11-19 | 285v4-286r6 |
| (3) | | ka.26b6-7 | | | p.8.16-19 | |
| (4) | | ka.26b7 | | | p.9.12 | |
| (5) | | | 88b1-3 | | p.66.3-7 | 234v14-235r7 |
| (6) | | | 88b5 | | p.66.7-10 | 235r8-18 |
| (7) | | | 90a6 | | p.66.10-11 | 235r18-v2 |
| (8) | | | 92b3 | | p.66.11-12 | 235v2-4 |
| (9) | | | 93a2-4 | | p.66.12-14 | 235v4-10 |
| (10) | | | 92b4-6 | | p.66.14-16 | 235v10-14 |
| (11) | | | 93b4 | | p.66.16-18 | 235v15-18 |
| (12) | | | 94a2-3 | | p.66.18-19 | 236r1-6 |
| (13) | | | 94b4-95a3 | | p.67.1-17 | 236r7-v10 |
| (14) | | | 95b4-6 | | p.67.18-p.68.5 | 236v10-237r4 |
| (15) | | | 97a2 | | p.68.6-7 | 237r4-7 |
| (16) | | | | 9a5-6 | p.68.16-p.69.2 | 237r15-18 |
| (17) | | | | 9b4 | p.69.2 | 237r18 |
| (18) | | | | 10a1-2 | p.69.3-4 | 237r18-v1 |
| (19) | | | | 10a2-5 | p.69.5-13 | |
| (20) | | | | 10a6-b1 | p.69.13-16 | |
| (21) | | | | 12a1-3 | p.69.16-19 | |
| (22) | | | | 12b2 | p.69.19-p.70.1 | 237v2-3 |
| (23) | | | | 12b6 | p.70.1 | 237v3-4 |
| (24) | | | | 17a4-5 | p.70.2-3 | 237v4-6 |
| (25) | | | | 16a6-b1 | p.70.4-6 | 237v7-11 |

上に挙げたような対応を示す２史書の関係として (1)『アルタン・トプチ』が『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』を抄訳した、あるいは (2)『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』が『アルタン・トプチ』を史料として用い話を浩瀚にした、という２つの可能性が考えられる。筆者は以下に述べるような理由から (1) の立場を取りたい。『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』は明らかに『ダライラマ３世伝』なり『ダライラマ４世伝』なりを見て訳しているが、『アルタン・トプチ』に用いられているチベット文史料は『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』よりの孫引きなのである。

『アルタン・トプチ』に引かれているチベット文の部分は、皆『アサラクチ・ネレト・イ

ン・テウケ』にも見出されるが、逆に『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』にのみあって『アルタン・トプチ』には無い部分がある｛(19) (20) (21)｝。これは『アルタン・トプチ』の著者がもし独自にチベット文史料を用いていたとするなら絶対にありえない現象である。

また、『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』は逐語訳といっていいほど原文に忠実なため、しばしば意味のとおりにくい場合があるが、『アルタン・トプチ』は『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』のそのようなところは一切省略して、文を簡潔なものにしている。例えば、『ダライラマ３世伝』を引用している (13) の最初の部分は、チベット語で、tshe ring gnam gyi she mong la brten nas rtsod dus kyi 'khor los sgyur ba, Al than rgyal po (永遠の天の権威によって末世の法輪を回すもの、アルタン・ハーン) とあるのを『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』は忠実に urtu (ring) nastu (tshe) tegri (gnam) yin (gyi) kücün (she mong) i yier (la brten) temece küi (rtsod) cardaki (dus kyi) kürdün ('khor lo) yier (s) ergigülüci (sgyur ba) gegen qaran と訳しているのにひきかえ、『アルタン・トプチ』はこれらの常套句を一切飛ばしてgegen qaranから始めている。同じような例は枚挙に暇ない。これも、直接原典に当ったものの態度としては考え難い。

ただし、一方では『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』には無く、『アルタン・トプチ』にだけある言葉も見られる。しかしそれもチベット史料の中にある言葉ではなく『アルタン・トプチ』の著者が自分の知識や、文脈を分かりやすくするために付け加えたものであると思われる。例えば『ダライラマ３世伝』よりの引用である (5) で、『アルタン・トプチ』には tere ber (彼は) とあるが (234v18)、『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』にはその語は無い。しかしこれは明らかに、ロプサン・ダンジン個人の判断により、文を分かりやすくするために加えられたものと見てよいであろう。このような例は、同じく (5) の『アルタン・トプチ』の qaran dur (235r1), qaran u (235r3), (10) の i (235v11), (13) の qoyina (236v4), qaran (236v7), yiar (236v8)にもあてはまる。

また、(5) で『アルタン・トプチ』は jasar tu tümen sayin gegen qaran (234v14) となっているが『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』は単に sayin gegen qaran となっているのも、ロプサン・ダンジン個人の知識ないし判断によって付け加えたとみてよいであろう。

さらにロプサン・ダンジンがチベット文を見ていないと考えられる有力な証拠は、『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』が不十分な理解から間違って解釈し、その結果意味の通らないものとなった文章を『アルタン・トプチ』もまた踏襲していることである。例えば『ダライラマ３世伝』に「〔ダライラマ５世を〕四手観世音菩薩であると見た」とあるのを理解できなかった『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』の作者は、「であると見た」を「を見た」(i üjebei) と誤訳しているが、『アルタン・トプチ』はさらにそれを「を言った」(i öcibei) と重ねて誤訳している。これはモンゴル語では旧文字を使うと、üjebei と öcibei の２つの単語が、混同されやすい形態となるためであろう。また、(11) のチベット文では byi (鼠) とあるのを『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』は mis (意味不明) と訳しており、『アルタン・トプチ』もまた、mis としている。もし『アルタン・トプチ』が、チベット語の原文を見ていれば、このようなことにはならないはずである。チベット語の人名地名のモンゴル語への転写も、『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』のほうがより正確である。

以上の理由から『アルタン・トプチ』は『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』よりも成立が遅い、と言えるであろう。

以上によって、従来 Heissig などが『アルタン・トプチ』のチベット文資料として挙げていた資料のリストの中に『ダライラマ４世伝』が漏れていること、また、『ダライラマ３世伝』の記事は Heissig が指摘したよりずっと多くの部分が、逐語訳といって言いほどの正確さで『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』に引用されていること、さらに『アルタン・トプチ』の用いたとされるチベット語資料は『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』からの孫引きであることなどを示した。さらに以上から Heissig が 1651年から 1655年、岡田英弘氏が 1675年以降とした『アルタン・トプチ』の成立年代を、早くとも『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』の成立後の 1677年以降とすべきであるということを結論づけることができるであろう。

## 註

1）モンゴルの年代記の中で最も成立が早くかつ尊重されているものは、『モンゴル秘史』Mongqol-un ni'uca tobc'an である。成立年代に関しては諸説あるが、岡田英弘氏の最近の論考によれば、『秘史』のコロフォンにある子の年は、フンギラト政権が後退する1328年以前で、かつ大クリルタイの開かれた年でなければならないので、1324年であるとされる（岡田，1985）。

2）Perlee、またそれを紹介した岡田英弘氏（1965）によれば『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』の作者はチャムバ・エルケ・ダイチン（Byamba erke dayicing）である。その生涯の概略は『欽定外藩蒙古回部王公表傳』巻六十九「扎薩克和碩親王善巴」の伝を参照。また、成立年代は「今、第11ラプチュンの火蛇の年」（AN，p.78）という記述から 1677年であると定められる。この時期は、まだオイラトのガルダンがハルハに侵入する前であり、他の年代記と比較しても『アルタン・ハン伝』『エルデニ・イン・トプチ』につぐ格段の古さである。『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』の内容の最も価値ある部分はその系図である。比較的古いと言われている漢文史料『欽定外藩蒙古回部王公表傳』を問題にしないほど詳しく正確なものである。特にチャムバの出身部族であるトメンケン・フンドレン・チョークルの子孫は、より多くの人の名が挙げられている。

3）吉田氏によると『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』所引の『モンゴル秘史』は、現行の『モンゴル秘史』系統から分かれたものであるが、『アルタン・トプチ』所引の『モンゴル秘史』はそれとは別のもので、現行『モンゴル秘史』を補う記事も若干見られるという（吉田，1977）。

4）吉田氏は『アルタン・トプチ』の用いた史料の中で最も多くの比重を占める『モンゴル秘史』の引用記事を検討することによって、ロプサン・ダンジン所有の『モンゴル秘史』が現行の『モンゴル秘史』に比べてかなり脱落が目立ち、より浩瀚な記事も一部に限られることを明らかにされた（吉田，1972）。また、いわゆる『著者不明アルタン・トプチ』が『ロプサン・ダンジンのアルタン・トプチ』の資料となっていることを精密な比較を通じて立証された（吉田，1974）。

5）Heissig の作成した一覧表によれば、『アルタン・トプチ』の利用した史書は少なくとも７つあるという。(1) Čiqula kereglegči tegüs uqaγatu sastir，(2) Mongqol-un ni'uča tobča'an，(3) ジンギス汗とその側近者のBilig，(4) 伝承複合 X，(5) Y，(6)『ダライラマ３世伝』，(7)『ダライラマ５世年代記』である。量としては (2) の比重が圧倒的に多い。このうちチベット文史料は (6)，(7) である（Heissig，1959，pp.50-75）。

6）Heissig は、『アルタン・トプチ』の成立を 1651年から 1655年の間とする。上限を



1651年とする根拠は、『アルタン・トプチ』にリクデン・ハーンの孫ブルニ（Burni）への言及が見られることである。彼は少なくとも 1651年には生まれていた。なぜなら 1657年に満州権力に対して反乱を起こしたとき彼は、数え年25才であったとされるからである（Siregetü guosi kemekü dharma : Altan kürdün mingγan kegesütü bicig，1739，<Nr. 12>，IV，2r）。従って彼の出生は 1651年以前には遡れない。一方下限を 1655年とするのは、カラチン（Karacin）の首領が『アルタン・トプチ』には第５代のブレ（Büre）までしか記されていないことによる。このカラチンの第７代目の首領ロミ（Lomi）は1735年に数え年60才であったとされるので（Vorwort，Mongγol borjigid oboγ un teüke，1735，I，4r5)、その誕生は 1675年前後ということになり、その父である第６代のダライ（Dalai）はさらに少なくとも20年前 1655年頃には生まれていなければいけないが、このダライの誕生への言及は『アルタン・トプチ』には見られない。従って『アルタン・トプチ』は 1655年以前に書かれたのでなければならない。Heissig は以上二つの根拠によって『アルタン・トプチ』の成立を 1651年と 1655年の間に設定している（Heissig，1959，pp. 54-55)。内蒙古の Liu jin suo は『アルタン・トプチ』の中にはハラチン=満州の連合については書かれていて、リクデン・ハンの死については触れられていないことから、『アルタン・トプチ』は 1628-1634年の間に成立したという（Liu，1979，pp.220-221)。両者とも、下限の設定について論拠薄弱であるというべきであろう。この点に関しては、Shag daryn も「ロプサン・ダンジンが現代の諸家の観点からすれば当然知っていなければならないはずの史実の細部を知らなかったということもありうる。また、たとえそのうちのいくつかは知っていたとしても、何らかの理由でそれについて書かなかったということもありうる」（1978，pp.231-232）と述べた上でロプサン・ダンジンの別の著作『五台山の耳の飾り』Uta yin tabun aγula u orusil süsüg ten ü cikin cimeg orusiba が書かれたのが、17世紀の末であることから、『アルタン・トプチ』もこのころ書かれたものであろうと推測している。また、岡田英弘氏は『アルタン・トプチ』の成立を 1675年以降とされる。『アルタン・トプチ』に於てブルニはブルニ・チンワン、即ちブルニ親王と呼ばれているが、正統なモンゴルのハーン家の直系にいるブルニが、父のアブナイより親王位を受け継ぐのは康熙八年（1669年）のことなので、彼を親王と呼ぶ『アルタン・トプチ』の成立は 1669年、或いはブルニのが乱を起こして死ぬ 1675年以降としている（AA研の「通信」第3号 p. 19。1967年11月)。モンゴルの学者 Perlee は『アルタン・トプチ』の年代を 1634年とするが、その根拠は示されていないのでここでは触れない（Perlee，1958)。

7）例えば Perlee は「他の歴史書の中でロプサン・ダンジンの『アルタン・トプチ』と関係していることは明らかである」とする。また、岡田英弘氏は「就中注目すべきは元朝秘史との関係であって、ボドンチョル（p.9）からチンギス・ハガンがタングートのシドルグ・ハガンを殺させる（p.35）までは、中間に多少の異源の記事を含みながらも、大体に於て元朝秘史の第四二-二二六節と良く一致する。しかも『アルタン・トプチ』に見られるような忠実な転録ではなく、かなり語を入れ替えて理解に容易にし、且つ簡略にした後が見られる。その上特記すべきことに、本書のかかる箇所は『アルタン・トプチ』とは互いに出入があり、決して後者からの抄出とは見られない」（傍線筆者 / 岡田，1965，p.118）と

指摘している。



## 第4章　サキャ派と元朝の関係

### 1．サキャパンディタ伝の考察

トゥカンの記述にそって、ここではサキャパンディタのモンゴル招聘以後の伝記を扱うことにしよう。この時期のサキャパンディタには学問的な活動として見るべきものはほとんどない。この時期の活動の焦点は、従ってゴダンの招聘によるモンゴル行きのみである。政治史、あるいはとりわけチベット=モンゴル関係史にとっては、これは重要な意味を持った事件であった。以後しばらく続く、チベットでのサキャ派の覇権は、このサキャパンディタのモンゴル行きに端を発し、このときサキャパンディタに連れられてモンゴルに行ったパクパによってそれが完成されることになる。

この事件について政治史的に問題となるのは次のような点であろう。

1) サキャパンディタが招聘されるに到った経緯はどのようなものであったか。
2) 使者としてサキャパンディタが選ばれた理由は何か。
3) サキャパンディタに、モンゴル、チベット両国から担わされた意味は何であったか。
4) サキャパンディタはクテンと会見をして何をしたのか。
5) その後数年間モンゴルでどのような活動をしたか。
6) 以後のチベット=モンゴル関係に残した影響は何であったか。

もちろんこれらの諸点は別々の問題ではない。すべては「サキャパンディタのモンゴル行きが後のチベット=モンゴル関係に持っていた意味は何か」という問いに集約することができるであろう。これらの問題についてはすでに Tucci (1949) pp. 9-12, Schuh (1976); Schuh (1977) pp. 10-57; Wylie (1977) pp. 112-116; Szerb (1979) などによって繰り返し取り上げられ、論じられてきた。しかしながら残念なことに、この事件に関する歴史資料は極めて限られたものにすぎない。かれは中国側の文献には知られていない。またチベット語文献のうち一般史の記述は極めて簡略であり、一方かれの伝記は伝説に満ちた宗教的記述に終始している。かなり後代に成立したモンゴル語文献は、ひどく混乱した記述をしか与えていない（岡田，1962 を後に述べる諸伝記の記述と比較されたい）。たとえこれから新たなサキャパンディタの伝記が発見されたとしても、おそらくこのような事情に変化はないであろう。現在知られている主要な伝記類の記述のパターンはほぼ出尽くしているように思われるからである。上に述べたような諸問題を解決するためには、サキャパンディタ個人に即しての研究よりも周辺的な事情から当時のチベット=モンゴル関係の流れそのものを確認して行くことが要請される。とりわけ『学者の宴』を含むカルマ派の資料が今後注目されるべきである。しかしながら今そこまで踏み込む余裕はない。そこでここではまず出発点として、サキャパンディタの諸伝記に記されている内容を総覧し、様々な情報の新旧を検討して今後の研究にそなえることにしたい。

サキャパンディタの伝記は、『パクサムジョンサン』やトゥカンの記述を除いて、ほぼ

サキャ派系の文献によって与えられる情報が主であり、それを集大成したものが『サキャ派年代記』のなかのサキャパンディタの伝記であると考えられる。従ってまずその内容の梗概を示して、かれの晩年のパターンを取り出してみよう。

サキャパンディタの伝記資料と生涯についての概観は Jackson (1985) Ch. 1(pp.20-47) に与えられている。ここでは特にクテンによるモンゴル招聘以後の活動に焦点を合わせてそれに言及するものを、その成立年代順に整理しておきたい。

(1) ヤルルンパ『サキャパンディタ小伝』Rigs par smra ba Yar klungs pa, Bla ma chos kyi rje dpal ldan sa skya pandita chen po'i rnam par thar pa mdor bsdus pa, 1251 (lcags phag), 5 fols.

(2) パクパ『サキャパンディタ小伝』'Phags pa Blo gros rgyal mtshan, Chos rje pa'i rnam thar bsdus pa, n.d., SKKB, Vol. 6, 31.3.3-32.1.2.

(3) タクパゲンツェン『サキャパンディタ中伝』Yar klungs pa Grags pa rgyal mtshan, Chos kyi rje sa skya pandita kun dga' rgyal mtshan dpal bzang po'i rnam par thar pa 'bring po, n.d., LBLS, Ka, 34b4-38b1.

(4) ラマダムパ『道果ラマ伝集』 1344, LBLS, Ma, 45b3-46b5.

(5) 『赤冊史』 1346, HDT, 20b6-21a6.

(6) 『ギャプイクツァン』 1434, GBY, 155b-156b1.

(7) コラムパ『三律儀分別註』 1463, SKKB, Vol. 14, 128.2.2-129.3.4.

(8) 『サキャパンディタ伝スンドーマ』 dPal sa skya pandita'i rnam thar gsung sgros ma, n.d., SKKB, Vol. 9, ; LBLS, Ka, 61a4-73a6.

(9) ロオケンチェン『学者の門解説』 1527, KJS, 47b4-77b5.

(10) 『新赤冊史』 1538, DMS, 51a1-b1.

(11) 『学者の宴』 1565, KGT, 794-795.

(12) ガワンジクテンワンチュクタクパ『サキャパンディタ伝』 Rin spungs pa Ngag dbang 'jig rten dbang phyug grags pa, 'Jam dbyangs mi'i srid pa sa skya pandita kun dga' rgyal mtshan dpal bzang po'i rtogs pa brjod pa bskal pa bzang po'i legs lam, 1579, LBLS, Ka, 118b6-145a5.

(13) 『サキャ派年代記』 1629, SDR, 61b2-78a6.

(14) 『ダライラマ５世年代記』 1643, D5Z, 56a1-4

(15) 『サキャ全書目録』 1736, SKKB, Vol. 7, 315.4.6-316.2.5.

さて以上のうち、サキャパンディタ個人の伝記である(1), (2), (3), (8), (12) は(1), (12) を除いてはみな正確な成立年代が記載されていない。(1)についても疑問点がないではない。コロフォンには著作の年次と場所は、1251年12月リンチュウツェにて、と記されている。ところがサキャパンディタが没したのは同年11月リンチュウツェであって、この伝記の書かれる１ヵ月程前なのである。そのことがこの伝記の同時代性を示しているのか、作為性を示しているのかは決めがたいところである。さらに、より詳しくは "rgyas pa rnam thar gyi yi ge chen mo" を見よ、とあるが、それが何を指しているのかは定ではない。サキャパンディタの生前に書かれたと推定される伝記が２つあるが、ともに学問上の伝統と業績が主な内容であり、今の問題の伝記と趣きを異にする。もちろんこれだけで



はこのコロフォンの記述を偽りとすることはできないが、無条件に信頼することもできないと思われる。

パクパによる伝記(2)のオリジナリティも疑わしい。サキャパンディタの神秘的な側面を述べた、１フォーリオの小品であるが、特に後半の死の直前の記述 (SKKB, Vol. 6, 31.4.3-32.1.1) は、後に見るビジリンチェン (Bi ji rin chen) による最晩年の詳細な報告の一部と酷似している。パクパがこの小品の著者であることを疑う必要はないが、すでにあった伝記からの抜き書きであることは明らかである。

この２つを除く４つ、およびサキャ派内部の資料と言える(4), (7), (8), (13), (15) はそれぞれの間に内容上の、あるいは上のパクパの場合と同様に表現にいたるまでの照応関係があり、ほぼ同系等の資料ソースに基づく伝記と言える。それらの組成について以下、諸伝記の集大成と言える『サキャ派年代記』の分析を通じて整理してみよう。

一方一般史に属する(5), (6), (10), (11), (14) は表現の上では異なるものの、内容的には上のサキャ派の伝承を受けており、２，３の注意すべき点以外は新たな情報を提供しない。

『サキャ派年代記』の梗概

１．(61b2-5) チベットでサキャパンディタが絶大な業績を上げていたころモンゴルには甚だ野蛮な無数の軍隊が中国・ミニャクへ侵攻し、僧俗区別なく徴兵・税・労役を課し、仏教の名前すらなかった。

２．(61b5-62a1) その時この惨状を御覧になって、ナムテカルポ神が、サキャパンディタの師匠シャーキャシュリーバドラに、モンゴルへ行ってくれるようにお願いしたが、シャーキャシュリーがターラー女神 (sGrong ma) に祈願したところ「汝が行っても益はない。汝の弟子でチベットにいるものが行くならば益がある、と予言せよ」と告げられたので、そのように予言した。

３．(62a1-2) サキャパンディタの叔父ラマジェブツンチェンポ=タクパゲンツェン (bla ma rje btsun chen po Grags pa rgyal mtshan) も死ぬ間際、サキャパンディタに「汝の生涯の終わりに北方から汝を召喚するものが来るであろう。その時にはそれに応じよ」と予言した。

４．(62a2-3) 62才のときモンゴルの王クテンから、かれを招聘する使者が送られてきた。

５．(62a3-b2) その招聘状 "'Ja' sa gdan 'dren ma" の引用。

６．(62b2-3) サキャパンディタは身命も顧みず、63才のときミニャクのチャングー (Byang ngos)* に向けて出発した。

* Stein (1951) pp. 231-232, esp. p. 232, n. 6.

７．(62b3-64a1) その途上、ドカム (mDo khams) でロドゥーラプセル (Blo gros rab gsal) という者に出会い、法の問答をした。サキャ全書からその問答録 No. 97 を引用。

８．(64a2-65a2) さらにドメー (mDo smad) ではネルジョルパ=トゥマ (sNal 'byor pa phru ma) という大修行者に会い、法の問答をした。サキャ全書から No. 98 を引用。

９．(65a2-5) ドサン (mDo srang) に来たとき、ある人が、多数の金珠のついた黒い絹を献上した。サキャパンディタはそれをハジェビジ (Lha rje Bi ji) に預け、「サキャに

は徳から生じた、宝石の如き、無量の遺骨（ring bsrel）がある。この絹でその包みを作りなさい」と言った。そして微笑んで「このことは人に言ってはならない。禍を起こすもととなる」と言った。

10.（65a5-66a6）後にフビライとパクパは施主・帰依処の関係になり、モンゴルに仏教が広まり、僧は徴兵・税・労役を免れ、多大の御布施を贈られることになったが、それはすべてこのサキャパンディタ叔父甥のお陰である、と知らなければならない。

11.（66a6-b5）1249年 65才のときリンチュ（Ling chu，涼州）に着いた。その時クテンは、グユクの即位のためモンゴルに行っていたが、そこから戻ってきたのと、翌1247年１月に会った。法話をたくさんなさり、わからないところはウイグルの善知識多数も仲介をして法の意味をすべて理解させた。王はたいへん喜び、それまでエルカウン（E rka 'un，ネストリウス派）とモンゴルの神降ろし（Hor gyi lha pa）を先頭にしていたのを、以後ラマ=サキャパンディタを先頭にし、祈願のときには先に僧の祈願をせよ、という勅令を出した。

12.（66b5-68a3）その後クテン王は皮膚病にかかった。1247年３月11日の明け方、サキャパンディタの夢に、体中傷と腫物で一杯の、足の不自由な人が現れ、クテン王が「土地神」に禍をなしたので王を病気にかけたことを告げた。サキャパンディタは王のために獅子吼の儀軌をして「土地神」に益を与え、王を病から解放した。

13.（68a3）それを初めとして様々な言語の多くのひとたちに信仰を起こさせ解脱させるという仏教の御業績をたくさんなさった。

14.（68a3-71a2）五台山へ行き、そこに住していたトクデンゲンポ（rTogs ldan rgyan po）に灌頂をし、マハームドラー（Phyag rgya chen po）についての教誡を与えた。その教誡をサキャ全書から No. 32 を引用。

15.（71a2-4）さらにリンチュツェ（涼州府）の宮殿で法を説いている時、五台山に供養に行っていた多くの人がみな、文殊が五台山にはいず、リンチュツェで法を説いている、という同じ夢を見たので、リンチュツェに行くと、そこでサキャパンディタが法を説いているのに出会い、みな法を得た、と伝えられる。

16.（71a4-74b2）サキャパンディタはチャングーからチベットの弟子たちにたくさんの贈り物をした。さらに『入菩薩道次第仏密意解明』（Byang chub sems dpa'i lam la 'jug pa'i rim pa Thub pa'i dgongs pa gsal ba, SKKB, Vol. 5, No. 1）を、「弟子たちに告ぐ」という手紙とともに贈った。その「弟子たちに告ぐ」という手紙 No. 77 を引用。

17.（74b2-77b2）1251年70才のとき９月８日に死の予兆の大地震が起こったときから、11月14日の臨終の時までの様子が詳細に描かれる。

以上が『サキャ派年代記』の梗概である。他の諸資料について、このそれぞれの分節に対応する箇所を次ページに表示し、それについて資料ないしは個々の情報の相互関係を考察してみよう。

まずタクパゲンツェンの(3)の著作年次は正確には知られていない。D. Jackson の注意するところは次のようである：

コロフォンはこの著作を Yar klungs pa Grags pa rgyal mtshan に帰しているが、



（表３）サキャパンディタ諸伝記対照表

| | (3) | (4) | (7) | (8) | (9) |
|---|---|---|---|---|---|
| 1. | | | | | 29a3-29b1 |
| 2. | | | | | 29b1-29b4 |
| 3. | 34b5-35a1 | 45b3-45b4 | 18b4-18b5 | 62a4-62a6 | 29b4-29b6 |
| 4. | 35a1 | 45b4 | 18b3-18b4 | 62a6-62b2 | 29b6-30a1 |
| 5. | | | | | |
| 6. | 35a1-35a2 | 45b4-45b5 | 18b5 | 62b2-62b3 | 30a1-30a2 |
| 7. | | | | * | 30a2-32a5 |
| 8. | | | | | 32a5-33b5 |
| 9. | | | | 62b5-63b1 | 33b5-34a4 |
| 10. | | | | | 34a4-36a2 |
| 11. | 35a2-35a3 | 45b5-45b6 | 18b5-19a1 | 63a2-63b1 | 36a4-36b3 |
| 12. | | | 19a2-19b3 | 63b1-64b3 | 36b3-38b4 |
| 13. | | 45b6-46a1 | 19a1-19a2 | 64b3-64b4 | 38b4-38b6 |
| 14. | | | | | 38b6-43a6 |
| 15. | | | | | 43a6-43b3 |
| 16. | | | | 64b4-64b6 | |
| 17. | 35a3-37b5 | 46a1-46b5 | 19b3-20b6 | 64b6-67a4 | |

* 62b4-62b5 はカーダムナムカーブムとの対話。これについては後述する。

当のコロフォン自身は後代の人の手になるものである（著者に対して mdzad という敬語表現を使っている）。コロフォンはこの著作を「中篇（bar ba）」としているが、sangs rgyas phun tshogs は「短編（bsdus pa）」を Yar klungs pa Grags pa rgyal mtshan に、一方「長詩篇（rnam thar tshigs bcad ma rgyas pa）」を Yar klungs pa Byang chub rgyal mtshan に帰している：de yang yar lung pa byang chub rgyal mtshan ni / chosrje'i rnam thar tshigs bcad ma rgyas pa rtsoms (sic) pa po yin la / rnam thar bsdus pa rtsoms pa po yar lung pa grags pa rgyal mtshan yang bsnan nas rgyal mtshan mtha' can brgyad ces bya'o // (NCB, 59b3-4)（Jackson, 1985, p. 41, n. 6）

一方もう１つ Yar klung pa と署名されている伝記がある。最初に問題にした（1）の簡略な賛嘆偈の伝記である。そこで情報を整理して示せば次のようになる。

① ２人の Yar klunga pa によって書かれた長い詩（3）と短い詩（1）の２つの伝記が現在知られている。

② 『ゴル仏教史』で Sangs rgyal phun tshogs は Yar klungs pa Byang chub rgyal mtshan が rnam thar tshigs bcad ma rgyas pa を書き、Yar klungs pa Grags pa rgyal mtshan が rnam thar bsdus pa を書いた、としている。

③　長い詩の方 (3) のコロフォンはその著者を Yar klungs pa Grags pa rgyal mtshan に帰し、その著作を bstod pa bar ba と呼んでおり、また巻頭のタイトルは rnam thar 'bring poとなっている。しかし本文に属すると思われる部分では rnam thar mdor bsdus cung zad ston (38b5) としている。
④　短い詩の方(1)のコロフォンは自らの著作を rnam thar mdor bsdus pa としている。

まず③で(3)を、タイトルを付けたり、コロフォンを書いたりした後代のものが「中間のもの」としたのは、その時点で他により長大な伝記とより簡略な伝記とがあったことを明瞭に示すであろう。一方それを著者自身が「要略して示したもの」としているのはより長大なものに対していっているとは必ずしも言えない。しかしまた著者が「要略」といい後代のものが「中間のもの」と言っているものを Sangs rgyas phun tshogs の言うrnam thar tshigs bcad ma rgyas pa とは呼びづらい。とすれば (3) は Sangs rgyas phun tshogs の言う bsdus pa に当たり、もう一人の Yar lungs pa である Byangs chub rgyal mtshan によって書かれた今は伝わらないより長大な詩の伝記があった、そして (3) を後代のものが「中間のもの」とする場合には、その長大な詩の伝記の他に (1) の簡略な伝記を加えて考えている、とすることができるのではないだろうか。その上で、その２人の Yar lungs pa は Sangs rgyas phun tshogs によってサキャパンディタの弟子のうちに数えられているのを正しいとすれば、 (3) の伝記はサキャパンディタが没してほど遠くない頃に書かれたものと考えることができるであろう。因みに D. Jackson によって指摘されているように (Jackson, 1985, p. 41, n. 5)、また後にも見るように Yar lungs pa Byangs chub rgyal mtshan は 1255年パクパが具足戒を受けるときの秘密師 (gsangs ston) を務めている (LBN, 48b6) ことによって、その存在が確認される。内容からすればここで問題にしているモンゴル招聘後のことについては、その死の直前の記述が最も長く、それ以外はごく簡略で情報量はあまり多くない。

もう１つ年代のわからない伝記が (8) の『スンドーマ』である。これは (3) に比べて内容的に重要であり、その著作時期がわからないことが微妙な問題を投げ掛けている。そのコロフォンにはそれに先行する伝記が次のように挙げられている。

a．その方御自身の足の塵を頭で受けた持金剛 Blo gros rgyal mtshan dpal bzang po によって著されたものから、また
b．Bla ma dmar ston Chos kyi rgyal po
c．mKhas pa rGyal ba dpal
d．Bi ji rin chen grags
e．Dam pa kun dga' grags
f．Bar ston rdo rje rgyal mtshan たちがお作りになった伝記から、意味を尽くして要約し、勝手に割り増ししたり、割り引いたりしていない伝記『スンドーマ』をここに終える。聴聞録については詳しくは
g．dngos grub brnyes pa slob dpon Rin chen dpal のお作りになった伝記を見られたい。 (LBLS, Ka, 67a4-6)

ここに挙げられる７人の著者のうちａは (2) のパクパであり、ｃとｇはここでは取り上げなかった、サキャパンディタの生前に書かれた二つの伝記（順にSKKB, Vol. 5, 433.2.1-438.4.6 ; LBLS, Ka, 38b1-57a1 に当る）の作者である。またｄはすでに言及しまた後にも考察するようにサキャパンディタの死の直前の様子の詳細な報告を残した人物であり、その大部分が知られている。残りのｂ，ｅ，ｆ３人による伝記は知られていない。そのうちｂの Bla ma dmar ston Chos kyi rgyal po はおそらく Sangs rgyas phun tshogs によってサキャパンディタの弟子のひとりに数えられている dMar chos rgyal (NCB, 159a3) と考えられる。従ってこれもごく初期の人物である。またｅの Dam pa kun dga' grags は、同様に Sangs rgyas phun tshogs によってパクパの弟子の一人として挙げられ (NCB, 163b1)、また『ダライラマ５世年代記』にも Chos rje khu dbon gyi mgon po'i bka' babs kyi slob ma Gya a snyan dam pa Kun dga' grags として言及されている。かれは bla ma bDag nyid chen po をサキャの座主に迎えるのに一役買ったとされる (D5Z, 58a5-b2)。かれはまた漢文文献でも確認される。稲葉正枝氏によってすでに研究されているように、『元史』巻二〇二釈老伝および『仏祖歴代通載』巻二二に膽巴功嘉葛剌思として簡単な伝記が記されている（稲葉、1963、pp.180-182)。それによればかれは大德七年 (1203) に 74才で亡くなったというから、生年は1230年と推定される。中統年間 (1260-1263) にパクパの推戴によって元の朝廷に用いられるようになり、その後も長く中国に留まっていることからすれば、パクパの弟子のうちでも特に中国において師弟関係を結んでいたものと思われ、その繋がりの深かったであろうことが窺われる。かれは単にサキャパンディタの伝記を書いているばかりでなく、『サキャ派年代記』のコロフォンによれば、それの基づいた gdung rags のひとつを書いたともされる (SDR, 304a6)。そのような意味でもかれはサキャ派の伝統の中で重要な人物であったと言えそうである。特に長く中国にいたことがかれの書いたものに何らかの特徴を付加していたと思われるが、残念ながら現在のところ、われわれにそれは伝わっていない。かれの活動も含めて、その情報を後代の資料の中で蒐集できることが期待できるだけである。

次に rDo rje rgyal mtshan については、『青冊史』の「時輪タントラ」の伝承に関する章（第 10 章）に次のような報告がある。パクパの教師の一人 rGwa lo (1203-1282) には４人の子供があり、少なくともその３人までが「時輪タントラ」に関係があった。その第２子 Shes rab seng ge (1251-1315) は 30 才 (1280) のときパクパとナルタンの座主チム一切智者の前で具足戒を受けている。かれももちろん「時輪」を含めてタントラを説いていたが、特に論理学にも造詣が深かった。後にかの有名なサキャ派の Bla ma dam pa bSod nams rgyal mtshan (1312-1375) が生まれたときには灌頂を授けている (DN, Tha, 18a5-b1)。第４子 Bla ma A ka ra singdhi は「時輪タントラ」の Rva lugs および 'Bro lugs のほか、サキャ派の法を余すところなく知悉した (ibid, 18b6)。その子供が Bla ma rDo rje rgyal mtshan である。かれは 1283 年に生まれている。叔父の Shes rab seng ge に「時輪」を初めとする様々な教誡をすべて聞いた。またその後は他のタントラのほかサキャ派の「道果」の教えも聞いた。そのうちに名声が高まり、中国の皇帝に招かれて 1322 年 (khyi lo とあり、あるいは 1310 年かもしれない) 中国に行き、1325 年に亡くなっている。かれはまたプトンの師匠として「時輪」や暦学などタントラの注釈を授けている (ibid., 18b6-19a7)。かれがはたして上のサキャパンディタの伝記、あ

るいは上の Dam pa 同様、サキャ派の年代記を書いた人物と同一人物であるかどうかは確認できない。しかし、今見たようにサキャ派ないしパクパとの繋がりがはなはだ深い点からすれば、かれがそのような伝記なり、年代記なりを書いておかしくない人物であったと言える。もしそれが認められるならば、この『スンドーマ』は早ければ 1300年前後にまで遡りうることになるであろう。逆に言うなら、ここに挙げられている著者は皆ごく早い時期の人物ということになる。

一方では、この著作はサキャ全書では Ngor chen Kun dga' bzang po (1382-1456) の全集の中に収められていることにも注意しなければならない。しかし上に見たようにコロフォンには著者名はなく、またその著者名のないままに『ラムデ=ロプシェ』に単独で収められてもいる。したがって簡単に Ngor chen の著作であると考えてしまえるものではない。この点についてはなお Ngor chen の伝記や著作リスト、聴聞録 (Thob yig rgya mtsho, SKKB, Vol. 9, 44.4.1-108.2.6) などを検討する必要がある。ただし、その特殊な性格からして、次にみるコラムパやロオケンチェンとほぼ対になる時期に書かれていると考えられるから、Ngor chen その人ではないにせよ、15世紀中ごろ以降の成立と言ってよいと思われる。

コラムパ (1429-1489) の伝記の記述の仕方は、内容面は別として形式の上で他の伝記と異なった特徴を持っている。必ずしも時間の順序にそっているわけではないが、おおよそモンゴル招聘以後の記述と思われる部分は「3度世間の上級の人たちから敬礼を受けたこと ('dzam gling che dgus zhabs la gtugs pa'i yon tan lan gsum)」という項目名のもとに第1に人の王クテン、第2に龍王、第3に護法神の王、と科文分けされている節 (SKKB, Vol. 14, 128.2.2-128.4.6)、次に「予言を得たこと」という節 (ibid, 129.1.1-129.2.2)、そして死の直前の様子を述べる節 (ibid, 129.2.2-129.3.4)、という構成になっている。このような整理の仕方はそれに先行する通常の時間順に記述される伝記があった上でなされたものと考えるのが自然である。言い換えれば、このコラムパに含まれる情報はこの伝記の著作時期よりも何程か遡りうる、ということである。特にここで注目したいのは龍王の伝説である。現在の筆者が参照し得、かつ著作年次のはっきりしているものの中では、このコラムパの記述が最も古い。ただしこの伝説は『スンドーマ』にも記されているので、うえの推定によれば、あるいは『サキャ派年代記』の方が古いかもしれない。いずれにせよこの両者がほぼ同時代であるとすれば、この伝説が知られてくるのは、この時期以後と言えるであろう。もちろんそのことは、この伝説がこの時期初めて成立したということを意味しない。現在に伝わらないごく初期の伝記にすでにこの伝説が記載されていた可能性を否定するものではない。しかし失われたものを根拠にしては何も論ずることはできないので、ただわれわれに残されたものを根拠にしてどれだけのことが言えるのかをできるだけ正確に確定しておきたい。「予言」の項目と「死の直前の様子」を述べる項目は大部分ビジリンチェンの報告に基づいているが、ここも元は時間の順序にそった記述であったものが、内容に即して科文分けされている。

次にロオケンチェンの (9) はコラムパの著作同様サキャパンディタの著作『三律義分別』(sDom pa gsum gyi rab tu dbye ba, SKKB, Vol. 5, No. 24) の注釈であり、本文の解説に入る前に著者その人を知らなければならない、としてサキャパンディタの伝記を



記し、しかも内容の面から分けた科文を付けるという形をとっている。しかし形式は類似しているにもかかわらず、その内容は上の対照表からもわかるように、異なっている。ロオケンチェンの伝記はほぼそのまま『サキャ派年代記』に再録されているのだが、いくつかの重要な点で相違を見せている。まず第1に、これにはクテンの招聘状がない。この手紙については D. Schuh が、より後代のいくつかのテキストを比較検討した結果その真憑性を疑問視しているが、確かにわれわれに知られている伝記資料の中でそれに触れるものは、比較的後代のものに限られるようである。少なくとも 1579年に書かれた (12) の伝記にそれが詩に書き直された形で出てくるのが筆者の見た限りでは最初である。ただし 1538年の『新赤冊史』にはその出だしの部分のみが引かれているが、それは "tshe ring gnam gyi she mong las rgya bsod nams dpal gyis mngon par mtho, rgyal po nged kyi lung bod sa skya pandi ta kun dga' rgyal mtshan dpal bzang po la zlo ba" (DMS, 51a2-3) というモンゴル皇帝の詔勅 ('ja' sa) に一般的な呼び掛けの言葉のみであり、その著作時点でここに引かれる招聘状の全文があったかどうかはわからない。その他の伝記の中で、単にクテンの使者が来て王の lung (命令書) を宣布したという記述は、古くはタクパゲンツェンの (3) と (8) にのみ見られる。そのことをも心に留めて、このクテンの手紙については後にもう一度取り上げることにしたい。

ロオケンチェンと『サキャ派年代記』の相違の第2点は、前者が、五台山の人たちがサキャパンディタを供養するためにリンチュウツェにやって来たという記述で唐突に終わってしまうことである。サキャパンディタの死の記述さえ、ない。これはどういうことであろうか。その死の記述を欠く伝記は他に知られていない。その理由を推測することは難しい。このように最後が省略されているために、『サキャ派年代記』に収録されている「弟子たちに告ぐ」という手紙も含まれないことになり、この手紙の初出が 1629年の『サキャ派年代記』まで待たねばならない、ということになる。この点はこの手紙の真憑性をさらに疑わしいものにしてしまうことになる。

一方このロオケンチェンによる伝記と『スンドーマ』とには共通の性格がある。両者ともサキャパンディタ全書に含まれる文献をいくつか利用、ないし再録していることである。ロオケンチェンでは上の分節番号 7, 8, 14 (順に SKKB, Vol. 5のNo. 97, 98, 32) であり、『スンドーマ』ではその 7, 8 に当る部分に No. 96 が、16 の『仏密意解明』に関する記述ではそのコロフォンが利用されている。ただしその利用の仕方には若干の相違がある。ロオケンチェンの利用しているのは教理的な問答がほとんどであるのに対し、『スンドーマ』は具体的な活動に関する情報を含むものを利用している。No. 96 については後に取り上げるとして、『仏密意解明』のコロフォンは例えば次のようである。

tshogs chos 'di dBus gTsang Khams gsum du ngas thams cad la bshad pa yin pas / nga'i slob ma thams cad kyis lung thob pa yin pas yi ge 'di la ltos la shod // 'di bshin nyams su long. (SKKB, Vol. 5, 50.1.6 ; LBLS, Ka, 64b5-6)

またロオケンチェンが取り上げているものはビジリンチェン筆受のものであるが、『スンドーマ』はそれに言及していない点については後述する。

『サキャ派年代記』と『スンドーマ』とではロオケンチェンに省略されている部分、分節番号 16, 17 が、『スンドーマ』に含まれない「弟子たちに告ぐ」を『サキャ派年代記』

が付け加えているのを除けば、そのまま再録している。また以上の伝記のうち、この『サキャ派年代記』以外には含まれていない幻化寺（sprul pa'i sde）の由来についての伝説が、1565年成立の『学者の宴』に「他の伝記には見られないが、 rtogs ldan Shambhala pa の Lam yig に」述べられているものとして報告されている（KGT,Ⅲ, p. 797)。このシャンバラパ（時輪行者）という人物が誰であるかはわからないが、『学者の宴』の著者パオツクラクテンワがやや異なった系統の資料を参照していたことがわかる。もちろんその内容が史実であるわけではない。

今言及した『学者の宴』は他に見られない奇妙な記述をしている。その一端、即ちサキャパンディタ招聘の理由が龍王による足の病の治癒のためとしている。龍王による足の病の話は上に述べたようにコラムパの伝記にすでに見られるが、それをサキャパンディタ招聘の理由にするのはこれが最初である（Schuh, 1977, p. 51)。またクテンはグユクのハーンの即位式に行っていて直接サキャパンディタに会っていないのだが、その即位式から戻ってきて会ったとき、サキャパンディタに法を求めなかった（KGT, Ⅲ, 795.4）。その後サキャパンディタが亡くなるときの天変地異に驚いて信ずるようになり、以前法を求めなかったことを悔やんでパクパに法を求めたという（ibid, 795.22-23)。その他単にサキャパンディタの伝記ばかりでなく、チベット=モンゴル関係について、この『学者の宴』は注意すべき情報を多く含んでいる。

以上煩雑な記述となったが、割合情報量の多い文献について、それぞれの資料の提起する情報の新旧、および他資料との関係の若干を検討した。ここから諸資料の相互関係を少しでも浮き上がらせることができているとすれば幸いである。しかし年代の確定できない著作や、現代に伝わらない伝記があること、問題をサキャパンディタの最晩年の７年間に限っていることなどから、すでに周知の事実以外の新たな情報を提供し得ていないのも認めなければならない。ただ歴史資料を扱う際、その資料の成立年代と他資料との関係を位置付けておくことは、是非とも必要なはずである。後代のよくまとめられた資料を使って歴史記述を行うとしても、その情報がどの時期から文献の上に現れ出したのかを検討しておかなければ、裏付け捜査がなされていないということになるであろう。



上の議論で残してきたいくつかの問題を、別の観点から考察してみよう。

『スンドーマ』がサキャ全書の中からその記述を利用しているもののうちのひとつに、No. 96 bKa' gdams pa Nam mkha' 'bum gyi zhus len がある。この著作には 14 の問答が記されているが、その２番目（SKKB, Vol. 5, 415.2.5-3.1）に

> このモンゴルに（Hor 'di la）あなたがいらっしゃることで益がある理由があるのですか。

というナムカーブムの問いに対してサキャパンディタは次のように答えている。

> このモンゴル（人の王？）が私に「何としても帰依処としてやって来い。もし来ないならば軍隊を送るであろう」と言って来たので、もし軍隊が来たならばチベットに害があることを怖れたので（モンゴルに）行くのです。衆生に利益あることを願って行く以外に、利益を確かにする理由はありません。また衆生に利益があるならば私の身命を捨てることに躊躇すべきことはないと考えています。

即ち、

1) 帰依処としてモンゴルへ行くこと、
2) 衆生のために身命を顧みずに行くこと、
3) モンゴルへ自分が行かなければ、モンゴル軍がチベットに来ること、

が述べられている。この内容は、クテンのサキャパンディタ招聘の手紙の内容にはなはだよく似ている。その招聘状については、D. Schuh が数種類の史書における引用形態を詳細に比較しながら、分析をしている（Schuh, 1977, pp. 10-41)。重複するが、ここでも必要最小限の部分を訳出しておこう。

> 私の父母の御恩に報いるために、帰依処となるものが必要である。〔そこでそれについて〕考慮してみたところ、汝が適切であるということになったので、途上の困難から逃げずにやって来なさい。もし汝が年老いていると言うならば、昔の釈尊が衆生のために自らの身体を無数に布施なさったことを思い出さないであろうか。それでも汝が来られぬと言うならば私は大辺境軍を送って、多数の衆生に害をなすならば、汝は〔それを〕怖れないであろうか。故に仏教と多数の衆生のことを考えて、汝は早急に来なさい。（Schuh, 1977, pp. 31-34, ここでは『蒙古仏教史』のテキストに基づいて訳出。）

『サキャ派年代記』に引用されたテキストでは、「1244年８月末日」の日付になっている。この招聘状の内容は

1) 帰依処が必要なこと、
2) 身命を顧みずに来い、という命令、
3) さもなければ軍隊を派遣するという威嚇、

と分析することができる。そうしてみると上のサキャパンディタの言葉とよく相応していることがわかる。Schuh の研究では、複雑な比較分析の結果、その真憑性は、積極的に否定することはできないが、非常に疑わしいとされている（ibid, p. 41)。一方サキャパンディタの上の手紙自体は、Jackson (1985) p. 111 に掲載されているサキャパンディタの著作リストによれば、ごく古い時期からサキャパンディタの真作として認められていた。

現在のところ、この作品の真憑性に対する否定的な材料はない。もしそれが真作であるとするなら、その内容からして、上のクテンの招聘状と称せられるものが実際に来ていてもおかしくはない。ただしそのことは、この招聘状が真作であることを保証するものではない。サキャパンディタの手紙を基に、後代に偽作された可能性もあるからである。しかし少なくとも同じような内容の手紙が届いていた可能性は、そのナムカーブムへのサキャパンディタの手紙の真憑性と同じ程度のものがある。

一方、より具体的な状況を示している資料が、著名な Bu slob rnams la spring ba「弟子たちに告ぐ」(SKKB, Vol. 5, No. 77) である。この手紙は、Tucci によって訳出・紹介され、Schuh によって分析・解釈された (TPS, pp. 10-12; Schuh, 1976, pp. 227-233, nn. 17, 20)。この手紙でもモンゴル軍の脅威と、自分が来たためにそれを抑えていることが述べられているが、内容の基調は、モンゴルによって征服された他国の例を挙げながら、繰り返しモンゴルに服従することを説くことにある。しかし、この手紙の真憑性は D. Jackson によって疑問視されている。その著作リストでも、この手紙は後代のごく限られた目録 (サキャ全書目録から知られる dKon mchog lhun grub のリスト) にしか現れないからである。さらに〔筆者との個人的な談話の中で〕この手紙の全文の、現在われわれに伝わっているもののうちでの初出は、1629年の『サキャ派年代記』での引用である、というのも、この年代記のサキャパンディタの伝記はその大部分がロオケンチェンのサキャパンディタの伝記の転載からなっているが、奇妙なことにこの手紙の部分はそのロオケンチェンの伝記には見られない、ということを指摘している。この手紙は今までその真憑性を特に問われることなく、その具体性の故に重視されてきたが、なお検討の余地があることになるだろう。

次にサキャパンディタの晩年の弟子ビジリンチェンにスポットライトを当ててみよう。Bi ji rin chen あるいは Hla rje bi ji、またある資料では Bi ji sman pa (SDR, 113 a1) と言われるこの人物は、その名からすれば医者であったと思われる。かれは『ゴル仏教史』や『道果ラマ伝集』、『サキャ派年代記』に報告される弟子のリストには現れてこない。しかし晩年のサキャパンディタに最も身近に仕えていた弟子であることは間違えない。サキャパンディタがモンゴルへ向かったのが数え年で63才、考えてみれば、医者が常に身辺につきそっているのも当然かもしれない。以下にかれについての情報を整理してみよう。

サキャパンディタの著作は後に見るパクパの場合と異なり、そのコロフォンに具体的な記述はほとんど見られない。そのうちビジリンチェンが筆受者になっている著作が３つある。それらにはそれを書いたときの状況が具体的に、しかしごく簡略に示される。その３つの著作のタイトルとコロフォンあるいは前書きに含まれる情報は次のようである。

No. 32, rTogs ldan rgyan pa'i dris lan : rJe btsun 'Jam pa'i dbyangs kyi rnam 'phrul Chos rje Sa kya pandita chen po rGya nag Ri bo rtse lngar phebs nas



bzhugs pa'i tshe / de na sgom byed kyin gnas pa'i rTogs ldan rgyan po zhes bya ba zhig gis Chos rje pa la bskor ba dang phyag mang po byed cing 'dug pa la / Chos rje pa'i zhal nas / rTogs ldan pa bskor phyag kyang ngo mtshar che ste / gnas 'di 'dra na 'dug pa la gdams ngag zab mo la brten pa'i sgom sgrub cig dgos pa yin te 'ang gsung gin 'dug / rTogs ldan pa des bsam mno zhig btang ste rang gi gnas nas dar yug dkar po zhig blangs te Chos rje pa la phul nas / Chos rje palta ba phyag rgya chen po 'di theg pa thams cad kyi bsgom du bzhed dam / phyag rgya chen po'i rang bzhin ji lta bu lags / ci'i phyir phyag rgya chen po zhes bya / 'di'i skye tshul dang / sa lam bgrod tshul gyi rim pa ji lta bu lags / bdag la phyag rgya chen po'i gdams ngag zab mo zhig gnang bar zhu zhes zhu yin 'dug pa la / Chos rje pa thugs dgyes ste / dom bi pa'i Kyi rdo rje'i dbang bskur mdzad nas / phyag rgya chen po lhan cig skyes grub dang / tog the pa'i bsam mi khyab kyi gdams ngag tshang ma gcig gnang nas / ... (本文) ... / rTogs ldan rgyan po la gdams pa phyag rgya chen po'i mig thur zhes bya ba Chos rje pa'i gsung la yang yang nan chags byas nas Bi jis Ri bo rtse lngar bris pa'o // (SKKB, Vol. 5, 334.2.2-335.4.3 = Na, 77a2-80a2)

No. 97, sTon pa Blo gros rab gsal gyi dris lan : mDo smad kyi ston pa Blo gros rab gsal gyi dris lan Bi ji rin chen grags kyis gLing khar bris so // (ibid, 417.2.2 = Na, 246a2)

No. 99, rNal 'byor pa phru ma'i dris lan : rJe btsun 'Jam pa'i dbyangs kyi rnam 'phrul Chos rje Sa skya pandita Hor yul du phyags phebs pa'i mDo smad kyi lam khar chibs gong du byon nas lam la gshegs pa'i tshe / rnal 'byor pa Phru ma pa zhes bya ba'i sgom chen pa bzang po gcig gis Chos rje pa la gos phyi nang cig phul nas / ... (本文) ... / rnal 'byor pa Phru ma pa la gdams pa'i tshigs su bcad pa lnga ba Bi jis mDo khams smad gling khar bris pa'o // (ibid, 419.1.2-3.2 = Na, 249b2-250b2)

『サキャ派年代記』の梗概を示した際に言及したように、No. 97は分節番号７に、No. 99は８に、No. 32 は14に再録されている。上の前書きあるいはコロフォンには時間は記入されていないが、No. 97と No. 99 はモンゴルへ向かう途中であるから、1244年から1246年の間の出来事である。『道果ラマ伝集』の言い方によれば、サキャパンディタはモンゴルへ向かう途上、灌頂、加持、教誡等を与えながら進んで行ったので、３年かかったとある (LBN, 45b5)。それが本当に教化活動のためであったとは思えないが、それはともかくとして、その途上で出会った人のなかに上の２人がいるのであろう。本文の内容は完全な教理問答で具体的な情報はない。その意味ではわれわれにとってはあまり重要な著作では

ないと言えるであろう。一方、No. 32はチャング一へ着いてからであるから、1246年から1251年の間である。しかしその間に五台山へ行ったという記事は、このビジリンチェンの報告以外には知られていない。むしろロオケンチェンの伝記で上の分節番号15では、リンチュウツェにいるサキャパンディタのもとに五台山の人々の方がやって来て教えを受けたという記述がある。この記述は確かにサキャパンディタが五台山へ行ったことがあるということを否定するものでもなく、またこの記述そのものも伝説的で信用の置けるものではないが、少なくとも14の記述とではつながりはやや自然さを欠いている。サキャパンディタが実際に五台山に行ったかどうかはなお新たな言及を探すことによって解決しなければならない問題である。

また別の観点から考えてみよう。D. Jackson によれば、サキャパンディタの著作リストがいくつかあるうち、この３つの著作がリストアップされるのは次のとおりである (Jackson, 1985, pp. 105-111)。

a. dKon mchog lhun grub の gSan yig (1500年代初頭) : Nos. 32, 97, 99.
b. 伝記資料の (11) の著作リスト (1579) : No. 32 (No. 97 は不確か)
c. Sang rgyas phun tshogs の gSan yig (1600年代後半) : Nos. 97, 99.

ロオケンチェンの伝記の年代が1527年であるから、その時には少なくともかれにはこの著作は知られていた。dKon mchog lhun grub の gSan yig が1500年代初めであるとすれば、それはロオケンチェンとほぼ時期を等しくしている。さらに No. 99のロオケンチェンに引用されているテキスト (当然それを引き写した『サキャ派年代記』においても同様であるが) の上に挙げたコロフォンの後に、細注で「この３つの連続した問答は以前には広まっていなかったが、mDo Khams から rDo rje 'chang Kun dga' dbang phyug の手に入ったものを書き写したのである : dris lan gyi rim pa gsum po 'di sngon chad dar ma byung kyang / mDo Khams nas rDo rje 'chang Kun dga' dbang phyug gyi phyag tu byung ba las bris pa yin no / zhes gsungs so (KJS, 33b5)」と言われていることに注意しよう。ここに言及される３つの問答が指すものとして D. Jackson は、分節番号７における No. 97、８における No. 99、および９の、モンゴルへ行く途上での不思議なリンセル (舎利) についてのビジリンチェンとの対話 (KJS, 33b4-34a4) を挙げている。なるほどそう言えなくもない理由もある。即ちまず８で No. 99 の引用が終わったのち、ces 'byung zhing / yang mDo srang du phebs pa'i tshe ... "としてエピソードが始まり、最後は "ces kyang gsungs so // " と終わる。両者ともビジリンチェン筆受になる部分が "ces" として引用される形をとり、またその両者を "zhing / yang" が並列するものとしてつないでいる、と言えるかもしれない。またこの３者ともに mDo khams の途上での出来事であり、それが上の細注にあったように、mDo khams に残っていてそこから Kun dga' dbang phyug の手に入ったというのは自然なことである。しかしながら上の細注は、順序から言えば、２番目である８に付けられたもので、その後に来る９までを指しているとするのはやや不自然であるし、またこの９は完全な著作、あるいは少なくともサキャパンディタの教えの言葉を書き写したものでもなく、mDo srang の途上であったエピソードを書き記したものであって「問答」と言えるようなものでもないと思われる。もしこの９



を３つの問答に含めないとすれば 残る可能性は No. 32、あるいは現在に伝わらぬ何らかの著作ということになるだろうが、そのうち後者であるとすればかなり複雑な説明を用意しなければ、このロオケンチェンの細注の意味を解釈できないであろう。しかし前者であるとしてみても難点がないわけではない。 No. 32 は五台山で書かれているのだから、それが mDo khams に保存されていたというのも、回りくどい話であり、またこの伝記での記載順から言えば、この No. 32 のみが (その内容からすれば当然のことであるが) かなり離れたところにあって、「この３つの問答」と呼ぶのには抵抗がある。

いずれにせよ速断はできないが、現在の筆者は「この３つの問答」は、Nos. 32, 97, 99 を指している、とすることに傾いている。この３つともがビジリンチェンの署名を持ち、dris lan というに相応しく、No. 32と No. 99にはともに前書きで問答の始まる状況が描かれていて、その手法が類似している、また『スンドーマ』に知られていたのは先のリンセルについてのエピソードのみであり、この Nos. 32, 97, 99はロオケンチェンから初めて報告されている、さらにロオケンチェンの引用もこの３者とも、コロフォンを持った著作の引用という形をとっていること、などの理由による。

またその細注には、それらは Kun dga' dbang phyug (1424-1478) の手に入ったと言われている。従ってその資料の存在そのものは、1450年前後にまで遡り得るであろう。さらにビジリンチェンの実在性、次に見る伝記と共通の描写の具体性、その３者の共通の保存され方などから、これらが確かにビジリンチェンの言う通りの問答の記録であるとすることはそれほど疑わしいことではない。そうであった場合、特に五台山での問答の記録は、その当時の五台山ににおけるチベット仏教の一端を示していて貴重な情報と言える。また、後に見るようにパクパは1257年には五台山へ行っており、またそこで様々な経論を学んでもいることも同様の情報と言えよう。

さてもっとはっきりと文献史のなかにビジリンチェンの名を刻印しているのは、すでに何度か言及した、サキャパンディタの死の直前の詳細な記録である。その全貌と思われるものをわれわれが知り得るのは、やや後代の『スンドーマ』からであるが、その記録の存在はごく初期のころから確認される。

まず1344年成立の『道果ラマ伝集』には後にその箇所を表示するように明らかにそれに基づきつつラジェビジとの対話という形で書き直されているのが確認される。また、bKa' dams nam mkha' 'bum というものが、1267年パクパと会って行った法問答の記録を書き残したものが『サキャ派年代記』のパクパの伝記の中に転載されているが、そこには次のような問答があったことが報告されている。

> それでは法主 (サキャパンディタ) が亡くなるとき、南インドのムムナ (Mu mu na) の国にニメトプペル王 (rgyal po Nyi ma'i stobs 'phel) の子供として生まれる、と書いてあるものがありますが、法主御自身がおっしゃったのでしょうか、と〔パクパに〕お尋ねしたところ、〔パクパは次のようにお答えした〕最初〔法主は〕わたしにそのことをおっしゃらず、ビジメンパ (Bi ji sman pa) にそのようにおっしゃったということです。その後わたしもお尋ねしたところ、(法主御自身が) お認めにな

りました（SDR，112b6-113a2）

この予言は『スンドーマ』では1251年10月18日の夜明け頃ジェブツンパ=タクパゲンツェンとビルワパとナクポパが現れ、タクパゲンツェンが予言したものとして（LBLS，Ka，66 a4-5 に）記載されている。従って1267年時点でそのビジリンチェンの文書の存在が確認される。因みにこの予言は、最初に述べたパクパの伝記（2）にも現れるが、そのオリジナリティはこのビジリンチェンの方にある。ここでパクパは自分でもサキャパンディタに尋ねたように言っているが、その伝記の記述はビジリンチェンの文章を全くそのまま転載していることからしても、どうもそれは怪しいように思う。パクパは後にビジリンチェンの記録を見てそれを知ったのではないのだろうか。

サキャパンディタの弟子であるヤルルンパ=タクパゲンツェンの伝記は韻文で書かれているので、文字通りの引用ではないが、明らかにビジリンチェンの記述に基づいて書き直されていると思われる部分がある。しかしながら対応しない部分もあって何か別の資料、あるいは可能性は少ないが当人がそこに居合わせて見聞していたかもしれないことを想像させるもする。そこで『道果ラマ伝集』の場合も含めて、日付の対照表を作って検討してみよう。

| 『スンドーマ』 | タクパゲンツェン | 『道果ラマ伝集』 |
|---|---|---|
| 1251.9/8 (65a1) | = 9/- (35a4) | = 9/- (46a2) |
| | ≠ -/- (35a4)① | |
| 9/29 (65a2) | = 9/29 (35b1) | = 9/29 (46a2) |
| 9/30 (65a3) | = 9/30 (35b2) | |
| 10/6 (65a3) | ≠ 10/6 (35b2)② | |
| 10/13 (65a5) | > 10/13 (35b3) | = 10/13 (46a3) |
| 10/14 (65a6) | = 10/14 (35b4) | = 10/14 (46a4) |
| 10/15 (65b1) | ≠ (-/-) (35b4) | = 10/15 (46a4) |
| 10/16 (65b1) | | |
| 10/17 (65b4) | = 10/17 (35b5) | = 10/17 (?) (46a5) |
| 10/18 (66a1) | = 10/18 (36a1) | = 10/18 (46a6) |
| 11/7 (66b2) | = 11/8 (!) (36a4) | |
| | ≠ 1251.-/- (36a6)③ | |
| 11/15 (67a2) | < 11/15 (36b1) | = 11/15 (46b4) |
| | ≠ 11/18 (36a3)④ | |
| 11/25 (67a3) | ≠ 11/25 (36a3)⑤ | |

タクパゲンツェンの中で言及される弟子の名は、増広されたと思われる③にパクパの話が出てくる以外は、ビジリンチェンのみであり、それが次のような形で３度現れる。

Bi ji la sogs bu slob tshogs rnams (35b5, 36a4-5)

Bi ji rin chen grags pa'i mtsha' can (37a6)

ビジリンチェンの記述はすべて１人称（bdag）で語られるが、タクパゲンツェンの対応部分はすべて人称なしで述べられている。これらの対応の仕方からして明らかにビジリンチェンを土台にして書かれていると言えるが、一方全く対応しない記述も含まれる。そのうち、前後の時間系列からは若干ずれた表現をとっている①と③が何か他の資料が挿入されているらしいのと、④および⑤が死後の様子について甚だ詳しいこととである。しかし、後者に関しては、『スンドーマ』に引かれるビジリンチェンの記述では、その死後の描写が極端に少ないことからすれば、場合によってはむしろタクパゲンツェンの方にもともとのビジリンチェンの記述を受け継ぐものがあるのかもしれない。上に挙げたビジリンチェンの名前の言及の２番目のものはまさにその箇所に現れるものである。確認はできないが、もしそうでないとすれば、タクパゲンツェン自身がその場に居合わせたか、この他にも詳細にサキャパンディタの死を報告する文書があったかのどちらかであろうが、そのいずれも不自然さを免れない。前者であるとすれば、なぜタクパゲンツェンはそれ以外の箇所でも自分の見聞をもとにして書かなかったのか説明がつきづらいし、後者についてもこれまで挙げた以外に他の詳しい資料が存在した痕跡を認められないからである。従ってビジリンチェンの記録には『スンドーマ』に引用されたものの後にまだ続く部分があったと考えておきたい。

他の資料の存在が認められない、というのとは矛盾するようだが、③は唐突に“lcags mo phag lo bdun cu bzhes pa'i tshe”と始められる。それ以前には確かに年の記載はなかったが、上の表からもわかるように、月日の細かい言及があるのだから、なにも今更 lcags mo phag と年を示し、しかも70才と年齢を示さなくともよかったはずである。このようなことはこの部分が他の資料の挿入であることを示しているであろう。その内容はサキャパンディタが最後にパクパに与えた言葉である。これは後に見るパクパ伝に報告される言葉とは異なっており、何か系統の違う資料である。

一方①の内容は聖龍樹や文殊、観音を初めとする諸尊が現れて、身体の病についてサキャパンディタに教誡を与えるという話であるが、記述はすべて３人称であり、ビジリンチェンの入り込む余地はなく、また他の誰かが具体的に見聞したことの記録といった性格のものでもなく、伝説的である。従って後代に（といってもこの伝記そのものが比較的古いものであるから死後ほど遠からぬ時期に）作られたものであろう。

以上ビジリンチェンという、サキャパンディタ最晩年の最も密接な弟子の「存在」を何程か定着できたであろう。かれのより具体的な「様態」は、上の記録の中でのサキャパンディタとのやりとりを読んでみることで彷彿させるであろう。

## ２．パクパ伝の比較考察

現在筆者の利用しうるパクパの伝記、あるいはかれの生涯に言及する歴史書を成立年代順に挙げるならば次の通りである。

（1） イェシェゲンツェン『パクパ伝宝環』:dge slong rdo rje Ye shes rgyal mtshan, Bla ma dam pa Chos kyi rgyal po rin po che'i rnam par thar pa Rin po che'i phreng ba, 1283, LDLS, Ka, 145b-169b5.

（2） ラマダムパ=ソナムゲンツェン『道果ラマ伝集』 1344, LDLS, Ma, 47a5-51b2.

(3) 『赤冊史』1346, HDT, 22a3-6.
(4) 『ギャプイクツァン』1434, GBY, 156b1-159b2.
(5) コラムパ『三律儀分別註』1476, SKKB, Vol. 15, 124.3.3-125.3.5.
(6) 『青冊史』1478, Nga, DNG, 4b3-5.
(7) 『新赤冊史』1538, DMS, 51b1-52a2.
(8) 『学者の宴』1564, KGT, pp. 795-798
(9) 『サキャ派年代記』1629, SDR, 79a-127a.
(10) 『ダライラマ５世年代記』1643, D5Z, 56a4-57b5.
(11) 『ゴル仏教史』1692, NCB, 161b1-163a7.
(12) 『サキャ全書目録』1736, SKKB, Vol. 7, Ba, 421b6-426a5.
(13) コンチョクジクメワンポ『チャンキャ二世転生譜』全集 Vol.2, 11a3-22b3.

さらにこれよりも後の歴史書（たとえば『パクサムジョンサン』や『蒙古仏教史』など、これらについては第４節参照)にも言及されるが、主要な流れは以上のもので掴めるだろう。以上のうちパクパ個人の伝記は (1) のみであって他はすべてサキャ派内部の史書、または一般史に記載されるものである。この点がサキャパンディタの場合と大きく異なる。(3), (6), (7), (11) の一般史に言及されるものは短く、他の伝記から得られる以上のものを含まない。サキャ派内部に伝承され正統的なパクパ像を示すものといえる (1), (2), (5), (9) は分量も多く、相互に関連があるうえ、年代的にも間隔のあるものなので、パクパ伝の資料的な位置づけを考える手掛かりとなる。一方同じ一般史でもそれぞれ特色を有する (4), (8), (10) の記述は大筋はサキャ派系の伝記と異ならないが、細部においてそれらに含まれない情報を伝えていて重要である。(12), (13) は比較的後代に成立し、それまでのサキャ派系の伝記の要約といった趣きで新たな情報はない。

さて以下では (1), (2), (5), (9) に描かれるパクパの生涯を辿ってみることにしよう。ここでもサキャパンディタの場合と同様最も分量の多い『サキャ派年代記』の梗概を示し、その上で他の資料との異同を検討する、という手順を取ることとしたい。

1．(79a4-6) パクパは、父サンツァソナムゲンツェン (Zangs tsha bSod nams rgyal mtshan) が52才の1235年３月６日に生まれた。幼時から学問に優れていた。
2．(79a6-b1) 前生はセトゥンリパ (Se ston ri pa) であったが、その２人の弟子がパクパに会いに来たとき、パクパは前生のことを覚えていて、その２人が名乗る前に自分の弟子であると認め、人々を驚かせた。
3．(79b1-6) セトゥンリパがパクパに転生した次第。
4．(79b6-80a1) サキャパンディタについてキトン (sKyid grong) へ行ったときにも、セトゥンリパの昔の弟子をそれと認めて人々を驚かせた。
5．(80a1-2) ３才のとき、sgrub thabs mtsho skyes を暗唱したので、「この方は確かに殊勝な方だ ('phags pa'o) 」と有名になり、以後パクパと言われるようになった。
6．(80a2-3) ８才のときには転生譜を、９才のときにはヘーヴァジュラタントラを暗唱して人々を驚かせた。



7．(80a3-4) 10才のときサキャパンディタにつれられチャングー (Byang ngos) に向かう途上、ウにおいて出家をする。
8．(80a4-5) 17才のとき、サキャパンディタは後事をパクパに託して他界する。
9．(80a5-6) 1253年にセチェン (Se chen, 即ちフビライ) に招かれて彼の宮殿に行き、法の問答をする。以下王とのやりとりが 85b5 まで述べられる。
10．(80a6-b4) チベットで最も徳の高い人を王に問われて、パクパは「私のラマ、サキャパンディタです」と申し上げた。「ラマの智慧はどのくらいであり、汝はどのくらい学んだか」と問われて、「ラマの智慧は大海の如くであり、私は手ですくえる程のものを学んだにすぎません」と答えた。
11．(80b4-81b1) 王がチベットに軍を起こそうとしたとき、パクパは止めるよう嘆願したが聞き入れてもらえなかった。そこでチベットへ帰ろうとしたが、妃チャプ (dpon mo Cha bu) がとりなして、王の信任を得た。
12．(81b1-82a4) さらに妃は王に灌頂を受けるように勧めたが、まず妃から先に受けるように言われたので、喜金剛の灌頂を受けた。その返礼に何がよいか尋ねると、パクパは、「とくに自分に大切で高価なものを献じるのです」とおっしゃったので、妃は真珠の輪の耳飾りを献じた。それを売ったお金が、チュミクの法会とサキャの大金屋根の資金となったと言われる。王はパクパに灌頂をお願いしたが、最初は断られた。しかしここでも、妃が和解案を申し上げた。「法をお願いするときや人の少ないときはラマを中央にし、王族、貴族、長官、大衆の中では王を中央にする。チベットのことはラマの言うことに何でも従い、ラマにお伺いをたてずしては王は詔勅を下さない。その他の大小のことはラマにお伺いしていては、ラマは慈悲深いので王国を統治できなくなってしまう、そこでラマに御相談なさらない」と申し上げたので、王は側近者25人とともにパクパにサキャ派の喜金剛の灌頂を受けることができた。これがモンゴルにおける金剛乗の初めである。
13．(82a4-b5) このようにして灌頂は３度行われた。それに対する御布施として第１番目は13ティコル (khri bskor bcu gsum) を差し上げた。２番目のときは、白法螺貝ギャンタク (Chos dung dkar po rGyang grags) を初めとしてチベット３区 (Bod chol kha gsum) を差し上げた。最後の御布施はラマの御言葉通り、大ミユル (mi yur chen mo)* を差し上げたのでたいへん喜んだ。
　* Stein (1951) p. 263 参照。
14．(82b5-84a5) 白法螺貝がサキャ派の手に入るまでの次第。
15．(84a5-85a3) カルマパクシとの神変の争い。第２部訳参照。
16．(85a3-b1) 1253年19才の新年、フビライはパクパに灌頂をお願いし、パクパに「帝師」の称号を、様々な御布施とともに贈った。翌1254年、“Bande gshed bskyed”という勅書をチベット人僧侶に出した。
17．(85b1-5) フビライは、チベットの僧すべてをサキャ派の法流に改宗させるよう詔勅を発布しようとしたが、パクパは、それぞれが自らの法流を守るようにしなければならない、とおっしゃったので、以後のこのお２人の勅令すべてには、各々の法流に努めるようにとお書きになるだけであった。
18．(85b5-86b5) サキャ寺に保存されていた、1254年と1264年の二つの勅書を収録する。

まずフビライが1264年に発布した“'Ja' sa mu tig ma”。

19.（86b5-89b5）1254年の“'Ja' sa bod yig ma”あるいは“Bande gshed bskyed ma”。これは５つの部分に分かれる。

①パクパの詩（ -87a6）

②パクパの弟子の詩（ -87b6）

③パクパの詩（ -88a4）

④フビライの詔勅（ -89a3）

⑤パクパの詩（ -89b5）

20.（89b5-90a2）以上のようなパクパの活動は、昔ティソンデツェン王（rgyal po Khri srong lde btsan）の前でパドマサンバヴァ（slob dpon Padma 'byung gnas）が予言したとおりである。

21.（90a2-92a5）その翌年（1254年 !!）王がジャンユル（Ljang yul）に兵を起こしたとき、パクパはチャングーに行ってサキャパンディタのクンブムで落慶法要を行った。サキャパンディタのお言葉に従いウユクパ（'U yug pa）に具足戒を受けようとドカムまでやって来た。しかしウユクパがすでに1253年に亡くなったことを聞いて引き返し、王と同時に中国に着いた。1255年５月15日21才のとき、中国・モンゴルの境にあるティク（Thig）というところの河岸でニェタンパの僧院長タクパセンゲ（mkhan po sNye thang pa Grags pa seng ge）にお願いして具足戒をお受けになった。そのタクパセンゲに戒師をお願いする手紙（1252年）* が収録されている。

* ただしこれは正しくはウユクパへあてた手紙。

22.（92a5-6）23才のとき、ジャン（Ljang）に招かれて五台山に行き様々なタントラや論を聞いた。

23.（92a6-b2）同年４月14日の夜、サキャパンディタが現じて、将来マハームドラーを成就することを予言した。その時、“Thos pa rgya mtsho ma”もお作りになった。

24.（92b2）それまでモンゴルに文字がなかったので新しくモンゴル文字を作った。そのお礼に王は“Bande gshed bskyed thabs grub ma”を差し上げた。

25.（92b2-4）それから王の宮殿に行き、悪見を長く修し執している道士（Zin zhing）17人を正理によって調伏し出家させた。

26.（92b4-5）28才のとき、たくさんの縁分を差し向けられ、プンチェン=シャーキャーサンポ（dpon chen Shakya bzang po）はサキャ寺の金の大屋根を建てた。

27.（92b5-93b1）1265年31才のとき、サキャ寺に帰った。大金屋根や金・銅からできた天蓋、金瓦のクンブムを建造し、経・タントラ・般若経などの仏語200函を金文字で建立し、多くの弟子を育てた。

28.（93b1-6）1267年33才のときフビライの使者の強い招きにより、王のもとへ向かった。その時、13の役人（las chen）を連れて行こうとしたのに対し、チョンデン・リクレル（lCom ldan ral gri）がそれを揶揄する詩を作った。パクパはそれを逆手に取った返答の詩を作った。

29.（93b6-114b4）1267年33才のとき、モンゴルに向かう途中、カーダム=ナムカーブム（bKa' gdams Nam mkha' 'bum）に会い、多くの法問答をした。その様子はナムカーブムによって詳細に報告されている。

30.（114b4-115a5）モンゴルへ行く途中の教化活動の称賛。

31.（115a4-5）翌年シャーキャーサンポがサキャ寺の壁を建てたのに対し、そのお返しとして134ティコルを贈った。シャーキャーサンポとポンチェン=クンガーサンポはよくそれを治めた。

32.（115a5-b3）それからパクパはフビライのもとに到着したが、1270年36才のとき王に再び灌頂をお願いされた。それに対して王は様々な御布施と詔勅とともに「天の下、地の上の、インドの神子、化身仏、文字を作った人、王国を安泰にした人、五明に通じた学者にして聖者である帝師」という称号を贈った。

33.（115b3-116b1）それから再びチベットに急いで帰ろうと気が急いで王にその旨を伝えた。モンゴルと帰国途上での教化活動の称賛。

34.（116b1-5）1275年41才のときサキャ寺に到着した。その時、僧、大長官、さらにはインドとカシュミールなどから名声を聞いてやって来たパンディタが集まった。彼らにそれぞれの属する仕方の供養と灌頂を行った。パクパは「今チベットにあると言われる、甚深なる経・タントラ・教誡の部を私は持っている。汝らはそれぞれ自らの信ずるところの法を私に求めよ」とおっしゃった。

35.（116b4-117a4）1277年１月チンキム王（rgyal po Jim gim）が施主となってツァンのチュミク=リンモ（gTsang Chu mig Ring mo）で大法会を行った。

36.（117a4-119a4）14日間続いた法会の装飾的な記述。その中でチョンデンレルディを改宗させたことにも触れている。

37.（119a4-120b3）晩年の活動の称賛。特に注意すべきこととして、ドカムガン（mDo khams sgang）に115函の経とrta thog gzhis me tsher mdo mangの40函を金文字で建立し、さらにサキャパンディタの塔「金の多扉」と、サキャパンディタの座所に金大屋根の仏寺などを建立した。

38.（120b3-123b3）著作リスト。

39.（123b3-124a1）主な弟子のリスト。

40.（124a1-125b4）死の様子。

サキャパンディタの場合と異なり、パクパの著作のコロフォンにはその執筆時と場所、そしてその著作を勧めた人物あるいはそれを献呈した人物の名が記されているものが多い。その著作数はサキャ全書の目次の番号では320、私見によっていくつかを細分化すれば、345、そのうち日付あるいは場所の情報が何らかの仕方で記入されているのが、およそ220、即ち３分の２に登る。単純に考えれば、パクパの著作活動が1250年から1280年まで30年間だったとして、１年に７つの時点でパクパの位置を押さえていくことができる計算になる。もちろんすぐにも見るように、年によって、さらにはその年の中でも月によって著作の多寡の片寄りがあり、その数ほどにはそれらの「点」は「線」には繋がらない。とはいえ、そのコロフォンの記載を信用するとすれば、様々な伝記における年代の不一致や簡略な記述を補う情報を得ることができる。また伝記からでは単にパクパの生涯の「ストーリー」を追うことに終わってしまいがちなのを、より具体的に一生の時間の流れを辿らせてくれ

(表４）パクパ諸伝記対照表

| | (1) | (2) | (4) | (5) | (10) |
|---|---|---|---|---|---|
| 1. | 148a5-149a4 | 47b4 | 157a1 | 124.3.3-5 | 56a5-56a6 |
| 2. | 149a4-149b2 | 47b4-48a2 | | | |
| 3. | | | | | |
| 4. | 149b2-149b4 | 48a2-48a3 | | | |
| 5. | 149b4-150a6 | 48a3-48a4 | | 124.3.5 | |
| 6. | 150a6-151a4 | 48a4 | | 124.3.5-6 | |
| 7. | | 48a5-48a6 | 157a3-157b2 | 124.3.6-4.1 | 56a6 |
| 8. | 151b6-152a6 | 48a6-48b1 | 157b2 | 124.4.1-2 | 56a6 |
| 9. | 152a6-152b4 | 48b1-48b3 | 157b6-158a2 | 124.4.3 | 56b1-56b2 |
| 10. | | | | | |
| 11. | | | | | |
| 12. | | | | | |
| 13. | | | | | 56b3-56b4 |
| 14. | | | | | |
| 15. | | | | | 57a4-57b1 |
| 16. | | | 158a2-158a3 | | |
| 17. | | | | | 56b4-56b6 |
| 18. | | | | | |
| 19. | | | | | |
| 20. | | | | | |
| 21. | | 48b3-49a1 | 157b2-157b6 | 124.4.3-6 | 56b3-56b3 |
| 22. | 153a1-153a4 | 49a1-49a3 | | 124.4.6 | |
| 23. | | 49a3-49a5 | | 124.4.6-125.1.2 | |
| 24. | 152b4-153a1 | | 158a4 | | 56b3 |
| 25. | 153a4-153b2 | 49a5-49b1 | 158a3-158a4 | 125.1.2-3 | |
| 26. | | | 158b2-158b4 | | 56b6 |
| 27. | 153b2-154a4 | 49b1-49b6 | 158b1-158b2 | 125.1.3-6 | 56b6-57a1 |
| 28. | | 49b6 | | 125.1.6 | 57a2 |
| 29. | | | | | |
| 30. | 164a5-164b4 | | | | |
| 31. | | | | | 57a2-57a3 |
| 32. | | | | | 57a3-57a4 |
| 33. | 164b5-165b3 | | | | |
| 34. | | 49b6-50a2 | | 125.1.6-2.2 | 57b1 |
| 35. | 165b3-166b6 | 50a2 | | | 57b1-57b2 |
| 36. | | | | | |
| 37. | | 50a2-51a2 | 159a5-159a6 | 125.2.2-4 | 57a4 |
| 40. | 166b6-167b6 | 51a2- | 159a6- | 125.2.5-3.2 | |

この対照表について、特に注意すべき点は、『サキャ派年代記』におけるモンゴルでの活動の記述が、それまでの伝記よりも、かなり詳しくなっていることである。それ以前の伝記について言えば、ここに挙げてあるうちでは、『ダライラマ５世年代記』にいくつかの対応が見られ、また『学者の宴』でもフビライとの交渉やカルマパクシとの神変の争いが報告されている。一体『サキャ派年代記』のモンゴルの記述の資料は何であったのだろうか。『学者の宴』がカルマ派のパオソクラクテンワによって書かれている点にも注意し



| | (11) | (12) | (13) |
|---|---|---|---|
| 1. | 161b1 | 422a2 | 11a5-11a6, 11b5-12a2 |
| 2. | | | |
| 3. | 161a6-161b1 | 421b6-422a2 | 11a6-11b5 |
| 4. | 161b5-161b6 | 422a3-422a4 | 12a2-12a5 |
| 5. | 161b4-161b5 | 422a2-422a3 | 12a5-12a6 |
| 6. | 161b6-161b7 | 422a4 | 12a6-12b1 |
| 7. | 171b7-162a2 | 422a4 | 12b1-12b3 |
| 8. | 162a2-162a6 | 422a4-422b2 | 12b3-12b5 |
| 9. | 162a6 | 422b2-422b4 | 12b5 |
| 10. | | | 12b5-13a3 |
| 11. | | | 13a3-13b6 |
| 12. | | | 13b6-14b3 |
| 13. | 162a7-162b2 | | 14b3-14b5 |
| 14. | | | |
| 15. | | | 14b5-15b2 |
| 16. | 162a6-162a7 | | 15b2-15b6 |
| 17. | | | 15b6-16a2 |
| 18. | | | |
| 19. | | | |
| 20. | | | |
| 21. | 162b2 | 422b4-422b5 | 16a4-16b2 |
| 22. | | | 16b2-16b4 |
| 23. | | | |
| 24. | | | 16a2-16a4 |
| 25. | | 422b5-422b6 | 16b4-17a2 |
| 26. | | | 17a2 |
| 27. | 162b3-162b5 | 422b6 | 17a2-18b4 |
| 28. | 162b5-162b7 | 422b6- | 18b4-19a1 |
| 29. | | -423a3 | 19a1-19a2 |
| 30. | | | 19a2-19a7 |
| 31. | 162b7-163a2 | | |
| 32. | 163a2-163a5 | 423a3-423a4 | 19a7-19b3 |
| 33. | | 423a4-423b1 | 19b3-19b7 |
| 34. | 163a5 | 423b1-423b3 | 19b7-20a4 |
| 35. | 163a5-163a6 | 423b3-425a6 | 20a4-20b4 |
| 36. | | 425a2-426a2 | |
| 37. | | 426a2-426a4 | 20b4-21a1 |
| 40. | 163a6-163a7 | 426a4-426a5 | 21a6-22a5 |

なければならない。カルマ派もサキャ派とならんで元朝と交渉があったからである。この『学者の宴』に限らず、カルマ派の資料の検討が必要であろう。その一端は第２部訳註のなかでも、カルマ=ランチュンドルジェやルルペードルジェのモンゴル招聘について紹介してある。

るように思われる。さらにコロフォンのみならず、あまり多くはないが、その著作自体にも歴史的情報を提供するもの、伝記の記述を裏付けるものがある。これらはもっとも直接的な一次資料と言える。ただしそれらとて、すでに伝記においてもそうであったように、サキャ派と元朝との政治的な関係を解明するに有効であるような種類の情報ではない。従って以下年を追って辿って行くのも、そのような大きな流れではなく、パクパ個人の生涯、それもどちらかと言えば、宗教家としての側面を中心としたそれ、ということになる。一方ではまた、単にパクパの時間・空間上の位置づけというばかりではなく、著作自体が年代順に整理し直されたことになり、かれの著作の研究にとって重要な資料にもなると考えられる。今までのところ、フビライの国師・帝師になり、チベットでのサキャ派の覇権を確立するのに絶大な貢献をした、有能な政治家としてのパクパのみがクローズアップされ、思想家、宗教家としてのパクパが問題にされることは極めて少なく、サキャ全書のうちの２巻を占めるこれらの著作はほとんど分析されたことはないように思われる。確かにサキャパンディタのように顕教、とりわけ五明に通じていて、宗派を越えて後のチベット仏教に大きな影響を与えた思想家とは異なり、これといって理論的な著作もなく、密教の成就法や教誡が大部分を占めるのである以上、サキャパンディタと同じような意味でその著作に接することはできないかもしれない。しかしサキャ派全体の流れとしては、先師のクンガーニンポやソナムツェモ、タクパゲンツェン、また後に出るラマダンパ=ソナムゲンツェン、ゴル=クンガーサンポへとつながって行く密教思想を受け継ぎ、受け渡しているものとして、このパクパ位置づけることもできるであろう。いずれにせよパクパに限らず、サキャ全書の多くの部分を占める、さらには rGyud sde kun btus や Lam 'bras bslob shed をも含めれば、膨大な数になるサキャ派の密教書を分析・解明することは是非とも必要なことと思われ、その一つの試み、あるいは手掛かりとして、以下の著作年表、ならびに Appendix に、いくつかの材料を提供したい。

まず、著作の年月日と、執筆地およびその著作を勧めた人あるいはその著作の捧げられた人、サキャ全書の目次の著作番号を一覧表にして示そう。その上で、各年ごとに、特に注意すべき点、伝記などの他の資料から補足できることなどをコメントすることにしたい。

1246. 6/A. (rgyal bu byang chub sems dpa'i pho brang chen mo ; --- ; No. 110)

1249. 2/3. (--- ; --- ; No. 96)
-/-. (--- ; --- ; No. 284)

1250. 12/-. (Mi nyag gi yul Byang ngos ; --- ; No. 180)

1252. 2/-. (Me nyag gi yul ; --- ; No. 231)
3/3. (Ling chu rtser khab kyi gtsug lag khang ; slob dpon bSod nams seng ge ; No. 316)
3/5. (dpal Ling chu rtsir khab kyi gtsug lag khang ; --- ; No. 306)
5/8. (Byang ngos Ling chu tser khab ; --- ; No. 75)



12/-. (rgyal po chen po'i pho brang Kha'i phing hu ; --- ; No. 69)
-/-. (Me nyag gi yul ; --- . No. 178)

1253. 3/8. (--- ; --- ; No. 2)
5/27. (Kha'i phing hu ; mi'i dbang po ; No. 163)
11/A. (sMar khams cam mdo'i gtsug lag khang ; Byang chub snyan par grags pa ; No. 129)

1254. 7/15. (mDo khams sgang ; --- ; No. 4)
7/-. (mDo khams sgang ; --- ; No. 136)
10/23. (--- ; --- ; No. 191)

1255. 1/-. (--- ; rgyal bu byang chub sems dpa' Go pe la ; No. 320-1)
5/-. (--- ; --- ; No. 166)
5/-. (--- ; --- ; No. 167)
6/-. (rGya'i yul The le ra ; Samghamitra* ; No. 82)
6/-. (--- ; Samghamitra** ; No. 120)
9/-. (rGya yul mi dbang pho brang ; --- ; No. 66-2)
12/25. (Hing hu'i dgon pa ; --- ; No. 305)
12/-. (--- ; --- ; No. 3)
-/-. (--- ; --- ;No. 32)
* Yu gur gyi yul du skyes pa'i bande, ** Yu gur gyi bande.

1256. 1/-. (--- ; rgyal bu byang chub sems dpa' yab sras btsun mo dang bcas pa ; No. 320-2)
8/-. (--- ; rgyal bu Mu ga ; No. 135)
10/25. (Ri bo rtse lnga'i dbang ldan mtshams Hu chu ; --- ; No. 127)
10/-. (--- ; Yon tan 'bum ; No. 145)
12/-. (--- ; --- ; No. 10)

1257. 1/-* . (--- ; mi yi dbang po Go pe la ; No. 320-3)
2/25. (--- ; Ye shes bzang po ; No. 132)
3/10. (mi dbang po Ga ba la'i pho brang chen po ; --- ; No. 168)
3/-. (rGya'i yul ; --- ; No. 232)
6/A. (Ri bo rtse lnga ; --- ; No. 197)
6/17. (Ri bo rtse lnga ; --- ; No. 192)
7/8. (Ri bo rtse lnga ; rgyal po Go pe la ; No. 193)
7/21. (Ri bo rtse lnga ; --- ; No. 194)
12/-. (--- ; --- ; No. 242)

* No date but situated between bkra shis kyi tshigs bcad of 1256 and of 1258 in SKKB.

1258. 1/-. (--- ; rgyal bu byang chub sems dpa' Go pe la yab sras btsun mo dang bcas pa ; No. 320-4)
6/23. (--- ; --- ; No. 304)
8/19. (--- ; --- ; No. 214)
9/-. (rgyal po Go pe la'i pho brang chen po ; Jim gyim ; No. 42)
9/-. (--- ; --- ; No. 160)
10/25. (rgyal bu byang chub sems dpa'i pho brang chen po ; --- ; No. 52)
10/-. (rgyal bu Go pe la'i pho brang ; --- ; No. 109)
12/-. (pho brang dam pa ; --- ; No. 62)

1259. 4/-. (Cu sham hu ; --- ; No. 315-1)
6/23. (rgyal bu byang chub sems dpa'i pho brang chen po ; --- ; No. 128)
8/7. (rgyal bu byang chub sems dpa' Khyu mchog skyong gi gur chen ; Khyu mchog skyong ; No. 318)
9/-. (--- ; --- ; No. 241)
-/-. (rGya'i yul ; --- ; No. 290)

1260. 2/21. (rGya nag po Cong to'i mkhar ; --- ; No. 212)
6/-. (rgyal po'i pho brang ; --- ; No. 38)
11/-. (Tshar ba ; rgyal bu Jim gyin ; No. 49)
12/A. (rgyal po'i khab ; --- ; No. 8)
12/-. (--- ; --- ; No. 7)
-/-* . (Kha yi phing hu ; rgyal bu gzhon nu ; No. 43)
* rgyal po rgyal sar phyung dus.

1261. 1/-. (--- ; Go po la ; No. 320-5)
2/-. (rgyal po'i pho brang Kha'i phing hu ; --- ; No. 68)
2/8. (rgyal po'i pho brang ; dBang ldan dpal ; No. 111)

1262. 1/-. (--- ; Go pe la ; No. 320-6)
11/A. (rgyal po chen po'i pho brang : rGyal mtshan dpal et al ; No. 134)
11/-. (rgyal po'i pho brang Kha'i phing hu ; --- ; No. 108)

1263. 1/-. (--- ; Go po la ; No. 320-7)
5/21. (--- ; rgyal po chen po ; No. 57)
6/-. (rgyal po chen po'i pho brang chen po ; La'u shu ; No. 54)



7/14. (Kha'i phing hu ; Blo gros dpal ; No. 228)

1264. 1/-. (??? ; rgyal po chen po sras dang btsun etc. ; No. 320-8)
4/14. (Rong po'i yul snyi'i lung pa ; rje dBus pa Rin chen rdo rje ; No. 213)
8/21. (--- ; dge slong dBang phyug 'bum ; No. 64)
12/4. (Lha sa Ra mo che'i gtsug lag khang ; dge slong rDo rje 'dzin pa Byang chub bzang po ; No. 25)
8/21*. (mDo khams kyi sa'i cha ; Byang chub dpal ; No. 229)
* sbrog khrums kyi zla ba.

1265. 1/-. (dpal Lha sa'i gtsug lag khang ; Go pe la ; No. 320-9)
3/14. (dpal Sa skya ; --- ; No. 225)
3/14. (dpal Sa skya ; --- ; No. 283)
6/14. (dpal Sa skya ; --- ; No. 311)
8/-. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; Ye shes 'byung gnas dpal, Tshul khrims rgyal mtshan ; No. 95)
9/-. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; Ye shes 'byung gnas dpal, Nyi ma 'bum, Tshul khrims rgyal mtshan ; No. 94)

1266. 1/-. (dpal Sa skya ; Go pe la ; No. 320-10)
5/8. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; Ji big de mur ; No. 215)
8/-. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; dge slong dPal gyi 'byung gnas ; No. 47)
10/-. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; --- ; No. 65)
10/-. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; --- ; No. 66-1)
12/3. (--- ; Seng ge mtha' ; No. 63)

1267. 1/-. (dpal Sa skya'i gtsug lag khang ; Go pe la ; No. 320-11)
1/27. (dpal Sa skya ; Thang ngo ta ; No. 100)
2/2. (dpal Sa skya ; dpon Blo gros seng ge ; No. 253)
3/8. (sMar khams gyi sa cha cam mdo gnas gsar ; --- ; No. 5)
3/A. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; bla ma dge ba'i gshes gnyen Glo bo lo tsa ba ; No. 286)
3/A. (dpal Sa skya'i chos grva chen ; --- ; No. 288)
10/10. ('Dam gyi sa cha ; --- ; No. 319)
10/14. (gNam gyi sa cha ; dge slong gnas brtan Byang chub bzang po ; No. 28)
10/15. ('Dam ; bSam gtan shes rab ; No. 244)
10/27. ('Dam gyi sa cha Gad skya ; bKra shis bla ma ; No. 103)

10/27. ('Dam gyi sa cha Gad skya ; Grags pa rin chen ; No. 317)
11/-. ('Dam gyi sa'i cha ; Go pe la ; No. 320-12)

1268. 7/8. (Man gong gi sa cha ; --- ; No. 289)
8/8. (Man gong gi sa cha ; rgyal bu byang chub sems dpa' ; No. 116)
9/4. (Bha wang gi gtsug lag khang ; --- ; No. 112)
9/15. (Cong to ; rgyal bu Manngala ; No. 125)
9/20. (Bha phang gi gtsug lag khang ; rgyal bu Ji big de mur ; No. 44)
10/14. (Chen je'u ; rgyal bu Ji big de mur ; No. 254)

1269. 1/-. (--- ; Go pe la ; No. 320-13)
2/-. (Cong to'i pho brang sar pa'i dag byed khrus khang gi gling ; Jim gyim ; No. 123)
5/-. (Shang to ; Go go can ; No. 88)
6/-. (Shang to ; Go go chen ; No. 91)

1270. 1/-. (--- ; Go pe la ; No. 320-14)
1/-. (--- ; Jim gyin ; No. 51)
6/25. (rgyal po chen po'i pho brang ; --- ; No. 159)
7/18. (Shang to'i gtsug lag khang ; Go go chen ; No. 92)
9/1. (Shang to ; --- ; No. 90)

1271. 1/-. (--- ; Go pe la ; No. 320-15)
1/-. (rGya nag Cong to'i mkhar ; rgyal bu Mangga la ; No. 121)
2/-. (Cang to'i pho brang chen po ; slob ma sTon pa shes rab ; No. 71)
4*/27. (Shing kun mkhar ; A tsa ra ; No. 224)
5/25. (Shin kun gyi sa cha ; A rog che ; No. 114)
6/1. (Shing kun gyi sa'i cha ; rgyal bu A rog che ; No. 209)
6/10. (Shing kun gyi sa cha ; skad gnyis smra ba Du lag ? ; No. 157)
7/8. (Shing kun gyi sa cha ; rgyal po ; No. 210)
7/18. (Shing kun gyi sa'i cha ; rgyal bu Ho ko ; No. 97)
7/20. (Shing kun ; --- ; No. 186)
10/10. (Shing kun mkhar ; Ji big de mur ; No. 73)
10/25. (Shing kun gyi mkhar ; Ji beg de mur ; No. 74)
12/10. (Shing kun gyi mkhar ; Go pe la ; No. 320-16)
12/27. (Shing kun mkhar ; Go go can ; No. 98)
-/-. (--- ; dGe 'dun bzang po et al ; No. 302)
* mchod pa'i zla ba



1272. 1/-~3/-. (g-Yar mo thang khrom , Khams kyi sa'i bye brag Shing kun mkhar ; --- ; No. 39)
1/11. (Shing kun ; rgyal bu No mo gan ; No. 217)
2/23. (Shing kun ; Yon tan gyi rgya gyis mdzes par grags pa bzang po ; No. 104)
3/-. (g-Yar mo thang gi sa'i cha Shing kun ; Shes rab gsal ba nyi ma 'bum ; No. 126)
5/1. (g-Yar mo thang gi sa'i cha Shing kun ; --- ; No. 67)
5/-. (Shing kun ; rgyal bu Ho ko ; No. 218)
6/5. (Shing kun gyi sa cha ; rgyal bu A rog che ; No. 124)
12/A. (Shing kun gyi mkhar ; Go go can ; No. 87)

1273. 1/-. (Shing kun ; Go pe la ; No. 320-17)
1/-. (Shing kun mkhar ; rgyal bu Ji big de mur ; No. 81)
3/23. (Shing kun ; Ral gri ; No. 263)
3/-. (g-Yar mo thang gi sa'i cha Shing kun ; Ji big de mur ; No. 299)
4/24. (Shing kun ; Du gal dur mis ; No. 72)
4/27. (Shing kun ; Du gal dur mis ; No. 79)
4/- (--- ; --- ; No. 177)
5/1. (Shing kun ; slob ma rig pa'i nor 'chang ba Ting 'dzin shes rab ; No. 183)
6/11. (Shing kun gyi mkhar ; --- ; No. 122)
6/A. (Shing kun ; rgyal bu Jim gyin ; No. 56)
8/29. (Shing kun ; dPal 'byor phun tshogs lcags mtshan 'chang ba ; No. 117)
9/12. (Un chang hu zhes bya ba'i pho brang ; rgyal bu ; No. 118)

1274. 1/16. (--- ; Go pe la ; No. 320-18)
10/13. (--- ; A rog che ; No. 300)
10/15. (gNya' gong ; rgyal bu A rog che ; No. 115)
10/23. (sKu zhong bong lung ba ; slob ma Dod ? ; No. 131)
10/27. (--- ; dpon mo Go go can ; No. 50)

1275. 1/16. ('Bal gyi sa'i cha ; Go pe la ; No. 320-19)
2/20. (Dre'i sa cha ; --- ; No. 141)
2/24. (Tre yi sa cha dga' ldan gnas sar ; rgyal po ; No. 211)
3/23. (sGang ra ; --- ; No. 140)
4/28. (Yol gyi sa cha ; Bo lod ; No. 208)
5/20. (lDan klong thang 'jig rten sgron ma'i gtsug lag khang ; --- ; No. 164)

5/25. (--- ; sTon pa brtson 'gru ; No. 247)
7/15. (Tsom mdo gnas sar ; Go pe la ; No. 301)
8/5. (Cong to ; Ye shes 'bum ; No. 226)
8/8. (Tsom mdo gnas sar ; Mangga la yab yum, bKra shis rgyal mtshan, Thang ngo ta ; No. 298)
9/8. (mDo khams kyi sa'i cha Tsom mdo gnas gsar ; --- ; No. 119)
9/22. (sMar khams kyi sa'i cha Tsom mdo gnas gsar ; --- ; No. 312)
9/27. (--- ; --- ; No. 308)
9/28. (Tsom mdo gnas sar gyi gtsug lag khan ; Go pe la ; No. 154)
10/16. (sKyar rka mdo ; --- ; No. 314)
11/14. (Tsom mdo'i gtsug lag khang ; Go pe la ; No. 320-20)
12/21. (dpal Sa skya'i gtsug lag khang ; A rog che ; No. 153)

1276. 2/8. (--- ; --- ; No. 89)
2/13. (Thang skya ; Sho dgon gyi slob dpon sByang nga ba ; No. 26)
2/13. (Thang skya ; Sho dgon gyi slob dpon sByan snga ba ; No. 41)
2/14. (sMar khmas sgang ; --- ; No. 296)
2/23. (Thang skya ; --- ; No. 161)
3/27. (Gru mu ra ; Grub pa dpal ; No. 201)
4/8. (sKya rka mdo ; slob ma Mo ston tsa ge ju 'phur ; No. 137)
5/25. (--- ; rgyal bu De gus bho ga ; No. 219)
7/1. (mDo khams kyi sa'i cha ; rgyal bu Mangnga la ; No. 216)
7/1. (mDo khams kyi sa'i cha Sla snying mar me mdo ; --- ; No. 243)
7/-. (mDo khams zal mo'i sgang ; Rin chen dpal ; No. 303)
9/23. (gNam ; rgyal bu De mur bho ga ; No. 220)
12/25. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; Go pe la ; No. 320-21)

1277. 2/4. (Sa skya ; --- ; No. 252)
3/11. (Chu mig dpal gyi bde chen ; slob ma dad pa dang shes rab dang ldan pa Da sman ; No. 233)
6/25. (dpal ldan Sa skya ; btsun mo Go go can ; No. 297)
6/-. (dpal Sa skya ; bu mo Rin chen ; No. 234)
8/-. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; --- ; No. 235)
9/-. (dpal Sa skya'i gtsug lag khang ; --- ; No. 238)
9/-. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; --- ; No. 239)
-/-. (--- ; rgyal bu Jim gyim ; No. 293)

1278. 1/-. (--- ; Go pe la ; No. 320-22)
5/8. (dpal Sa skya ; --- ; No. 105)



5/22. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; --- ; No. 248)
5/25. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; rgyal bu Ji big de mur, Du gal dur mis ; No. 80)
9/8. (--- ; Jim gyim ; No. 130)
9/23. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; rgyal bu byang chub sems dpa' Jim gyim ; No. 1)
10/3. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; dpon mo Go go chen ; No. 106)
10/5. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; rgyal po Jim gyim ; No. 295)
10/7. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; Go pe la ; No. 320-23)
-/-. (--- ; rDo rje khye'u 'dren ; No. 139)

1279. 3/5. (Chu mig dpal gyi sde chen ; dge bshes Jo sras phag mchu ; No. 83)
6/21. (Chu mig dpal gyi sde chen ; slob ma lo tsa ba Sam gha ; No. 156)
6/23. (Chu mig dpal gyi sde chen ; slob ma lo tsa ba Sam gha ; No. 158)
9/19. (dpal Sa skya ; --- ; No. 184)
11/15. (dpal Sa skya ; Go pe la ; No. 320-24)

1280. 3/15. (dpal Sa skya'i chos grva chen po ; dpon mo Punda ri ; No. 221)

n.d. (rGya'i yul Cang to mkhar ; Kha che'i pandita Tathagatabhadra ; No. 102)
(rGya'i yul ; --- ; No. 138)
(Ri bo rtse lnga ; --- ; No. 230)
(rGya'i yul rgyal bu byang chub sems dpa' Go pe la'i pho brang chen po ; --- ; No. 240)
(dpal Sa skya'i gtsug lag khang ; --- ; No. 309)

The works the date of which cannot be decided.
No. 113. 1263, 1275 (phag gi lo). 9/29. (--- ; rgyal po'i bur gyur Jim gyim)
No. 200. 1249, 1261, 1273 (bya lo). 4/28. (--- ; sKyid grong gi 'phags pa wa ti)
No. 222. 1264, 1276 (byi ba'i lo). 6/-. (Dra mda' ; rgyal sras Jim gyim)
No. 223-1. 1265, 1277 (blang lo). 6/13. (dpal S skya ; Jim gyim)
No. 223-2. 1263, 1275 (phag lo). 11/1. (rMa chu 'gram ; Jim gyim)
No. 250. 1252, 1264 (byi lo). 2/8. (pho brang chen mo ; ---)
No. 258. 1263, 1275 (phag lo). 12/12. (Cong to ; rgyal bu A lo ga)
No. 259. 1263, 1275 (phag lo). 12/12. (Cong to ; Rin chen pakshi)
No. 260. 1258, 1270 (rta lo). 3/25. (rGya nag Cong to ; Pandi ta Lakshima ka ra)
No. 264. 1262, 1274 (khyi lo). 10/11. (mi'i dbang po'i pho brang Ka'i phing hu ; sPyi bo lhas pa bshes gnyen rin chen)

パクパの著作でコロフォンからその成立年次がわかっているうちでもっとも早いものが現れるのは、1246 年である。それ以前の部分については、各種伝記から知られるところを、その重要なものに限って挙げておこう。年の後の括弧はパクパの数え年を示す。

1235.(1)

3/6. パクパ生まれる。

1237.(3)

-/-. sgrub thabs mtsho skyes を暗唱していた。

1242.(8)

-/-. 転生譜を述べる。

1243.(9)

-/-. brTag gnyis (ヘーヴァジュラ・タントラ) を暗唱する。サキャ派は『ヘーヴァジュラ・タントラ』を正依の経典としているのである。これら３つは史実とは言えないが、ごく初期の伝記からすでに載っており、サキャ派の密教者としてのかれを記述するには必要な道具立てであったといえる。また前生者とされるセトンリパという人物は、かれ自身を確定はできないが、道果説の伝承過程で重要な位置を占めるセトンクンリク Se ston kun rig の名を連想させる名前である。sgrub thabs mtsho skyes が具体的にどの著作を指しているかははっきりしない。立川武蔵氏は Kai rdor mtsho skyes を指しているとし、それを mTsho skyes rdo rje による『ヘーヴァジュラ・タントラ』の注釈と解されている (立川, 1974, p. 93, n. 3; p. 92, n. 8)。もし羽田野伯猷氏の言うように mTsho skyes rdo rje が Padmavajra に、あるいはむしろ mTsho skyes が Padma に対応するならば (羽田野, 1958, p. 310, n. 8)、Padma 著として dPal dgyes pa rdo rje'i sgrub thabs (P. No. 2347) なる著作を見出すことができる。この点については例えば、サキャ派の伝統の中でどのような著作が取り上げられていたかを調べてみなければならないであろう。いずれにせよ mTsho skyes rdo rje は『ヘーヴァジュラ・タントラ』に関係の深い注釈家であった。brTag gnyis はもちろん『ヘーヴァジュラ・タントラ』のことである。このようにパクパの幼時の伝説は色濃くサキャ派の伝統に繋がりを持っている。

1244.(10)

-/-. サキャパンディタとともにチャングーへ向けて出発する。その途上ウ (dBus) において出家をする。サキャパンディタが mkhan po を務め、スルプパの僧院長ナサテンスル (Zur phu pa'i mkhan po Na bza' 'phreng gsol) が slob dpon を務めた。そしてキョルモルンの僧院長シェーラプセンゲー (skyor mo lung pa'i mkhan po Shes rab seng ge) から沙弥の所学 (dge tshul gyi bslab bya) などを聞いた (LBN, 48a5-6)。サキャパンディタを含めてこの３人の名はパクパの聴聞録には現れない。

1246.(12)

この年サキャパンディタおよびパクパとチャクナドルジェはチャングーに着いているが、そのとき当のクテンは兄グユクの即位式に行っていて不在であり、サキャパンディタが実際にクテンと会うのは、翌年になる。



6/A. No. 110, gSang ba 'dus pa 'jam pa'i rdo rje lha bcu dgu'i sgrub thabs. : 『秘密集会』の成就法に関するこの著作は、日付のわかるもののうちではもっとも古いものである。しかしながらこの年齢および学習の段階からいって、このような高度な本を著作したとするのは、やや不自然である。そのコロフォンの書き振りも "Chos kyi rje mkhyen rab kyi dbang phyug Sa skya pandita chen po'i zhabs kyi rdul spyi bos len pa lung dang rigs pa'i gnod phyin ci ma log par smra ba 'Phags pa" などとあって、この年齢の人間に相応しくない。さらにその著作場所が "rgyal bu byang chub sems dpa'i pho brang chen mo" とあるが、これがクテンの王宮を指しているとは考えづらい。上にも述べたようにこの段階ではクテンは不在なのである。またこの表現は、後に頻繁に用いられるように、ゴペラ即ちフビライの王宮のことを指している可能性が強い。記念すべき第１作なのであるが、これは年号の記載の誤りとしておきたい。

1249.(15)

-/-. No. 284, sNga bsdus sgra gcan gza' lnga dang bcas pa'i rtsis gzhi : これは暦学に関する著作である。パクパはサキャパンディタとは異なり、五明についての著作は少ないが、そのなかでは天文学あるいは暦学の著作を数点残している。これはそのうち成立のもっとも早いものである。その署名は "Shakya'i dge tshul" とある。パクパは 1255年に具足戒を受けるので、この段階ではまだ dge tshul といっているのは正しい。

1250.(16)

12/-, No. 180. さきの最初の著作のコロフォンが誤っているとすれば、ここで初めて地名が記載されたことになる。それがチャングーであるのも、よく状況に一致する。

1251.(17)

11/14. サキャパンディタが亡くなる。その時のサキャパンディタがパクパに与えた言葉は「仏教と衆生の利益をなすときが来た。以前の誓いを思い出しなさい」というものであった、とパクパの伝記は報告しているが (LBN, 48a1)、サキャパンディタの伝記ではタクパゲンツェンの伝記には「すべての仏の歩いた一つの道、タントラの最勝無上の密意、甚深なる成就法の瑜伽の祈願と修法に励みなさい。汝らすべての弟子はどのような言葉の門から〔入っても〕よい」(LBLS, Ka, 36b1) とあって一致しない。このうちでは前者の方が後事を託すという状況によくあっているように思われる。

コロフォンを読んでいるとしばしば「サキャパンディタの御言葉の通りに文字に書き留めた」という表現に出会う。さきにも触れたように、かれの聴聞録にはしかしサキャパンディタの名は挙げられていない。しかしサキャパンディタは、自分の後継ぎとしてパクパに期待するところがあったであろうから、当然親しく様々な教えを授けたに違いないと思われる。パクパの伝記では、サキャパンディタの持つ多くの学徳を尽くして身に付けたのでサキャパンディタは喜び、後事をパクパに託した (LBN, 48a6) とある。そのようにサ

キャパンディタから受け継いだものと、聴聞録に記録されている他の師匠から受け継いだものとの関係がどのようであるかは今後の課題である。

1252.(18)

3/5. No. 306, Chos rje pa bde bar gshegs dus dbus gtsangs gi dge ba'i gshes gnyen rnams la spring ba：サキャパンディタの死の模様とその後に残された者たちの様子をサキャの人たちに報告する手紙である（cf. Szerb, 1979, pp. 291-292)。サキャパンディタがチャングーでどのような活動をしたか、あるいはその意味は何であったかということについては、直接的な資料はなく、その真憑性が問題であるようないくつかの間接的資料が残されているのみである。サキャパンディタのナムカーブムに宛てた手紙や「弟子たちに告ぐ」という手紙、クテンの招聘状についてはすでにサキャパンディタを扱った際に言及した。このパクパの手紙もその資料の一つに数えられるであろう。この手紙でパクパはサキャパンディタの死の様子をやや装飾的に、あるいは神秘的に述べたのち、その死後、師のおかげでリンチュウツェに残された者たちがなお安楽に暮らしていられること、クテンの王子モンゲデュ（Mong go ta, Mönggedü）もやって来ていろいろ心に掛けていてくれていることを報告している（SKKB, Vol. 7, 267.2.3)。事実はともかくとして、パクパとしては、サキャパンディタの力でモンゴル王室の信任が得られたことを強調している、と言えよう。と同時にそれをチベットにいる者たちに報告していることからすれば、この時点ではまだチベットへの直接的な便宜供与を引き出しているわけではないことも伺い知ることができる。さらにパクパはモンケハンの出した詔勅（'ja' sa）に言及している。その詔勅は僧に対しては兵役や貢納を免除し、僧院には王の使者（gser yig pa）は立ち入れず、郵便制度への協力も免除されるなどの保護措置がとられ、各々の法流を信仰することを勧めている（ibid, 267.2.3）。これもチベットに対して出されたものではなく、モンゴルあるいは青海地方に出されたものと考えられる。ただしその内容はそれほど特殊なものではない。すべての宗教に寛容であること、宗教家に対しては兵役・租税を免除することは、ジンギスカンの対宗教政策の基本方針（Yeke Jasa）として元代を通じて遵守された。新たに皇帝の位に着くものは、ジンギスカンあるいは前代までの皇帝のその方針を踏襲し、再確認する詔勅を下していた（愛宕, 1961, pp. 243-255）。モンケハンが王位に着いたのは、この前年1251年であったから、その際に上述のような詔勅を発布したのは、当然のことと考えられる。逆に言えば、それはサキャパンディタの功績によるものではない。因みにパクパの伝記に、フビライとの会見の内容が記述されないごく古い時期のものからすでに、フビライがサキャ派以外の法流を禁じようとしたのを、パクパが思い留まらせたことをパクパの功績として記述しているが、上のような Yeke Jasa が絶対的な権威を持っていたとすれば、そのフビライとパクパのやりとりが実際にあったとは考えにくいということになるであろう。

12/-, No. 69：この著作の年代には問題がある。その著作場所が王宮開平府ということになっているのはおかしい。パクパはこの年にはまだフビライに会ってはいない。開平府はフビライの夏の居住地であるが、この時期にはまだ造営されていなかった。開平府という名で呼ぶことにしたのは、1260年のことである。（元史、巻五十八地理、上都路,



Szerb, 1980, p. 276, n. 74)。Szerb は金の都であろうとしているが、この年にパクパがそこまでいっていたとは考えられない。年号を示す chu pho byi が、chu pho khyi または chu mo bya の誤りであると考えた方が自然である。そのうち後者の年1274年にはパクパはモンゴルを去っている。一方前者の年1262年には後に見るように11月に開平府で著作をしている。従ってこの No. 69 も1262年の著作と考えられる。Szerb は、筆者とは異なり、この著作の年代を動かさずに地名を開平府に当てているため、フビライへの言及がすでにこの年のこの著作からあるとしているが（Szerb, 1980, pp. 276-277)、それは不自然な解釈である。

1253.(19)

この年パクパはフビライに招聘される。それに際しては、先の1252. 3/5. No. 306の手紙で言及されたクテンの息子モンゲデュが関わっていたようである。サキャパンディタを招聘したクテンの没年ははっきりしてはいない。後代のチベット語の史料、例えば『パクサムジョンサン』ではサキャパンディタと同年、1251年に亡くなったとされる（PS JZ, Re'u mig, 1251の項)。しかし『学者の宴』ではクテンはサキャパンディタの生前、法を求めなかったことを悔いて、その死後パクパに方を求めたことになっている（KGT, p. 795)。また漢文史料には1251年以降にもクテンの名が言及される箇所があるという（元史巻三憲宗本紀二年壬子；仏祖歴代通載巻二二；岡田, 1962, p. 101)。ただし仏祖歴代通載の記述は、フビライの使者がクテンのところへやって来たという箇所であるが、すぐ後に見るように、これはモンゲデュの誤りであろう。また元史の記述は、憲宗が、即位後、諸王を諸国に封じたもののなかに言及されているものだが、その箇所は「モンゲデュ（蒙哥都）を擴端居するところの西に遷ず」とあって、必ずしもクテン存命を示しているわけではない。クテンの子供であるモンゲデュが話題の中心であることからすれば、すでにクテンが亡くなってその息子の代になっていたと読めないことはないであろう。また上の手紙のコンテキストは、クテンの死後その子のモンゲデュがパクパたちの面倒をみていたことを示唆しているように思われる。『赤冊史』ではフビライが六盤山（Lu pa'i shan）にいるとき、チャングーの王子モゴドゥ（テキストは Mong gor, しかしデンサパ氏写本は Mo go du となっている：稲葉, 1264, p. 132, n. 44）とパクパは一緒に行ってフビライに会っている。『学者の宴』もそれを援用している（KGT, pp. 795-796; Szerb, 1980, pp. 274-275)。このモゴドゥはモンゲデュのことである。しかし何にせよパクパはクテン亡きあとしばらくは王子モンゲデュのもとにいた。そこにフビライからの招聘があった。そのフビライからの招聘の話は、仏祖歴代通載巻二二にも報告されている。ただしそこではフビライの使者が来たのはモンゲデュのところではなく、クテン（廓丹）のところということになっている（岡田, 1962, 97; 稲葉, 1965, p. 104; 中野, 1969, p. 99)。しかしこれはモンゲデュのことと考えた方がよい。さてその時フビライはどこにいたのであろうか。元史によればフビライは1253年、1254年と大理遠征をし、そこから戻って５月に六盤山に到っている。チベット語史料では、上の『赤冊史』に六盤山で２人が会ったことを述べる他はその会見の場所を記していない。しかし諸伝記によれば、1253年に最初の会見をし、．翌1254年にフビライがジャンユル（'Jang yul）に遠征したとある点で一致して

いる。従ってパクパはフビライが遠征に出る前の1253年前半に会見をしたと考えられる。

5/27, No. 163 : この著作の執筆地は開平府となっていて、これも上の1252. 12/-. の場合同様認められない。このコロフォンでは shing pho stag となっているが、これが何の誤りなのかを想定するのは難しい。他に開平府で書かれた著作 Nos. 43, 68, 108, 228 は1260年から1263年の間に限られる。おそらくこの著作もこの時期に書かれたものであろう。Szerb, 1980, p. 276, n. 74 の指摘する番号は No. 169b であるが、これは No. 163の誤りである。同じく p. 277, n. 77 でもそれに言及し、Ba 163b とあってフォーリオを示しているようであるが、今度はこれは No. 163の誤りであろう。

1254.(20)

サキャパンディタの言葉に従ってウユクパに具足戒を受けるためにドカムへ行く。しかしすでにウユクパは1253年に亡くなっていることを旅人から聞いて引き返す。その際遠征から帰ってきたフビライと合流して中国へ戻る (LBN, 48b3-4) 。ウユクパはサキャパンディタの有名な弟子である。自らの後継者であるパクパの具足戒の戒師を頼んでいることからもそのことが伺われる。パクパが 1252. 3/3. にウユクパに宛てて手紙を書いたことはすでに述べた。Szerb は 1254年にドカムへ行った後、1255年の前半までチベットにいたと想定している (Szerb, 1980, p. 276)。おそらく次の年の著作場所に見るように、その前半は場所の記述はなく、６月に yGya'i yul The le ra とあることからそのように考えたのかもしれないが、それは今見たように正しくない。

1255.(21)

この年からフビライのために新年の吉祥偈を書きはじめる。1259年、1260年のものは伝わっていないが、それらを除いて1280年まで続けられる。

この年の 5/21 に中国・モンゴルの境の The ler という大河の辺にある 'Ur thor というところ (筆者未詳) で Grags pa seng ge を戒師、Jo gdan Byang thang pa bSod nams rgyal mtshan を規範師、Yar klung pa Byang chub rgyal mtshan を秘密師として具足戒を受けた。その時、戒師からは般若経とその略注、プラサンナパダー、規範師からは別解脱と根本経 (? mdo rtsa)、秘密師からは成就七部書などを聞いた (LBN, 48b4-49a 1)。しかしこの３人ともパクパの聴聞録には出てこない。この The ler と言われているところが、6/-. の rGya'i yul The le ra を指していることは明らかである。5/-. No. 167 のコロフォンの署名は dge slong 'Phags pa となっているので、この著作の日付が正しいとすれば、このとき以前に具足戒を受けたことになるであろう。

1256.(22)

8/-, No. 135 : この時期にはパクパはフビライの元からドメーのヤルモタン (g-Yar mo thang gi sa'i cha Shing kun) に戻って来ている。

1257.(23)

この年 lDong ston なる者に招かれて五台山に行って、様々な法を聞いている。３



月にはフビライのところを通って半ばごろには五台山にいたらしい。そこで金剛怖畏、金剛四座、大幻化、金剛界、時輪などの灌頂・タントラ・注釈を聞き、またナーマサンギーティ、秘密集会、成就法神髄などの密咒類、種姓部、贊嘆部、阿毘達摩集論などたくさんの経論を聞いた (LBN, 49a1-3) 。上に言及した聴聞録は 1259年に書かれているが、そのコロフォンを信ずるならば、そこに挙げられる聞法は大部分この五台山で聞いたものではないかと思われる。しかし、Appendix に挙げたように、その教師のなかには、例えば有名なチム一切智者ナムカータク (mChims Nam mkha' grags) が含まれている。かれは1251年からすでにナルタンの座主についている (PSJZ, Re'u mig,1251年の項)。そのかれがこの時期五台山に来ているとは考えづらい。もちろんその点についてはかれの伝記を検討してみる必要があるであろう。もし、そうであれば、パクパがこのチム一切智者と接触する機会として考えられるのは、パクパの晩年、最後にサキャに戻り、チュミクの法会を催す頃ではないだろうか。パクパはそのチュミクの法会では、チム一切智者に首座を務めており、またすでにサキャパンディタの伝記を検討する際述べたように、２人でシェーラプ・センゲに具足戒を授けている。このようなことは、他の教師たちについても検討してみなければならないだろう。

1258.(24)

この年はおおよそフビライのもとにいたようである。

6/23, No. 304, Zin shing gi ston pa btul ba'i tshigs bcad : これは有名な道士調伏偈である (今枝, 1974, 41-48)。諸伝記の記述はおおむねこの著作のコロフォンからその記述を取ってきている。

1259.(25)

4/-, No. 315-1, [Dus phyis thos pa'i chos dang bla ma brgyud pa'i dkar chag] : 先に言及した聴聞録である。No. 315 はサキャ全書の目次の扱いでは単一な著作として扱われているが、書かれた時期の異なる２つの聴聞録とすべきである。SKKB, Vol. 7, 286.4.4-294.3.4 は 1259 年に書かれたというコロフォンがある (294.3.4)。そのあとはまた "lung dang brgyud pa sna tshogs zhes bya ba / 'Jam dpal gzhon nur rgyur pa la phyag tshal lo" という書き出しで始まり、最後にコロフォンはないが、法を聞いた日付がまずその最初の部分に次のように言及される。

de la Bod yul dBus kyi slob dpon dge ba'i bshes gnyen Sangs rgyas 'bum gyis gsan pa las chu mo bya'i lo zla ba bzhi pa'i tshes bcu drug nas brtsams nas zla ba gnyis kyi bar du 'dul ba 'dzin pa Chos kyi mgon po la sogs pa 'gas 'Dul ba yongs su rdzogs pa thos so. (ibid, 294.4.4-5)

chu mo bya はパクパの年代からすれば1273年である。さらに年代は次のようにいくつか出てくる。

phag lo (297.1.5); glang lo (297.3.2); sa pho stag gi lo (297.3.4)

最後の sa pho stag は1278年であり、この著作の終わりの部分に出てくる年号である。

途中の phag lo, glang lo は正確にはわからないが、1273年から1278年の間であるとすれば、それぞれ1275年、1277年にあたる。おそらくそれで問題はないであろう。パクパの生涯から言えばかなり晩年の聞法ということになる。いずれにせよ、上で述べたようにパクパの聴聞録にはなお検討すべき点が多い。

8/7, No. 318 : Khyu mchog skyong は王子と言われているが誰を指しているのか不明である。

1260.(26)

この年フビライは中国暦の３月に王位に就く。No. 43 はコロフォンに日付はないが、「王が登位した時」とあり、このころ作られたと考えられる。とくにこの著述場所が開平府となっているのは重要である。すでに述べた No. 69 と No. 163 の日付が誤っていると考えられるのを除けば、開平府が言及されるのはここが最初であって、それ以前のパクパのコロフォンでは単に "pho brang chen po" と言っているのみである。これは上都が中統元年(1260) 開平府と改名されるという元史巻五八地理一上都路の記述を裏付けるものである。ただしそれは単に名称の話だけであって、それ以前に造営は終わっていたには違いないし (野上, 1943, p. 269, n. 33)、パクパの言う "pho brang chen po" もそれを指していると考えられる。フビライの即位と同時にパクパは国師の称号を与えられている (元史釈老伝巻二〇二 ; 稲葉, 1965, pp. 105-106; 中野, 1969, p. 101)。ただしこの段階では後の帝師のような最高位ではなく、同時に何人かの人に与えられた尊称のようなものであったという (Pelliot, 1911, pp. 671-676; 中野, 1969, p. 103)。例えば、1275年に行われた道仏の論争の仏教側出席者のリストのなかにも何人かの国師の名が見える (野上, 1943, p. 237)。この国師・帝師の称号の与えられた年次についてチベット語史料は何も報告をしていない。

1264.(30)

ラマダムパの『道果ラマ伝集』の記述では "de nas dgung lo sum cu pa'i dus glang lo la yar byon te" とある (LBN, 49b1)。その牛年は1265年であるが、そうなると1235年生まれのパクパは数え年で31才ということになる。コロフォンによれば４月には青海を少し過ぎたロンポに、８月にはドカム、12月にはラサに来ていることになっている。従ってパクパがフビライのもとを去ったのはこの年1264年初めである。ただしサキャに着いたのは翌1265年の３月ごろである。この64年のパクパの行動の意味を解釈することは実ははなはだ難しい。この年の前後はある意味でエポックメーキングな年であった。フビライは1262年、敵対勢力であった弟アリクボガ (阿里哥不花)を討伐し (元史巻四本紀世祖)、名目ともに元帝国の皇帝として覇権を確立した。中央行政機構を構成する中書省・御史台・枢密院などがその前年に設置され、この年には、諸路行中書省・幹林国史院などが整備された。そのような行政機構の新体制の一環として、仏教およびチベット方面を統治する役所である総制院をこの1264年に作り国師に統領させたという (元史百官志巻八七; 野上, 1950, pp. 780-783)。この設置の年は他の史料による裏付けがなく、問題なしとしないが、一応この史料に従っておくとして、一般にはその総制院は国師たるパクパがそれを司った



と考えられてきた (野上, 1950, p. 782; 稲葉, 1965, p. 108; 藤島, 1967, p. 69)。しかしコロフォンから知られるパクパの帰国時期からして、たとえ何らかの関係があったとしても、せいぜい総制院の設立に関わった程度で、それを司ったということはなかったと考えなければならない。とするならば一体どのような人物がその権限を握っていたのであろうか。またそのような仏教およびチベットを統べるための中央権力機構の設立を待つか待たぬかのうちにそれを離れて、なぜパクパはチベットへ帰国したのだろうか。Wylie はその理由としてアリクボガを倒して権力を確立したフビライが、今度はチベット統治に乗り出すために、パクパとチャクナドルジェを軍隊とともにチベットへ送った、と解釈している (Wylie, 1977, pp. 120-123) 。しかし総制院の設置には言及していない。はたして総制院は実際のチベット統治には意味のない機関だったのだろうか。またそのような使命を持っていたとして、なぜ帰国に一年近くかけたのだろうか。いずれにせよ具体的な状況はほとんどわかっていない。その後パクパが中国に戻ってくる1268年までの間、総制院がどのような機能をしていたのかも含めて検討してみなければならない問題である。

1265.(31)

新年の吉祥偈がラサで書かれているがこれは実際には前年の12月に書かれたものかもしれない。この年のおそくとも３月にはサキャに到着している。以後1267年の２月まではほぼサキャに留まっている。

6/14, No.311, rGyal po yab sras kyis mchod rten bzhengs pa la bsngags pa'i sdeb sbyor danda ka : この著作のコロフォン、本文ともに誰か特定の王に限定するのは難しいが、『サキャ全書目録』によれば、gSan yig dbang gi rgyal po という聴聞録では、"rgyal bu Jim gyim sogs la bsngags pa gsungs pa" と言われているという。パクパとチンキムの深い繋がりからして大いにありうることである。ここでは仏塔を建立したことに対する廻向文であるが、これを最初として以後モンゴルの王族が般若経などの経典を建立したことに対する廻向文がいくつか書かれる。モンゴル王室からの僧院への財政的支援の一つといえるであろう。伝記によればパクパはモンゴルから帰国するとき様々な財宝を携えて来て、仏寺や仏像・仏塔、先師たちのクンブムの金蓋を作り、また如来の宝語を建立し、大勢の僧やバラモンや貧しい者に布施をしたりなどして、自らのためには全く取るところはなかった、という (LBLS, Ka, 54b3-6)。

1266.(32)

5/8. No. 215 はクテンの後継者ジビクテムル王への教誡である。かれはチンキムと並んでよくパクパに教えを受けている。

1267.(33)

２月まではサキャに滞在している。3/A 即ち yar ngo はここでは３月の初めのみで８日にはすでにマルカムまで来ている。伝記によればこの時フビライの使者がモンゴルに赴くよう強くパクパを促したという (SDR, 93b1; LBLS, Ka, 64a5)。パクパのモンゴル行きはフビライのたっての要望ということになる。それが何故であったかは定かではない。

先に述べた総制院というような中央官庁の統握をパクパに期待していたのであろうか。膝下へ召喚してすぐ新しいモンゴル文字を作らせたり、国師より一段高い帝師の称号を与えたりすることからすれば、単に側に置いておくという以上の信任を与え、必要としていたようである。

10/5. にはダムに到着したと、『サキャ派年代記』にその全文が引用されているカーダム=ナムカーブム (bKa' gdams nam mkha' 'bum) の記録に記されている。その場所を離れたのは、10月末日の夜とある (113b6)。一方コロフォンでは11月の日付でダムで書かれたものがある。ナムカーブムの言うのは、かれのいるところ、という狭い意味であり、広くは11月初めにダムを出発したと考えて差し支えないであろう。10/14. No. 28 にナムの地とあるが、これもダムを指している。。

1268.(34)

この２度目のモンゴル行きから細かい地名に馴染みのないものが多くなる。それらの地名考証は今後の課題として、あるいは御教示願うとして、特に注意しておきたいのは、フビライの居城である成都 (Cong to)、上都 (Shang to)、ドメーのヤルモタンのシンクン (g-Yar mo thang gi sa'i cha Shing kun) である。この年の９月にはその成都に来ている。

1269.(35)

この年は前半は成都に、後半は上都に行き、以後1270年までそこに滞在している。元史巻二〇二釈老伝によればこの年パクパは新しいモンゴル文字を作り、王がそれを広める詔勅を出している。その詔勅の中でフビライは、モンゴルに固有の文字がなく、政府の公用書も漢字あるいはウイグル文字を使って発布しなければならないことを憂い、国師パクパに命じて、帝国内の諸言語を統一的に表記できる新しいモンゴル文字を作らせ、以後帝国内に発布される詔書はすべてこの新モンゴル文字とそれぞれの国の文字を併記する旨を宣している。パクパの伝記で言及されているモンゴル文字創設の話は、多くの場合、最初にチベットへ帰る以前の部分の道士調伏の記事の前後に書かれている（前掲諸伝記対照表参照)。チベットの伝記はすべてモンゴルでの出来事に関しては、混乱しているか、伝説化しているか、ほとんど触れないかで、真憑性は低い。ある種の資料では、すでにサキャパンディタが初めてモンゴル文字を作り、さらにパクパがそれとは別の文字を作り、のちハイセングルク王のときチューキウーセルが先のサキャパンディタの作った文字を改良して仏典翻訳に適した文字を作った、という経緯が記されているが、そこに何らかの事実の痕跡が残されているにせよ、史実としては正しくない。ペリオによれば、パクパ文字以前にはウイグル文字を借用してモンゴル語を書き著していた。その例はすでにジンギスカン時代の1220年頃の碑文に知られている。従ってサキャパンディタが新たにそれを作ったとは言えない。かれは単にそれまで使われていた文字体系を整理して正字法を確立したにすぎない、という (Pelliot, 1925, p. 289)。しかしペリオがサキャパンディタの文字について依拠した資料は『パクサムジョンサン』であり、それは、後に見るように真憑性の少ない情報である。そうであるとすれば、ペリオの言う程度であれ、サキャパンディタが



モンゴル文字の展開に関係したと言える積極的な根拠はなくなる。先のフビライの詔勅にしても、それまでモンゴルに固有の文字がなかったことを認めているが、もしサキャパンディタが、単なるウイグル文字の借用以上の体系化をはたしていたならば、そのようなフビライの発想も生まれてこなかっであろう。従ってサキャパンディタが関与した可能性ははなはだ少ない。パクパ文字自体も実はチベット文字を土台にしてモンゴル語を転写できるように改良したものにほかならなかった。フビライの詔勅以降、政府は蒙古字学を立て、蒙古字学教授を設けてパクパ文字の積極的な普及に務めたが、その甲斐もなく結局はパクパ文字は廃れ、以前のウイグル文字に戻ってしまうことになる。その後モンゴル文字に何らかの貢献をしたと思われるチューキウーセルなる人物についてはその素姓、活動について検討すべき問題が多い。パクパ文字についての言語学的な問題は、Poppe (1957), Nakano (1971), 中野 (1971) を参照されたい。

なおこの頃パクパは帝師に任ぜられている。上のモンゴル文字創設の功によるとも言われる（仏祖歴代通載巻二一帝師八思巴行状; 稲葉, 1964, pp. 105-106; 中野, 1969, p. 103)。しかしその正確な年代はわかっていない。

1270.(36)

1271.(37)

2/-. の Cang to が Cong to の誤りであるとすれば、この年２月までは成都にいたことになる。その後はシンクンに移った。以後少なくとも1273年半ば過ぎまでそこに滞在する。いろいろな意味で落ち着いたのか、この時期は今まで以上に著作活動が活発である。もちろんその内容は仏教、とりわけ密教の教理や成就法に関するものであり、歴史資料としての情報を提供するものは少ない。

以後10年間の著作の中でいくつか目を引くのが、経典建立の廻向文である。伝記の中ではチベットへ帰ってから金の経函や金屋根、僧や貧しい者への施し物を盛大に行ったことが記されている。その金で経を建立する際の廻向文や詩が残されている。その多くはチベット王室の発願によるもので大・中・小の般若経などが金で筆写されている。以下その日付をまとめておくならば、次のようである。

1271.-/-. (No. 302)
1273.3/-. (No. 299)
1274. 10/13. (No. 300)
1275. 7/15. (No. 301)
1275. 8/8. (No. 298)
1276. 2/14. (No. 296)
1276. 7/-. (No. 303)
1277. 6/25. (No. 297)
1278. 10/5. (No. 295)

その他この10年間のクロノロジーの上で重要な出来事は、チベットへの帰国、チュミクの法会、没年である。1277年に催されるチュミクの法会を含めてのモンゴル王室からの莫

大な経済的援助に基づく布施活動の栄光と、その裏ではプンチェン（dpon chen）をめぐる政治的な抗争があったように思われる。しかし後者については諸伝記は何も報告せず、もちろん著作のコロフォンにそれが現れるわけでもなく、一般史のあるものにプンチェンの記述と絡んで記されているに留まり、その年次を確定することはできない。その具体的な研究はプンチェンの在り方の問題として今後の課題としなければならないが、ここで簡単にパクパをめぐっての流れを、そのもっとも古い記述、『赤冊史』から抜き出しておこう。

まず第１代のプンチェンはすでにサキャパンディタがチャングーへ向かうときにサキャの後事を託され、信任の厚かったシャーキャーサンポがフビライによって任命された。その時期は明らかではない。シャーキャーサンポが亡くなると、次はパクパの推薦により、Kun dga' bzang po, dpon chen Zhang btsun, Phyug po sgang dkar ba, Byang rin が順次フビライより任命された。そのうちクンガーサンポはパクパの不興を買い、フビライの命で殺されることになる。この年次も定ではない。一説にはパクパの没後１年とも言われるが、パクパの存命中密かに殺されたとも言われる（D5Z, 57b2-4）。一方シャーキャーサンポの没年も明らかではないが、1268年の人口調査には参加していたと言われるので（Petech, 1979, p.234)、おそらく1270年前後までは生きていたであろう。とすれば、その後約10年間にパクパの推薦によって４人のプンチェンが入れ替わるのは尋常ではない。これでは安定した統治などできるものではなかったろう。このことは裏の政争が激しかったことを物語っているのではないだろうか。Wylie は 1274-75年のチベット帰国をシャーキャーサンポの死と結び付けているが、もしそうなら、それ以後のほんの5, 6年に４人のプンチェンがたつことになり、これは尋常でないどころか、異常な事態ということになってしまうであろう。むしろ上のクンガーサンポの反目をその帰国の時期と重ね合わせた方がよいのではないだろうか。70年代以降2, 30年の政治抗争はサキャ派の繁栄と衰退と絡み合って重要な問題であるが、今は考察を加える余裕はない。そのような暗い背後関係と、チュミクの法会に代表されるような栄光とがパクパの（早すぎる）晩年を彩っているのである。

1272.(38)

1273.(39)

4/-, No. 177, rGyud sde dkar chag：この『タントラ目録』は後のプトンの『タントラ目録』ほどの精緻さはない。プトンの仏教史（1322）の目録部に収録されているタントラ経典の数が435点であるのに対し（西岡, 1983, p. 50)、このパクパの目録では約300点しか収録されていない。しかしその後100点以上が新たに訳出されたとも思えず、この段階での収集が学問的に徹底したものでなかったと言うべきではないのだろうか。しかし細かいことを除けば、この当時のサキャ派系で一般に知られていたタントラとその分類を概観することのできる資料であると同時に、プトンよりも約50年早く成立し、その先駆をなすもののひとつであるという意味があると言えるであろう。 Appendix で、この目録を再録し、プトン仏教史の目録部の番号を対応させておいた。



1274.(40)

この年は新年の吉祥偈を除けば、10月にしか著作がなされていない。もちろん日付の記載されていないもので他に書かれたものがあったかもしれないことを否定はできないが。しかし多少そのようなものがあったにしても日付の残されたものが７１年以降１年間に渡って平均的に書かれているのに対し、著しい対照を見せている。従ってこの時期に著作に専念できないような事情が何か起こって、それがまたチベットへの帰国につながってもいるように思われる。『サキャ派年代記』にはパクパはチベットにすぐに帰りたいと急に思い立って王にその旨申し上げると、王はパクパの寿命がそれほど長くないことを予感したと記されている（SDR, 115b)。元史巻二〇二釈老伝のパクパ伝にも皆が引き留めるのもきかずに帰国するパクパの様子が報告されている。やはり何か急な事情があったに違いないが、現在の段階では確かなことはわかっていない。この帰国について注意しておきたいのは、フビライの王子アロクチェが軍隊とともにつきそって帰国していることである（LBLS, Ka, 164b6-165a1)。憶測の域を出ないが、モンゴル軍の威力が必要なような不穏な空気があったのかもしれない。

1275.(41)

この年の後半マルカムのツォムドにしばらく留まり、暮れにやっとサキャ寺に到着する。

1276.(42)

サキャに留まるのも束の間、また年頭から様々な地方に出向いて年末にサキャに帰ってくる。

1277.(43)

この年の２月（SDR, 116b6)、ツァンのチュミクで、チンキムを施主とし、ウ・ツァンの善知識・僧すべてを招いて大法会をひらいた（LBLS, Ka, 165b3-4)。その法会は14日間続けられた（SDR, 117a4)。コロフォンでは 3/11 にチュミクにいることがわかる。

-/-, No. 293, rGyal bu Jim gyim gyis chos 'khor ba'i rtsis：チュミクの法会でパクパは仏滅からの年代をサキャ派流の方法で計算したことで有名である。この著作はまさにその計算の結果を示していると思われる。半フォーリオの短い著作で、仏の生誕と成仏と涅槃の「日時」（年数は示していない）を典拠となる経典とともに示し、「それから3410年経って、1277年（me mo glang gi lo）に王子チンキムが大法輪を回した」（SKKB, Vol. 7, 256.1.4）とある。パクパの表現は王子チンキムによってこの法会が主催されたかのような言い方である。この計算も含めて、仏滅年代論については、第２部訳註４）を参照。

この法会の盛大な布施活動はモンゴルの財力を背景として初めて可能だったのであろう。『サキャ派年代記』はこの法会に、ナルタン大蔵経建立の中心人物の一人として有名なチョンデンリクペーレルディ（bCom ldan rig pa'i ral gri）が疑心をもって現れたが、パクパによって改宗させられた経緯が伝説的に描かれている（SDR, 118ab)。これが事実か

どうかはわからないが、この法会の主座を務めたのがナルタン寺の座主チム一切智者（mChims thams cad mkhan pa Nam mkha' grags; 羽田野, 1963, pp. 134-144）であったこと、またこのチム一切智者はパクパの聴聞録の中にパクパの師の一人として数えられていること（Appendix 参照）から、ナルタン寺とパクパの関係が深いことが窺われる（羽田野, 1966, passim)。そのことからしてチョンデンリクレルと接触があってもおかしくはない。また1273. 3/23. No. 263 の手紙は "Ral gri" に宛てたものである。本文の中に具体的な記述がないので確認はできないが、それがこのチョンデンリクレルを指している可能性は強い。このようなカーダム派とのつながりは、パクパの思想、あるいはその形成過程を考える上で注意されてよいことである。

チュミクの法会の後はサキャ寺に戻り、翌1278年をそこで過ごす。

1278.(44)

10/5, No. 295, bDe bar gshegs pa'i gsung rab 'gyur ro 'tshal bzhengs pa'i gsal byed sdeb sbyor gyi rgyan rnam par bkra ba：これはチンキムが金でカンギュル大蔵経を建立したことを述べた詩である。これはイェシェゲンツェンの伝記には、チベットに翻訳されたのち表現や順序がおかしくなったものを正し、順序を整え、ウ・ツァンのすべての筆記者を集め、大量の中国の紙に金で書いて、金の板、絹の包みで飾った、それは第３回の仏典結集のようであった（LBLS, Ka, 166a2-4）と述べられ、またラマダンパの『道果ラマ伝集』では、その大蔵経115函がドカムに建立されたと伝えている（LBN, 50 a2)。またラマダンパにはその他にタクトクシモチェ（sTag thog gzhis mo che）に諸経部（mdo mang）40函を金で建立したとも記している（op cit.)。これがナルタンの大蔵経建立の原本の一つになったことについては 羽田野（1966）p. 72 を参照。ただし前者、即ちカンギュル大蔵経全体の115函については言及されていない。

1279.(45)

この年は前半はチュミクに滞在し、後にサキャに帰る。6/21, 23 に出てくる Sam gha は、あるいは総制院の長官として権力を振るった色目人桑哥をさしているのかもしれない。

1280.(46)

この年の10月22日、パクパは亡くなる。偶然なのかすでに前の年から著作数は減り、最後の年に書かれたと日付のわかっている著作はひとつだけである。伝記におけるその最後の記述は神秘的な話に満ち、同じ神秘性でもサキャパンディタにおけるビジリンチェンのような具体的な迫真性はなく、平板な記述に終わっている。



## 3．チューキウーセル

チューキウーセルは杳としてその消息の掴めぬ人物である。『青冊史』に Chos kyi 'od zer あるいは Chos sku 'od zer という人物が現れる。かれは gSer sding pa gZhon nu 'od の子（その出生には暗く複雑な事情があった旨、『青冊史』Nya, 10a1-2 に報告されている）であり、Kha che pan chen 即ちかの有名な Shākyashrībhadra がカシュミールに（1213年）帰国した翌年 1214 年に生まれている（DN, Tha, 9a1-2)。幼名を bDag med rdo rje と言う（DN, Nya, 10a3)。後に出家したとき戒名を Chos kyi 'od zer と名付けたが、'Gro ba'i mgon po 'Phags pa から Chos sku 'od zer という名が贈られた（DN, Nya, 10b2)。あらゆる論典を一見しただけで理解してしまったので「一切智者チューキウーセル」Kun mkhyen Chos kyi 'od zer と言われる。『青冊史』ではかれは特に『時輪タントラ』の学匠として名を連ね（DN, Tha, 9a3-7）、bla ma 'Phags 'od に法を伝え、さらに後者はプトンに教えを授けている（DN, Ja, 7a4-5; Nya, 10b3ff)。しかしながら『青冊史』にはモンゴルへ行ったという記述は見当らない。のみならずその生年（1214年）からするならば、パクパの生まれる11年前であり、パクパよりもずっと後にモンゴルへ行くというのは不自然である。またチューキウーセルの活動時期が他のモンゴル語資料から 14 世紀初頭と考えられるので、これとも年代が合わない。従ってモンゴルで翻訳に従事したチューキウーセルと『青冊史』のチューキウーセルとは別人と考えなければならない。そのことはすでにスンパケンポも『パクサムジョンサン』の原註において「プトンのラマ 'Phags 'od の師匠であるチューキウーセルあるいはダクメドルジェと、オルジェイト王の年代が合わないので、この方（即ちモンゴルの翻訳家のチューキウーセル）はサキャ派のダルマパーラ（Dharmapālarakshita, 1268-1287）の後の方であるように思われる」（PSJZ,Ⅲ, 170.16-17）と指摘している。一方チャンキャ=ルルペードルジェは『正字通達の源』Dag yig mkhas pa'i 'byung ngas（1741）において次のように述べている：「ハイセングルク王のとき、Kun mkhyen Chos kyi 'od zer をお招きした。この方に対して Chos sku 'od zer とも言う。gSer sding pa gZhon nu 'od の子であるかないか考察をすると、時期は合っているように思われる。Kun mkhyen Chos sku 'od zer のまだ年少の頃の名前 Chos kyi 'od zer を法王パクパが Chos sku 'od zer と変えたとかれの伝記に書かれているのと一致するように思われる」（DKB, I, 8b3-5)。Chos sku 'od zer の名前を贈ったのが、われわれ馴染みのパクパであるとしても、そのことではここの２人のチューキウーセルの問題には何の解決にもならない。さらに 1819 年に書かれた『蒙古仏教史』においても『青冊史』のチューキウーセルとモンゴルの翻訳家のチューキウーセルを合成した記述になっている。だがもしこのようにその二人のチューキウーセルが別人であるとするならば、翻訳家の方のチューキウーセルをチベットの資料の中に辿り得ないことになる。かれは一体どこから現れてきたのであろうか。

とはいえかれがチベット人であるという先入観を捨てれば、かれがチベット語の文献に現れて来なくても不思議はない。むしろ漢文資料やモンゴル語の資料にははっきりとかれの存在を告知する文献が存する。それらの文献についてはすでに Cleaves（1954）pp. 13-29 に纏められている。詳細はそれに譲るとして、ここではその結果のみをかいつまんで

示しておくことにしよう。まず Pelliot (1925) pp. 284-289. に指摘されていることだが、『元代畫塑記』に仏像の鋳造に関して 1310 年1月と 1313 年8月の記事に言及されているという。この著作は元代の工芸に関する短い本であるというが、筆者は残念ながらそれを参照することができなかった。次に元史には巻二四仁宗の皇慶一年 (1312) 十月と同二年 (1313) 三月、および九九志第四七看守軍の至治元年 (1321) の項にその名が見える。ただしどの記事も本来のチューキウーセルの活動 (即ち翻訳者、著述家としての活動) に関する記事ではなく、西番僧の仏事に関する記述にすぎない。

次にモンゴル語においては、かれの翻訳し、あるいは著述したもののコロフォンに年代を示す資料が見られる。まずかれに帰せられる著作を纏めておこう。

1) Bodhicaryāvatāra のモンゴル語訳 : B. Ja. Vladimircov, ed. (1929).

2) Bodhicaryāvatāra のモンゴル語注釈 : E. Haenisch, ed. (1954); F. W. Cleaves, ed. (1954).

3) チベット語の著作『仏の12の行い』。現在残っているのは、後にShes rab seng ge によってモンゴル語に翻訳されたもの。: N. Poppe, ed. (1967); L. Ligeti, ed. (1974).

4) Mahākālī の讃歌のモンゴル語訳 : W. Heissig, ed. (1961) pp. 226-229; L. Ligeti, ed. (1972) pp. 135-140.

5) Pañcarakṣā のモンゴル語訳 : P. Aalto, ed. (1961).

このうち 5)のパンチャラクシャーについては Ligeti はチューキウーセルの翻訳であることを疑問視している (Ligeti, 1962, p. 328)。4)の Mahākālī の讃歌は断片が3つ残っているだけである。2) と 3) はかれの独立の著作である。2) の注釈はコロフォンを含む最後の数葉が残っているだけである。これらのうち著作年代が示されているのは 1) と 2) である。すなわち後者 BAC, 167b10に皇慶一年 (ɣoong king, 1312) とある。また前者の BAM, p. 170に蛇の年とあるのは、その注釈よりも前に訳されていたと考えられるから、1305 年に当ると思われる (Vladimircov, 1929, pp. ii; cf. Cleaves, 1954, pp. 13-29)。また直接年代を示してはいないが、Bodhicaryāvatāra の注釈には、「仁宗王 (1294-1307 在位) の命によって」とあり、また Pañcarakṣā のコロフォンには英宗 (1307-1311 在位) に仕えたことが言及されている。

以上の資料から知られるかれの年代は、もっとも早くは1305年、もっともおそくて1321年ということになる。

しかし以上の資料からはかれの出自や生涯の軌跡はほとんど知られない。モンゴル訳カンギュルの目録には「ウイグル人チューキウーセル」という表現が出てくる (Ligeti, 1942, p. 333)。これがかれの出身に言及した資料として現在知られている唯一のものである。しかしこれとても17世紀後半という全く後代の資料に唐突に出てきたのだから、ほとんど真憑性はない。かれについての新たな、そして情報量の多い資料が見つからないかぎり、これ以上の知識は得られないだろう。

われわれはここで史実の枠を離れて、伝説の上でのかれの業績に目を向けてみることにしよう。かれには上に挙げた翻訳や著作のほかに『ズルヘントルタ』Jiruken-ü tolta という文法書が帰せられている。後代の、とりわけチベット語の資料には、かれが仏典翻訳に適するようにモンゴル文字を改良したという話が載せられている。その話はさらに、サ



キャパンディタがそれまでモンゴルに文字がなかったのを、ウイグル文字を借用して初めてモンゴル文字を作った、という記述と対になって現れてくる。第2部のトゥカンにもそれが対になって言及されている。そのような情報は一体どこまで遡れるのだろうか。第1部第1章でも言及したように、トゥカンのこの時代の記述はおおむね『パクサムジョンサン』によっているが、これらの話もやはり『パクサムジョンサン』に言及されている。その著作年は 1748 年であるが、上に引用したチャンキャの『正字通達の源』は 1741 年に書かれている。これが現在筆者の確認することのできた、もっとも古いチベット語の資料である。一方モンゴル語にはその『ズルヘントルタ』の注釈と称する著作が残されている。テンジンタクパ (sMon ram rab 'byam pa bsTan 'dzin grags pa) というものによって雍正帝 (1723-1735 在位) のときに著されたものである (JTT, p. 39)。ただし注釈といっても、『ズルヘントルタ』の原文を引いてそれに説明を加えると言うのではなく、なかに若干その名に言及することがあるほかは、ほとんど独立の著作と言ったほうがよい。全体は3章に分かれていて、第1章にモンゴル仏教史の概説、第2章はモンゴル文字の解説、第3章は母音調和の解説という構成になっている。

その第1章の仏教初伝からサキャパンディタの記述まではすでに岡田英弘氏によって紹介されている (岡田, 1962, pp. 105-107)。これが実は『パクサムジョンサン』の (従ってそれを受けたと思われるトゥカンの) 、他のチベット語資料には見られない奇妙な記述と符合する内容を持っている。まず第一にサキャパンディタに対して、将来モンゴルからの使者が来ることを予言したのが、タクパゲンツェンではなく、ソナムツェモだということになっている。第二にサキャパンディタが初めて基本的なモンゴル文字44文字を作ったとされ、さらにその44文字が列挙される。そしてチューキウーセルがその根本文字だけでは仏典を翻訳することができないとして、さらに必要な文字を添加して、gZung grwa lnga 等を翻訳したと述べられている (JTT, pp. 27-28)。これらがみな『ズルヘントルタ』の注釈と『パクサムジョンサン』とトゥカンに共通に述べられている。おそらく内容からして、それの更なる資料をそれ以前のチベット語の著作に求めることはできないであろう。とすれば残る可能性は、スンパケンポがこの『ズルヘントルタ』の注釈を見て書いたか、あるいはその両者が共通に基づくモンゴル語の資料が何かほかにあったかであろう。しかし他にこれ以前にそのような著作は現在のところ知られていないのだから、今は資料の遡源はここまでに留めなければならない。いずれにしても『パクサムジョンサン』はモンゴル語の資料を見て書いていると言えるひとつの例である。

ところでこのテンジンタクパの注釈は、たいへん有名な本であると同時に、『ズルヘントルタ』に関するものでは、ある時期以降もっとも古い文献であったようである。1892 年に書かれたダルマターラの『モンゴル仏教史』(1889) では、『ズルヘントルタ』の注釈としてリクデンハン時代の翻訳者クンガーウーセル (Kun dga' 'od zer) の同名の著作以外ではこの本のみに言及し、それに基づいてチューキウーセルの文字改革の概要を述べている (DHCB, pp. 218-221)。もちろんチューキウーセルの本もクンガーウーセルの本も現在伝わってはいない。またテンジンタクパはこの注釈のなかで、その2人に時折言及する以外には他の著作を引き合いにだすこともしていない。おそらくそのような状況はすでにジクメリクパの『蒙古仏教史』(1819) の段階でも同様であったであろう。この本のモ

ンゴル文字に関するサキャパンディタとチューキウーセルの記述は、簡略化されたものであるが、ダルマターラの記述と一致しているからである（JHCB，pp．149-150）。

さてここでその内容に関する考察を行うべき段ではあるが、モンゴル語学に全く素人のそれを取り上げる価値があるのか、どうかもわからず、また、ここでそれを論じる準備もないので、今後の課題としておきたい。

## 4．『パクサムジョンサン』に記述されたサキャ派・元朝関係記事の特殊性

さて上にサキャパンディタとパクパの諸伝記、あるいはコロフォンを検討してきたが、もちろんこれでトゥカンの『一切宗義』の元朝時代の問題が全部尽くせているわけではない。しかし、それでもそのようなサキャ派の正統的な資料を読んだものの目には、トゥカンの記述の、史実に即さない諸点が見えてくる。また、すでに第１章で言及したように、ここのトゥカンの記述は大部分『パクサム・ジョンサン』に依拠しているが、それらの史実に即さない内容は、『パクサム・ジョンサン』にも見出される。それは次のような点である。

① チンギス・ハーンとクンガーニンポが施主・帰依処の関係になり、モンゴルに初めて仏教が伝わった。

② サキャパンディタにモンゴルから招聘の使者が来ることを予言したのが、ソナムツェモである。

③ サキャパンディタがモンゴル文字を作った。

④ モンケハーンのとき、カルマ・ラマと関係を持ったが、そのことはモンゴル語の本には詳しくは書かれていない（『パクサム・ジョンサン』による。トゥカンはやや異なる）。

⑤ パクパによる喜金剛の灌頂に対する布施としてフビライが与えたのが、大マンダラ２つと「三界法王」という称号と、シリム城市である。

⑥ パクパが方形文字を作ったのが、鉄馬年（1270）となっている。

⑦ オルジェイト王のとき、サキャのチューキウーセルが来て、以前サキャパンディタが作った文字を改良した。後にハイセングルク王のとき、gSungs grva lnga などを翻訳した。

⑧ チンギス・ハーンからエルデニ・チョクト王までで14人の王がいた。

その他、トゥカンの記述に欠けている部分や、後代のモンゴル史の部分も問題となるであろう。しかし、本書がトゥカン『一切宗義』の研究であること、また後者については、その一端を第２部訳註で援用してもいるので、ここでは上の８点のみを取り上げることにしたい。

一方『パクサム・ジョンサン』に基づかずにトゥカンが書いている主なものも見ておくならば、それについては次の４点を挙げることができる。

ｉ）モンゴルへの仏教初伝の年について、『パクサム・ジョンサン』が、仏涅槃を火兎の年であると主張する流儀でしか記していないのに対し、トゥカンは鉄竜の年と主張する流儀による計算も付け加えている。



ⅱ）クテン王が「土地神」の病に係っていたのをサキャパンディタが治療した。

ⅲ）パクパとカルマパクシが神変の競い合いをした。またトゥカンはカルマパクシについて、『青冊史』を引用している。

ⅳ）フビライがチベットの僧をすべてサキャ派に改宗させようとしたのを、パクパが引き止めた。

これらの点から、明らかにトゥカンは何か別の資料も参照していたことはわかる。そのうちⅱ）からⅳ）までは、どれも史実とは言い難いが、サキャパンディタやパクパの伝記のごく一般的な内容で、特にここで問題とすべき点はなく、またそれが何に基づいているかを特定することも難しい。ｉ）については、第２部訳註４に取り上げたので、再論は避ける。

そこで上の①から⑧までを検討してみることにしよう。まず、これらの諸点は筆者の知る限りでは、他のチベット語資料に見られないものである。⑤については、ほぼ対応する記述がモンゴル語年代記『エルデニ・イン・トプチ』（ET，pp．140-141）に見出される。そこには、「チベット語で三界法王、中国語で三省大国師、モンゴル語に訳せば、３つの地の法王の大ラマという称号」ということばや、布施の品々に続いて、贈られた土地「シリムジ市」の名がみえる。『エルデニ・イン・トプチ』は1662年に成立しているので、スムパ・ケンポがそれを参照した可能性は十分考えられる。実際上の④のように、また⑧あるいは訳註25にも関連して Appendix に載せたように、元の皇帝を列挙する場合にも、かれはモンゴル語の史書を参照している旨を記している。しかしもしそうだとすれば、当然正統的なチベット語資料を参照できたであろうはずなのに（例えばそれは『ダライラマ５世年代記』であってもよい）、何故かれはその部分のみをモンゴル語の資料に依拠したのであろうか。あるいはかれは直接この『エルデニ・イン・トプチ』を参照したのではなく、その両者が共通に基づく資料が他にあったのかもしれない。なぜなら、その称号を『エルデニ・イン・トプチ』もまた、中国語、チベット語で挙げているということは、それがモンゴル語資料以外に基づいていることを示してもいるだろうからである。また①のクンガーニンポへの言及についても『エルデニ・イン・トプチ』に触れられていることが、岡田（1962）pp．105-106 に報告されている。現在の段階では、資料の詮索はこの程度に留めなければならないが、この時期以後のチベット語史書の資料が、複合的になっていることは注意しなければならない。

⑥については、他のチベット語資料でも新たにモンゴル文字を作ったということは述べられているが、その年次を記しているものは他には見られない。その年次は、しかし、すでに見たように、元史によると正確には1269年であったのだから、１年ずれている。漢文資料以外にはこの点に関して報告している資料はないであろうから、スムパ・ケンポは元史の年代を１年誤ったのか、あるいは1270年とする漢文資料を参照したかのいずれかではないかと思う。

さて、残りの②③⑦については、文字どおりではないが、ほぼ対応する資料があることは、すでにチューキウーセルを検討する際に言及した。

一方ではこの時期でも、同じグンルン寺の法友クンチョク・ジクメ・ワンポの『チャンキャ２世転生譜』におけるパクパ伝のように、正統的なチベット資料に基づいた記述もある

のだから、このようなスムパ・ケンポやトゥカンの記述は、奇妙な性格のものと言えよう。



## 第５章　ゲールク派政権成立時に於けるハルハ＝モンゴル部の動静

本書で訳註を施したトゥカン『一切宗義』「モンゴルへの正法弘布の章」もそうであるように、チベットの仏教史に記述される16世紀以降のモンゴル仏教史は、チベット、特にゲールク派の視点からのみ描かれていて、モンゴル側からの、あるいはチベットのゲールク派以外の宗派からの視点は抜け落ちてしまっている。一方、その従来見落とされてきた側の事情を明らかにしようとしても、モンゴル側及び他宗派の史料が絶対的に不足していることに気付かざるをえない。現在のところはやはりチベットのゲールク派の史料を主に用いて推測する外はない。ここではそのような作業の一つの試みとして、従来看過されることの多かったモンゴルのハルハ部の動静に焦点をあて、できうるかぎりモンゴル側の事情を考慮しつつ、検討してみよう。

### １．16世紀後半のモンゴル：アバタイ・ハーンとフンドレン・チョークル

16世紀の始めジンギス・ハーンの子孫をもって自認するバトモンケ・ダヤン・ハーン（Batumöngke dayan qaγan）はモンゴルを再統一した。ダヤン・ハーンの第11子ゲレセンジェ・ジャライル・ホンタイジ（Geresenje jalair qong taiji）は外モンゴルに牧地を持ち、その７人の息子はそれぞれ父の領地を相続して、７ホシューンと呼ばれるハルハ諸王侯の祖となった[1]。17世紀になると、この７ホシューンも名のみのものとなり、血筋の正しさよりも実力を持つものがハーン号を名乗る群雄割拠の時代となった。そののち統廃合の末成立する４ハーン部（ジャサクト・ハーン部、トシェート・ハーン部、チェチェン・ハーン部、サイン・ノヤン部）の諸家は、その勝利者であった。このように生き残っていった４ハーンの王侯達の祖先は、いずれもチンギス・ハーンの直系の子孫でないという点で、正統にハーン位を称することのできるもの達ではなかった。それゆえ彼等が求めた別の権威は、チベット仏教界の高僧に賜る位であった。宗教的権威は富と政治力によって買えるものであった。

ゲールク派との交渉面からみて最も最初に歴史の舞台に登場してくるのは、ゲレセンジェの第３子であるノーノホ<3>の系統から出た、アバタイ・ハーン<3-1>である。彼は所謂ジェブツン・ダムパ一世の曾祖父にあたる。ジェブツンダムパの伝記の冒頭には、アバタイ・ハーンの略伝を「アバタイという王は、マナの驕慢を挫く〔程の〕勇気を有しており、オイラトに大軍をひいて千人のオイラト人を殺しオイラトすべてを支配下に収め、自分の息子の内一人をオイラトの王に任じた（中略）チャカルのハーン〔リクデン・ハーン〕の使者より、モンゴル文字の話を聞かれると何人かの人を派遣してモンゴル文字を学ばせ正法の規範を打ち立てた。御年35才で亡くなられた」と記している（JSM, Nga, 63a6-63b3）。このアバタイ・ハーンは、当時モンゴルに来ていたダライラマ３世ソナム・ギャムツォと会見をしている。17世紀初頭に成立したモンゴル年代記『アルタン・ハーン伝』は、ダライ

ラマ３世がアバタイ・ハーンに称号を授与した様子を次のように伝えている。

〔アバタイ・ハーンは〕やって来るや否や、〔ダライラマに〕奉仕・布施を献じて礼拝した。ダライラマは祝福して、ワチライハーン（wacirai qaγan）という位を授けた。(AQ, 43v2-5)

この記事の前には青鳥年（1585）のセンゲ・ドゥーレン・ハーン（Sengge dügüreng qaγan）の死亡記事が、またこの後には火犬年（1586)のナモタイ・セチェン・ホンタイジ（Namutai secen qong tayiji）の順義王継位の記事があるので、ダライラマ３世のアバタイ・ハーンへの称号授与は、1585年ないし1586年に行われた、と見るべきであろう。また同伝に「ターラー菩薩の化身ジョンギン・ハトン（Jönggin qatun = 三娘子）に跪拝して会見した」(AQ, 43v5-7) とあるので、会見の場所は、三娘子の住地であるフフホタ（Köke qota）であったと思われる。この 1585年ないし 1586年に行われたアバタイとダライラマの会見は、17世紀後半になって成立をみたチベット語資料、あるいはモンゴル語年代記では 1587年のこととして見え、称号授与前後の記述においても、説話的な要素が濃くなっている。『ダライラマ３世伝』にみえる会見の記事は、「(1587年) ハルハのドルジェ・ハーン（Khar kha rDo rje rgyal po = アバタイ・ハーン）が会いにいらしたのに対し、望むところの希望を広く充たした。古い柔らかい皮のテントなど様々な財宝を沢山献じた」(D3N, 104b5) と非常に簡潔であるが、モンゴル年代記のひとつ『エルデニ・イン・トプチ』は多少詳しく会見の内容を伝えている。

丁亥年（1587年）の間にハルハのアバタイ・ガルチャフ（Abatai γalcaqu）というタイジが〔ソナム・ギャムツォの所に〕礼拝にやつて来て、貂（bulaγa）皮によって覆われた金帳を始めとする沢山の財物を、万をもって数えるほど贈ったことに対し〔ダライラマはアバタイの〕望む心のままに、法によって満たした。ダライラマはハーンに対して、「この私の諸仏の中から手を差し込んで一つの仏を取りなさい」と言った。するとワチルパニ（金剛手）の画に当り、〔それを〕取った。それから〔ハーンが〕戻るとき、「自分にたいし、ワチル（金剛）という名の高いハーン号を戴きたい」と申し上げたのに対し、〔ダライラマは〕「汝のモンゴルの政にとって障害となろう」とおっしゃられた。〔しかし、ハーンが〕再び要求するので、ワチライ・ハーンという位を授けた。(ET, p.274.1-275.3) [2]

以上がアバタイとソナム・ギャムツォの会見内容であるが、アバタイの目的はやはり高位の聖職者に授かるハーン位であったことがわかる。

アバタイ<3-1>の弟でノーノホ・ウイチン・ノヤンの第４子トメンケン・フンドレン・チョークル<3-4>も早い時期にゲールク派と交渉を持った王であった。彼はハルハの中でかなりの勢力を持っていた。ザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』には、「ハルハ７ホシューンに於て〔トメンケンは〕ハーンの名こそ無かったけれど、７ホシューンの大半の首領の伯父であったので、７ホシューンの３ハーンもトメンケンの御言葉には背かなかった」(JSM, Nga, 147b5) と、トメンケンがハルハのなかでも年長者として尊敬を集めていたことが述べられている。漢文史料『欽定外藩蒙古回部王公表傳』によると、彼とその息子ノモン・エジェン<3-4-2>は、ダライラマからサイン・ノヨンという称号を授与されたと



ある[3]。ただしそれは、ダライラマ伝等のチベット史料では確認されていない。チベット史料に於て彼の名はダライラマ４世ユンテン・ギャムツォの葬儀の際に現れる。

火蛇年（1617）の秋の終わりに主従パンチェン・リンポチェがタントラにそった正しい儀法で〔ダライラマ４世の〕御遺体を荼毘にふした時、頭蓋骨、心臓、舌、目などの舎利がたくさん出てきた。〔そのうち〕ハルハの首領チョークル（Chos khur即ちトメンケンのこと）が頭蓋骨、トメトのタイジ=ロサン・テンジン・ギャムツォ（Blo bzang bstan 'dzin rgya mtsho）が心臓を、それぞれの国に福田として勧請した。〔ダライラマ４世の〕舎利を安置した、この世でもとりわけ立派な宝塔を建立なさるための工房を、ハルハのチョークル・ポンボが施主となって建てたが、争乱のため完成できないままになっていた。それを再び木牛の年（1625）にトメトのポンボ・ホンタイジ[4]が施主となってチャンゾー・サキョン・ソナム・ラプテン（phyag mdzod sa skyong bSod nams rab brtan）が責任者となり、画師のゴケドルジェ（dGos skyes rdo rje）が図面を引き、監督はチャワ・カーチュ・サンゲ・シェーラプ（cha ba bka' bcu Sangs rgyas shes rab)、工人部チンパ・ロサン（dpon po Bying pa blo bzang)、ネパールのノルブ・ツェリン（Nor bu tshe ring）等二十人程によってつつが無く建てられた。(D4N, 51a2-5)

トメンケンによるユンテン・ギャムツォの仏塔建立の記事は、ザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』にも見られる（JSM, Nga, 148a1)。これらの記事によると、少なくともユンテン・ギャムツォの死（1616年）の１年後には、トメンケンとチベットの間に、すでに関係が生まれていたことになる。また、ザヤパンディタによれば、トメンケンは最初にモンゴルからチベットに行って、モンゴルに仏教の規範を打ちたてた人で、パンチェン一切智者，テモトゥルク（De mo sprul sku)，セムパー・チェンポ（Sems dpa' chen po）などたくさんのラマと会ったといわれる（JSM, Nga, 147b6-148a1）[5]。それがどの時期であるかは定ではないが、チベットとの間にかなり親密な接触があったと言えるであろう。

トメンケンの次男ノモン・エジェン<3-4-2>も、仏教に帰依し僧形をとる者であった[6]。その世俗勢力の強さは、順治十二年（1655）清朝によるハルハ８ジャサクの設置の際、兄ゾトバ・セチェン・ノヤン<3-4-1>をさしおいてジャサクに封ぜられたことをみても分かる。彼の勢力の秘密が、チベット仏教教団との繋がりにあったであろうことは想像に難くない。ザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』によると、「〔ノモン・エジェンは〕ウ、ツァンに５回行き、ダライ、パンチェンにたくさんの贈り物をなし、セラ、デプン、ガンデン、タシルンポ等大小の寺に茶供養と割り布施をなした」とあり、モンゴルに於てもガンデン・ナムゲル（dGa' ldan rnam rgyal）という寺やタシチュンペー（bKra shis chos 'phal）という御所を建てたという（JSM, Nga, 48a5-6)。これによれば、ノモン・エジェンは積極的なゲールク派支持王侯であったように見える。しかし彼が、ダライラマ５世の伝記に名を現すようになるのは 1644年以降のこと、即ちダライラマ政権が一応成立してしまったのちであり、トメンケンの活動していた 17世紀前半との間には空白期間が横たわっている。この、ゲールク派政権の成立以前の一番支援の欲しかった時期にノモン・エジェンとゲールク派とがどのような交渉を持っていたかは不明である。

1970年外蒙古で白樺の木の皮に書かれた20余りの法典が新発見された。この通称『白樺法典』は、16世紀後半から 17世紀初頭の外蒙古の歴史を語る上で数少ない貴重な一次史料である。それぞれの法典の序文には、その法典の制定に加わった王侯達の名前が列挙されている。この法典を研究された二木氏は 1603年以降の法典の冒頭には、トメンケン・フンドレン・チョークルとアバタイの子でトシェート・ハーン位を継いだエリケ・メルゲン・ハーン<3-1-2>、またエリケの子ゴンポ・トシェート・ハーン<3-1-2-1>の名が頻りに現れることから、トシェート・ハーン家とトメンケンの一族は当時のハルハに於て代表的勢力であったと述べられている [7]。宗教界での影響力は当然俗界にまでも及んでいたのである。

## 2．モンゴル諸王侯と紅帽派の関係

第1節に於て見たようにハルハの2大王侯、後にトシェート・ハーン部、サイン・ノヨン・ハーン部の祖と呼ばれるようになるアバタイ・ハーンとフンドレン・チュークルは、いずれも黄教（ゲールク派）を支持し、その見返りによって位称号を授けられていた。しかしこの時代チベットには、黄教・ゲールク派以外にも、同程度の宗教的権威を持つ紅教集団、とりわけカルマ派が存在していた。ゲールク派がモンゴルにまで信者を求めた背景には、黄教の宿敵カルマ派との長年に亘る対立があったのである。モンゴルの諸王侯は当然これらカルマ派の高位の聖職者とも交渉を持っていた。スィトゥ・パンチェン・チューキ・ジュンネー（Si tu Pan chen chos kyi 'byung gnas/1699-1774）の手になるカルマ派の伝記集にはカルマ派の当主であるガルワン・チューキ・ワンチュク（Gar dbang chos kyi dbang phyug, 1584-1630),カルマ派黒帽派九世ワンチュク・ドルジェ（dBang phyug rdo rje, 1556-1603）の伝記があるが（ただしこの部分は 'Be lo Tshe dbang kun khyab が1775年に完成された部分に含まれる)、そこにはモンゴルよりの招聘の使者、莫大な布施についての言及が見られる。

例えば、トメト部は、最初アルタンハーンが出てソナム・ギャムツォを招き、ダライラマという称号を与え、後にソナム・ギャムツォが死ぬとその転生者ユンテン・ギャムツォ、所謂ダライラマ4世を出す等、黄教ゲールク派を支援することでは代表的な部族であるとされてきた。ところがドロン・トメト部の人間で、アルタン・ハーンの北帰の後青海を鎮護していたホロチェ（Kho lo ji ）は [8]、紅帽派6世ガルワン・チョーキ・ワンチュクに使者を送り、勧請しようとしていた（KKNT, Na, 135b1; 136a1, 4)。また、ソナム・ギャムツォを迎請する大立者であったオルドス部のセチェン・ホンタイジの弟チェチェン・ダイチン（Che chen da'i ching）[9]も、やはりガルワン・チューキ・ワンチュクへ招聘の使者を派遣し布施を行っている（na, 135a6；136a5)。

また、単にモンゴル人（sog po）というのみで、いずれの部族に属するかは不明であるが、ハタン（Kha dan / Kha than）という人は、『ダライラマ4世伝』によれば、ダライラマ四世の側近チャンゾー・グシを引退させる直接の契機を作ったとあり、反ゲールク派の人物であったと思われる（D4N, 37b1)。そのハタンについては、黒帽派の当主、9世ワンチュク・ドルジェの伝記に、「(1602年）モンゴル人カテン（ハタン）の最初の招聘がチャングー（Byang ngos）より至った」（KKNT, Na, 117b6; 118a2, 4）とあり、また紅帽派6世ガルワン・チューキ・ワンチュクの伝には「モンゴル王カテンに招かれて〔行くと〕、ナム・ツォ（gnam mtsho）の近くにカテン王が御迎えにいらした」（KKTN, Na, 132a2）などというようにカテンと紅教との関係を示す記事がみられる。これらから、ハタンがガルワン・チョーキ・ワンチュクやワンチュク・ドルジェなどの紅教側の意思にそって反ゲールク派活動を行っていたことが推測できるであろう。

やはりチューキ・ワンチュクの伝に現れるモンゴル人の中にアペー（A dpal）という人物が登場する [10]。彼は、1583年、1589年、1597年から1599年の間に一度との計3回チューキ・ワンチュクに親書を送り、招聘の工作をしている。この人物もソクポ（モンゴル人）と記されているのみで詳細は不明であるが、アペーが使者を送って招聘を行おうとしていたその時期が、奇しくもアバタイがダライラマ3世ソナム・ギャムツォと会見を行うために内モンゴルに来ていた時期（1586年-1587年）にあたっている。後にはソナム・ギャムツォの蒙古巡錫のみが喧伝されるが、その時期にもこのようなカルマ派への働きかけがあったことに注意しなければならない。

以上にみられる如く、15世紀の終わりから16世紀の初頭にかけて、まだモンゴルの諸王侯は黄帽派、紅帽派、いずれとも交渉を持ち支援をしていたことが分かる。後にゲールク派の書物で口を極めて悪く言われる紅帽派支持のモンゴル王侯も、このような背景より現れてくるのである。

上に述べたようにトメンケン<3-4>およびその息子は親ゲールク派と考えられるが、トメンケンの弟バライ・ホショーチ・ノヤン<3-5>の子供であるトメンケン・チョクト・ホンタイジ<3-5-1>と孫に当るアルスラン・ホンタイジ<3-5-1-1>は、紅教支持の兵を起しゲールク派に対立したことで後世名を残した。『ダライラマ5世伝』には1634年、アルスランがゲールク派と関係していた同族のアカイ・ダイチンを謀殺したという記事が見える（D5N, Ca, 76b6)。このアカイ・ダイチン<3-4-11-10 or 3-4-13-3> [11]は、アルスラン同様トメンケンの孫の代に当る人物であるので、この事件は宗教的な利害と同族間での勢力争いが絡んだ複雑なものであったことが想像される。

1636年の秋、アルスランはリクデン・ハーンに国を滅ぼされてチベットにやって来ていたユンニシェブの4人の首領を滅ぼした（D5N, Ca, 79a1-3)。ユンニシェブはタクルン・カーギュ派の施主であったが、このころ頓にゲールク派に接近していた。四首領 [12]のうちのラマキャプ・チョークル（Bla ma skyabs cho khur)が 1632年に（D5N, Ca, 69b5-6)、カルマ・イルデン（Karma yildan)が 1633年に（D5N, Ca, 74b6-75a)、タクルンを通ってデプン寺参詣に来ているのである。アルスランがユンニシェブを打倒したこの事件は、1636年の新年に起きた唐突とも言えるアルスランのゲールク派転向の直前に位置していることに注意するならば、その背景について様々な推測をする価値が十分ある。例えば、アルスランがユンニシェブを滅ぼしたのは、タクルン・カーギュ派の施主を打倒して、ゲールク派の権益を擁護しようとしたのか、それとも、カーギュ派の施主でありながらゲールク派に近づいたためカーギュ派の立場から制裁を加えたのか、これはいずれとも判断しがたい。とにかくアルスランは1636年新年には、完全にゲールク派の守護者としてガンデン・カンサルに於いてダライラマに拝謁する（D5N, Ca, 80a6-b3)。

この劇的な改宗から、後アルスランの死に至るまでの過程については、『青海記』『パクサムジョンサン』に基づいた山口博士の詳細な研究があるので、ここでは省くことにする（山口，1963，pp748-750）。

## 3． ゲールク派政権の確立時に於けるハルハ王侯の動向

チョクトを滅ぼして、ダライラマよりテンジン・チョーキ・ゲェーポ（bsTan 'dzin chos kyi rgyal po / 護持教法王）という称号を授かったグシ・ハーンは、引き続きボン教を奉じるベリの王トンユ（Don yod）を滅ぼす。さらに最終的には西チベット、ツァン（gTsang）の支配者（sde srid）と結びついた紅教カルマ派の打倒に向かい、1642年にチベットを全て支配下に治める[13]。

このようなグシハンによるゲールク派政権確立時の歴史を語る際に、見落とされてきたのは、チョクト・ホンタイジ<3-5-1>没後のハルハの動静である。実際1642年には、少なくとも２人のハルハの諸侯がやはりゲールク派にとって好ましからざる動きをしている。

その１人はアバタイ・ハーンの直系の孫トシェート・ハーン・ゴンポドルジ<3-1-2-1>である。彼の息子ロプサン・テンペー・ゲルツェン・ペルサンポ<3-1-2-1-3>は後にゲゲン・フトクト（または、ジェブツン・ダムパ）[14]<3-1-2-1-3>という名をもってハルハ左翼の精神的盟主として君臨することになるが、彼は、こともあろうに紅帽派の一派ジョナン派の転生者の１人に数えられている[15]。このことは、それを後にオイラトのガルダンがハルハに攻め込んだ理由の一つであると考える人もいる程、重要な点であるのだが[16]、このジェブツン・ダムパの化身としての認定が行われた際の状況は従来明らかにされていなかった。ここで『ダライラマ５世伝』、ザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』などの記事によってゲゲン・フトクト出生前後の状況を考察してみたい。

ゲゲン・フトクトの最も古い伝記は、彼の弟子ザヤ・パンディタ=ロサンティンレー（Jaya pandita Blo bzang 'phrin las)<3-4-8-3>[17]によってゲゲン・フトクト在生中の1702年に書かれている（JSM，Nga，62b6-78b3）。その伝記によると、ゲゲン・フトクトがジョナン派のターラ・ナータの化身と認定されたのは、15才の年にチベットに行ったときの、1650年であるとなっている（JSM，Nga，64a3-65a2）[18]。しかし同書によると、1639年ゲゲン・フトクトが出家戒を取ってすぐにその報告がチベットへなされていたという記事が見える。以下がその記述である。

> 御年５才になられた時（1639）、座にお就かせ申し上げることを通じて縁起が良く整った。ケドゥプ・サンゲ・イェーシェー（mKhas grub sangs dge ye shes）の化身エンサ・トゥルク（dBen sa sprul sku）が出家の戒師となられ、御名をロサン・テンペー・ゲーツェン（Blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan）と御付けして、護法神の随許を差し上げた。それからダライラマ、パンチェンラマ（rgyal ba yab sras）の御前に〔御報告〕申し上げると、ジェブンダムパの化身であるとの認定を下された。（JSM，Nga，64a1-2 傍線筆者）

ここでジェブツン・ダムパの化身と認定されたとあるのは、どのような意味であろうか。



ジェブツン・ダムパというのは、聖尊者というくらいの意味で、特定の人物名、あるいは化身名ではない。ザヤパンディタ自身が、同じ『聴聞を明らかにする鏡』の中で、ゲゲン・フトクトがターラ・ナータの化身とされるのは第１回目のチベット留学の際であると述べているので、ここでこのジェブツンダンパという称号がザヤパンディタによってどのような意味合いで使われたのかを、考察しなければならない。

まずこの報告が届いた時のチベット側の対応を見てみよう。『ダライラマ５世伝』によると、このモンゴルよりの使者は 1642年正月にダライラマのもとへ到着している『ダライラマ５世伝』は、

> 特にハルハのドルジェ・ゲェーポ（rdo rje rgyal po，即ちトシェート・ハーン）の使者は、木部を白梅檀によって作った素晴らしい緞子製の帳幕を北に向けて張っていた。〔ダライラマ５世は〕そこに呼ばれてもてなしと献品を受け、モンゴルに来て戴きたいとの報告を受けた。
>
> トンコルは化身が３人いるが、そのうちオルドスのトンコルをはじめとする 200人位のものに出家戒・具足戒を授けた。〔オルドスのトンコル〕化身に御名ガワン・ジャムヤン・フンドゥップ（Ngag dbang 'jam dbyangs lhun grub)と名付けた。（D5N，Ca，105b3-5）

とトシェート・ハンの使者が到着したときの様子を伝えている[19]。この伝記の記述を見るかぎり、ザヤパンディタの伝記にあるような、ゲゲン・フトクトに関する報告の記事は見られない。しかしこのときその報告がなされていたであろうことは、同年６月の記事に、

> 〔ダライラマ５世は〕６月の１日にセラ・テクチェン・リン（Se ra theg chen gling)、ギュットパ（rGyud stod pa)、ミルワ（rMi ru ba）などの寺廟からの僧列と歌舞の歓迎を受けて、ルプク・リンカに行って 15日程滞在した。デプン寺の密教行者ニェル・グンナン・チュージェ（gNyal gung snang chos rje）をジャムヤン・トルク（'Jam dbyangs sprul sku）の指導僧（yongs 'dzin）に送る約束〔を伝え〕、トシェート・ハーン、セチェン・ハーンの使者などの大部分とセチェン・ハンのラマとしてクンブム・チュージェ・タシ・トンドゥプ（sKu 'bum chos rje bKra shis don grub）が派遣された。ジャムヤン・トゥルクに対して韻文の手紙を出した。（D5N，Ca，113a2-4）

とあることより分かる。ここにジャムヤン・トゥルクとあるのはゲゲン・フトクトを指している。チベット史書では、『パンチェン・ラマ１世伝』にしても、この『ダライラマ５世伝』にしても、ゲゲン・フトクトは終始一貫この「ジャムヤン・トゥルク（文殊の化身）」という名で現れる[20]。なぜ彼はそれらの史料に於いてジャムヤン・トゥルクという名でのみ言及されるのだろうか。もしゲゲン・フトクトがジョナン派の化身であるとされたなら、ジョナン・トゥルク（Jo nang sprul sku)、あるいはターラナータ=クンガーニンポの化身（Ta ra na ta kun dga' snying po'i sprul sku）と呼ばれるのが普通であるはずだろう。事実ゲゲン・フトクトの前代の化身とされるターラナータは、『ダライラマ４世伝』『ダライラマ５世伝』ともにジョナン・トゥルクという名で呼ばれている。むしろ、ジャムヤン・トゥルクと言う称号からは、ジョナン派のことよりも、まずトンコルの化身が連想される。モンゴル年代記『アルタン・ハーン伝』によるとダライラマ３世とトメトのアルタン・ハーンが会見したとき、アルタン・ハーンを始めとする首領達が皆でトンコルの活仏に

対してマンジュシリー・フトクト（Mon: Manjusiri qutuɤtu : Tib: 'Jam dbyangs sprul sku）即ち「文殊の化身」と言う称号を奉っている（AQ, 24r1-2)。そのためトンコルの活仏には、その称号から由来する「ジャムヤン」という語を含む名前が多い。アルタン・ハーンの時代即ち 16世紀後半に生きたトンコル・マンジュシリー・フトクトはユンテン・ギャムツォ（Yon tan rgya mtsho）という人物であった。彼の死後、２人の活仏ゲルワ・ギャムォ（rGyal ba rgya mtsho）とジャムヤン・ギャムツォ（'Jam dbyangs rgya mtsho）が生まれる。このジャムヤン・ギャムツォの死後現れたのが、先程の史料に上がっているオルドスのマンジュシリー・ガワン・ジャムヤン・フンドゥプと、『ダライラマ５世伝』の他の部分に現れるハルハ右翼のマンジュシリー・ジャムヤン・ロサン・テンジン（'Jam dbyang s sprul sku Blo bzang bstan 'dzin）なのである（D5N, Ca, 153b1）[21]。この２人の化身は 1642年トシェート・ハーンの使者とともに入蔵したらしい。上に引いた『ダライラマ５世伝』の記事にはガワン・ジャムヤン・フンドゥプの名しか見えないが、『パンチェンラマ１世伝』には、エルデニ・ホンタイジと２人のトンコル活仏がパンチェン・ラマに会見し、パンチェンラマはトンコルの２人の化身を始めとする人々に出家戒・具足戒を授けた、という記事がある（PIN, 116b5-117a1)。

そこで、『ダライラマ５世伝』の 1642年新年の史料に戻って考えてみよう。ダライラマ５世はトンコルの活仏を３人と述べている。勿論トンコルには前述のゲルワ・ギュムツォ系の活仏もいたわけであるから、その活仏を加えて３人という意味にもとれるが、このダライラマ５世の発言が、トンコルの（恐らく）２人の活仏とトシェート・ハーンの使者とが入蔵した時になされていることに注目するならば、実際に入蔵したその２人の活仏以外の残りの１人は、その時トシェート・ハーンの使者がその報告をもたらしたゲゲン・フトクト自身を指していたと考えることもできるのではないだろうか。とすれば、上のザヤパンディタの記述に対応するチベット側の資料ということになるだろう。しかし、ゲゲン・フトクトがジョナン派の化身であることは、後世既成事実となって残ってくることなので、チベット側がいつのころからゲゲン・フトクトをジョナン派の化身として済し崩し的に承認したのかは、研究の余地がある。

『ダライラマ５世伝』の 1642年の６月の記事に見える、ダライラマ５世からジャムヤン・トゥルク即ちゲゲン・フトクトに宛てて出された手紙は、ダライラマ５世の全集に残されており[22]。その題名は

> ジャムヤン・チュージェ・タシペーテンの化身といわれるジョナン派の化身、クンガー・ニンポ（kun dga' snying po）の化身が、ハルハのドルジェ・トシェート・ハン家に生まれたことを告げる、金剛の鼻に香しいマラヤの香り。（RNG, 44a1)

というものである。この手紙は日付こそ無いが、内容から見て先程あげた、1642年６月の『ダライラマ５世伝』に言及された韻文の手紙に当るものと考えられよう。この手紙は前編装飾的な韻文で書かれており、実質的な意味は殆どないが[23]、手紙の冒頭でははっきりゲゲン・フトクトをジョナンの化身とうたっており、ジャムヤン・トゥルクという名はかけらも見えない。チベット側の資料がゲゲン・フトクトを常にジャムヤン・トゥルクとしてしか言及していないこと、およびザヤパンディタの伝記でもこの時点ではまだ、ジェブツン・ダムパとししかて認定されたていないことからすれば、ここに残されている手紙が 16



42年に書かれたものであると判断することは難しい[24]。そこには何らかの作為があると考えなければなるまい[24]。

ジョナン派はゲールク派との宥和精神からか、ターラナータの化身系譜にデプン寺の創建者ジャムヤン・チュージェ・タシ・ペーテンを加えている。それに対してダライラマ５世は好感を持っていなかった。例えば『ダライラマ５世伝』によると1642年3月頃に、ジョナン・トゥルク〔ターラナータ〕が、ジャムヤン・チュージェー・タシペーテンの化身であるので、ジャムヤン・チュージェーの建てた寺デプン寺には〔ターラナータの〕浄相が現れるという話があった事に対して、ダライラマ５世は「嘘を誠しやかに話す」と評している[25]ことが挙げられる（D5N, Ca, 107a1-3)。このこととも考えあわると、1642年当時、まだ政権の礎も定まらない不安定な時期に、トシェート・ハン家のような勢力のある一族から、自派とは別の化身をわざわざ認定したとは考えづらい。また、1651年にゲゲン・フトクトはチベットへ留学するが、その際そのキャラバンを迎えに「〔ジャムヤン・トゥルク（チベット資料はゲゲン・フトクトをそう呼ぶことは上に述べた）を〕ジャムヤン・チュージェの化身とみなす」人々が出迎えたとダライラマ５世は述べている（傍線筆者：D5N, Ca, 154a1-3)。いま「みなす」と訳したのは、"'Jam dbyangs chos rje'i sku skye'i dbang du btang ba"の下線部であるが、その訳に若干の疑義がないわけではない。しかし、ある辞書の語義およびその用例に従って「みなす、考える」という意味に取ることができるとすれば[26]、そこにはダライラマ５世の、そう考えることに同調していない態度を読み取ることができよう。以上のような諸点を考慮するならば、1642年当時、ダライラマ政権はゲゲン・フトクトをターラナータの化身であると認めていたとは考えにくい。

ゲゲン・フトクトをターラナータの化身とはっきりうたっているものは、年代の明らかなもので、ザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』中の記述があるが、これは、1702年に成立をしたもので非常に新しい。そこで、更に古い記事を求めて『ダライラマ５世伝』を見ると、ゲゲン・フトクトがジョナン派と深い関係があった事を間接的ながら示してくれる史料が若干あった。ターラナータの建立したジョナン派の大寺タクテン・プンツォクリンは1650年にゲールク派に改宗するが、ゲゲン・フトクトの第１回目のチベット留学はこの年である（D5N, Ca, 154a6-b1)。また、同寺に於ける旧勢力の徹底排除は1658年になされるが[27]、その記事の直前にゲゲン・フトクトがこの寺に学堂を建てることを願いでているのである（D5N, Ca, 263a1-2)。

1642年当時、ゲールク派にとって不穏な動きをしていたもう１人のハルハの王侯の名は、パドマ・エルデニ・ホンタイジ<1-2-1-3>である[28]。彼の家系は、アルトゥン・ハーン家といわれ、古くからロシアと交渉を持ち、その勢力はハルハ右翼の宗家ジャサクト・ハーン家を凌ぐほどであった[29]。このエルデニ・ホンタイジは、第２代アルトゥン・ハーンと呼ばれるものである。その事績についての研究は、若松寛氏によりロシアの記録文書を用いてなされている[30]。

この人物も、グシ・ハーンによるチベット平定が終了した直後、1642年の後半よりダライラマ、パンチェンラマの記録に現われ始める。グシ・ハーンの西チベット平定は、1642年３月に終わるが、これで全て反ゲールク派勢力が一掃されたわけではなく、この時期何度か、コンポ（Kong po）方面のカルマ派の戦闘的一派ガルパ（sGar pa）による小反乱が

起る。その際、エルデニ・ホンタイジは、親カルマ派のモンゴル人達が反乱を起すことを懸念して相談のために、グシ・ハーン主従の軍隊のいるところに向かったという記事がある（D5N, Ca, 114a2-4)、その一方では、『ダライラマ５世伝』によると、エルデニ・ホンタイジがツァンのカルマ派と手紙交換をしていたこと（D5N, Ca, 116a2-3)、やグシ・ハーンとの不仲（D5N, Ca, 116a4-6）が伝えられている[31]。このような記事を考えると、1642年当時エルデニ・ホンタイジも、トシェート・ハーン家と同様グシ・ハーン主導のゲールク派政権の確立に対して、消極的ながら次第に協力を余儀無くされていったといえるのではないだろうか。

以上 16世末のソナム・ギャムツォによる蒙古巡錫に始まる、チベット仏教後伝期時代の初頭から、ゲールク派政権が成立する 1642年までの、ハルハ左右翼の王侯の動静を駈足で見てきた。モンゴルにとってのチベットとは、自らの称号を権威づけてくれる宗教的権威の根源であった。また、寺を建て、高僧をチベットより招聘することは、自らの財力を内外に誇示すると同時に、属民の支持を得てその心を束ねるためには必要なデモンストレーションであったと言えよう。ダライラマ政権の成立後のように、チベットに絶対的に優勢な宗派があれば、モンゴルの諸公は皆その膝下に集まったであろうが、1642年以前は、同程度の力を持つ黄教集団と紅教集団が並び立っていた。モンゴルの諸公は、その時々の、広くはモンゴルとオイラト、狭くは左翼と右翼の、対立ないし同盟に影響され、どちらかのチベットの宗派を支持していた。われわれの検討してきたエルデニ・ホンタイジとトシェート・ハンのゲールク派に対する消極的挙動も、オイラト・ホショト部のグシ・ハーンに対抗する意識が裏にあったことは、ここで改めて述べる必要もあるまい[32]。

このように定見ないモンゴル人を束ねてついにはグシ・ハーンのような庇護者を見つけてチベットを支配下に収めていくことができたのは、ゲールク派の卓越した政治力によるところ大であった。ゲールク派が政権をとるにあたって、実際にその政治力を発揮したのは、ダライラマその人よりもその側近ソナム・ラプテン（bsod rnams rab brtan）であった。彼は『ダライラマ５世伝』中に御前（zhal ngo）という呼び名でしきりに現れ、事件の場に直接乗り出しては調整調停に奔走していたことが見えている[33]。黄帽派の一党支配が成立する過程は、まだまだ分からないことが多い。これらの視点を一つ一つ解明していかなければ、ゲールク派政権の具体的な姿を理解することはできないであろう。ここではその一つのステップとして、ハルハ=モンゴルの動静を僅かな資料から辿ってみるにとどめなければならない。



## 註

1）本論に登場するハルハの王侯の家系を以下『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』の記事に基づいて系図にした。本章で特に詳説する人物には下線を引いた。

Geresenje jalair qong taijiの七人の息子（七ホシューン）

1. Asiqai darqan qong taiji
1-1. Bayandara qong taiji
1-1-2. Laiqur qaγan
1-1-2-1. Subadai jasaγ tu qaγan
1-2. Tümengdara daicing qotoqor
1-2-1. Soloi sain ubasi qong taiji
1-2-1-3. Badma erdeni qong taiji
1-2-2-6. Gümbü yeldeng
2. Noyantai qatan baγatur
3. Noγonoqo uijing noyan
3-1. Abatai sain qaγan
3-1-2. Eriyekei mergen qaγan
3-1-2-1. Gümbü tüsiyetü qaγan
3-1-2-1-3. Blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan dpal bzang po (Tib. 'jam dbyangs sprul sku /通称ゲゲン・フトクト)
3-4. Tümeng ken kündülen cöγükür
3-4-1. Jodba secen noyan
3-4-2. qDus jab erdini üijing noyan (nom un ejen)
3-4-5. Luyaγ erke cögükür
3-4-5-1. Bandita qutuγtu yin gegen
3-4-8. Cembül taiji
3-4-8-3. Noyan qutuγtu
3-4-11. Sarja diyun qong taiji
3-4-11-10. Coski dorji aqai daicing
3-4-13. Baγar ja
3-4-13-3. Qatan aqai daicing ubasi
3-5. Baγarai qasiγuci noyan
3-5-1. Tümengken coγtu qong taiji
3-5-1-1. Wacir aimaγ un arslan qong taiji
4. Amin dorqal noyan
4-1-1. Siloi dalai secen qaγan
4-2. Mooro böime
5. Darai taiji
6. Daldan kündülen

7. Samu otrun

2）ウランバートル版の『エルデニ・イン・トプチ』は、４つの写本を校訂している。底本となったのは所謂ウルガ本で、その他 a e i ３つの写本によって校訂されている。a 写本は「トシェート・ハンの奉った史書〈天命によって起ったハーン達の黄金氏族の白い歴史〉という名の話である。」という奥書きのついたもので、e 写本は歴史家ジャムヤンが内蒙古から持ってきた「サガン・セチェン・ホンタイジのエルデニ・イン・トプチ」。i 写本は筆で書かれている出所不明のものである（ET, 1958, p. 5)。本文で揚げた記事の後半部分は、a 写本によると、以下のようである。

ダライ・ラマがおっしゃるには、「この如来はカムパのワチル・ハーンの画である。昔ゲルに一杯の仏がゲルごと火に燃えたときも燃えなかった大利益ある仏である」とおっしゃった。また親指程の仏舎利と白銅によって鋳造したチャクラ・サムバラ仏、インドの地より招来した多くの法力ある信仰の対象物（sitegün / rten）を始めとするものを賜った。〔また、〕大きな虎皮のゲルを始めとする財貨を賜り、〔ダライラマより〕「バジラ・パーニの化身なり」と言う御言葉を戴いて、ノムン・イェケ・ワチル・ハーンという位を賜った。

『アルタン・ハーン伝』また、『エルデニ・イン・トプチ』より成立が新しい『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』の記事は、この a写本と相似している（AN, p. 77.18-p. 78.19)。この年代記はハルハで成立したものなので、a写本にあるような、ダライラマがハーン号の授与を断ったという、ハルハのハーンにとって不名誉な話は見られない。しかし、一方では、問題の会見を火犬年（1586）としており、またアバタイの牧地をハラ・ウルクと示しているなど、『エルデニ・イン・トプチ』の記述より詳しくかつ正確である印象を受ける。

3）『國朝耆獻類徴初編巻首之八十一』『欽定外藩蒙古回部王公表傳』巻之六十九 傳五十三 喀爾喀賽因諾顔部總傳に「初喀爾喀有所謂紅教者、與黄教争。圖蒙肯尊黄教為之護持、唐古特達賴喇嘛賓之、授賽因諾顔、號令所部奉之視三汗。圖蒙肯卒。子丹津喇嘛復受諾們汗號於達賴喇嘛」と、トメンケン、ダンジンラマ（ノモン・エジェン）父子も黄教を保護した見返りにダライラマより称号を授与されていたことを記している。エルデニ・イン・エリへのサイン・ノヤンについての対応部分はこの史料に基づいている（EE, p.71）。サイン・ノヤン部が一部として独立するのは、３ハン国の中で最も遅く、雍正３年（1725年）のことである。

4）ここに見えるホンタイジとは、アルタン・ハーンの息子ブッダシュリー（Budasiri qong tayiji）と把漢比妓の間に生まれたオムボ・ホンタイジ（Ombo qong tayiji）である。彼はカンジュールをモンゴル語に翻訳する際のパトロンの一人でもある。オムボ・ホンタイジについては森川（1985）参照。『ダライラマ５世伝』にはポンポ・ホンタイジ（dPon po hung tha'i ji）という名で現れ、仏塔建立の際には、ウルチン・ナンソ（Ul ching nang so）トンコル・ポンチュン（sTong skor dpon chung）を使者として派遣してきた、と



ある（D5N,ca,40a6-b2)。

5）テモトゥルクの化身系譜は『ロンドル・ラマの聖者名簿』によると、３代目がコルタクパ・ナムギェー・キナンツェン・ゲロン・ジャムカルワ（'Khor dag pa rnam brgyad kyi nang tshan dge slong 'jam dkar ba)、４代目がシャルワ・レクパ・ゲンツェン（Zhwa lu ba legs pa rgyal mtshan）である（KTM, 20a6-b2)。『蔵族歴史年鑒』によると、４代目の生没年は 1631-1668年なので、トメンケンの会見したテモトゥルクは３代目か４代目であったと思われる。セムパー・チェンボについても『ロンドルラマ』や『パクサム・ジョンサン』のレウミクによって推測するなら、６代目ガワン・チョーキ・ギャムツォ（Ngag dbang chos kyi rgya mtsho,1573-1605)、あるいは７代目ガワンプンツォク・ナムゲル（Ngag dbang phun tshogs rnam rgyal,1605 or 1607-）がトメンケンと同時代の化身と思われる（KTM, 20b4-6)。

6）順治十二年の８ジャサク設置に関しては、宮脇（1979）に『欽定外藩蒙古回部王公表傳』を用いた詳細な考察がある。ノモン・エジェン（丹津喇嘛）の名が『ダライラマ５世伝』に現れるのは、1644年も後半になってからである（D5N, Ca, 124a6; 125a6)。ゲールク派政権成立以前の活動は明らかではない。

7）『白樺法典』についての研究は、この法典の出版者 Perlee（1974, pp. 117-138）によるものと、日本では二木博史氏の研究がある（二木, 1981, pp. 49-73;1981a, pp. 50-63)。二木氏によれば、1603年（p. 30)、1614年（pp. 39, 42）の法典編纂に加わったトシェート・ホンタイジはゴンポ・トシェート・ハーンその人を指すという。このトシェート・ホンタイジや前代のエリケ・メルゲン・ハーンなどのトシェート・ハーン家の統領達は1603年から1620年の間７つの法典編纂に関わっている（HTSB, pp. 24, 30, 39, 42, 44, 57, 59)。またトメンケン・フンドレン・チョークルもフンドレン・チョークル・ノヤンという名で８つの法典に現れ（HTSB, pp. 27, 30, 39, 42, 44, 46, 56, 60)、その勢力はやはり大きいものであったらしい。

8）和田氏は、ホロチェはユンニシェブ（Yüngshiyebü, 永謝布）系かオルドス（Ordus, 鄂爾多斯）系であるとされ（和田 1959, p. 681)、山口氏はダライラマ３世と会見したホロチェは疑い無くユンニシェブ系であるとしながらも、1621年にゲールク派のために兵を起したグル・フンタイジ（Guru hung tha'i ji）とラツン・ロサン・テンジン・ギャムツォ（lHa btsun blo bzang bstan 'dzin rgya mtsho）の父であるホロチェとが同一人物であるかどうかという点については、『エルデニ・イン・トプチ』にホロチェがドロン・トメト（doluran tümed, 多倫土默特）とあるのが両者の同一化を妨げる、と述べられた（山口, 1963, pp. 743-744)。さらに萩原氏はホロチェは最低オルドス系、ユンニシェブ系、ドロン・トメト系の３者が考えられ、１人の人物に速断することは避けるべきであるとされている（萩原, 1980, pp. 379-380)。以下に私見を述べてみよう。『ダライラマ３世伝』によると、1579年にアルタン・ハーンにより青海に留められ、1584年にはダライラマ３世

と会見している首領コロチェ（'Kho lo che）は（D3N, 99a6）、『パクサム・ジョンサン』にトメトのホロチェとトメト部の人であるようにみえることや、モンゴル年代記『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』にドロン・トメトのゴドン・ホロチ・ノヤンは青海に行った人であると註記されていることや（AN, p. 71.4-5）、『金輻千輪』にもアルスボラド（ホロチェの祖父）は青海に遊牧しドロン・トメトを支配した、などの記述があることから（MK, IV, 9r8）、やはりドロン・トメトの首領であるコロチェとみるのが自然であると思う（D3N, 103a2）。また、1621年にゲールク派のために兵を起したグル・フンタイジ、ラツンの兄弟の父も、モンゴル年代記『金輻千輪』にドロン・トメトのゴデン・コロチェ・ノヤン（Göden qolaci noyan = 火落赤台吉）の子にグル（Gürü）、アカイ・エイスン（Aqai eisün）がみえることより（MK, IV, 9r11-12）、ドロン・トメトのコロチェと見てよいと思う。1604年にダライラマ４世がチベットへ向かう途上青海を通ったとき、コロチェは「〔ダライラマ３世が〕ここに３年程お住まいになられたが、〔私コロチェには〕３か月ほどにしか感じなかったので、〔なお〕御滞在下さい」と、ダライラマ４世に青海滞在を願っている（D4N, 21a1-2）。これらの記述のみを見れば、コロチェはいかにもゲールク派とは縁の深い人物であるように思われる。しかし実際は、上述のように黄教以外のカルマ派黒帽派と通じるなどしており、またそれが不思議でない時代であったのである。

9）セチェン・ダイチンは、おそらくオルドス部のセチェン・ダイチン（Secen daicing）を指すのであろう。彼の業績を、『エルデニ・イン・トプチ』により見ると、壬申年（1572）のトクマク征伐（ET, p. 231）に参加しており、1578年のソナム・ギャムツォとの会見でも、アルタン・ハーン、セチェン・ホンタイジに次いで称号を授かっている（ET, p. 248; 254）。アルタン・ハーン、フトクタイ・セチェン・ホンタイジに次いで位を授かっているということは、セチェン・ダイチンはソナム・ギャムツォが招聘された当時、アルタン・ハーン、セチェン・ホンタイジに次ぐ勢力があったことを推測させるに十分である。和田（1959）に収録されている『エルデニ・イン・トプチ』に基づく系図では、フトクタイ・セチェン・ホンタイジの従兄弟で、父の名はブヤングライ・トラル・ダイチン（Buyangrulai Torar daicing）となっている（ET, p. 218; 和田, 1959, p. 722）。1585年のソナム・ギャムツォとの会見に関する記事は『エルデニ・イン・トプチ』や（ET, p. 268）、『ダライラマ３世伝』にも確認できる（D3N, 103a6）。

10）アペーという名は、『ダライラマ３世伝』に記事の有るアペー・ノヤン（As dpal no yon）の事であろうか。この人物についての『ダライラマ３世伝』の記事は、1570年代の後半から80年代のごく初期に集中している（D3N, 94a4；99b；102a）。『ダライラマ３世伝』に見られるソナム・ギャムツォとの会見の内容は、供養を受けたことやノヤンの病気を直した等の『ダライラマ３世伝』の中では典型的な記事である。

11）このハルハのアカイ・ダイチンは可能性のあるところで２人の人がいる。トメンケンから数えて３世代目に位置する、チョーキ・ドルジ・アカイ・ダイチン<3-4-11-10>とハタン・アカイ・ダイチン・ウバシ<3-4-13-3>とである。『ダライラマ５世伝』に見られるアカイ・



ダイチンが、両者どちらを指すにしても、アルスランにとっては同世代の同族であることが系図より分かる。

12）ユンニシェブの簡単な系譜を『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』より以下に掲げてみよう（AN, p. 70.13-19）。ボディダラ・オトゴン・タイジとは、アルタン・ハーンの父バルス・ボロドの第６子である（AN, p.63.17）。

1. Bodidara odrun tayji
1-1. engkedere dayicing noyan
1-1-1. engke secen noyan
1-1-1-5. Karma yeldeng
1-1-1-6. Lamajab cögükür buyantu cing baratur
1-1-2. Esen üijcing noyan
1-1-2-1. Burrai secen cögükür
1-1-2-1-1. Rincin tayiji
1-1-2-2. Dorji nomci jaisang
1-1-2-3. Karma üijing jorirtu

『ダライラマ５世伝』に現れるユンニシェブの４人の首領のうち２人は下線を引いた人物であることは間違い無い。『ダライラマ５世伝』には、他にユンニシェブ関係に小カルマ（D5N, Ca, 75a1-2; 79a2）、ノムチ・タイジ（D5N, Ca, 75a1; 79a2）、大カルマ（D5N, Ca, 79a2）、ノルブ・リンチェン（D5N, Ca, 79a2）の名が現れる。小カルマ、大カルマというのは、カルマという名の二人の人物を呼び分けるために、年齢順に大小と区別したのであろう。もしノムチ・タイジがドルジ・ノムチ・ザイサン<1-1-2-2>を指すのであるとすると、小カルマはカルマ・ウイチン・ジョリクト<1-1-2-3>に、大カルマはカルマ・イルデン<1-1-1-5>のことを言うのかもしれない。小カルマをカルマ・ウイチン・ジョリクトに比定するのは、小カルマへの言及が常にノムチ・タイジと一緒に現れるので、兄弟とするのが自然と考えられるためである。

13）『ダライラマ５世伝』には、壬午年（1642年）３月の内にチベット農耕民（bod shing sgo can）がグシ・ハンの支配下に入ったとの情報が、ダライラマのもとに着いている（D5N, Ca, 106a3）。しかし42年後半にはコンポ方面のカルマ派の反乱が起り、まだ完全な支配体制が確立するには、しばらくの時間が必要とされた。

14）ロシア史料などのハルハに関しての同時代史料を見ると、ジェブツン・ダムパー世はゲゲン・フトクト（Akademiya nauka SSSR, 1978, No.7, No.11）と呼ばれ、単にフトクト（ibid, Passim）ということもある。ここではゲゲン・フトクトをジェブツン・ダムパの通称として採用する。

15）ゲゲン・フトクトの転生譜は、一番早いものでザヤ・パンディタの手になるものとロンドル・ラマによるものがある。（KTMとJSMが一致する場合は、KTMを-----とした。）ゲゲ

ン・フトクト転生譜は Bawden (1961) pp. 20-33、丁實存 (1947) pp. 49-58; pp. 55-64 等による研究がある。

| JSM.による系譜 | KTM.による系譜 |
|---|---|
| | 1. sTob chen. |
| | 2. Byang sems blo gros shin tu rnam dag |
| 1. 'Bar ba'i gtso bo. | 3. ---------- |
| 2. Grub pa'i dbang phyug nag po spyod pa. | 4. Mi skyod rdo rje. |
| 3. grub thob Ra tan bha hu ra. | 5. Ra tan chen po. |
| 4. Rong zom chos bzang. | 6. ---------- |
| 5. Dar ma dbang phyug. | 7. ---------- |
| 6. A wa dhu ti. | 8. 'Od zer dpal. |
| 7. 'Brug sgra rgyal mtshan. | 9. 'Brug sgra rgyan. |
| 8. Sangs rgyas ras chen. | 10.---------- |
| 9. Sa nggha bha dra. | 11.---------- |
| 10. 'Jam dbyang chos rje. | 12.----------bKra shis dpal ldan. |
| 11. Chos kyi nyin byed. | 13. Nyin byed bzang po. |
| 12. rJe kun dga' grol mchog. | 14. Kun dga' grol mchog. |
| 13. dGa' byed sa skyong. | 15.---------- |
| 14. rje Kun dga' snying po. | 16. Ta ra na tha kung dga' snying po. |
| (JSM, Nya, 30a6-78b3) | (KTM, 21b6-22a5) |

16) 井邊一家 (1938) p. 241-246参照。

17) ザヤ・パンディタの伝記についての概説はPurevjav (1978) pp. 46-48；p. 64, n. 102 がある。現在日本に於て閲覧可能な史料は、大谷大学のチベット蔵外文献の中に Shaka btsun blo bzang 'phrin las kyi ngag rnams phyogs su bsgrigs pa las rang gi 'khor bar spyod pa'i tshul shin tu gsal ba'i sgron me (Tome 474, No. 12176, / The complete works of blo bzang 'phrin las) とdKyil 'khor rgya mtsho'i mnga' bdag rdo rje 'chang dza ya pndita blo bzang 'phrin las dpal bzang po'i rnam thar dpags bsam yongs 'du'i dbang po zhes bya ba (Tome 477, No. 12224, / The complete works of bka' 'gyur pa er te ni mer ken chos rje) とがある。これらの伝記の研究は若松 (1982) に於いてなされている。『パクサム・ジョンサン』によると、ザヤ・パンディタの司どった寺は「ビルハンヌケ (Bil han nu khe) 寺とナンセの四寺 (nang se'i grwa tshang bzhi) がある。〔それらの寺は〕固定家屋とテントが入り交じっている」と記されている (PSJZ, Ⅲ, p. 175 = 315b2)。著作の目録は ETPM, pp. 13-14 参照。ザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』のゲゲン・フトクク伝には1653年、このザヤ・パンディタに対してノヨン・フトクト<3-4-8-3>という称号を与えたと見えているので (JSM, Nya, 65a6-66a2)、『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』に見えるトメンケンの孫であるノヨン・フトクトがザヤパンディタその人を指しているのであろう。このザヤ・パンディタとゲゲン・フトクトとラミン・ゲゲン<3-4-5-1>は、ほとんど同時代を生きている。この３者は王侯の子弟であること、チベットへの留学をしていること、ハルハに於ける寺廟の建立に指導的役割を果たしたことなど、共通点の多い生涯を送った。３人の生涯についての概説は、Pürevjav (1978) pp.43-49 参照。

18) ザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』によるとゲゲン・フトクトの第１回目のチベット留学のさい、パンチェン・ラマ・ロサン・チューキ・ゲンツェン (blo bzang chos kyi rgyal mtshan) は、勉強のできないジェブツン・ダムパを大学者ターラナータの名によって加持したことが述べられている (JSM, Nya, 64b5-6)。ところがゲゲン・フトクト自身が自らをターラ・ナータの化身であるということに対し懐疑的な言葉を吐いていることや (JSM, Nya, 65a1-2) 、後に述べるように、チベット文献には、ゲゲン・フトクタはジャムヤン・トゥルクの名によってしか表われないことを見ても、彼がゲールク派の側からすんなりジョナン派のターラナータの化身と認められていた可能性は薄いと思われる。

19) 1642年の正月ダライラマのもとに着いたトシェート・ハンの使者については、パンチェン・ラマの記録には見えない。しかしトシェート・ハンの使者と共に入蔵したトンコルの化身が、1643年の正月にハルハ右翼の王侯エルデニ・ホンタイジとともにパンチェンラマのもとに来ている (P1N, 116b5-6)。また、1640年には有名なモンゴル=オイラト会盟がタルバガタイで開かれるが、このハルハ左翼のトシェート・ハン (Tüsiyetü qaγan) とハルハ右翼のエルデニ・ホンタイジ (Erdeni qong tayiji) と恐らくこの２人のトンコル化身 (Arsobi manjusiri , amuγa siddhi manjusiri) と見られる人物とは皆この会盟に参加している (Dilikov , 1980, p. 54, ; pp. 71-72)。以上のことなどより、この３者は1640年の会盟終了後、一緒に入蔵した可能性がある。

20) 『ダライラマ５世伝』『パンチェンラマ１世伝』等のチベット人の手になる史料以外、ザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』においても、ゲゲン・フトクトはジャムヤン・トゥルクという名であらわれる場合がある (JSM, Ga, 207b6；218a1； Nga, 149a1 etc.)。

21) トンコルの活仏については、若松 (1980) にチベット史料『アムド仏教史』を用いた研究がある。『アムド仏教史』は、その記述の一部を紛れも無く『ダライラマ５世伝』に負っている。ところが、『アムド仏教史』と『ダライラマ５世伝』とを対照させると、明らかに矛盾する点が出て来る。一例を挙げると、『アムド仏教史』によれば、このトンコルの活仏系譜においては、モンゴルに於ける弘法活動で知られるユンテン・ギャムツォが、1587年に死んだ後、ハルハのマンジュシリー、オルドスのマンジュシリーのガワン・ジャムヤン・フンドゥプ、ゲルワ・ギャムツォの３人の化身が表われ、その中のゲルワ・ギャムツォがトンコルの化身と認められ1639年まで生きたと書かれている (DGT, 217a1-3; 若松, 1980, pp.320-498)。しかし、『ダライラマ４世伝』によれば、ジャムヤン・ギャムツォとゲルワ・ギャムツォは同時代の人物として現れる。即ち、ゲルワ・ギャムツォは1611年から1613年中に、チベットに現れ (D4N, 45b5)、1614年には、ジャムヤン・ギャムツォがダラ

イラマ４世より、具足戒を受けているのである（D4N, 47a3-48b3）。また、『パクサムジョンサン』にも「1588年にトンコル、ジャムヤン・ギャムツォとトンコル、ゲルワ・ギャムツォの２人が生まれた」とあるので（PSJZ, 282a）『アムド仏教史』の言うようなジャムヤン・ギャムツォとゲルワ・ギャムツォの関係は成立しえない。また、『アムド仏教史』によるところの1588年にトンコルの化身オルドスのマンジュシリー=ガワン・ジャムヤン・フンドゥプを含む３人の化身が現れたという記事も、ユンテン・ギャムツォの死後まもない1587年ではなく、本論第４節でトシェート・ハンの使者の入蔵を述べるさい挙げた史料の中で明らかなように、1642年頃の事なのである（D5N, Ca, 105b3-5）。

ダライラマの言及した３人のトンコル活仏とは、１人はゲゲン・フトクトを暗に指しているとして、もう１人は疑い無くガワン・ジャムヤン・フンドゥップであるが、入蔵したトンコル活仏のうちのあと１人は誰であろうか。『ダライラマ５世伝』『ダライラマ５世の手紙集』の記述より推測するなら（D5N, Ca, 153b1; RNG, 69b3）、それはハルハ右翼のジャムヤン・ロサンテンジン・ティンレー・ギャムツォであったらしい。『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』に見えるアシハイ・ダルカン・ホンタイジ〈1〉の曾孫ツェリン・イルドゥチの子マンジュシリ・フトクト御前（Manjusiri qutuɣtu gegen）がその人物に当るのかも知れない（AN, p.76）。もしこの人物が1642年に入蔵した化身であるなら、同族のパドマ・エルデニ・ホンタイジの入蔵も、この化身の後見役としてではないかという見方もできる。一方ゲルワ・ギャムツォの化身はドギュ・ギャムツォ（mDo rgyud rgya mtsho）と言い1646年に入蔵している（D5N, Ca, 132a6-b2：PIN, Ka, 27b6-28a2）。

22) ザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』にはダライラマの著作リストが掲載されている。この手紙も同じ題で Nga,314a5-6 に見える。ザヤ・パンディタによるダライラマの手紙のリストは、ダライラマの全集に収録されているうちの約半数、103番目の手紙 rgyal dbang padma'i dge bsnyen tshangs pa dung zod can gyis sa phag lo gsar gyi lha tshes thog ma 'ongs 'byungs 'gyur gyi lung bstan 'ong tshul byung ba ltar spyan ras gzigs tshogs kyi 'khor lo dang bcas 'phrin du gsol ba lha rgyal snyan pa'i gang rgyangs rnams so.までで終わっている（RNG, 121b4-121a3）。この手紙は木の猪年（1659）の新年に、書かれているので（傍線参照）、それ以降ダライラマの死ぬ1683年までに書かれた手紙は、ザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』のリストには載っていないわけである。

23) 以下に手紙の全文を挙げる。傍線部分は本文で問題となるところなので、（ ）内に翻訳を示した。

stobs bcu mnga' ba'i chu gter las / blo bzang bcu gnyis bdag po'i dpal / grags pa'i 'od zer 'bum phrag gis/ khyod blo'i padma rgyas par mdzod/ rgyal kun mkhyen pa'i lang tsho dar ba'i dpyid / zur phud lnga pa mi yi srid pa can / snyigs dus 'gro ba'i mgon du gnyis skyed kyi / sgyu 'phrul dra ba'i rol gar btsong kha pa'i / ring lugs 'degs pa'i khur ldan shes rab kyis / 'jam dbyangs bzhon nur



'gran bzod chos rnams kyi / rje bo'i them 'dzegs pa'i thos bsam sgom / bkra shis dpal gyi g-yung drung rgyan ldan 'khyil / de lta'i ngang tshul phra mo'i na tshod kyi / skye ba'i zlos gar gsar pa'i chu shel dbang / tshe ring gnam bskos rigs kyi lha lam ngos / shar ba'i ngang tshul 'di las gzhan du ci / rab 'byams chos kyi gnas lugs mtha' yas mdung / cig car 'grol ba rgyal ba'i gsung rab mchog / 'jug pa'i rim pa ji bzhin 'khrul bral gyi / tshul 'dir ring du ngal ba'i khur sten gces / ring nas sbyangs pa'i thos pa'i lcags khyo yis / mdo rgyud ri dwags mig can rab 'gugs pa'i / slob bu yongs su 'dzin mkhas bsod nams kyi / grags pa'i dpal 'bar （指導僧は賢者ソナム・タクペーペルバル）de yang ring du sten / slar yang gtam gyi mes po'i thod yangs las / brjod par 'os pa'i dza fu'i bu mo'i rgyun / byed po skal ldan shing rta'i bya ma rta / bshul du 'dong la bskyud pa med par gyis / de skad 'phrin yig gandharbha / snyan tshigs rgyung mang snyim pa yis / thogs te mi phyed rdo rje'i rgyan / rnam bkra'i rgya yis mdzas bzhin du / rin cen mar gad las bskrun pa'i / yal ga'i ri dwags dbang sgyur tshe / gru 'dzin gnyis pa'i gzhal med che / dga' ldan pho brang nas bris （ガンデン・ポタンから書いた）dge.（RNG, 44a1-44b5 / 傍線筆者）

24) 以下は、上述の手紙中に見えるゲゲン・フトクトの指導僧ソーナム・タクパの名前の由来についての記事である。

gnyal ba chos rje bya yul mang ra'i bla mar bskos. bshes gnyen bya yul pa'i sku de klu bdud kyi steng du yod pas sus kyang reg mi nus par khong gis grang gser (4) spyib byugs dang dgon pa ser khyims pa gtsang dgon du bsgyur ba'i nyams gsos kyis bstan pa rin po che la shin tu phan pa byung ba ni glegs bam rin po che'i pha chos lung bstan las, nam mkha' rnam dag dri ma med, gser sdong shes rab mtshungs pa med, tha ma bstan pa'i (5) me ro ni, grags pa'i dbang gis gso bar byed, ces lung bstan gyis zin cing, dpe la lar gser sdong bsod nams mtshungs pa med ces snang la gang ltar chos rje la nam mkha' bsod nams grags pa zer pas, mtshan yongs rdzogs sam (6) phal cher tshang zhing, (D5N, Ca, 157a3-6)

これはゲゲン・フトクトの指導僧としてハルハに送られていたソーナム・タクパが、ゲゲン・フトクトのチベット留学に伴って入蔵したときの記事である。これによると、ソーナム・タクパはチャ国にある寺の僧院長をしたときの功績により、その名をナムカー・ソナム・タクパとなして、名を完全にしたといわれる。この「名を完全にした」という下線部の意味は何であろうか。筆者の知るかぎりでは、この人物はこの記事のあらわれる1651年以前は、ソナム・タクパという名で現れることはなく、ニェル・グンナン・チュージェ（D5N, Ca, 113a3）、もしくはニェル・グンナン・チュージェ・ロ・ヅェーバと言う名で言及されるのみである（D5N, Ca, 157）。ゲゲン・フトクトにあてて出されたという手紙には、ソーナム・タクパと出てくるが、本文で検討しているように、この手紙自体は、1642年に書かれたとは考えられない。一方『パイドゥーリャ・セルポ』によると、ソナム・タクパが僧院長になった

カルテン（mkhar steng）という名の寺の座主の名は、始めのうちは不明とされるが、ある時から、グンタンパ・ヅェーパ・ペルテン（Gung thang pa mdzes pa dpal ldan）、ナムカー・ヅェーペー・ゴンポ（Nam mkha' mdzes dpal mgon po）等、ナムカー、もしくは、ヅェーパという単語を名前の中に含む人が数人座主についたと報告されている（VSP, 171b3）。その僧院長リストの一番最後に出てくるのが、ナムカー・ソナム・タクパである。座主を勤めた期間は載せられていないのではっきりとは言えないが、もしこれが、『パイドゥーリャ・セルポ』の書かれた1690年代当時のことであるとするならば、この史料にでてくるソナム・タクパはかなり時代が下っていると思われる。そうなってくると、ゲゲン・フトクトの指導僧としてハルハに送られたソナム・タクパと同一人物かどうかはあやしくなってもくるように思われる。

25) ダライラマ５世はこのときツァンに向かう途中のセルドク・チェン寺を通過するところである。セルドクチェンはジョナン派のクンガー・ドルチョクも僧院長を勤めた寺であることから、ジョナン派とは因縁のある寺である。以下が、その原文である。（傍線筆者）
sang ri zhin gi gru don gser mdog can gyi mdar tshogs pa'i ser sbreng dang sban du mkhan slob rnams phrad par byung zhing mkhan po a 'dus de tshad ma (2) bod du dar tshul kyi gleng ma mang po mdzad 'dug. mkhan lcags 'dam pa byon pa'i khong gi bla ma jo nang sprul sku de 'jam dbyangs chos rje'i sku skye yin pas 'bras spungs phyogs la dag snang che bas mjal bar yong tshul ze dgur mngon chung gi sgo nas mdzad pa'i (3) g-yo can drang par smra mkhan zhig snang. (D5N, Ca, 107a1-3)

26) Melvyn Goldstein のTibetan-English Dictionary of Modern Tibetan によると、"dbang du btang na" という項目には、"supposing, assuming" という訳語がつけられている。また、例文には "dbang du btang ba'i srid gzhung" という dbang du btang の属格の使用例もあり、その翻訳は、"hypothetical government" と仮定的、暫定的な意味合いで使用している。
27) 以下はタクテン・プンツォクリンの改宗についての『ダライラマ５世伝』の記事である。
cags stag grub mtha' bsgyur song ba ra gan gser gsol gyi rnam pas rnying pa mi 'gyur bar ma zad gsar pa rnams kyang skyo ma snga btsan du 'gro yin yod 'dug gshis snye thang drung tshan can btang ba'i gra rnying rnams dgon lag gzhan du 'byung. rtag brtan du dge lugs kha zhe mtshungs pa'i sa gtsang rdo gtsang bzos. dgon pa'i ming dga' ldan phun tshogs gling du btags. (D5N, Ca, 263a1-2)
これによると、タクテン・プンツォクリンは1650年にジョナン派からゲールク派への改宗を行なったが、その改宗が不徹底であったため、この時期即ち1658年になって古い僧を末寺に追い出して、寺の名をゲールク派風のガンデン・プンツォクリンに変えたという。

28) エルデニ・ホンタイジと言う名の人物はハルハに少なくとも３人いるが、『ダライラ



マ５世伝』の他の部分でエルデニ・ホンタイジの弟がイルデン・ノヨンであるとしているので（D5N, Ca, 184b5）、ハルハ右翼のパドマ・エルデニ・ホンタイジと固定できた。

29) エルデニ・ホンタイジの息子である第３代アルトゥン・ハン、エリンチン・ロプサン・タイジは1662年宗家のジャサクト・ハン、ワンチュク・メルゲン・ハンを襲殺するに至る。その間の経緯は宮脇（1983, pp.188-189）参照。

30) 若松氏の研究の中に、エルデニ・ホンタイジのブレインにはチベットのタイ・メルゲン・ランズ（Tai mergen lanzu / Erdeni dai mergen nangsu）というラマがいてロシアとの重要な外交折衝の任にもあたっていたというが（1978, p. 533）、このことは、この人物がチベットと一方ならぬ関係があったことを示す貴重な史料である。

31) 以下がエルデニ・ホンタイジがカルマ派と手紙交換があったことを示す史料である。
（116a2) Er te ni hung tha'i jis gtsang nas yi ge byung ba'i lan snyan tshig tu bsrings. kong po nas dpung gyes pa'i rgyal po dpong g-yog sngon la phebs. dus rim gyi gdab (3) las kyi tshig rnams Er te ni hung tha'i jis go ba'i karma pa dang yig 'brel byas par don med kyi rnam rtog langs pa'i bkag mkhan med par dge lugs ma gtogs bsam rgyu med pa'i mna' brgya mna' ston skyel 'dug. (D5N, Ca, 116a2-3)
また、以下はエルデニ・ホンタイジとグシ・ハーンの仲が一時険悪となって、ダライラマやグシ・ハーン妃が和解の工作をしたという記事である。
（116a4) rgyal po dang Er te ni Hung tha'i ji lugs ma legs pas tha'i ji dpon g-yog nyung gshis par bsam blo khang la brten nas 'khra rtsis dang O rod rnams kyang 'tshub 'gyur che tsam snang ba de la brten pa'i dge skyon 'dra byung na Khal kha O rod kyi gzhung yang (5) zhig pa'i sdig rgyun chen por song dogs rgyal por rgyu mtshan nan tan du labs shing, Kun ci rgyal mos kyang mthun 'gyur kyi ram bteg, Hung tha'i ji lam du gnod pa byas dogs 'dug par Byams gling no mon khan dang Rab 'byams pa ngag dban gdge legs gnyis (6) bsu bar phyin pa'i rgyal po dang Tha'i ji lhan du phyag drug pa'i rjes gnang bskur te phan tshun dam tshig gis spel ba'i 'khon med lugs legs spel nas smon lam che chung gi tshogs dbur phyin. (D5N, Ca, 116a4-6)

32) 本章註19参照。

33) ゲールク派政権の成立に力あつたのは、１人ソナム・ラプテンのみではなく、リンメー・シャブドゥン（gling smad zhabs drung）、パンチェン・ラマ・ロサン・チューキ・ゲンツェン（blo bzang chos kyi rgyal mtshan）、グル・フンタイジ（gu ru hung tha'i ji）等も、ダライラマ４世なきあとの危険な時期を乗り切る努力を重ねた人々である。ダライラマ５世をゲールク派支持勢力の大貴族チョンゲー（'phyong rgyas）より出すことを決定

したのも、まだ幼いダライラマ５世を支えて1642年前後の不安定な政局を切り抜けたのも、これらの人々の力といっていい。



# 第　2　部

## トゥカン『一切宗義』「モンゴルの章」訳註

## 『一切宗義』「モンゴルの章」

〔1．はじめに〕

【1b】勝者の御仕事を、所化〔それぞれ〕の天分に適した形でなさる〔という〕不思議な楽器〔の伴奏に〕よって、利益の根源である仏の教えが、大モンゴル（chen po Hor）とリユル（Li yul）とシャムバラ(Shambhala）とに現れた様子を述べよう。

第２に〔インド、チベット〕以外の他のいくつかの国々に宗義（grub mtha'）が生じた様子〔は以下の通りである〕。その〔いくつかの国々といって〕も、カシュミール（Kha che)、ネパール（Bal yul)、パルシク(Bar sig)、ツァンパカ(Tsam pa ka)、テウ(spre'u)、セルミク(gSer mig)、ギュマ(rGyug ma)、ランマ(Ram ma)、サンリン(Zangs gling)、セイロン(Singga la'i gling)、ティヤンク(Pri yang ku'i gling)、ヤムナ(Ya mu na'i gling)、セルリン(gSer bling)、タワ(zla ba'i gling)、メッカ(Ma kha)、【2a】カシャ(Kha sha)、ギジャン(Gyi ljang)、シャンシュン（Zhang zhung)、ドゥシャ(Bru sha)、アシャ（'A sha)、スンパ（Sum pa)、サホル（Za hor)、ミニャク（Mi nyag)、ジャンユル('Jang yul)、ウイグル(Yu gur)、トガル(Tho gar)、オルゲン(O rgyan)、トディンパ('Gro lding pa'i yul)、ロンワ(Long ba'i yul)、ツォル（Tsol)、カリンカ（Ka ling ka）などの大小たくさんの国々[1]において、仏法が、三乗全部そろっている、あるいは全部はそろっていない、〔という〕様々な〔仕方で〕、またその国〔すべてに〕共通な衆生を〔所化の対象とする〕、あるいは特殊な〔衆生〕のみを所化の対象とする、〔という〕様々な仕方で、栄えたり、亡んだり、といういろいろなことがあったと説かれている。しかしそれらのうちには、謬見を持った種族もたくさんあったことは確かなので、それらすべてを語ることはできないのである。

従ってここではモンゴルとリユルとシャムバラとに〔仏〕法が栄えた様子のみを話すならば、それに〔モンゴル・リユル・シャムバラと〕３つあるうちの第１、モンゴルに〔仏法が〕栄えた様子はというと、この国にインドの学者（Pan〔dita〕)・行者（grub〔pa〕)がやって来て教えの規範を開いたという話はないので、法の初源は〔実は〕チベットから起こったのであるが、その〔初源〕といっても、最初に起こったのはサキャ派の法流（chos lugs）なのである。

〔1．チンギス・ハーンとクンガーニンポ〕

即ち〔その様子を説明するならば次の通りである。世俗的な権〕力の輪を転じたチンギス〔ハーン〕（Ching gi si, 1162-1227）がチベットにいらっしゃって、ガリ３県（mNga' ris skor gsum)、ウ・ツァンの４翼（dBus gTsang ru bzhi）、ロ・カムの３郡（lHo Khams sgang gsum）全てを支配下に入れた[2]。ツァンへ使いを送ってサチェン=クンガーニンポ（Sa chen Kun dga' snying po, 1092-1158）に贈り物をし、施主と帰依所（mchod

yon)〔の間柄〕になった。〔チンギス・ハーンは帰国した〕後に、〔クンガーニンポを〕モンゴルへ御招きするお願いを差し上げた。〔仏像・仏典・仏塔の〕三依〔も〕いくつか勧請した。それによってモンゴル人全てが仏教を信仰するようになった。〔即ちこれが三〕宝を供養する始まりであり、沙弥などの戒を取るものも現れて仏教が始まったのである[3]。これは、仏が涅槃なさった年を鉄竜の年であると主張する流儀に従うならば、その年から2087年〔過ぎた2088年目の年であり〕、また〔仏涅槃を〕火兎の年であるとする主張【3a】に従うならば、〔それは〕2041年目の第４ラプチュンの火兎の年であり、更にその年から第13ラプチュンの鉄竜の年（1760）まで553年が経過しているのである[4]。

〔２．サキャパンディタとクテン〕

チンギス〔ハーン〕の孫のグユク（Gu yug, 1207-1248）・クテン（Gu tan）兄弟２人が蘭州（Lang gru）方面に於いて国王をしていた時[5]、クテンはサキャパンディタ（Sa skya pan chen Kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251）の名声を聞くと、チベットに使いを派して〔かれを〕モンゴルへ御招きするお願いを差し上げた[6]。そこで、サキャパンディタに対して〔サキャ派の〕前代の阿闍梨ソナムツェモ（bSod nams rtse mo, 1142-1182）が、

〔いつの日か〕隼の帽子と豚鼻の靴をはいて地の涯の人が〔汝を〕御招きにやって来た時、そこに行くならば仏教と衆生の利益が生ずるであろう

という予言があったことと符合したので[7]、〔サキャパンディタは〕御承諾になり、弟子のパクパ（'Phags pa Blo gros rgyal mtshan, 1235-1280）とチャクナ（Phyag na rdo rje, 1239-1267）[8]を伴って〔モンゴルへ〕お出かけになり、第４ラプチュンの火羊の年（1247）にクテン王と御面会なさった。王が土地神（即ち龍王）の病に罹っていたのを[9]、サキャパンディタは獅子吼〔の儀軌〕を通じてお治しになって、王と〔その〕側近のものたちに喜金剛の灌頂をお与えになり、様々な神変を示して、〔仏教を〕信仰するようにさせた。

それ以前にはモンゴルに文字がなかったのに対し、サキャパンディタが新しい文字を作ることを引き受けられた時、ある女が革なめし用の鋸の歯のようなものを持っていたのを御覧になって、このような形の【3b】モンゴル文字を作って、ア・エ・イ、ナ・ネ・ニ、パ・ペ・ピ、ハ・ケ・キ、ガ・ゲ・ギ、マ・メ・ミ、ラ・レ・リ、ら・れ・り、ア・エ・イ、タ・テ・ティ、た・て・てぃ、ツァ・ツェ・ツィ、つぁ・つぇ・つぃ、ヤ・イェ・イィ、ワ・ワェ・ワィ〔など〕の男性・女性・中性あるいは緊・緩・柔の３種にまとめた。〔このようにしてモンゴル語の〕読み方の規範を打ち立てた[10]。鉄猪の年（1251）にサキャパンディタと王が２人とも亡くなられたので、サキャパンディタの御遺骨を蘭州城の外の幻化寺（sPrul pa'i sde）[11]の舎利塔の中にお入れしたと言われているのである。

〔３．パクパ、カルマパクシとフビライ〕

その後モンケ王（Mung khe rgyal po, 1208-1259）の時、カルマパクシ（Karma paksi,



1204-1283）などがおいでになった[12]。

モンケ〔王〕の弟フビライ・ツェチェンハーン（Hu bi la'i tshe chen han, 1215-1294）は権勢を極めて強大にして、中国・チベット・モンゴルの３つと、インドの半分程のカシュミールの果てに至るまで支配下に収めた。チベットからサキャパンディタの甥パクパ=ロドゥーゲンツェンを御招きになり[13]、水牛の年（1253）にかれは王と御会いになった。王は〔仏〕法に関する質問をなさり、信ずるようになった。

しかし、その〔パクパの来る〕前にカルマパクシを信奉していたので、経典の徳はパクパの方が大きいが、証解の徳は甚のラマ〔即ちカルマパクシの方〕が高いようだと、王が蔭で話したのを、ラマ=パクパを信奉していた王妃ゼェーマサンモというものがパクパに申し上げて、王を信じさせるために〔カルマ〕パクシと神通力を競われるようにと、お願いした〔ところ、パクパはその〕通りに【4a】御承知なさった。王などの御前で、パクシは空に〔浮んで〕結跏趺座をし、山に向かって猛進するなど〔の神変〕を示したのに対し、パクパは自分の五肢を切り離してばらばらに捨て、〔それらが〕五部の尊に（rgyal ba rigs lngar）なり、再び〔元の〕パクパの身となるなどの神変を示したなどと、いくつかの文献に見える。『青冊史』には、「フビライはパクシとお会いして、チベット国など全土に〔仏〕法を正しく行じ、私に良き祈りをなしたまえ、と申し上げたので、良き詔勅が交付された」ということ以外は書かれていないのである[14]。蘭州城の中にカルマリシの供養塔なるものがあるが、これがカルマパクシの供養塔であるわけであるが、〔それが〕訛ってカルマリシの供養塔と言われているのである、と何人かの優れた人がおっしゃっている〔が、その〕通りならば、カルマパクシはこの地で亡くなられたことに疑いは無い。しかし『青冊史』などには、チベットへお戻りになったという話が書かれている[15]。

王はしばらくはパクパに灌頂をお願いせず、まず最初に妃に喜金剛（Kai rdo rje）の灌頂をお願いさせ、どのような誓いを守らねばならぬのか、〔妃に〕尋ねたのに対し、彼女が誓いの言葉を述べた時、王が言うには「他の誓いは守ることが出来るが、ラマの御言葉に【4b】背かないなどとは、私は大王である故、出来ぬことである」と言った。〔それに対し〕妃は「俗界の行いについては王を、聖界についてはラマを、主とすればよい」と言ったので、王の心に適うものとなった。誓いを守ることの出来る側近24人とともに、喜金剛の灌頂を聞いた。灌頂の御礼に金の大マンダラ２つ、１つは孔のあいていない、羊丸ごとほどの大きさに積み重ねられた真珠の塊を付けたもの、１つは七金山〔の形〕（ri gling = ri bdun）などを付けたもの、更には、馬、ロバ、ラクダ、金、銀、絹織物〔など〕測りしれない贈り物を差し上げ、中国語でシンシンタカオシュリ（sing sing ta kau shri, 三省大国師）にして、三界法王という御名前を御贈りになった[16]。シリム城市（grong khyer Shi lim）[17]の土地と人、後には順次チベット３区の全てを臣民として献じた。

王が、チベットの全ての僧は宗派をサキャ派の流儀にしなければならない、という勅を下そうと言った時に、パクパ=リンポチェは、「各々が以前から広めていた宗派を保持すればよい」という旨をおっしゃったので、〔王はそれぞれの宗派については〕干渉しないことにしたのであった。パクパ=リンポチェは、木牛の年（1265）にチベットにおいでになり、第５ラプチュンの土蛇の年（1269）にふたたびモンゴルにいらっしゃった[18]。鉄

馬の年（1270）に４つの角のある丸をモンゴル文字（sog yig 'khor ma gru bzhi）を作り[19]、また講義と実習等を行う規範を打ち立てられ、〔仏〕教と衆生との【5a】利益を盛大なものになさった。王はインドから仏の御遺骨などの三依をたくさんお招きになり、寺をお建てになり、僧伽をおこしになって仏教を盛んにしたのである。

〔５．チューキウーセル〕

しかし丸文字では法（経典）をモンゴル語に翻訳することが出来なかったので、モンゴル人が法を読誦する時にはウイグル語（Yu gur skad）によって読誦していたところ、オルジェイ王〔＝仁宗〕(1265-1307)の時にサキャ派のチューキウーセル（Chos kyi 'od zer）という者がおいでになって、以前にサキャパンディタの作った文字に、尾の付いた文字をたくさん添加して、法を翻訳出来るようになさった[20]。後にハイセングルク王〔＝英宗〕(1281-1311)の時、パンチャラクシャー（gzung gra lnga）[21]などの経・論の法をモンゴル語に翻訳した。

〔６．ナルタン大蔵経建立の事情〕

ボヤントゥ（Bo yan thu, 1285-1320）の代にナルタンリクレル（sNar thang rig ral）の弟子ジャムヤン（'Jam dbyangs）がモンゴルにおいでになって、この者がナルタンにいた時、仮面をかぶってリクレルを驚かしていたので、ラマは良い感じをお持ちでなかったが、そこに、モンゴル国から、カンギュールを建立するための諸道具材料が大量に送り届けられ、とりわけ中国の素晴らしい墨が小箱１〔箱〕献ぜられたので、ラマもお喜びになった。献呈されたその縁分によって建立されたカンギュールは、ナルタンのジャムヤンハカン（'Jam dbyangs lha khang）に収められ、それを元本にしてカンギュールがたくさん増えていったのである[22]。

〔７．カルマ派僧の蒙古巡錫等〕

その後の事になるが、カルマ=ランチュンドルジェ（Karma Rang byung rdo rje）がお見えになって、モンゴルの【5b】ある王に灌頂をしたと伝えられるが、〔それは〕チヤート王〔＝文宗〕（Ci ya thu rgyal po, 1304-1332）ではなかったかと思われる[23]。トゴンテムル〔＝順宗〕（Tho gun thu mer, 1320-1370）がカルマ=ルルペードルジェ（Karma Rol pa'i rdo rje）を御招きになり、彼〔自ら〕は御歳 19の土犬の年（1358）にモンゴルにおいでになった[24]。チンギス〔ハーン〕からエルデニチョクトゥ〔＝寧宗〕（E rte ni chog thu, -1332）までの間の14人の王の代に[25]、サ〔キャ派〕・カル〔マ派〕のたくさんのラマがおいでになっており、王によって帝師（ti'i shri）に推戴された者も何人か現れている[26]。

〔８．ソナム・ギャムツォ、ユンテン・ギャムツォとアルタン・ハン〕



ゲールク派と施主・帰依処の関係になった様子〔を述べるならば次の通りである〕。トメト部のアルタンハーン（Al than han, 1507-1582）の時に、第３代ダライラマ=ソナムギャムツォ（rGyal dbang gsum pa bSod nams rgya mtsho, 1543-1588）がモンゴル国へ御出でになった。モンゴル人たちはオンゴン（Ong gvong）[27]を供養するために殺生を盛んに行っていた〔が、その〕風習を改め、黄帽派（Zhva ser）の教えの規範を打ち立てた。ダライラマその方はモンゴル国で亡くなられた[28]〔。その〕化身である第四代ダライラマ=ユンテンギャンツォ（rGyal dbang bzhi pa Yon tan rgya mtsho, 1589-1616）はモンゴル国にお生まれになったので、更にモンゴル国に〔ゲールク派の〕教えが広まるのに益となり、モンゴル人全てがゲールク派の施主になったのである[29]。

〔９．モンゴル大蔵経翻訳略史〕

その後〔17世紀初頭〕[30]、シレートグシ（Shi re thu gu shri< Siregetügüüsi）が３般若経（Yum gsum）をモンゴル語に翻訳した。チャハルのレクデン=フトクト（Legs ldan hu thog thu, 1592-1634）の時にクンガーウーセル（Kun dga' 'od zer）を中心とするたくさんの翻訳家がカンギュール全体をモンゴル語に翻訳した。モンゴルの最後の小王であるレクデン（Legs ldan）は、自分の政府を自分で壊滅に追い込み、モンゴルの王統は尽きてしまったが、康熙帝(1654-1722)の時に、モンゴル語のカン【6a】ギュールを校訂なさって開版された。文殊皇帝乾隆帝（'Jam dbyangs gong ma Chen lung rgyal po, 1711-1799）の御言葉によってテンギュール全部をモンゴル語に翻訳して開版した。この時、チャンキャー切智者ルルペードルジェ（lCang skya thams cad mkhyen pa Rol pa'i rdo rje, 1717-1786）[31]がモンゴル語に法を翻訳するに際しなくてはならない『正字通達の源』（Dag yig mkhas pa'i 'byung gnas）を御著作なさった[32]〔が、それは〕後の翻訳家たちにとって経典の言葉の意味を読みとる〔ための〕目（ gsung rab kyi brda don blta ba'i mig）となった。

〔10．ハルハの仏教〕

ソナムギャムツォがモンゴル国にいらした時に、アスタハーン（A su tha'i rgyal po =Abatai qaran, 1554-1588）[33]はハルハ国に於いて〔かれと〕御会いした。〔王は〕エルデニ=ジョオの寺（E ra te ni jo bo'i tsugs lag khang）をお建てになった。その孫であるドルジェ=トシェートハーン（rDo rje Thu shri ye thu han）の息子としてターラナータの化身ジェブツンダムパ=ロサンテンペーゲーツェン(rJe btsun dam pa Blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan, 1635-1723)が御生まれになった[34]。ハルハ７ホシューンの頂飾となった。文殊皇帝も〔かれを〕盛大に恭敬し、礼讃をなさった。リボゲゲーリンの僧院（ Ri bo dge rgyas gling gi dgon pa）を建てた。それから化身が順次に現れた。さらに、パンチェン=ロサンチューゲン（Pan chen bla ma I Blo bzang chos kyi rgyal mtshan, 1567-1662）とダライラマ５世（rGyal dbang lnga ba, 1617-1682）〔お２人〕

の弟子ザヤパンディタ=ロサンティンレー（Dza ya pandita Blo bzang 'phrin las, 1642-1715）[35]とエルデニパンディタ=ロサンテンジン（Er ti ni pandita Blo bzang bstan 'dzin, 1639-1704）[36]の２人もまた寺（dgon pa）を創建なさって、仏教のための業績を大々的になさった。それ以来ハルハ国は偉人と僧団で一杯になり、学問と修行〔顕密両方〕（bshad sgrub）の仏教が盛大に【6b】なった。

〔11．トルゴートの仏教〕

トルゴート国（Thor gvod）に「菩薩加行道者」と言われるゴマンの貫主トンドゥプギャムツォ（Byang sems sbyor lam par grags pa sGo mang dpon slob Don grub rgya mts hao）[37]が御出でになって、仏教の規範を打ち立てたけれども、ロシア（O ro su）の支配下に入ったので[38]、それほど盛大になることはなかった。後にロシアの支配から出て文殊皇帝の御支配下に入った。首領たちはそれぞれ別々の方面に分かれていて仏教の〔三〕宝を熱心に恭敬したのであった。

〔12．ジュンガルの仏教〕

オイラト、もしくはウールトに４部あるうち[39]、王統はホショトが継いだごとくであったけれど[40]、チョロス族から出たボショクトハーン（Bo shog thu han, 1644-1697）は権力と財産が大きかったので、ホショトのチェチェーンハーンの王統を奪ってオロトの王国全土に権力をふるった。〔かれはまた〕経・呪（即ち顕教と密教）の学堂（grva tshang）をたくさん建てた。その後、エルデニジョリクト=ホンタイジ=ツェワンラプテン（Er te ni jo rig thu hung thas ci Tshe dbang rab brtan, 1663/5-1727）[41]は、仏教一般、とりわけゲールク派（dGe ldan rin lugs）を信頼する信仰心を得た。〔そして〕タシルンポから大密呪者ゲレーラプゲー（sngags chen dGe legs rab rgyas）とページョルギャムツォ（dPal 'byor rgya mtshao）２人を順次に御招きした。その後デプンからワシュルワ=テンバラプゲー（Wa shul pa bstan pa rab rgyas）などの学者をたくさん御招きして、在家のものたちを斎戒させた。沙弥・比丘に対しては、所学処として ナムツェ、ディンマ（nam rtse, lding ma）の２つを持せしめ、清浄なる律と【7a】戒を打ち立てた。顕教の学堂（mtshan nyid kyi bshad grva）は建てなかったが、大小の『ラムリム』（Lam rim che chung）の学科を基礎たるべきものとした。沙弥・比丘各々に対し、従者となる家族と住処の３戸づつ、ラクダ６頭、馬と牛（rta nor）40 頭づつ、羊200 匹づつの御援助をなさるなど、仏教に対してチベットの王ティ=レルパチェン（Khri Ral pa can）と同じ位の恭敬をなさった。その後、その方の息子ガルダン=ツェリンワンポ（dGa' ldan Tshe ring dbang po, -1745）[42]は、タシルンポ〔寺〕から名実共に備わった大学者トーサムリンの貫主ペーテンイェーシェー（grags pa don ldan gyi mkhas pa chen po thos bsam gling dpon slob dPal ldan ye shes）、デプン〔寺〕から長老にして持律者ゴマンの貫主ロサンプンツォク（gnas brtan 'dul pa 'dzin pa sgo mang dpon slob Blo bzang phun tshogs）とレーチェンパ=ゲンドゥンタクパ（las chen pa dGe 'dun grags pa）、



セラのチェパの貫主など法眼を御持ちのものをたくさん御招きになり、顕教の学科を打ち立てた。寺（gtsug lag khang）と身・口・意の三依をたくさん御建てになった。ゲシェーに新しくなった類の者には、贈物と称賛を盛大になさったので、ジュンガルの国に仏教の清浄なる規範は、末長きに至るまで増えたけれども、後に内紛によって王権が衰微し、今は〔収穫も終わって〕何もなくなった秋の耕地の如くなってしまった[43]。

〔13．グシハーンの業績〕

オイラト４部といわれる中の一部ホショト部の首領ハナイの息子グシハーン=【7b】テンジンチューキギェーポ（Gu shri han bsTan 'dzin chos kyi rgyal po）[44]といわれる方は、水馬年（1582）にお生まれになった。御名前をトロルバイフと付けられた。テルトン=ディメールンポ（gter ston dri med lhun po）の予言に、「金剛手の化身」と説かれ、住地（sar gnas）の菩薩チューデンギェーポ（Chos ldan rgyal po）の姿で出現なさったかたである[45]。御年13になった時、白頭の軍〔トルコ軍〕（mgo dkar）一万ほどを襲うのに将軍となって〔戦場に〕御出でになり、敵方の軍隊全てを滅ぼして、戦勝の名声を得た[46]。その時、その地に〔仏〕法は栄えていなかったのであるが、モンゴルの他の国にダライラマ=ソナムギャムツォ（rGyal dbang bSod nams rgya mtsho）と金の王〔即ちアルタンハーン〕が帰依処・施主の〔間柄になった〕御恵みに依って正法が栄えた、と、法という名を聞いただけで強い信仰心が生じ、何度も何度もその方向に礼拝をしたので、額がはれあがってしまったほどである、と言われている。御年25 におなりになった時、母上がお亡くなりになったが、その御葬式の際に、貧しい者たちに施し物を盛大になさった。ある時ハルハとオロト両者が互いに仲違いをして大きな戦乱が起こった時、慈悲の心に衝き動かされて、ハルハの中に躊躇することなく入って、互いを〔和解させるように〕調停なさった。【8a】そのことをトンコル法王（sTong 'khor chos rje）とハルハの王臣たちは大変喜んで、「大国師」（ta'i ko shri）という称号を贈った[47]。〔グシハーンは〕再び自分の国に戻った。ダライラマ〔３世〕ソナムギャムツォにオロトのある人が『最勝金光明経』に聖別を御願い申し上げた時、〔ダライラマ３世はその人にその経典の〕名を尋ねたところ、アルタンケレル（Altan gerel）と申し上げると、「これから20年経つと汝の国にこの法が栄えるであろう」という予言をなさったが、〔それに〕相応しく〔グシハーンは〕施主におなりになって、『最勝金光明経』などの法をたくさん翻訳し、仏教の規範の初めを打ち立てた。チャハル王〔リクデンハーン〕[48]によってモンゴル六部盟[49]の中に騒乱が起こされたことにより、ハルハの人の中に一部の者が逃げ込んだが、〔ハルハの〕首領たちが〔リクデンハーンを援助するかしないかで〕互いに意見が分かれたために、ハルハのチョクト=ホンタイジ[50]（ -1637）は自国から追われて青海（mTsho kha）へ来て、アムド（A mdo）の地を支配下に入れた。〔チョクトは〕しばらくの間権力が強大で、仏教一般わけてもリボガンデンパ〔即ちゲールク派〕の教えに対して何かと迫害をなした。その事の次第がこの王〔即ちグシハーン〕の御耳に入り、ジェリンポチェ〔即ちツォンカパ〕の教えのみを貴しとお考えになり、大軍を引き連れ、自国を出て火牛の年（1637）1月に青海に至り、戦いをしてチョクトと〔その〕４万の軍を残らず【8b】滅ぼし、ドメ

ー（mDo smad）方面全てを支配下に収めた[51]。それから教主父子（rGyal ba yab sras＝ダライラマ、パンチェンラマ）に御会いになるためにウ（dBus）に御出でになった[52]。ダライラマ５世とパンチェン=ロサンチューキゲンツェンお２人の尊顔を拝して、〔そのお２人を自らの〕頂飾として推戴した。ガンデン寺に拝観にいらっしゃった時、それは27日の夕べであったのに、黄昏時に小さい砂利までも見えるほどに闇が非常に白くなったので、聖俗全てが白く柔らかくなる縁起が整ったのである[53]。それから牛年の後冬（1637）に青海に御出でになった。パルカム（Bar khams）でベリ[54]王トンユ（Be ri rgyal po Don yod）が、仏の教えに対し非常に反感をもち、ボン教のみを主として供養しているという様子をお聞きになり、土兎の年（1639）５月中に大軍を率いてベリ〔王〕を襲撃なさった。大部分の土地と人が取り上げられた。ベリ王は別の地方へと逃げたが、金竜の年（1640）11月25日に捕まえて、監獄に入れた。〔一方〕サキャ派、ゲールク派、カルマ派、ドゥク派、タクルン派などのラマや首領たちは監獄に入れられていたけれども、〔それを〕解放し、〔それぞれ〕自国へ送り〔帰した〕。ジャン[55]王〔の所領〕（'Jang rgyal po）に至るまでの人々は税や貢物を献じ、恭敬に努めた。その時、ウ、ツァンの王は執政ツァンパであった[56]。かれはカルマ派を、供養すべきラマの根本としており、ゲールク派【9a】に対して、邪悪な計画をたくさん目論んでいた。それ故に、この王（即ちグシハーン）は大軍とともにウ、ツァンの地域においでになった。〔そして〕ツァンの軍全てを滅ぼし、ツァンの王臣を捕らえて、ウのネウシカ（dBus kyi sne'u gzhis kha）の監獄に入れ、ウ、ツァンの全地方を支配下に収めた。チベット３区の王となり、法律の白傘が天上にいたるまで覆った。ゲールク派に逆らって恨み、悪意ある人々全てを断罪した。インドの王ラコシン（Ra kho shing）[57]、ネパールのヤムブ〔カトマンズ〕の王（Yam bu'i rgyal po）、ガリの王など辺地のたくさんの小王も[58]、その土地土地の産物を献じた。〔さらに〕ウ、ツァンの土地と人民を一切智者ダライラマに供献して、ナムクー=ガンデン宮（gNam bskos dga' ldan pho brang）の政治の権威は天に届くほどになった。今にいたるまで地上のガンデン、天上のガンデン（sa dga' ldan gnam dga' ldan）と言われるこれも王の御蔭と理解されている。

〔14．グシハーンの子孫以降〕

この方〔即ちグシハーン〕には息子が 10人いた〔。その〕うちダヤンハーン（Ta yan han）とその孫のラサン（Lha bzang）の２人が順にチベットの王となり、末子アクタシバートル（sras tha chung A khu bkra shes ba thur）が青海の王となった。同様に国師ハーン（グシハーン）の子孫で、支配地がそれぞれに分かれていったものたちもまた[59]、【9b】力と富と権力を有し、他に依ることなく、自主独立でいたが、後に（1723）テンジンワン（＝ロプサンダンジン）（bsTan 'dzin wang）が乱を起こしたのを契機に全てが文殊皇帝の御支配下に入った[60]。皇帝からそれぞれの割当と援助を賜った。先代父祖の習いに従って、リボガンデン派〔即ちゲールク派〕の教え、および〔その〕教えを遵守する人々を含めて、恭敬し、それぞれの土地に僧伽を建てる、などによって仏教に対する奉仕を熱心にした。このようにモンゴルの様々な地に仏教が栄え、いつからともなく、モンゴルの僧達はウ、ツァンに学問に行く風習が広まったので、チベットで正規の学問の権威者となられ、モンゴルに来て学問・修行いずれによっても仏教者を育て増やすことのできるものがたくさん現れ、また、ウ、ツァンやド、カム（mDo, Khams）などいずれからも大人物が前後してたくさん来たために、現今はモンゴルのあらゆる地方に仏寺と僧伽が満ち溢れ、顕教の学堂も栄えたので、仏教の宝が増えて盛大になったのである。ソロン（So lon）とパルゲー〔バルガ〕（Bar gvad）のいくつかの部族のみを除いては[61]、モンゴル（byi ng）に外道やムスリム（Kla klo）などの謬見を持つものは、名前【10a】すらもなくなり、〔また〕先行のサキャ派とカルマ派の法流を継ぐものも、今やいなくなってしまったので、黄帽の宗派〔即ちゲールク派〕のみによって〔モンゴルが〕覆われるようになったのである。

## 註

1）ここに列挙されている地名は、仏教経典に由来するもの（gSer gling=金洲，Zla ba'i gling=月洲， Singgala'i gling=星割棘洲，『彰所知論』 巻上 p.227中；SKKB，Vol. 6，3.3.2-3）チベットに於いて過去に栄えた国（'A sha=吐谷渾，Sum pa，Za hor，Mi nyag=西夏）また、仏教発祥の地インドからチベットに至る間にある歴史的な国々（ Bal yul=尼婆羅国，『大唐西域記』巻 7 p.910 / Ka ling ka=揭釐城，巻 3 p.882中，29a5 / Kha che=迦濕弥羅，巻 3 p.888上，37b1 / tsam pa ka=瞻博迦，巻 5 p.897上,61b7 / Orgyan=Udzdzana=烏仗那，巻 3 p.882中，28b3 / Ram pa=藍摩国，巻 6 p.902中，73a2 / Thod kar=覩貨邏国，巻 7 p.907下，81b1 / Yu gur，GTD，p.112，p.201，森安，1977 / 'Jang，GTD，pp.55，99，119，179)、そして外国の国々（Par sig=ペルシア、Bru sha=ギルギット、Ma kha=メッカ）などが混ざりあっている。この記事の典拠となったのは、スムパ･ケンポの書いた『世界の構造』(DPS，94b2-95b6）と『パクサム･ジョンサン』(PSJZ，I，p.41 = 4a1-3）に掲げられている地名の列挙と相応する。特に前書は地名の配列までもが一致している。

2）mNga' ris skor gsum は西部チベット、dBus gTsang ru bzhi は中央チベット、mDo khams sgang gsum は東部チベットに対応する(GTD，p. 55)。従ってここではこの３つを合わせてチベット全土を支配したことになるが、もちろんその事実はない。その理由はともかくチベットはモンゴルの勢力からしばらく放置されていた（Wylie，1977，pp. 105-106)。「ガリの３コル」についてはいくつかの説があるようだが、『ザムリンゲーシェー』の説は、ラダック（La dwags)，ルトック（Ru thog)，グゲ（Gu ge). の３つを指すという（GTD，pp. 55-56；p. 119，n. 53)。「ウ、ツァンの４翼」は、西から東へ向けて、支部翼（Ru lag)、右翼（g-Yas ru)、中部翼（dBus ru)、左翼（g-Yon ru）である（GTD，p. 64；p. 128，n. 122)。「ドカムの３ガン」は、これも『ザムリンゲーシェー』によればマザサプモガン（rMa rdza zab mo sgang)、ツァワガン（Tsha ba sgang)、ポプワォラガン（sPob bo ra sgang）であるが、これにマルカムガン（sMar khams sgang)、ミニャクガン（Mi nyag sgang)、ヤルモガン（g-Yar mo sgang）の３つを加えて「６ガン」とも言う（GTD，pp. 97-98)。

3）チンギスハーンの生没年は、1162年-1227年、クンガーニンポの生没年は1092年-1158年。従ってこの２人が交渉を持つ可能性はない（岡田，1962，pp. 99-100)。モンゴル人が仏教を信仰し始めたのはいつからかという問題は、簡単には確定できない。単にプライベートに交渉を持つことは十分にありうるし、またそれを追跡することは難しいだろう。ここで問題になるのは、信仰に関してではなく、施主・帰依処の関係、それも宗教的なものではなく、政治的な意味を担ったそれである。チベットという宗教的な勢力が政治的な勢力でもあるような政教合一の国における朝貢関係の一形態と言えるであろう。そしてそのような性格の交渉は、サキャ派のみならず、例えばよく知られているように『学者の宴』には他に、ディグンパ（'Bri khung pa)とツァングルモワ（gTsang mgur mo ba）はモンケハンに、ハデ（Lha sde）とシュンパ（gZhung pa）はゴダンに、ツェルパ（Tshal pa）はフビライに、タクルンパ（sTag lung pa）はアリクボガに、ヤプサン（gYa')、パクモドゥパ（Phag mo gru pa)、ニャン（Nyang）はフラグに、それぞれ交渉を持っていたことが報告されている（KGT，Ⅲ，p. 794.3-5；Schuh，1977，p. XXI ；Wylie，1977，p. 108，n. 15)。この対応関係自体はなお検討の余地はあるかもしれないが、サキャ派とフビライの帰依処・施主の関係を結ぶ以前に様々な駆け引きがあったことには多くの傍証があり確実であると思われる。より具体的な状況に関しては、サキャ派系の資料や一般史以外に、今まであまり利用されることはなかったが、かなり豊富に残されているカルマ派の諸資料を解読することが課題となるであろう。

4）仏滅年代論は、チベット暦学の一部をなす重要な問題であった。様々な人たちが、様々な機会に様々な理論に基づいて仏涅槃の年を設定し、その年からの経過年数を計算している。1592年に著された暦学書 Lha dbang blo gros の bsTan rtsis 'dod sbyin gter bum では、13種の主張が報告され、それらが Vostrikov（1970）pp. 104-118 に検討され、整理されて示されている。同じ暦学書に基づいて Macdonald（1963）pp. 68-69 もそれらの主張を手際よくまとめているが、残念なことにいくつかの計算でその２人の間に食い違いがある。この経過年数の計算には誤り易い点があることは、山口（1978）p. 17，n. 31 および同（1982）p. 380-400 に指摘されている。それによれば、ある事件の年から何年が過ぎた、という経過年数による表現と、何年目という、序数表現では、その数値に１年の違いがある。「10年が過ぎた」ということは、今は10年過ぎたその次の年にいるということであり、それはまた「11年目」にいるということでもある。前者を意味するチベット語表現と後者を表すチベット語表現とがそれぞれどのようなものであるか、ということについては、山口（1982）pp. 383-391 参照。上記２人はその点に注意を払うことなく、そしてそれは、Lha dbang blo gros 自身の表現に問題があるとも思われるが、そのために計算の結果に相違が生じているようである。しかしここのテキストの問題としては、仏涅槃の年を紀元前何年にしているを確定しておけば、それらの経過年数とその表現の錯綜した事情に取敢えず触れることなく、処理できるであろう。まず仏涅槃を鉄竜の年とし、かつ1207年から（1、2年の誤差を無視して）約2087年前であるとするならば、それは B.C. 881年にあたる。その主張は Lha dbang blo gros に従えば、Pad dkar shal lung の主張である（Vostrikov，1970，p. 116，n. 354)。一方、仏涅槃を火兎の年とし、かつ約2041年前であるとすれば、それは B.C. 834年にあたる。その主張は、Jo nang pa 流の主張である（Vostrikov，1970，p. 108，n. 337)。この２つの流派が後代対立的であったことは、山口（1973）p. 80 に引用される『パクサム･ジョンサン』の記事にも指摘されている。スムパ･ケンポ自身はその２つの流派のうち、Jo nang pa 流の側に与していたことも報告されているが（山口，1973，p. 80)、そのことは次のような点にも現れていよう。トゥカンはこの章の記述の多くを『パクサム･ジョンサン』に依拠しているが、ここに挙げられる仏滅後の経過年については、『パクサム･ジョンサン』は火兎の年という Jo nang pa 流の主張による計算の方しか挙げていないのである（PSJZ,Ⅲ，p. 167 = 312b6)。と

ころでそのように仏滅の年を設定した上で、問題のモンゴルに仏教が初めて伝わったという1207年までの年数について、ここのトゥカンの記述では、B.C. 881年からの計算は経過年数によって「2088年過ぎて〔2089年目〕」と表され、B.C. 834年の方は、序数表現によって「2041年目」と表されている。またその年から1760年まではここのテキストでは lo lnga brgya dang gsum 経過したことになっているが、この dang は nga (50) の誤りであろう。1207年から1760年までで553年経過しているはずだからである。

5) グユク、クテンがともに国王をしていたのではない。ハーンの第3代がグユク、第4代がモンケ、第5代がフビライである。クテンはそのグユクの弟で、青海地方、あるいはチャングー Byang ngos、あるいはミニャクの辺りを統治していた。グユクの登位は1246年のことと考えられるが（サキャパンディタが1246年にチャングーに着いたとき、クテンはグユクの即位のためのクリルタイに行っていて留守であった、第1部4章参照)、在位期間は一定しない。それらモンゴルの王の順序と在位年数については Appendix 参照。

6) クテンのサキャパンディタ招聘の手紙と言われるものが後代のいくつかの資料に示されている。Schuh はそれを取り出し、コンテキストも含めて比較検討して、その真憑性を疑問視している (Schuh, 1977, pp. 1-43)。確かにこの手紙の文面はこの状況下に於いてあまり自然ではないが、さりとて積極的にそれを偽作だとする根拠もない。この問題については第1部4章第1節参照。

7) この予言は史実であったとは思わないが、ごく古い資料から載せられている。1344年成立のラマダンパ『道果ラマ伝集』やそれと系統の異なるように思われる1346年の『赤冊史』にすでに記録されている。しかし第1部4章で指摘したようにこの予言を与えたのはサキャパンディタの叔父であり師であるタクパゲンツェン (Grags pa rgyal mtshan, 1147-1216) である。この誤りについても同章第4節参照。

8) チャクナドルジェはパクパの弟。数え年で6才のときサキャパンディタに連れられてチャングーへ行き、その後18年間滞在したのち、1265年数え年25才のときチベットのサキャ寺に帰るが、1267年に数え年29才の若さで亡くなる (SDR, 127a3-b4)。以上がかれについて知られるクロノロジーである。このようにかれについてはあまり詳しいことは知られていない。情報は『赤冊史』、『サキャ派年代記』、『ダライラマ5世年代記』にやや詳しく記載されている。それらに基づいて Wylie は今まで忘れられた存在だったこのチャクナドルジェにスポットをあて、甚だ興味深い考察を提起した。『サキャ派年代記』のチャクナドルジェの記述に言及されているところのフビライから与えられたとされる二つの称号、Thong phyi g-yas g-yan gyi khrims ra と Sa len dbang の意味を様々な手続きの後にそれぞれ、「チベットの代理統治者」、「白蘭王 (Wylieによればこの場合、白蘭はチベットを指しているという)」と解釈し、早世したために十分に機能しなかったものの、フビライはかれをチベットの代理統治者に任命したと主張した (Wylie, 1984, pp.391-404)。確かに、まだ6才のチャクナドルジェをサキャパンディタがモンゴルに連れていったということは、パクパに担わされていたのと同様に何らかの重い運命をかれも担わされていることを意味していたと考えるのは自然であろう。しかしそれはいまだ「推論」(infrernce, cf. Wylie, 1984, p. 404) の域を出るものではなく、具体的なことはなにもわかってはいない。パクパとチャクナドルジェと当時のプンチェン (dpon chen) であったシャーキャーサンポ (Sha kya bzang po) との間の関係がどのようであったか、またフビライによってこのような関係に何が与えられたのか、という問題に光を当てなければその当時の政治構造が明らかにはならないだろう。

9) 大地を司ると考えられていた神の一種。龍 (klu) との関係は深く、しばしば同一視される。適切な儀式をせずに石を動かし、土を掘るなどすると「土地神」を刺激し、人間に災害をもたらすとされる (Tucci, 1980, p. 201)。このサキャパンディタの場合にもクテンが適切な儀式をすることなしに新たに家を建てたので龍王を怒らせてしまい、その結果ライ病に苦しむことになる。

10) サキャパンディタが新たにモンゴル文字を作ったという記載は、サキャパンディタの伝記には現れてこない。これについて最も早く言及しているチベットの資料は、筆者の知るかぎりでは『パクサムジョンサン』である。後に出てくる、サキャパンディタの作った文字を改革したというチューキウーセルの記事もチベット語文献としては『パクサムジョンサン』が最初であるように思われる。チューキウーセルの問題も含めて、第1部第4章第3節参照。

11) 蘭州城 (Lang gru'i mkhar) と言われているところは普通はリンチューツェ (Ling chu tsher、涼州府) とされるところである。この混同を犯しているのは、『パクサム・ジョンサン』とそれを受けたトゥカンのみである。第1部第4章第4節参照。

12) カルマパクシがモンゴルに招聘されたのは、1255年、時の王はモンケハンであったが、カルマパクシを招聘したのはフビライである。Richardson (1958) pp. 142-145 参照。

13) この記述は正しくない。パクパは当時サキャパンディタの没した地リンチュツェに残っていたので、チベットには戻っていない。第1部第4章第2節参照。

14) DN, Nya, 37b2. : Go pe las kyang zhabs la gtugs / Bod yul la sogs gar bde bar chos spyod cing / nged la smon lam bzang po thob zer nas 'ja sa bzang po bsgrags.「ゴペラ（＝フビライ）もまた〔カルマパクシを〕敬礼し、チベットなどあらゆるところでよく仏法を行じ、我に正しき祈願をなさしめよ、といって真実の詔勅を交付した。」

15) DN, Nya. 37b2-4. 註14の引用に続いて、「成都 (Cang to mkhar) からツルプ ('Tshur phu) にいらっしゃる道中に8年が過ぎた。ツルプにいらっしゃってから大仏 (Lha

chen）を初めとする仏像をたくさんお建てになった　・・・・・　80才になった1283年３月に涅槃なさった」とある。サキャパンディタやカルマ派の僧を招聘して以来、蘭州（Lang jo）地方にはたくさん仏寺が建った。『パクサムジョンサン』には「中国・チベットの境にある蘭州城の中にはカマラシーラの仏塔と言われるもの、城外の東にはサキャパンディタの舎利塔など沢山の仏塔のある幻化寺云々」（PSJZ，Ⅲ，pp. 172.22-173.2）とある。

16）この称号については第１部第４章第４節参照。

17）この地名は『一切宗義』ではリシム（Li shim）とある。これについても第１部第４章第４節参照。後に３チョルカを与えたとあるのだから、ここでは13ティコルを与えたとあるべきところである。

18）パクパがチベットへ帰ったのは、1264年、またモンゴルに戻ってきたのは1267年、モンゴル文字創設は1269年のことである。第１部第４章第２節および第４節参照。

19）いわゆるパスパ文字である。これはさきのサキャパンディタの場合とは異なり、殆どの伝記に言及され、また漢文資料によっても裏付けられる。ポッペによれば全く新たな創作というよりは、チベット文字を借りてモンゴル語を転写したといったほうがいいという。14世紀に入ってからの碑文も多数残されているが、実際には印璽に用いられたのみで一般には普及せず、以前からあった文字に戻ってしまった。Poppe（1957），Nakano（1971），中野（1971）参照。

20）チューキウーセルに関しては第１部第４章第３節参照。

21）gZungs gra lnga とは、５つのダラニの総称である。P. Nos.177-181 = Bu ston Nos. 1213-1217（西岡，1983，p. 60）。サンスクリット原典などについては、松長（1969）p. 48 およびその注参照。

22）この旧ナルタン大蔵経成立の事情に関しては羽田野（1966）に詳しい（特に pp. 67-83;　ここのナルタン=リクレルとジャムヤンの故事は pp. 68-69）。ここでは最も古い文献の一つ、『青冊史』によってナルタン=リクレル、ジャムヤン、ウパロセルの活動を紹介しておきたい。「チョンデンリクパイレルディ bCom ldan Rig pa'i ral gri はナルタン寺の大学匠としてチベットの持蔵者の３分の２を集めるほどの名声を博した。その弟子の中に大学者ジャムペーヤン mKhas pa chen po 'Jam pa'i dbyangs がいた。かれは仮面で悪魔の真似をして師匠（リクレル）に不興を与えたので、ひどく叱責された。師のもとに留まることができず、サキャに趣き、そこでモンゴルから招かれ、ブヤントゥ王（Bhu yan du rgyal po）の帰依処となった。モンゴルで『プラマーナ=ヴァールティカ』の複註および略註を著述し、モンゴル王の使いに託してリクレルのもとに何度も差し上げたが、



師を喜ばすことはできなかった。最後に小箱いっぱいの墨を差し上げたので師はお喜びになった。リクレルは16函程の論書を著述した。大学者ウパロセル mKhas pa chen po dBus pa blo gsal は、リクレルとジャムヤン二人の弟子であった。リクレルは経典の巻数と翻訳後記（'gyur byang）などを確定し、論典についてもまた区分し各部にまとめ、bsTan bcos bstan pa rgyas pa という〔目録〕を著した。その後ジャムヤンは大量の調度品を〔モンゴルから〕送り、ウパロセルらに「経典・論書の翻訳したものの集成を建立しナルタン大学問寺に安置せよ」と返書を送った。その通りにウパロセル、翻訳家ソナム・ウーセル（Lo tsa ba bSod nams 'od zer）、ギャンロ・チャンチュプブム（rGyang ro Byang chub 'bum）の３人が大変な努力をもってカンギュル、テンギュルの原本を集めてよく〔大蔵経を〕建立し、ジャムハカン（'Jam lha khang）という経堂（gtsug lag khan）に安置した。この〔大蔵経〕から他の地方にもたくさん〔大蔵経が〕広まっていった」（DNG，Cha，5b4-6a3；羽田野，1966，pp. 69-70）。

23）カルマ=ランチュンドルジェはカーギュ派の一派カルマ黒帽派（Karma zhva nag pa）の第３代活仏でさきに出たカルマパクシの転生者とされた。18世紀にシトゥ=チューキジュンネー（Si tu Chos kyi 'byung gnas，1699 or 1700-1774）によって著されたカルマ派の伝記集によれば、1329年に登位したモンゴル皇帝 Thog the mur 'ja' yan du rgyal po からモンゴルへの招聘状が1331年にウ（dBus）に届けられ（KKNT，107a6-7；以下同書からの引用はフォーリオ数、行数のみ指示）、一度はモンゴルに向けて出発するが、途中王の余命が短いことを予言しツルプ（mTshur phu）に戻ってしまう（108a3-4）。その後ふたたび1332年２月ツルプを発つが（108a6）、モンゴルへ向かう途中、８月王が亡くなったことを知る（108b5）。10月王宮に着く（108b6-7）。Rin chen dpal が登位するが１ヵ月で亡くなってしまう（109a2）。Tho gan thi mur（Toran temur）が次の王に選ばれ大中国から1333年１月大都に到着して登位する（109a3-4）。ランチュンドルジェは、この Tho gan thi mur，El the mur 大師などに灌頂を授ける（109a5）。1334年王に帰国の許可を求めるが、王は２年後に戻ってくることを約して認める（109b4-5）。その後何度かモンゴル招聘の手紙と使者が来たので、1336年８月ツルプを出発し（111b6）、1337年３月王宮に到着する（112a5-6）。1339年６月モンゴルにて没する（114b3）。トゥカンの記述ではランチュンドルジェが灌頂を与えたのがチヤート王（Ci ya thu rgyal po）ではなかったかとされるが、チヤート王とは上のシトゥの伝記に出てくるトクティムル=ジヤントゥ王（'Ja' yan du rgyal po）のことであろう。もしそうであるなら、ランチュンドルジェはその王には逢ってはいない。かれが灌頂を与えたのは実質的にはその次の王トガンティムルであった。シトゥの伝記集には上に出てきたいくつかの招聘状およびそれに準ずる書簡が採録されているが、D. Schuh はそのテキストと訳、および伝記の概要を研究している。Schuh（1977）pp.128-142 参照。

24）ルルペードルジェはカルマ黒帽派第４代の活仏である。かれについてもシトゥの伝記集によれば元の最後の王となるトガンティムルからモンゴルへの招聘上が1357年送られてきて（176a3）、1358年５月ツルプを出発（176b3）、1360年12月大都に到着し、王に灌頂を

与える（170a1）。1362年に大都を出発しチベットに帰る（181b1）。Schuh（1977）pp.142-147 参照。

25）元の皇帝についての報告で、ある意味で最も古いのはチベット語資料だとも言える。しかし、それは著者たちの聞きがきによっていて、しばしば誤りが多い。一方、モンゴル語の資料は、成立が後代であって、混乱が見られる。さらに後代のチベット語史書、例えば『パクサム・ジョンサン』などは、チベット語資料のみならず、漢文資料、モンゴル語資料をも参照して書かれている。その異同については、Appendix にそれらの代表的な資料の対応表を載せておいた。

26）元朝の帝師については、TPS, pp. 15-16; ibid. pp. 252-253, n. 42-54; 稲葉（1965）pp. 80-155 を参照。

27）オンゴトは、モンゴルの土着宗教で祭られれていた偶像である。W. Heissig（1969）pp. 1-23, Dalai（1959）pp. 32-33 参照。

28）ダライラマ３世の事績については、史料として『アルタン・ハーン伝』（19r17-25v18）、『ダライラマ３世伝』、『エルデニ・イン・トプチ』（pp. 240.2-279.7）等があり、また研究としては佐藤（1983）、Petech（1956）p. 371 参照。３世は再びチベットの土を踏むことはなかった。その没地は『ダライラマ３世伝』には記されていないが、最近刊行された『アルタン・ハーン伝』には次のような記事がある。「1588年ハラチンのジガスタイ（jirasutai）と言う名の地で聖ダライラマは無常の相を御示しになった。全ての人々は仏舎利の塔を建てて、御遺体は大昭寺の釈迦牟尼の北に安置した」（AQ, 25v11-18）。ジガスタイとは、清代のアルタイ軍台の駅名で、張家口より５つめに位置する。

29）ユンテン・ギャムツォの出自については、和田（1935）p. 703参照。その生涯は、チベットに行く前後に二分される。事績についての主な史料は『ダライラマ４世伝』であるが、モンゴルにいるころのことは、モンゴル年代記『アルタン・ハーン伝』（AQ, 45v18-52r6）、『エルデニ・イン・トプチ』（pp. 279-8; p. 280.4; pp. 282.5-284.1）や『北虜風俗』「崇佛」の条などにも断片的記述が見出される。４世のダライラマとしての認定問題はディグン派も絡んだ複雑なものであったらしく、14歳になるまで剃髪もせずにモンゴルにいたことなど問題にすべき点は多い。チベットに至ってからの４世の生活は、側近のチャンゾー・グシ（Phyag mdzod gu shri）やラプジャムパ・ソーナム・タクパ（Rab 'byams pa bSod nams grags pa）など争いを好むもの達の中にあって、苦労の多いものであった。かれがラサのチョカンに参拝した際語ったという言葉、「再びこの輪廻に於て何度も生を受けるのであれば、この国（チベット）にだけは生まれない」（D4N, 45a4-5）これが全てを語っていよう。４世の宥和主義は、例えば『ダライラマ４世伝』にある次のような記述に現れている。「今日辺境軍がチベットに大禍をもたらさんとしているので、〔私が〕しばらくの間抑えているのだ。今も私の健康の良い限りは、モンゴルはチベットに害を与えることはない」（D4N, 45a3）。また、４世は自分の出身部であるトメトの軍も勝手には振る舞わさず、ホロチェの２人の息子〔グル・フンタイジとラツン〕とツァンの軍の２軍とが不穏な情勢になったときも、特使を派遣して努めて平和裡に収めようとした（D4N, 47a6; 50a1）。４世の死は早く、1616年12月15日28才の若さで亡くなる（D4N, 50b2-3）。



30）この段落は、蒙文経典翻訳の歴史についての概観である。この段落の元となった史料『パクサムジョサン』には「その後シレート・グシが３般若経（rgyas 'bring bsdus）を翻訳し、チャカルのレンタン・フトクト（リクデン・ハーン）の時にクンガー・オーセル（Kun dga' 'od zer）を始めとするたくさんの翻訳家によってカンギュールを全てモンゴル語に翻訳しまた、後に満州の聖祖康熙帝の時代にチベット語のカンギュール、テンギュールとモンゴル語のカンギュールを校訂して開版した。康熙帝の孫乾隆帝の時代にインドの賢者の論書のチベット語に翻訳していたものをチャンキャ・フトクト（lCang skya sprul sku）とガンデン座主の化身（dGa' ldan gser khri pa'i sprul sku）の御二方を始めとするたくさんの賢者と翻訳家等が、モンゴル語に翻訳した」とある（PSJZ, Ⅲ, p. 172 = 314a6-314b1）。17世紀の初頭、恐らく元朝崩壊後始めて蒙文大蔵経翻訳を行ったといわれる、フフホタ（歸化城）のシレートグシについての研究は、近年内蒙古より、17世紀初頭に成立したモンゴル年代記『アルタン・ハーン伝』が出版されたことにより、飛躍的に進んできた。『アルタン・ハーン伝』によると、「ナムタイ・セチェン・ホンタイジ（Namutai secen qong tayiji）、ジュンギン・ハトン（Jönggin qatun）、オムボ・ホンタイジ（Ombo? qong tayiji）は３人で、殊勝なる聖主（アルタン・ハーン）の政を仏教の教えに沿って行わしめ、その時にシレート・グーシ・ツォルジ（sirege tü güsi corji）、アユシ・アーナンダ・マンジュシリー・グーシ（Ayusi ananda manjusiri güsi）を始めとする殊勝なる３万人の翻訳家達によって、仏師の説いた108巻カンギュールを、壬寅年（1602）から丁未年（1603）にかけて、全ての経をモンゴル語に完全に翻訳して、殊勝なる適当な本となした」という（AQ, 52r7-19；森川, 1985）。ここに見えるアユシ・アーナンダ・マンジュシリー・グーシは、同じ『アルタン・ハーン伝』（AQ, 30r21-30v2）に、ダライラマ３世とアルタン・ハーンが互いに称号を授けあった際、仏典翻訳のためにバヤン・バクシ（Bayan barsi）に「バクシ・アーナンダ・マンジュシリー・グーシ」という称号を授けて、バクシ（師）達の中心人物となした、という記述があるので、シレート・グーシより早くから蒙文大蔵経の翻訳に深く関わっていたのであろう。モンゴル大蔵経一般については Heissig（1962）、金岡（1957）、シレート・グーシに関しては、György Kara（1983）、Coyiji（1985）参照。

31）チャンキャ２世ルルペードルジェに関しては第１部第２章参照。伝記の研究はドイツの Kaempfe（1976）がおこなっている。チャンキャの訳経事業のうち蒙文大蔵経については、チャンキャが 1641年に編集した『正字通達の源』の序文（DKB, Ch. 1, 10a5-10b3）、Ngag dbang thub bstan dbang phyug による『チャンキャ２世伝』Nyi ma'i 'od zer（CNT1, 45a4-46a4）、Blo bzang chos kyi nyi ma による『チャンキャ２世伝』（CNT2, 112a1-122b4）を参照。'Jigs med rig pa'i rdo rje の『蒙古仏教史』（JHCB, pp. 261-271）, Dharmatala の『モンゴル仏教史』（DHCB, pp.224-226）等の後世の大蔵経翻訳の記

事は、『正字通達の源』に負うところが大きい。次注参照。満州大蔵経の翻訳については、トゥカンによるチャンキャの伝記（CNT2，292a6-304a1）及び『嘯亭續録』巻一「清字經館」参照。

32）『正字通達の源』のコロフォン（DKB，Ch．11，14b2-16a3）によると、この著作は乾隆帝の命によってチャンキャがダライラマ７世ロプサンテンペーニマの協力のもと、1741年にチベット語で著し、同年10月から翌1742年11月にかけて27人の学者がモンゴル語の訳語を検討・決定し、チベット=モンゴル対訳の決定訳語集としたものである。

33）アスタハーンとはハルハ部トシェート・ハン家のアバタイ・サイン・ハーン（Abatai sayin qaran）を指す。アバタイハンについては第１部第５章第１節参照。

34）第１部第５章第３節参照。ジェブツン・ダンパの建てた寺は『パクサム・ジョンサン』によると「ハルハ地方にはターラナータの化身と言われるジェブツン・ダムパという方（化身）がいて、前代ジェブツン・ダンパのロサン・テンペー・ゲーツエンが御建てになった古寺（dgon rnying）と現ジェブツン・ダンパであるロサン・テンペー・トンメ（Blo bzang bstan pa'i sgron me ）が司った新寺（gsar dgon）は〔その名を〕ガンデン・シェードゥプ・タルゲーリン（dGa' ldan bshad sgrub dar rgyas gling)〔といい、〕移動寺（gur dgon）であり、そこでは現在に至るまで五明（rig gnas）のよい教授がなされている」（PSJZ，Ⅲ，p．175 = 315b1-2）とある。『パクサム・ジョンサン』の成立した1748年の頃ですら、ハルハの寺にはまだ固定家屋でないゲル形式の物があったことが分る。ジェブツン・ダンパの著作の目録は ETPM，pp．5-9 参照。

35）ザヤ・パンディタについては、第１部第５章第３節参照。

36）エルデニ・パンディタの伝記についてはザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』（JSM，Nya，147a6-164a2）参照。また、簡単な略伝はPürevjav（1978）pp．48-49 にある。また同書 pp.64-65，n.109 参照。タムツィク・ドルジェは ETPM，p.45に見える Grub pa'i dbang phyug brag ri dam tshig rdo rje（1781-1885）を指すと思われるが、同書の全集の目録には該当しそうなものは入っていない。Na 帙の rJe btsun blo bzang tshe dbang skyabs mchog dpal bzang po'i rnam thar というのがこれに当るのかもしれない（ETPM，p.49）。エルデニ・パンディタの著作の目録は略伝とともに ETPM，(pp.10-12) にある。『パクサム・ジョンサン』では「パンチェン・エルデニ・パンディタ・ノミンハンのゲールク派の寺（gtsang dgon)」（PSJZ，Ⅲ，p.175 = 315b2-3）というようにエルデニ・パンディタの建てた寺を僅かに記しているのみである。しかしザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』によると多少詳しい情報が得られる。同書によると、エルデニ・パンディタは1643年にジェブツンダンパの家庭教師としてモンゴルに来ていたニェルワ・チョージェー・ナムカー・ソナム・タクパ（gNyal ba chos rje Nam mkha' bsod nams grags pa）より、密名チョーキ・ドルジェ（chos kyi rdo rje）という名を授かり（JSM，148b6-149a



2)、７才になった 1645年には同じラマより、優婆塞戒と出家の戒をとっている。ロサン・テンジン・ゲンツェン（Blo bzang bstan 'dzin rgyal mtshan）という名もその際授けられたものである（JSM，149a6-149b1)。17才の 1655年から 1662年まではチベットのタシルンポに留学し、その間 1658年にパンチェンラマのもとで具足戒を受けている（JSM，152a4-6)。

37）ジャムヤン・シェーペー・ドルジェ２世ジクメワンポによるジャムヤン・シェーペー・ドルジェ１世の伝記に、1702年ジャムヤン・シェーペー・ドルジェとトルグートのトンドゥプ・ギャムツォが、法論を交わした記事がある（J1N，173.2)。

38）トルグートがジュンガル部に圧迫されて、ロシアの支配に入るのは明の崇禎元年（1628）のことであり（Zlatkin，1983，p.96)、ロシアの支配下より脱するのは乾隆三十六年（1771）のことである。『準噶爾的歴史与文物』(pp.129-145）及び、『嘯亭雑録』(巻一「土爾扈特來降」)、『西陲要略』(巻四「土爾扈特源流」)、『朔方備乗』(巻三十八「土爾扈特歸附始末」）に簡単なトルグート来降の経緯が述べられている。

この段落よりオイラートの記述となる。オイラートに関する史料はオイラート文字による年代記は勿論のこと（文献目録のモンゴル史料の番号 7，8，9 参照)、漢文史料も豊富にの残されている。しかし、交易のために、或いは戦争による捕虜として、また使者としてオイラートに出向いたロシア人達の残した記録の方が、当事者達の記録より、客観的な情報を伝えていることが多い。

『朔方備乗』に「土爾扈特習蒙古俗、務畜牧逐水草徙、而俄羅斯城郭居風俗既異、土爾扈特重佛教達賴喇嘛、而俄羅斯尚天主教不事佛、以故土爾扈特雖受役屬而心不従恒歸向中国」（三十八巻、二丁裏－三丁表）とあるように、トルグート来降という歴史的事件の背景に宗教問題が重要な要素としてあったことは間違い無い。Zlatkin（1983）所引のロシアの古文書によると、ダライラマがトルグートに対しジュンガルに臣属せよとの使いを送っていたという。「先年ダライラマのもとよりシュクルラマが到着した後、ダライラマの命令に基づいてアユカハン（トルグートのハーン、漢名阿玉奇、1672-1724 在位）に対して言うには、『彼ら全てのカルムク人（トルグート人）は、ロシアの支配下より出て、法を同じくするハーン（ジュンガルのハーン）のもとへ牧地を移すように。ハーン アユカとその妻ダルマパーラとシュクルラマとエムチゲレン（原註：ダライラマが与える高い聖職の位）は、ホンタイシャ（ツェワン・アラプタン）とともに遊牧し、彼らと共に牧地を移し、ダライラマの使者を送るように。ホンタイシャも、ダライラマの命令を蔑ろにせず、彼等（トルグート人）を破滅させないように』」（Zlatkin，1983，p.221)。トルグート来降の影にはダライラマの意思が動いていたことを示している。

39）オイラート４部がいずれの部族名を指すかは、諸説に分かれる。羽田 明（1955)、同（1971)、同（1982）pp.169-181、岡田（1974）参照。『エルデニ・イン・トプチ』によれば、４オイラトはエルート Egeled，バートゥド Baratud，ケルグート Kergüd，ホイト Qoyid の４つであり、このエルートがホショトであるか、ジュンガル（チョロス）であるかが論

争点となっている。『欽定外藩蒙古回部王侯表伝』によれば４オイラトは、綽羅斯 coros，都爾伯特 tu-erh-pe-te，和碩特 hoshihte，土爾扈特 turʒut とあり、後、土爾扈特は、輝特 huite となるという。トゥカンの認識していた４オイラトは、恐らくこの『欽定外藩蒙古回部王侯表伝』の４オイラトに近いものであったであろう。

40) ジュンガル一般については、Zlatkin (1983) 参照。ガルダンに関しては、羽田 明 (1958)、同 (1962)、岡田 (1980) がある。Zlatkin (1983) の説に基づく若松寛氏のジュンガル汗国に関する研究を若手の研究者が批判するという形で近年学会の論争点となっているのは、ジュンガル汗国が汗国といえる存在になったのは何時の時点であるかという問題である。それらの論争も含めてジュンガル汗国の初期の政治史は、若松 (1970)、宮脇 (1984)，(1981) 参照。ここの簡略なトゥカンの記述の間を補う意味で、ガルダン登場までのジュンガルの情勢を概観しておこう。17世紀前半、ホショト部のバイバガス・ハーン (Bayibaʒas, -1640) が４オイラトの宗主であったが、チョロス部長カラクラ (Xara qula, -1634) が勢力を強めてきて、その座を脅かし始めていた。そのカラクラの子バートゥル・ホンタイジが死ぬと、彼の子供のひとりセンゲとその兄弟の間に、８年にわたる内乱が起こった。一方ホショト部では、オチル・チェチェン・ハーン所謂オチルト・タイジとその兄弟アブライ (Abalai) とが争っていた。そのチョロス部のセンゲとホショト部のオチルトが結び付き、他の兄弟と対立するに至り、17世紀中頃にはオイラトを２分する争いに発展した。その結果勝利したのが、センゲとオチルトであったが、そのセンゲもまた1670年末、兄に殺されてしまう。その時チベットのパンチェン・リンポチェのもとに留学していた、センゲの弟ガルダンは、兄の死を聞くと還俗してボショクトの称号をもらってモンゴルに帰り、兄の仇をうった。そのころジュンガルはオチルトが首領となって統べていたが、ガルダンはそれを滅ぼしてオイラトを統一するハーン（ガルダン・ボショクト・ハーン）となった (PSJZ, Ⅲ, p. 157 = 307b7-308a3)。

41) 1696年ガルダン・ボショクト・ハーンが清朝に敗れてジョーン・モド (昭莫多) に没した後、ジュンガルに覇を唱えたのはセンゲの子ツェワン・アラプタン (Tsewang Arabtan) であった。彼は「土虎年 (1698) 王座に就かれて、昔、ガルダン・ボショクト・ハーンが支配していた３つの寺のうちシャプテン・ダツアンの名前を変えてドルワ・ダツァン ('dul ba grwa tshang) とした。それからラマ御前様の似姿をホトンの地に勧請して出家者、戒律を正された。29年王座にあって、火牛年 (1726) に死んだ」 (PSJZ, Ⅲ, p. 158)。

42) 「火羊年 (1727) から、彼（ツェワンアラプタン）の息子ガルダン・ツェリン・ワンポが王国を支配した。〔ガルダンの建てた〕昔の３つの寺に加えて新たにトーサム・リン (thos bsam gling, 聞思堂) と密教堂を建立して、その３所で顕教の教授の伝統を打ち建てた」(PSJZ, Ⅲ, pp.158-159 = 309a6-309b1)。

43) ジュンガル汗国末期の政治史は、若松 (1968) 参照。ガルダン・ツェリンの死後、ジュンガル帝国は内攻によって急速に崩壊に向かう。1750年その庶兄ラマ・ダルジャは、ガルダン・ツェリンの子としてハーンを継いだツェワン・ドルジ・ナムジャルを幽閉し、ジュンガルの統治権を奪った。しかし、大ツェリン・ドンドゥプの孫、ダワチ (Davaci) と輝特部台吉アムルサナ (Amurusana) とは、1752年イリでそのラマ・ダルジャを襲殺し、ダワチがハンとなった。しかしそのダワチの即位に異を唱える小ツェリン・ドントゥプの孫、ナムク・ジルガルが反乱を起こし、ジュンガル汗国は急速に崩壊して行く。清朝はこの機を逃さずジュンガル討伐に本腰をあげ、1755年２月には定辺左副将軍アムルサナ（ダワチと不和になったことで清朝に亡命していた）を北路より、定辺右副将軍薩喇勒を西路より進軍させ、５月にはイリを平定した。ダワチは敗走の後捕らえられて北京に護送され、ジュンガル帝国は実質上の終わりを告げた。アムルサナについては森川 (1979)、当時のカザフスタンの有力者アブライについては、同 (1980) 参照。

44)『ダライラマ５世の年代記』にはグシ・ハーンの出自を以下のように記している (D5Z, 107b6-108a1)。「ホショトの首領ハナイ (Ha na'i) に妃アハイ・ハトン (A ha'i ha thun) を娶って５人息子が生まれた。３人目がこの王（グシ・ハーン）である。壬午年 (1582) に御生まれになった。御名をトロパイフ (Tho rol pa'i hu) と御付けした。」 グシ・ハーンのチベットに至る以前の研究は、若松 (1976) チベット時代についての研究は、山口 (1963) を参照。

45) 埋蔵教典テルトン・ディメー・ワンポの内容は『ダライラマ５世伝』 (D5N, Ca, 85a5) と『ダライラマ５世年代記』 (D5Z, 107b3-4) によると、「後にも辺境の軍隊が７回至った後に、バジラ・パーニ（金剛手）の化身たる王が、チベットを一時平安にするであろう」と言うものである。グシ・ハーンは金剛手が化身したハーンであるとされたのである。

46) 『ダライラマ５世年代記』によれば、この年は「丙午年 (1606) 御年25才になられた時」であるという (D5Z, 108a4)。

47) このハルハとオイラトの争いについて『パクサム・ジョンサン』の年表の1606年の項に次のように記されている。「ガンデン座主とトンコル御前ジェブツン・ダンパといわれる御二方が座席を同高にされたことによって、オイラートとハルハの間で戦争が起きたが、グシ・ハンが仲裁なさり、〔その功績でグシ・ハンは〕グシ（国師）の位を得た」(PSJZ, 382b 上段右から10番目；山口, 1963, p. 748；若松, 1976, pp.325-326)。これによれば、1606年のハルハとオイラトの争いは、ガンデン寺の座主とトンコル寺の活仏が席を同高にしたことを原因に起ったことになる。ところが、『パクサム・ジョンサン』の記述に見えるこの事件と全く同工異曲なものが、80年後の 1686年に起きているのである。この事件の梗概をザヤパンディタの『聴聞を明らかにする鏡』(JSM, Nga, 68a1-69b2) と『欽定外藩蒙古回部王公表傳』巻四十五「土謝圖汗部總傳」により要約して示すと以下のようである。

康熙二十五年 (1686) 世にいうクレンベルチル盟の席上で、ハルハ左翼の盟主にしてターラナータの化身であるジェブツン・ダンパ=ロサン・テンペー・ギェーツェン (rJe btsun

dam pa Blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan ) とダライラマ５世の代理人として会盟に出席していたガンデン座主ガワン・ロトゥ・ギャムツォ (Ngag dbang blo gros rgya mtsho) が席を同高にして語り合った。オイラートのガルダン・ボショクト・ハーンは、それがダライラマを侮辱した態度として憤激し、兵をハルハに進めた。戦争の結果はハルハの惨敗に終わり、ハルハの王侯衆庶は保護を求めて康熙帝のもとに下った。

1686年のこの出来事は、ハルハの清朝服属の端緒を開くことになった事件である。1606年と1686年という時代の違いと、ジェブツン・ダンパと呼ばれているのが、前者はトンコル御前であり、後者はトシェート・ハンの弟にしてハルハ左翼の精神的首長であったロサン・テンジン・ゲーツェン・ペーサンポであるという違いはあるが、この２つの事件の記述はほぼ同じ内容を示している。実際には1606年にスムパ・ケンポがいうようなガンデン座主とトンコル化身が争ったという事実は他のどの資料からも確認されない。おそらくこの『パクサム・ジョンサン』の話は80年後の記事との混乱をしているのであろう。

48) 既出のリクデン・フトクトである。彼はチンギス・ハーン直系の最後のハーンであり、モンゴルの年代記『エルデニ・イン・トプチ』には「リクデン・バートル・タイジは壬辰年 (1592) に生まれ、13才の甲辰年 (1604) にハーン位に就いて、フトクト・ハーンと諸方に有名になった。マイダリ・ノモン・ハーン (Maidari nom un qaγan), チョーネー・チュージェ (Joni corji) を始めとするものから〔(a,e,i 写本) 深甚の秘密乗の灌頂を受け〕、仏法を支持し、26才丁巳年 (1617) にサキャ・パンチェン・シェーラプ・フトクト (Sakyai badunejen sarba quturtu) と会って深甚の秘密乗の諸灌頂を受け、ワチル・トゥ・チャガン・ホタと言う大宮殿を建て、その中にジョー・シャカムニを始めとする寺廟を沢山建立し、〔それを〕一夏の間に迅速に完成させ、内の仏像などの信仰の対象物 (sitügen / rten) を全て仕上げ、祖先の政教二規を平かにあらしめた。しかし500年末法の時代であったので、６大国に〔別れて〕散居していたダヤン・ハーンの子孫でハーンの血統の者達、また、その属民達は、大ウルスで道理より離れた振る舞いが多くなってきたので、平和な政治によって支配することができなかった。例えば、昔の古い諺に『ハーンが怒ればその政破れ、大象怒れば町壊る』というように、ハーンの聖心に瞋恚の念が生じたことにより、６大国は大清国によって支配された。31才の時にハーン位に就いて43才の甲戌年 (1634) に天命が尽きて死んだ。この方がダヤン・ハーンの１番目の子トロボラト (torobolad) から分かれたハーンの政統である」(BT, p.221.2-222.7)。また、『恒河の水源』というモンゴル年代記には「聖チンギス・ハンからリクデン・フトクト・ハンに至るまで 35代のハンが〔順次即位した〕。チンギス・ハンの即位の初年である火馬の年 (1206) からリクデン・フトクト・ハンの死去の年である木豚の年 (1634) に至るまで409 (429) 年が経過した」と正統なハン位継承者の最後を締め括っている。リクデンの死後、その妻子ソダイ (Sudai) 太后とエジェイ・ホンゴル (Ejei qongγol) は 1636年、傳国の玉璽とともに清朝に降る。リクデン・ハンについての研究は、萩原 (1980) pp.295-400 参照。

49) モンゴルとはここでは後の内モンゴル49旗をさす。この６盟は時代的には、順義王の６大部落に当るかとも思われるが、トゥカンの意識がそこまで歴史的であったとは、思えない。むしろ後になって成立する内蒙古６盟を考えていたであろう。６盟とはジェリム盟 (哲里木盟, Jirim)、ジョスト盟 (卓索圖盟, Josotu)、ジョーオダ (昭烏達盟, Zuu uda)、シリンゴル (錫林郭勒盟, Sili yin γoul)、ウラン・チャブ盟 (烏蘭察布盟, Ulaγan cab)、イヘ・ジョー (伊克昭盟, Yeke juu) である。



50) チョクト・ホンタイジ、およびその子アルスランついては第１部第５章第２節参照。チョクト・ホンタイジの残した碑文の研究は岡田 (1968) 参照。

51) グシハンがチョクトの軍を滅ぼした事件は『ダライラマ５世伝』によると「オイラートからやってきたグシ・ハーンは、我欲を貪らず教法のみのために戦われ、バートル・ホンタイジも援軍を起こされた。オイラートの１万を超す軍が牛年 (1637) の１月のうちに至って、チョクト首領の３万に近い軍を一時に討ち滅ぼした」と描写されているが (傍線筆者 D5N, Ca, 84a6)、同じくダライラマ５世によって書かれた『ダライラマ５世年代記』には「チョクトの軍４万などを名が残るのみとした」(D5Z, 109a1) と、チョクト軍を叙述するに際しての数の相違が見られる。『ダライラマ５世年代記』の記述の中には、註58で指摘するように、明らかに後世の加筆と思われる部分がある。この３万と４万の混乱も、そのようなものと考えるべきか、それとも『ダライラマ５世伝』が後世に書かれたゆえに生じた混乱と解釈すべきであろうか。

52) グシ・ハーンが中央チベットに至った記述は『ダライラマ５世伝』に「グシ首領とチョネ・チュージェ (Co ne chos rje) とサキョン・トクグー・ナムゲル (Sa skyong thog rgod rnam rgyal) 伯父甥を始めとする千人をこえるキャラバンがダムに着いた」と記されている (D5N, Ca, 84b3)。チベットに着いてからは、ジョー (ラサのトゥルナンの大招寺) の如意珠釈迦の御前でテンジン・チューキ・ゲーポ (bsTan 'dzin chos kyi rgyal po) というチベット語の称号をモンゴル流に呼んだものと、印 (tham ka) とをダライラマより賜わり、また、グシ・ハンの息子と貴族等に対しても位が与えられた。逆にグシ・ハンの方からは、チベットの実力者ソナム・ラプテン等に対しダライ・チャンゾー (Da la'i phyag mdzod) などの位を授けている (D5N, Ca, 85a6-85b1)。

53) グシ・ハンがガンデン・ナムパル・ゲルワ・リン (dga' ldan rnam par rgyal ba gling) に行った際の奇跡の話は、『ダライラマ５世年代記』にしか見えず、『ダライラマ５世伝』にはない。

54) 『ザムリン・ゲェーシェー』によるとペリの位置は、デルゲ (sDe dge) から東に行ったホルコク (Hor khog) という地域にある。ホルコクにはカンサル (Khang gsar) とマシ (Ma gzhi) とタクゴ (Brag mgo) とピリ (Pi ri) とトレオ (Tre'o) という５首領 (dpon khag lnga) がいる (GTD, p.43, 英訳 p.104)。このピリは、漢字では必里と転写し(ibid, p.188, n.680)、付録の地図によると位置はニャクチュ (Nyag chu) の北にある。『ダライラマ５世伝』によればグシ・ハーンがペリに兵を引いた記事は1640年の４月以降

のところに寅年（1638）のこととして記載されており（D5N, Ca, 96a4)、ベリ王を捕獲し６県を支配にいれたという情報は、1641年の1月カーチュ・ゲニェン・トンドゥプ（dKa'bcu dge brnyen don grub）とグシ・ハンの大妃の慶賀とともにセチェン・ウパシ（Se chen o pa shi）が携えてきたという（ibid, 99a4)。

55）『ザムリン・ゲェーシェー』にはジャン（'Jang）は、チベットに接する８つの国の１つとして、また、位置は中国と雲南の中間、ミリ（Mi li、木里）の南にあるとしている（GTD, p.3, p.55, p.119; p.39, p.99, p.179)。

56）ツァン王はこのときシンシャク氏の最後の王カルマ・テンキョン・ワンポであった。

57）同様の記述はトゥカンが基づいた史料、ジクメワンポのチョーネー版目録と『パクサム・ジョンサン』(PSJZ, Ⅱ, p.165 = 207a7）にもみられる。ところが、インドの王の朝貢に関しては『ダライラマ５世伝』の 1656年6月の条に「インドの大部分に権力を振るった、シャキャ・ラージャ（Sha kya ra dza）の中の息子にしてバンガラの君主なるシャハスジャ・マハーマドゥシャ（Sha ha su jas ma ha madhsha）が使者を派遣して、インドとトーソ（sTod zo）の産物を沢山献じた」(D5N, Ca, 250a1）と、かなり後になってからの朝貢の記述しかなく、また王の名も合致しない。『ダライラマ５世年代記』の成立は1643年１月であるから、この話が後世の加筆であるか、『ダライラマ五世伝』が記述もれをしているかの２つの可能性が考えられる。やはり後世の加筆であるとみるべきであろうか。

58）ネパール王の朝貢に関しても、『ダライラマ５世伝』には 1672年１月、「ネパール、ヤムブ（yam bu, カトマンドゥ）の王等、様々な服装、様々な言語の大群が広く満ちた」(D5N, Cha, 127a1）とあるのみで、1642年前後には該当の記事はない。

59）ジクメ・ワンポによるグシ・ハーンの諸子は以下のようである。
大妃アハイ（A ha'i）の子は、ダヤン・ハーン（Ta yan han)、セチェン・チュンタイジ（Se chen chung tha'i ji)、バヤン・アブゲ（Ba yan a bag ge)、ダレンタイ（Ta lan tha'i）の４人で、中妃の子は、ツェリン・イルドチ（Tshe ring yil du chi)、ダライ・ホンタイジ（Ta la'i hung tha'i ji)、エルデニ・ダイチン（Er te ne ta'i ching)、ゴンポ・ツェワン（mGon po tshe dbang)、サンガルジャ（Sang gar ca)の５人で、小妃エンケ（Eng khe）の子は、アクタシ・バートル（A khu bkra his baa thur）であり、〔全部で〕10人である（CTK, 185b2-4)。『皇朝藩部要略』など中国史料によるによるグシ・ハーンの家系図は山口（1963）pp763-764佐藤（1973）p.82 参照。

60）いわゆるロプサン・ダンジンの乱。第１部第２章参照。

61）バルデーはバルガ（漢名巴爾虎）のことを指すと思われる。この部族は興安嶺以西の旧黒龍江省周辺に居していた。バルガは旧バルガと新バルガに分かれ、旧バルガはソロン



（漢名索倫）とチプチン（『パクサム・ジョンサン』の Chim cha, PSJZ, Ⅲ, p. 165 = 311a5）より成り立つ。『呼倫貝爾志略』には陳（旧）巴爾虎の項目に「一作巴爾呼、外蒙喀爾喀之属部也。以戍邊闌入俄境。清康熙時征俄、遂自俄境來歸、編入八旗、附打牲部之後、先後駐防黒龍江齊齊哈爾各城。此族人昔在木蘭圍場游牧、後遷至興安嶺北迄東一帯。雍正十年由布特哈遷駐呼倫、兵數為二百七十五名、編制索倫八旗以内。冬日沿海拉爾河上游夏則沿海拉爾下游、逐水草而居。此族人性情與索倫相近而言語稍異、俗不敬喇嘛、子弟多在呼倫城習漢文者」（傍線筆者、p.194）とあり、新バルガの項目には「外蒙之喀爾喀部也。昔在外興安嶺北麓游牧。清嘉慶間漸向南徙遂成部落。因其言語與陳巴爾虎相通故、名巴爾虎。新編入旗故曰新巴爾虎。遷駐呼倫者、在雍正十二年、由外蒙車臣汗移來、官兵二千四百八十四員名編為八旗。在伊敏河両岸游牧。俗敬喇嘛、託命於佛、與陳巴爾虎相水火云」などの遊牧地の所在、移動の経過、チベット仏教受用の差異等を示す記事がある（傍線筆者、p.194)。バルガは上述のようにモンゴル人であるが、索倫はツングース系である。ジクメ・ワンポが、バルガの中に含まれるソロンをバルガと並列して述べたのも意味の無いことではない。バルガ、ソロンについては、服部（1943）pp.75-89、程廷恒（民国13年）pp.193-194、後藤（1934）p.122-146、 Latimore （1934）pp.155-191を参照。

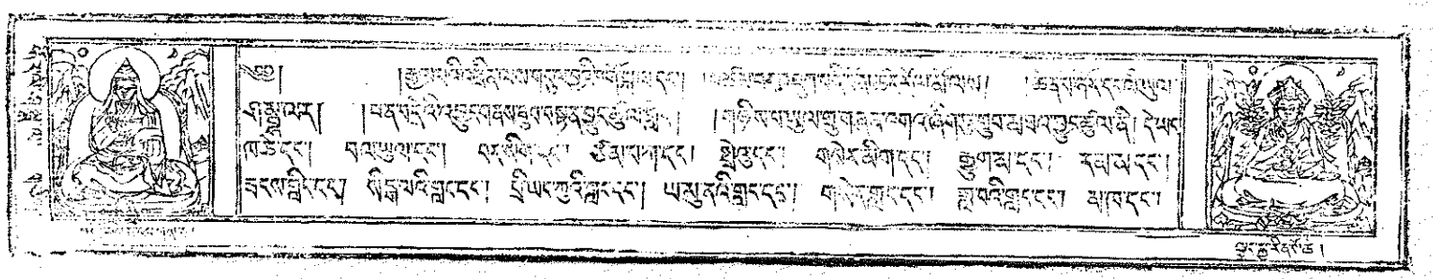
# 第 3 部

## 『一切宗義』「モンゴルの章」テキスト

## 『一切宗義』モンゴルの章テキスト

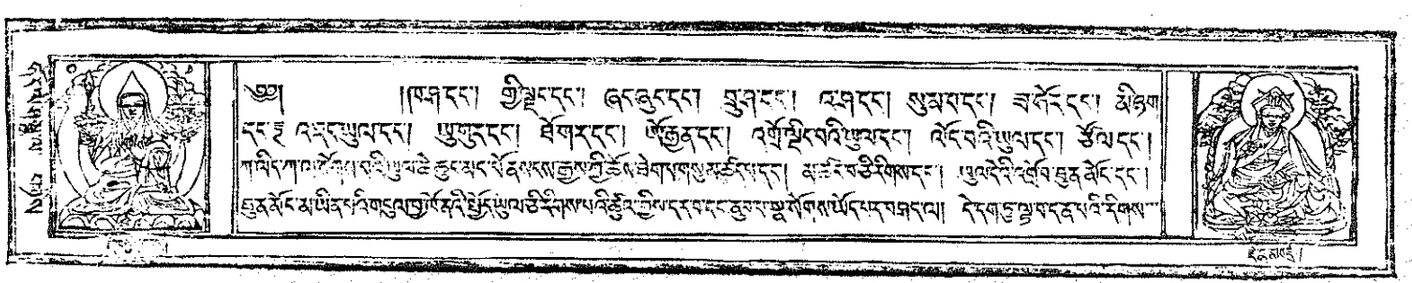
以下テキストは、東京大学所蔵の dGon lung 寺版のテキストである。必要に応じて Zhol 版の読みを採用した場合には、その訂正を挙げておいた。dGon lung 寺版、Zhol 版については、第１章第１部註２参照。第２部に訳されているのは、fol. 10a2 までであるので、校訂箇所もそれに従う。

1a



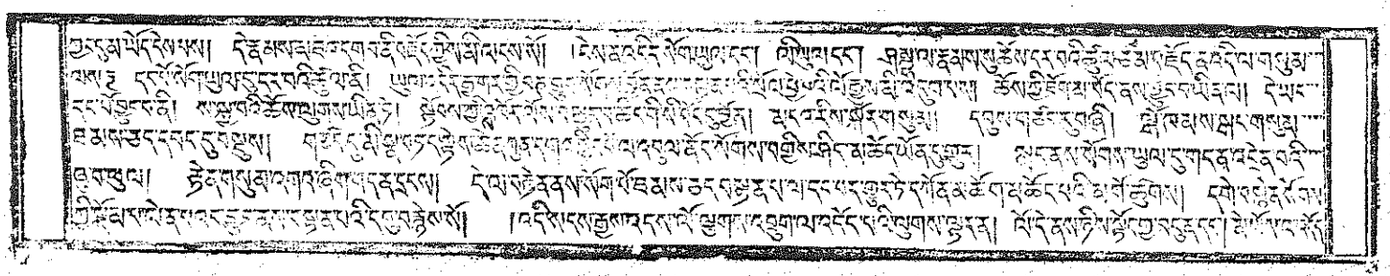
4, glang → gling

2a



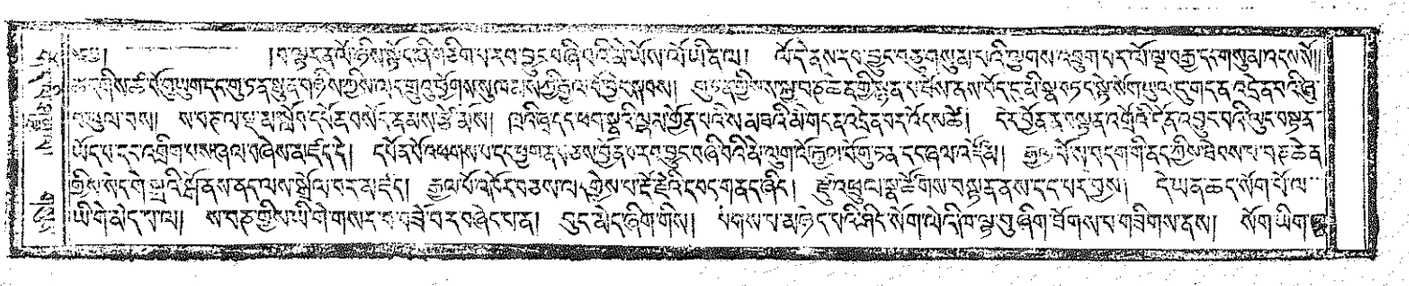
4, sogs → tshogs

2b



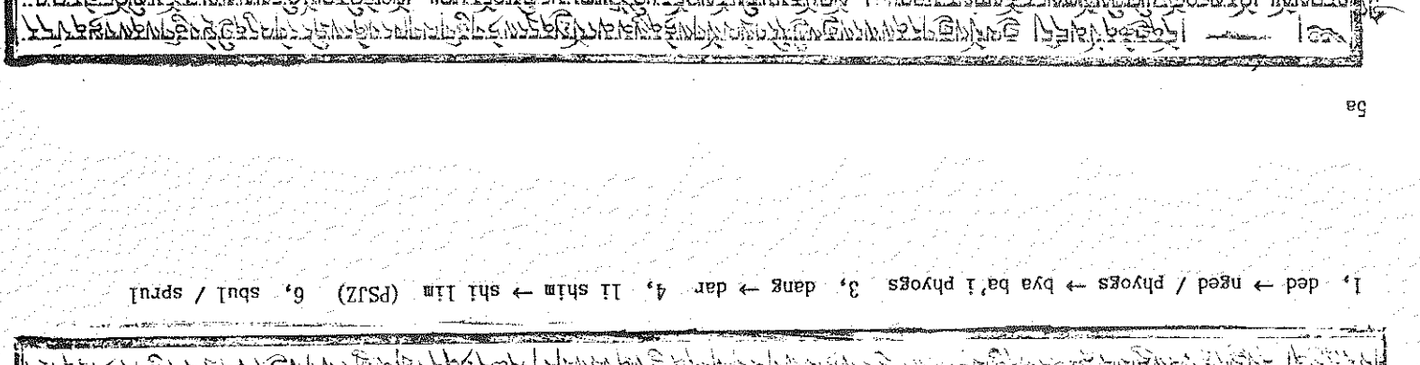
3, lgo → lho  4, sogs → sog

3a



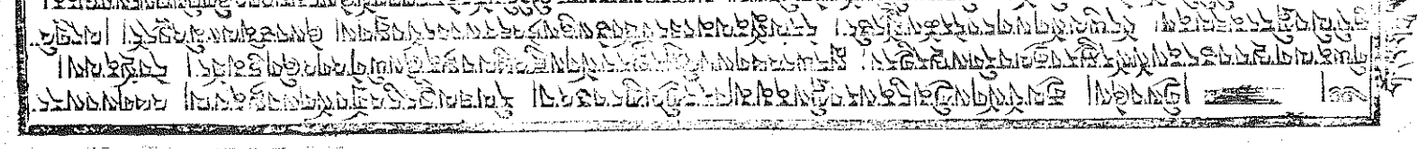
1, zhe → zhi  2, chang → ching  2, 3, 4, 6 ban → pan

3b



2, lhong → lhod / ban → pan  4, dpang → dbang / dpon → dbon  5, dang → dad / khung → lung  6, dang → dad

4a



1,3,4,5, bakshi → pakshi  2, ba → ʼx  3, hu pi li → hu bi li/ der → ned



4b



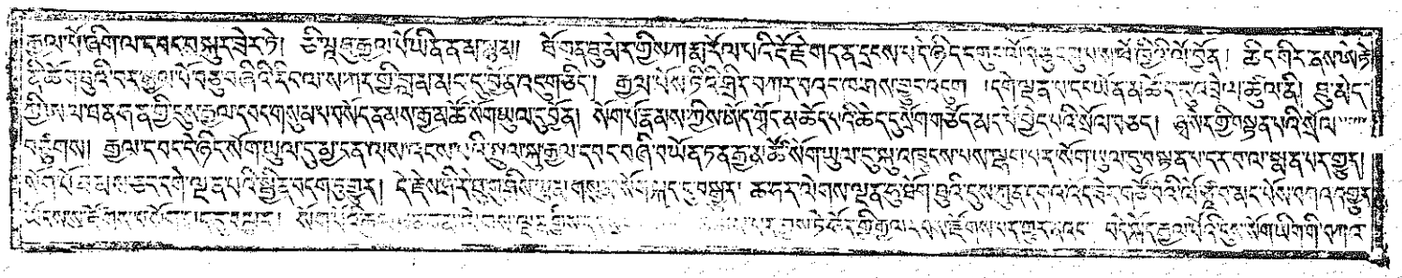
1, ded → ned / phyogs → bya baʼi phyogs  3, dang → dar  4, li shim → shi lim (PSJZ)  6, sbul / sprul

5a



1, sum → gsum  3, ban → pan  5, nag → sna ga

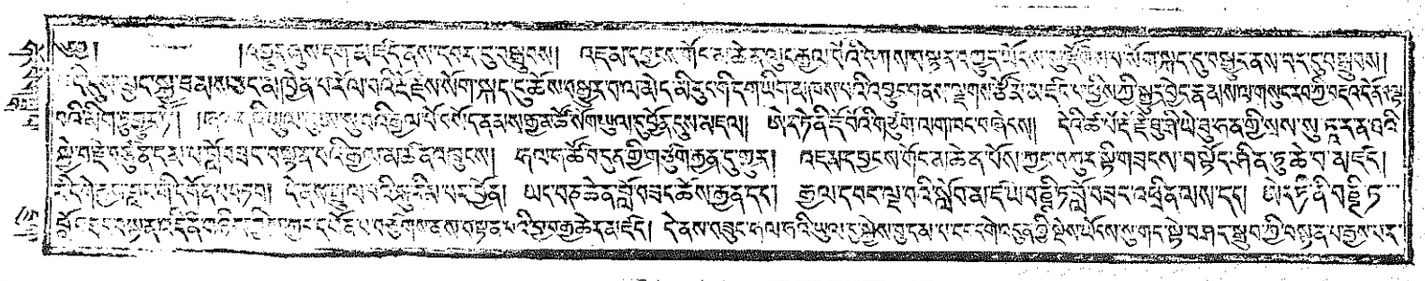
5b



1, bkar → bkur  4, btsugs → bstugs  6, skod → skyid



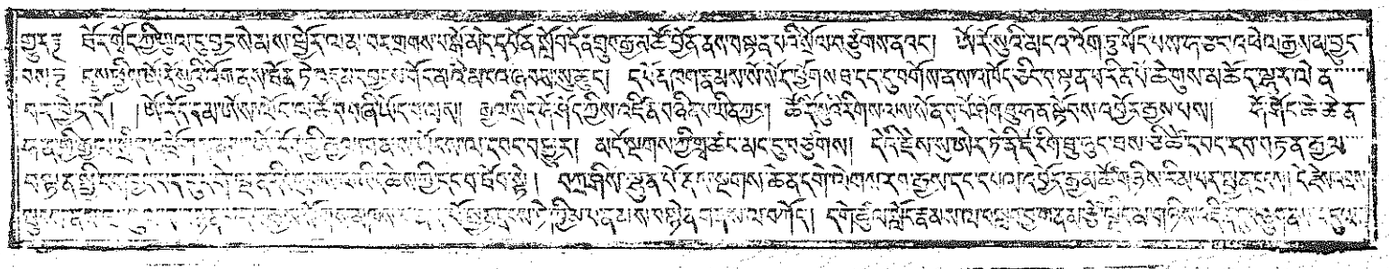
6a



1, dbar → par  2, 'don → don  3, a su ba'i → a su tha'i  4, gzangs → gzengs

5, ri → ri bo / glang → gling / bandita → pandita / er ti ni bandita → er te ne bandita

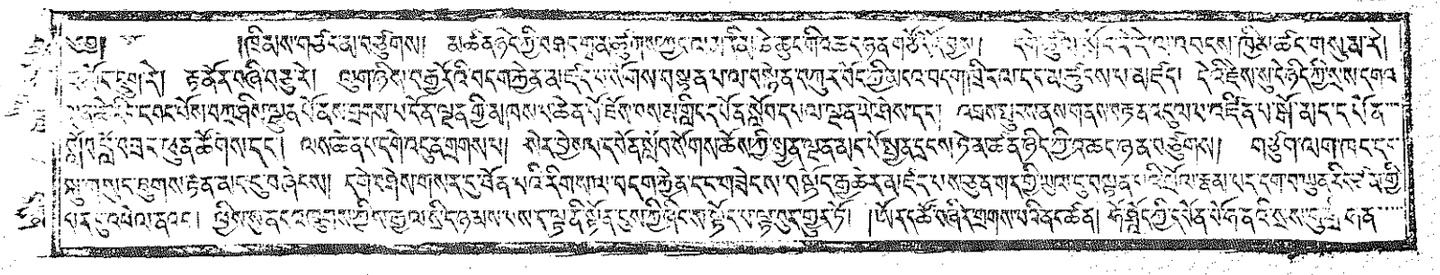
6b



1, med → mang  4, 'phrogs → 'phrog  5, dang → dad

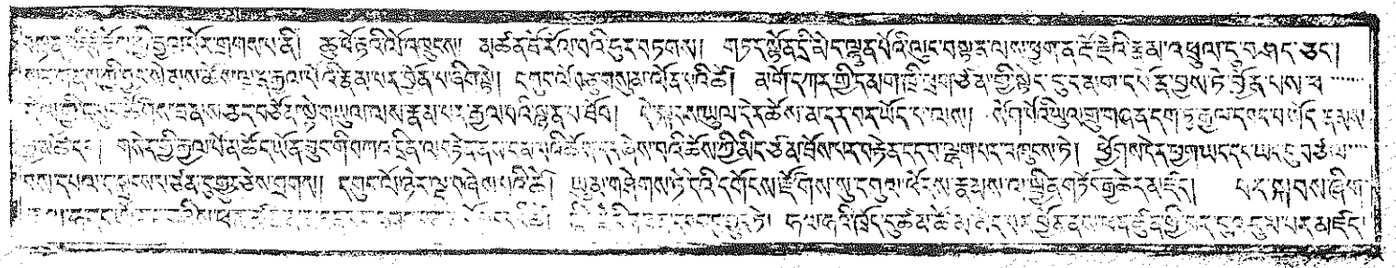


7a



1, mtshugs → ma tshugs  2, ro → re  4, dbon → dpon  5, rtan → rten  6, rad → rod

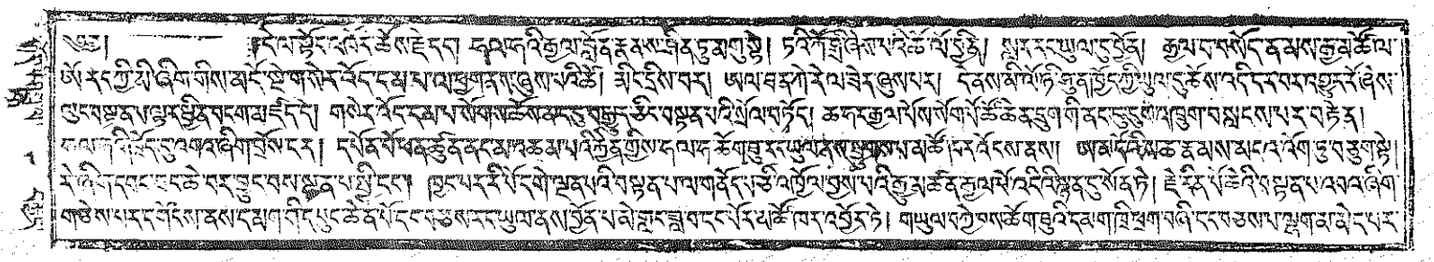
7b



1, gtar → gter / cang → cing  5, dpal bskrangs → dpral skrang  6, rad → rod

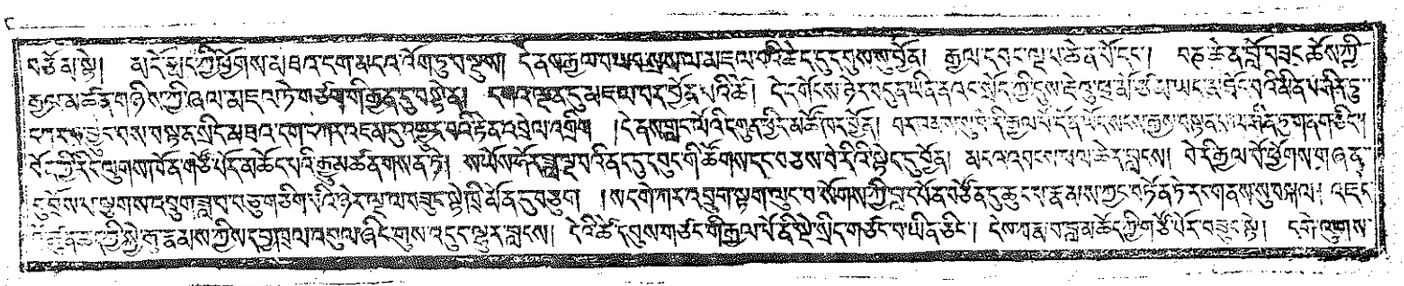


8a



2, rad → rod  4, dar → par  5, po → bo

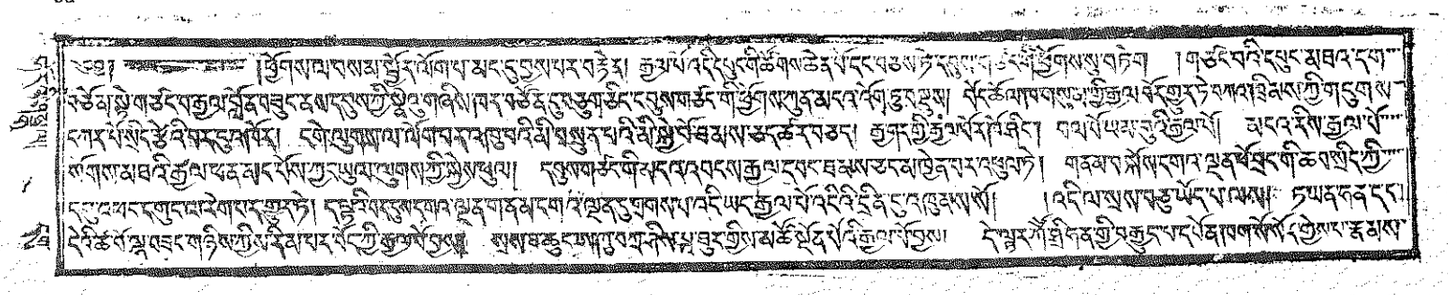
8b



1, ban → pan  2, gtsag → gtsug / min → mu na  4, bong → bon / dbung → dpung  4, 6, gtso por → gtso bor
5, bskal → bskyal  5-6, 'jang bo → 'jang rgyal po  6, dbya → dpya

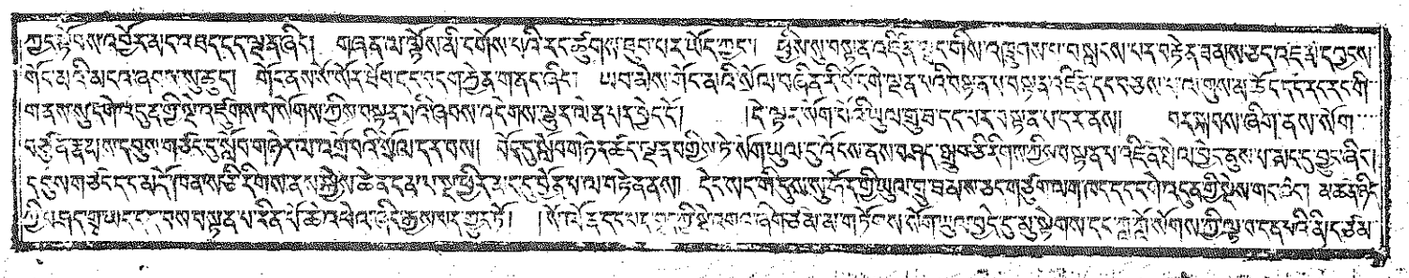


9a



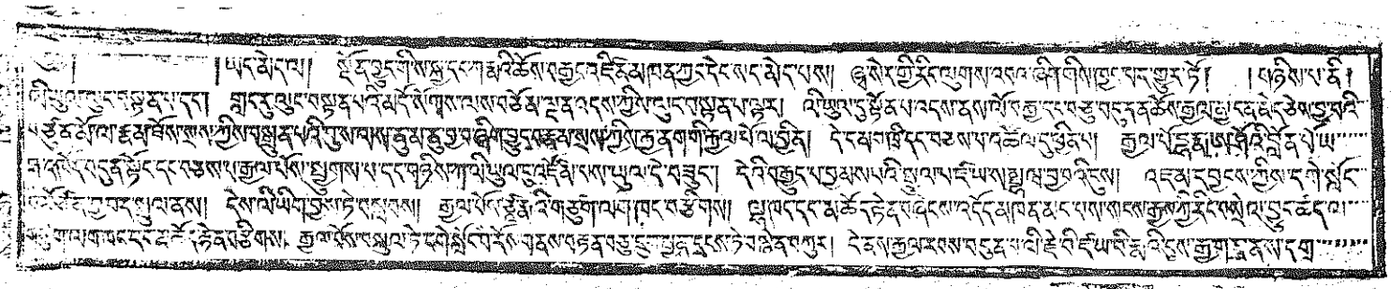
3, mi → 欠  4, phan → phran / 'phul → phul  5, pa → ba

9b



1, mang 'thad dad → mnga' thang dang 6, byed → bying

10a



1, brgyad → brgyud / khyad → khyab

Appendix A：

スムパ・ケンポ、チャンキャ2、ジクメ・ワンポ、トゥカンの伝記対応表

以下の表は、第１部第２章で取り上げたグンルン寺を代表する４人の僧の伝記のフォーリオ数を、年次の変わり目ごとに対応させたものである。使用した伝記は、

(1) スムパ・ケンポの自伝（SNT)、

(2) ガワン・トゥプテン・ワンチュクの手になるチャンキャ二世ルルペー・ドルジェの伝記（CNT1)、

(3) グンタン・コンチョク・テンペー・トンメのジャムヤン・シェーペー・ドルジェ二世コンチョク・ジクメ・ワンポの伝記（JNT)

(4) グンタン・コンチョク・テンペー・トンメのトゥカン・ロサン・チューキ・ニーマの伝記（TNT2)

である。これらの著作については、同章および文献目録を参照されたい。上の伝記の主人公たちは、いずれも、当時としては、一流の学者であり政治家であった人々であるので、その伝記もその人物一人の個人史であるのみならず、その時代を知るうえでの貴重な歴史史料と言えるであろう。

| | SNT | CNT1 | JNT | TNT2 |
|---|---|---|---|---|
| 1704 | 10a7 | | | |
| 1705 | 11a5 | | | |
| 1706 | 11a5 | | | |
| 1707 | 11b4 | | | |
| 1708 | 11b5 | | | |
| 1709 | 11b5 | | | |
| 1710 | 15a5 | | | |
| 1711 | 16a6 | | | |
| 1712 | 18a2 | | | |
| 1713 | 19b6 | | | |
| 1714 | 20b6 | | | |
| 1715 | 21b2 | | | |
| 1716 | 23b7 | | | |
| 1717 | 24a3 | 10a1 | | |
| 1718 | 24a5 | 12a4 | | |
| 1719 | 24a5 | 13b2 | | |
| 1720 | 28b5 | 13b5 | | |
| 1721 | 29b2 | | | |
| 1722 | 29b3 | | | |
| 1723 | 29b7 | 14a4 | | |
| 1724 | 35b7 | 15b3 | | |
| 1725 | 37a3 | 64b1 | | |
| 1726 | 42a4 | 64b1 | | |
| 1727 | 42b3 | 20a5 64b1 | | |
| 1728 | 52b2 | | | |
| 1729 | 57a1 | | 11a4 | |
| 1730 | 58b7 | | 12a2 | |
| 1731 | 59b1 | 20b1 | 12a2 | |
| 1732 | 62b3 | 20b1 | 12b6 | |
| 1733 | 67a3 | 20b1 | 15a2 | |
| 1734 | 70a5 | 21b4 | 15a5 | |
| 1735 | 73b1 | 25a3 37b2 | 18b5 | |
| 1736 | 78a3 | 39b3 | 18b6 | |
| 1737 | 79b7 | | 20a5 | ta. 12a2 |
| 1738 | 82a7 | | 21a6 | |
| 1739 | 83a1 | | 21a6 | 14b6 |
| 1740 | 95b4 | 44b3 | 21b6 | |



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1741 | 96a5 | 45a4 | 23a2 | |
| 1742 | 101a2 | 46a1 | 23a5 | 17b3 |
| 1743 | 101b2 | 46a4 47a4 | 26a5 | |
| 1744 | 102a5 | 49a3 | 32a1 | |
| 1745 | 102b3 | 50a3 53a3 | 33b5 | 24a4 |
| 1746 | 102b4 | 21b2 51a2 53a3 | 34a5 | |
| 1747 | 106b1 | | 36a2 | 24b2 |
| 1748 | 108b5 | 56b4 | 37a1 | |
| 1749 | 109a5 | 56b4 | 37b3 38b5 | 26b2 |
| 1750 | 113a4 | | 40b1 | 29b3 |
| 1751 | 114b7 | 65b6 | 41a3 | 31a1 |
| 1752 | 115a2 | 65b3 | 41b5 | 32a5 |
| 1753 | 116b4 | | 47b6 | 35a2 |
| 1754 | 118a3 | | 49a5 | 37b4 |
| 1755 | 119b4 | | 51a1 | 38b5 |
| 1756 | 120a4 | | 52a2 | 44a3 |
| 1757 | 120b1 | 66a3 | 55a2 | 54a2 |
| 1758 | 124b3 | 71b1 | 57b4 | 59b5 |
| 1759 | 126a6 | 72a1 | 62a4 | 66b3 |
| 1760 | 126b5 | | 69a2 | 74a2 |
| 1761 | 128a6 | | 72b6 | 79b3 |
| 1762 | 134a7 | | 75b2 | 84a1 |
| 1763 | 137a1 | 75a3 | 79b3 | 88b1 |
| 1764 | 137b6 | 78b1 | 82b6 | 96a4 |
| 1765 | 139b1 | 80b4 | 84a2 | 99b3 |
| 1766 | 141a1 | 82a1 | 87b4 | 102a5 |
| 1767 | 143a1 | 83b3 | 91a1 | 113b5 |
| 1768 | 144b3 | 83b4 | 93a2 | 120b4 |
| 1769 | 146a5 | 84a1 | 97b5 | 134a2 |
| 1770 | 149b3 | 84b5 | 106b1 | 138b4 |
| 1771 | 153b1 | 88a5 | 117a2 | 150a2 |
| 1772 | 155a4 | | 124a1 | 158a1 |
| 1773 | 162b3 | 93a4 | 128b3 | 168a3 |
| 1774 | 164b7 | 94a1 | 132b1 | 172a5 |
| 1775 | 166a3 | 94b3 | 135b2 | 174b3 |
| 1776 | 175a2 | 99a5 | 139a2 | 177b2 |
| 1777 | 182a4 | 107a2 | 143a4 | 180a2 |
| 1778 | 187a1 | 108b2 | 147b1 | 183a1 |
| 1779 | 190b7 | 109a3 | 151b5 | 186b2 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1780 | 197a5 | 109b3 | 157b3 | 193b3 |
| 1781 | 209a4 | 115b2 | 165b6 | 202b5 |
| 1782 | 216b4 | 118b4 | 168a5 | 208a1 |
| 1783 | 220a4 | 119b5 | 172b6 | 210b1 |
| 1784 | 227a1 | 122a1 | 176a2 | 216b6 |
| 1785 | 228a3 | 125b5 | 183b5 | tha. 13a3 |
| 1786 | 229b5 | 130a2 | 195a4 | 58b4 |
| 1787 | 236b1 | | 213a4 | 107b3 |
| 1788 | 238b7 | | 219b1 | 120b4 |
| 1789 | | | 227b5 | 139a2 |
| 1790 | | | 237b1 | 148b1 |
| 1791 | | | 241b6 | 162b5 |
| 1792 | | | 272a2 | 184a4 |
| 1793 | | | | 193b5 |
| 1794 | | | | 213b3 |
| 1795 | | | | 219b1 |
| 1796 | | | | 238b5 |
| 1797 | | | | 253b4 |
| 1798 | | | | 265a4 |
| 1799 | | | | 277a3 |
| 1800 | | | | 290a4 |
| 1801 | | | | 307b3 |
| 1802 | | | | 342b2 |



Appendix B：

チベット語史料とモンゴル年代記の原文の対照テキスト

以下は、『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』（p.66.3-p.70.6）と『アルタン・トプチ』（234v14-237v11）に於ける『ダライラマ３世伝』『ダライラマ４世伝』の引用部分を対照させたもので、第１部第３章中の表と対応するよう作られている。番号は、チベット語の引用文章の塊ごとに付けられ、さらに同一番号内でも、チベット文が長くなる場合には、意味の切目で、適宜、段を改めた。和訳はチベット文にそってつけた。「参考」は、対応するチベット史料はないが、モンゴル年代記での前後の繋がりを読みやすくするために掲げたものである。破線はチベット史料と『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』を比較した場合、チベット史料にしか見られない部分を示し、、実線は『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』と『アルタン・トプチ』に共通する部分を示している。

(5) D3N : 88b1／de yang sngon lcags lug gi nang du al than rgyal po chos kyi snang ba cung zad skyes 2／ te,

AN : p.66.3／ sain gegen qaran temör qonin jil dur genedte nom-un sedkil törüged,

AT : 234v14／ mön tere jasar tu tümen sain gegen altan 15／ qaran anu, temör qonyin jil dur, genedte 16／ nom-un sedkil törüged,

それについてもまた、昔鉄の羊の年にアルタン・ハーンは仏教者としての行動を少しく生じて、

D3N : phyogs der 'dzo dge a seng bla ma zhes bya ba zhig 'ong pa la, dri ba byas par,

AN : 'joe dege sing 4／ blam-a kemegci iregsen dür anu asarubasu,

AT : mjowe deki sdig 17／ lam-a iregesen dür anu , qaran tegün ece 18／ asarabasu,tere ber

その方面にゾゲのアセン・ラマというものが来たときに、御質問を為さると、

D3N : rje 'di nyid kyi sku gsung thugs kyi rnam par thar pa sogs zhib tu bshad pas, 'phrog tu med pa'i dad pa rgya mtsho ltar 'phel te,

AN : qamur i medegci bsowad nams rgya mjöe 5／ yin bey-e jarlir sedkil teri-güten i narin-a ailadqarsan dur, qaril ügei süsür 6／ anu jun daki narur debereged,

AT : qamur i medegci 235r1／ bsowad nams yeke mtsowa yin bey-e jarlir 2／ sedkil terigüten i narin-a qaran dur ailad 3／ qarsan dur, qaran u qaril ügei süsüg 4／ anu jun daki narur metü debüreged,

この王自身の身口意の伝記などを詳しく御話になられたので、奪うことのできない信心が海のように増えていって、

D3N : byang phyogs kyi sa chen por phebs dgos pa'i 3／ snyan gsan du blon po na gtse pos thog drangs gser yig pa mngags pa sku gzhogs du 'byor. rgyal po'i zhu yig dang 'bul ba rgya cher phul,

AN : umar-a jüg deki yeke rajar tur ögede bolqu kereg kemen, ailadqar-a 7/ altan bicig yeke barilr-a ergün jalara ilegebei.

AT : umara 5／ jüg deki yeke rajar ögede bolqu kereg 6／kemen, ailadqaracin taid kiy-a dur altan 7／ bicig yeke barilr-a ergün jalar-a ilegebei.

北方の地に来て頂きたい、という請願に応えて、大臣ナツェポを始めとする大使を送った。



〔その者達が〕御前に着くとハーンの親書と贈り物を盛大に献じた。

(6) D3N : 88b5／ mchod yon mtsho khar ngos mjal gnang ba'i gang ci'i zhib cha dang, re zhig bla mchod du 'dul ba slob dpon brtson 'grus bzang po rdzong sta mdzad,

AN : p.66.7／ elci kürcü ailadqagsan dur jalaraju ögede bolbai. 8／ blam-a ögilge yin ejen anu köke narur tur jolraqui boljagad alin i bögesü narin-a jarlir bolju, 9／ nigen da takil-un blam-a qdol-ba cowas rjw bciowan grus btsang bowa i 10／ yaburulba.

AT : 235r8／ kürcü ailadqarsan dur, qutur-tu 9／ qomsim bodisung yin qubilran tamcad 10／ mcyeba bsowad nams yeke mtsowa kemekü qutur- 11／ tu dalai lam-a ekilen, basa qutur-tu wacir 12／bani yin qubilran tsamduu rjirung qutur-tu 13／ terigüten olan merged quvarar-ud ögede bolju 14／ ireküi dür dalai lam-a yi köke narur tur 15／ boljiju urtun ucirarad alin i bögesü 16／ narin-a jarlir bolju, yeked takil-un lam-a 17／ qdolba cos rji btswan grus bsang bowa yi 18／yaburulba.

施主と僧が青海で直接御会いになって、具体的な指示と当座のラマとして阿闍梨ソォンドゥー・サンボを御送りになられた。

(7) D3N : 90a6／ hor zla bcu gcig pa'i nyer drug la 'bras spungs nas chibs kha bsgyur.

AN : p.66.10／ mong rol-un arban nigen sarayin qorin jirruran dur qbras sbung aca inarsi 11／ ögede bolbai.

AT : 235r18／ mongrol-un arban nigen sar-a yin v1／ qorin jirruran dur qbras bung aca inarsi 2／ ögede bolbai.

モンゴル暦11月26日デプンから出発なさられた。

(8) D3N : 92b3／ rim gyis nyin lam du ma 'das pa na, grag ri chen po dung gi dbyibs ba'i logs shig nas, nor gter la khyad du 'phags pa'i dung dkar g-yas 'khyil shin tu che ba snyim pa kha sbyar tsam zhig gter nas bzhes.

AN : p.66.11／ ulam inarsi yaburan dur caran büriyen-ü düridü qada yin qabirr-a yin sang aca 12／ dung büriyen yi abubai.

AT : 235v2／ ulam inarsi yaburan dur 3／ caran büriyen-ü düridü qada yin qabirrayin 4／ sang aca dung büriyen yi abubai.

順に数日行程過ぎたとき、側面が法螺貝の形をした大きな岩山から、殊勝なる右巻きの白い法螺貝の非常に大きい一掬り程の大きさのものを地中から取った。

(9) D3N : 93a2／ tsha khad gcig 3／ phebs pa na, rta pa nyis brgya skor zhig

byung ba'i dbus nas, gtso po bon zhwa gyon gyon pa zhig gis rta las babs te phyag btsal nas da ring nged kyis bsnyen bkur zhus zer, chu tshod gnyis tsam thegs pa'i sar, bza' btung gi bye brag mang po sta gon byas 'dug cing, bsnyen bkur 4/ bstab,

AN : p.66.12/tegünece inaγsi ögede bolqui dur, mösün aγula yin ejen qoyar jaγun 13/ mori tan irejü mörgüged.

AT : 235v4/ tegün ece 5/ inaγsi ögede bloqui dur, mösün aγula yin 6/ ejen qoyar jaγun moritan irejü mörgüged.

一休行程行かれた処で、二百人位の騎馬隊が現れたその中から、ボン教の帽子を被った首領が下馬して、五体投地をして、「今日は私が奉仕申し上げる」と言った。小一時間程行った地に様々な飲食物が沢山用意してあり、奉仕をした。

D3N : sgam gnyis sgo lcags bcug pa lde mig dang bcas pa'i steng du, dar dkar po bzhas pa zhig phul te, spyan ras gzigs kyi rjes gnang zhus.

AN : coγujitu qoyar abdar-a yin degere tülkigür talbiju, tegünü degere nigen 14/ caγan kib talbiju ergüged.qongsim bodi satu yin abisig sonusba.

AT : 7/ coγuji dur qoyar abdarayin degere tülkigür 8/ talbiju teγün-ü degere caγan kib talbiju 9/ ergüged qomsim bodisung yin abisig 10/ sonusba.

上に白絹を置いて、鍵付きの二つの鉄の蓋を持った箱を献じ、観世音菩薩の加護を願った。

(10) D3N : 92b4/ nya mtsho stod du phebs. dgon 5/ pas gtsos pa'i skya ser gyi khrom chen po tshogs te, gser srang stong phrag gsum tsam gyis gtsos pa'i zang zing gi 'bul ba rgya cher phul.

AN : p.66.14/ mcowan yin ekin-ü ulus 15/ γurban mingγan lang yin al-tan terigü-ten yeke barilγ-a ergüjü.

AT : 235v10/ cowa yin ekin-ü ulus γurban mingγan 11/ lang altan terigüten i ergüjü.

ニャムツォの上手にいらっしゃった。寺を始めとする僧俗の大群衆が集まってきて、三千サンの金を始めとする様々な贈り物が盛大に献ぜられた。

D3N : bla ma'i rnal 'byor, yi ge drug pa'i bzlas lung, rab byung bsnyen rdzogs stong phrag tu nye ba sogs gnang ste kun kyang thar pa'i lam la 6/ bkod. bzhugs khri'i rgyab yol gyi rdo la thugs rje chen po phyag bzhi pa'i sku rang byon dang,

AN : mingγan siqam kümün toin bolqui dur, saγuγsan 16/ cilaγun tüsilge dür dörben γar tu qongsim bodisatu yin boγ-e öbesüben bütübei.

AT : mingγan ilegüü 12/ kümün toin bolqui dur, saγuγsan cilaγun 13/



tüsilge dür dörben γar tu qomsim 14/ bodisung yin bey-e öbesüben bütübei.

ラマの瑜伽、六字真言の読誦による加持、出家戒、具足戒を千人に近い人に与えた。すべての人々を解脱の道に置いた。御座処の拠りかかりの石に、一人でに現れた四手観音菩薩の御姿と、

(11) D3N : 93b4/ de nas nyin lam gnyis tsam 'das pa na nyin gcig sog po'i lha 'dre rnga mong rta byi la sogs kyi mgo brnyan can mang po zhig chos skyong beg tses khrid nas 'ongs pa dam la btags te

AN : p.66.16./ tende ece inaγsi 17/ ögede bolqui dur mongγolun tegri cidkür anu mori temege mis toloγai tan i nom-un sakiγulsun 18/ bwigercw ködeljü ireged tangγaliγ tur oruγulbai.

AT : 235v15/ tendece inaγsi ögede bolqui dur mongγol 16/-un tegri cidkür anu mori temege mis 17/ toloγai tan-u nom-un sakiγulsun bing rtsw 18 / ködeljü ireged tangγariγ tur oruγulbai.

それから二日行程ほどいったところで、ある日駱駝や馬や鼠などの頭を持つものモンゴルの神と魔物沢山を、護法王ベクツェが連れて来た。それに〔正法護持を〕誓わせた。

(12) D3N : 94a2/ gdan 'dren gnyis par 'ur bsdus rgyal rigs se chen hong tha'i ji dang, 3/ mthu med kyi rgyal rigs, da yan no yon gyis gtsos pa'i rta pa stong phrag gsum tsam, gser dngul gos dar, rta sga srab kyis brgyan pa sogs phyag rten khyer nas gdan 'dren bskyar mar slebs,

AN : p.66.18/ tegün ece inaγsi ögede bolqui dur ordu-sun 19/ secen qong taiji tümed-ün dayan noyan qoyar ekilen γurban mingγan moritan altan mönggü torγ-a terigüten p.67/1.barilγasi ergüjü mörgübei.

AT : 236r1/ tegün ece inaγsi ögede bolqui dur ordus 2/-un secen qong taiji tümed-ün dayan noyan 3/ekilen γurban mingγan moritan altan mönggün 4/ torγ-a terigüten i bariju mörgübei.

2番目の案内は、オルドスの王族であるセチェン・ホンタイジとトメトの王族のダヤン・ノヤンを始めとする3千人ほどの騎馬の人が、金、銀、絹、緞子、鞍と轡によって飾られた馬など挨拶の品を持って、再度の招待のためにやって来た。

D3N : hong tha'i jis, thugs rje chen po phyag bzhi par mthong.

AN : secen qong taiji dörben γar tu qongsim bodisatu yi üjebei.

AT : 5/ secen qong taiji dörben γar tu 6/ qomsim bodisung-un abisiγ i öcibei.

ホンタイジは〔ダライラマを〕四手観世音菩薩と見た。

(13) D3N : 94b4/ tshe ring gnam gyi she mong la brten nas rtsod dus kyi 'khor

los sgyur ba, al than rgyal po nyid, mtha' 'khob mun pa'i gling dkar por byas ba'i brda chad du, gos dkar po gsol,

AN : p.67.1/ urtu nastu 2/tegri yin kücün y-ier temeceküi car daki kürdün yier ergigülügci gegen qaran öber yien kijarar daki 3/ qarangrui yi caran gerel yier cailraqu yin beleg dür, caran torran takil (debel) emüsjü,

AT : 236r7/ gegen qaran öber yien kijarar daki qarangrui 8/ i geigülkü yin tula beleg dür caran takil 9/emüsjü,

永遠の天の権威によって、〔末世の〕転輪王、アルタン・ハーン御自身が、辺地の暗い国を白くする象徴として、白い御着物を御召しになって、

D3N : 'khor khri phrag 5/ tsam de nyid kyi btsun mo 'ang 'khor mang po dang bcas te 'ongs nas

AN : tor-a tan dararulan 4/ kiged, öberün qatad terigüten olan orcin lura bügüde-ger irejü,

AT : tümen toratan dararuli kiged 10/ öber ün nököd bügüdeger,

一万人ほどの眷族と、彼の妃も多くの眷族をともなってきて、

D3N : mchod yon mjal ba'i dga' ston gyi thog mar, dngul srang lnga brgya las grub pa'i mandala, gser gyi phor pa yul dbus kyi bre tshad shong ba zhig rin po ches bkang ba, gos yug dkar ser dmar 6/ ljang sngon po rnams nyi shu re, rta dkar po rin po che'i sga srab kyis brgyan pa bcus thog drangs pa'i rta brgya, khrom zil gnon gyi gos can sna lnga pa yug bcu, dngul srang stong phrag gcig, ras dar sogs phul,

AN : blam-a dur öglige yin ejen anu 5/ terigün mörgüküi bayasru-lang tu qurim-un beleg tü jarun tabun lang mönggün yier bütügesen i 6/ mandal, möngke rajar-un nigen sarulra-n bar dügürgekü yin tedüi altan ayar-a i erdenis yier dügürgejü 7/ qorirad qorirad büküli caran sira ularan noruran öngge torran,arban caran mori i erdenis-ün 8/ emegel qajarar yiar jasarsan yiar ekilejü jarun mori, yeke qural i sür yier daruqu arban büküli 9/ sayin torrun, mingran lang mönggün, kib büs terigüten i ergübei,

AT : blam-a dur 11/ bayasrulang un qurim möngügüin beleg jarun 12/ tabun lang yiar egütügsen mönggün mandali 13/ nigen yeke altan ayagan i erdenis yier 14/ dügürgejü, qorirad büküli caran sira 15/ ularan noruran torra, arban caran mori 16/ emegel tei jarun mori, altan mönggün kib, 17/ büs terigüten ergüjü mörgübei.

僧と施主の謁見の宴会のはじめに、500サンの銀よりつくったマンダラ、宝石で満たされた中央チベットの一升程の金の茶碗、白黄赤緑青などの緞子をそれぞれ20ぴきと宝石の轡



と鞍によって飾られた白い馬10頭を始めとする馬100頭、衆目を驚かす大きな五色の緞子10ぴき、銀1000サン、木綿、絹の布などを献上した。

D3N : de nas khrom 'bum phrag tsam 'tshogs pa'i dbus su, mchod 95a1/ yon nyi zla zung gcig phebs te, hong tha'i jis gtam btang, gu shri pakshis lo tsha bsgyur te,

AN : teden i bumdi toratan qurarsan 10/ ulusun dumda, blam-a öglige yin ejen qoyar naran saran lur-a adali qamtu ucirarsan dur, güüsi 11/ bar-si bar kelemürciljü secen qong taiji tegesi üge ailadqaba,

AT : güsi 18/ barsi kelmürlejü, secen qong taiji v1/ tegegsi ailadqaba.

それから、集まってきた人10万人程の群衆の真中で、僧と施主が月と日のように御到着になった時、ホンタイジが御話申し上げ、国師パクシが通訳した。

D3N : sngon nas cha dkar gnam gyi rigs las chad pas stobs che, rgya bod hor gsum drag pos dbang du bsdus, sa skya pa dang mchod yon du 'drel te chos 2/ dar, slar ze (the) mur rgyal po nas chos chad, las su sdig dang zas su sha khrag kho na la longs spyod pa'i mun nag khrag mtsho'i gling lta bur,

AN : erte tegri ece salursan cinar 12/ kemen basu, kücün yeke bolurad mong-rol töbed kitad rurbarula i erkedür yien oruruljü, secen 13/ qaran qbagsba blam-a yin öglige yin ejen bolurad sasin i delgeregüljü amu, 14/ torun temör qaran aca inarsi sajin tasuraju onca kilincesi üi-ledcü qarangrui cisun u dalai 15/ metü bolju bügetele,

AT : tegri yin erke kücün yier 2/ mongrol töbed kitad i erke dür yien 3/ oruruljü, secen qaran pagsba lam-a yin 4/ aci bar, sajin i delgeregüljü amu, qoina 5/ torun temör ece inarsi sajin tasuraju 6/ onca kilince ber yabuju bölüge,

昔チャカルが天の王族からでられたので、大力があった。中国、チベット、モンゴルの3国を武力によって、支配し、サキャ派の人と、檀家と帰依所の関係になって仏法が栄えた。またテムル・ハーン以来仏法は滅びた。行いに於いては罪をこととし、食物としては血肉を享楽する暗い血の海の中にあるような国に、

D3N : mchod yon nyi zla zung gcig gi bka' drin las, dam pa chos kyi lam btod, khrag mtsho 'o mar bsgyur ba 'di bka' drin che bas, phyogs 3/ 'di na yod pa'i rgya bod hor sog kun gyis kyang dge ba bcu'i khrims la gnas pa dgos, nyi ma de ring nas khyad par sog po cha dkar la khrims su bcas pa ni,

AN : naran saran qoyar metü blam-a öglige yin ejen qoyar uciragsan u acibar 16/ ene cisun u narur i sün bolurarsan ene kemebesü yeke

acitai bolba, qamur bügüde yi arban buyan u 17/ yosurar yabuqu kereg kemen, ene edür ece ekilen mongrol dur carajalaju jarlabai.

AT : 7/edüge naran saran metü lam-a qaran qoyar-un 8/ ucirarsan-u aci bar qamur yiar arban 9/ buyan-u yosurar yabuturai kemen carajilaju 10/ jarlabai.

日月のような檀家と帰依所の恩恵により、正法の道を起こし、血海変じて乳海となるというこの事の恩恵は大きいので、この方面にある中国、チベット、モンゴルのすべての人々は十善戒を守って欲しい。今日より特にモンゴルのチャハルに於いて法となすべきことは、

(14) D3N : 95b4/ de nas mchod yon zhib par gsung gleng gnang ba'i skabs, rgyal po yug cig dran med du song ba las bsos te,

AN : p.67.18/ blam-a öglige yin ejen qoya-rula inarsi cinarsi narina jarlir bolqui üy-e dür qaran anu 19/ tür jarura medege ügei bolju tend ece delüreged

AT : 236v10/ lam-a narin-a jarlir bolju bayiqui 11/ car dur, qaran tür jarura medege ügei 12/ bolju, tendece delüreged,

それから施主と僧が詳しく御話をなさられた時、ハーンは一時気を失っ〔たが、そこから〕目を覚まされて、

D3N : sngon 'phags pa shing kun gyi gtsug khang bzhengs pa'i tshe, nga se chen rgyal po dang, 5/ khyed bla ma 'phags par gyur, khyed kyis gtsug lag khang la rab gnas mdzad, nga de nas da bar gang du 'khyams zhes sngon gnas rjes dran gyi zhu ba phul.

AN : erte 'bagsba singgün-ü süm bariqui car tur p.68.1/ bi secen qaran bolurad ci blam-a 'bagsba bolursan dur, ci süm i amilaba. tegünece qoisi bi 2/ edüge boltala qamirasi tökögerejü yaburšan bui kemen erten-ü oron i medejü ailadqarsan dur

AT : erte pagsba lam-a 13 / süm-e bariqui car tur, bi secen qaran 14/ bolurad ci pagsba lam-a bolrsan dur ci 15/ süm-e yi amilaba, tegün-ü qoina bi edüge 16/ boltala qamirasi tögerijü yaburšan bui kemen 17/ ailadqarsan dur,

「むかしパクパがシンクンの寺を御建てになった時、私はセチェン・ハーンであり、汝はラマ・パクパであった。汝がその寺を落慶なさった。私は、今に至るまでどこを巡ってきたのか」と、昔を思い出す御話を申し上げた。

D3N : de'i bka' lan dang bcas te rigs lnga mtshon pa'i dar tshon sna lnga pa la sku gsung rdo rje'i mdud pa'i rgyas spras pa dang 6/ rin po che'i phor pa 'bru sna tshogs kyis bkang ba zhig rgyal po la gnang ngo.



AN : tegünü 3/ qariqu jarlir bolju bey-e yin sakirulsun dur tabun ijarur tan i belgeber tabun öng-ge tü 4/ kib yiar wacir janggiy-a bar janggidju tamaralaju, erdenis-ün ayarai eldeb üris yier dügür-gejü, 5 /qaran dur soyorqabai.

AT : lam-a jarlir bolju bey-e 18/ yin sakirulsun dur tabun ijarur tan i 237r1/belge ber tabun öngge kib yiar wacir 2/ janggiya janggidju tamaralaju, erdenis-ün 3/ ayaran i eldeb üris yier dügürgejü 4/ qaran dur soyorqabai.

その御答えに、五明を象徴する五色の身口意金剛の結び目の記しによって飾られた旗と、様々の物によって満たされた宝の御碗を、ハーンに御与えになった。

(15) D3N : 97a2/ ta la'i bla ma badzra dha ra zhes khyab bdag rdo rje 'chang gi las ka phul. rgyal po la 'ang chos kyi rgyal po lha'i tshangs pa chen po zhes mtshan gnang ngo.

AN : p.68.6/ bsowad nas rgya mtsowa dur dalai blam-a wacir-a dara kemen cola ergübei. gegen 7/ qaran dur nom-un qaran yeke esrün tegri kemen cola soyorqabai.

AT : 237r4/ sodnam rgya 5/ mtsowa dalai lam-a wacira dara cola ergübe. 6 gegen qaran dur nom-un qaran yeke esrün 7/ tegri kemen cola ögbe.

ダライラマ、バザラダラという名と、自在天金剛手の称号を奉った。また、ハーンに対しても法王大梵天という御名を与えられたのである。

(参考 1) AN : p.68.7/biligtü qaran aca inarsi arban 8/ yisün qaran-u üy-e dür tasuragrsan sasin i eng ülemji delgeregülbei sayin gegen qaran kemen.

ビリクトハーンから19代にわたる間、途切れていた仏教を最初に広めたサインーゲゲンハーンといった。

(参考 2) AN : 9/ ene qaran-u üy-e sasin-u ekin bolulcarsan qalq-a yin wacir sain qaran, caqarun tümen 10/ jasar tu qaran buyu.

AT : 237r.7/ sasin u ekin tümen 8/ jasar tu qaran qalq-a yin wacirai sain 9/ qaran ed buyu.

このハーンの時代に仏教を支持した人に、ハルハのワチルサインハーン、チャカルのトメン・ジャサクトハーンがいた。

(参考 3) AN : p.68.11/ sain gegen qaran i köbegün sengge dügüreng qaran, dügü-reng qaran-u köbegün sümer taiji 12/ cinggis qaran-u altan ijarur-a, dalai blam-a yondan rgiyamtsowa yin qubilursan yosun 13/ anu eimü bui, 14/ ecige anu sümer taiji, 15/ eke anu qabutu qasar-un ür-e nonon uicing noyan-u okin baiyang jola yin umai dur

oruγsan anu.

AT : 237r.9/ gegen qaγan-u köberün sengge 10/ düğüreng qaγan, tegün-ü köbegün sümer 11/ taiji aca yontan rjmtsowa yin qubilursan 12/ eimü buyu. ecige inu sümer taiji, eke 13/ inu qasar-un üre dayun uicing noyan-u 14/ okin biriqan jola yin kebeli du oruγad,

サインゲゲンハーンの子、センゲ・ドゥーレン・ハーン。ドゥーレン・ハーンの子は、スメル・タイジである。チンギス・ハーンの黄金氏族にダライラマ・ユンテン・ギャムツォの転生した条は、以下のようである。御父上はスメルタイジ。御母上は、ハブト・ハサルの子孫ノノン・ウイチンノヤンの娘バヤン・ゾラ〔。そのバヤンゾラ〕に入胎した件は、

(16) D4N : 9a5/ rta dkar zhon pa'i khye'u mdzes pa zhig, sbra yi steng du byon pa yum gyis mthong, lhums su zhugs nas khog stod nyid bzhugs shing, yig drug sgra zhig gsal por thos pa byung, de dang mtshungs par sgra la 'ja' zug 6/ cing, me tog char sogs dge mtshan du ma byung.

AN : p.68.16/ erkin üjesgüleng tü nigen keüken caγan morin köllejü ireged 17/ erüken-ü degere baiqu i eke anu üjejüküi. 18/ eke yin kebeli dür oruγad bey-e yin cigejin aγsan böged 19/ endegürel ügei jirγuγan üsüg-ün daγun dota (u) ra aca iled (iledte) sonusun, ger ece solong-γa p.69.1/ tataγad, 2/ eldeb ceceg-ün qura terigüten olan buyantu belges boljuqui.

AT : 237r15/ jirγuγan üsüg-ün daγun dotura aca iled 16/ sonusturad. ger ece solongγ-a tataγad. 17/ eldeb ceceg-ün qura ba olan belges 18/ boljuqui.

白い馬にのった美しい子供が、テントの上にいるのを御母上は見た。子宮に入られてから体の上部に居らして、六字真言の声が明らかに聞こえた。それと同時に音につれて虹が立ち、花の雨が降るなど、沢山の吉祥が生じた。

(17) D4N : 9b4/ de nas zla ba ngo bcu la

AN : p.69.2/ arban sara boluγad,

AT : 237r18/ arban sara boluγad,

それから10か月して、

(18) D4N : 10a1/ sa glang hor zla dang po'i tshes gcig gi 2/ nyi ma shar dang bltams pa lhan cig byung.

AN : p.69.3/ eme siroi üker jil-un 4/ angqan-u sarayin nigen sined naran γarqui luγa saca-γu.

AT : 237r18/ siroi üker vl/ jil dalai lam-a qubilju törübei.

土の牛の年1月1日の日が昇るのと御生まれになるのは同時であった。



(19) D4N : 10a2/ yum mchog ba khen sbyu la yi, mngal sprin nas 'thon rab 3/ mdzes sku, rgyal sras nyi ma'i dkyil 'khor shar, sa glang mchu zla'i tshes gcig la, sog yul dbang po'i sa 'dzin rtser, dkar phyogs padma'i gnyen de byon, nag po'i rtsa lag mun pa sangs, zhes so.

AN : p.69.5/ ülemji degedü eke bayiqan jula yin umai yin egülen ece γaruγ-san sayiqan üjesgüleng bey-e tü, 6/ üker jil-un usun sara dur mong-γol oron-a sineyin nigen erketü γajar bariγci yin üjügür ece 7/ sineken caγan jüg-ün tere lingqu-a yin sadun γarul üjeged, sibsigtu qara jüg-ün qarangγui i uγ aca aril-γabai. kemeγsen bolai.

最勝の御母上バーハン・ゾラの胎の雲〔子宮〕よりいでし美しき御体。王子は日輪が昇る土の牛の年斗宿月1日に、モンゴル王の城（地を支配する者の城）に白方の（仏法の）遵華の族が御生まれになった。黒方（非仏教徒）の暗い族は清浄となった、という。

D4N : de'i tshe 'ja' 'od kyi gur dang me tog gi char 4/ chen po 'bab cing, dus ma yin pa'i 'brug gi sgra dal bur sgrog pa dang, sngon chad sna'i yul du ma myong ba'i dri zhim po bro pa dang, sgra 'dzin gyi yul du thos ma myong ba'i rol mo sna tshogs rang 'khrol ba,sa chen po g-yo ba sogs ya mtshan pa'i ltas mang du byung 5/ ngo.

AN : tere üy-e dür 9/ solngγan yin gerel yier ger bayiγulun cecer-ün quras yeked oruju, caγ busu yin luu yin daγun 10/ alγur daγu-risqaqu ba, urida qabar dur ese ünüstegsen amtatu ünüd angkil-qui kiked, 11/ cikin dur ese sonus-daγsan eldeb cenggel öber yien daγurisqu-ba,yeke delekei ködelkü terigüten 12/ γayiqamsiγ-tu olan iru-a boluγsan böged,

その時虹のテント〔があらわれ、〕花の大雨が降り、時ならぬ雷鳴がゴローンゴローンとひびき、以前に鼻の境としてかいだ事も無い良い香りが味わわれ、耳の境として聞かれたことも無い様々な楽器が自ずから奏でられた。〔また〕大地が動くなど希有の兆候が沢山現れたのである。

D4N : zla ba de ka'i nang du yab kyi mtshan nas 'bod pa dang gzhan yang gsung gleng du ma gnang pas,

AN : mön qubiluγsan sar daγan ecigei nereljü daγudaqu kiged, 13/ busu basa olan jarliγ boluγad.

その月のうちに御父上の名前を呼び、さらに沢山御話をなさったので、

(20) D4N : 10a6/ nyin cig yum la lha khang nas bka' 'gyur phyi ma du ma spyan drongs shog gsungs pa ltar blangs pas, glegs bam la gzigs te 'di ni nga'i rnam par thar pa'o. zhes gsungs

AN : p.69.13/ nigen edür eke degen süm ece bey-e dür ün me 14/ üsüg-tü

boti jala-ju ire kemen jarliγ bolursan dur abcu iregsen dür, ene anu minu turuji bolai 15/ kemen jarliγ bolursan dur

ある日のこと御母上に対して、「仏寺からカンギュールのちょっとした大部を持ってきて下さい」と、仰有られたのでそのとおりにもってきたところが、その経巻をじっと御覧になって「これは、わたしの伝記である」と仰有られた。

D4N : b1/ glegs bam kha phye bas, dam chos pad dkar gyi nang gi don yod zhags pa'i rnam thar byung bas, sphyan ras gzigs kyi sprul ba yin par gor ma chag ces kun mgrin gcig tu gleng.

AN : negejü üjebesü, borda nom caγan lingqu-a yin dotora ki tusatu calm-a yin 16/ turuji büküi dür, qonsim bodisatu yin qubilγan mön ajiru kemeldübei.

板口を開いて〔見たところ、〕法華経のなかの不空絹索観音の伝記がでてきたので、「観音様の化身であることは疑いない」と、すべての人々が声を揃えて語った。

(21) D4N : 12a1/ de nas lo 'khor 'ba'i tshe, yab kyi mchod khang la rab gnas 2/ shig byed pa'i dus , rje 'di nyid kyang der 'phebs te rten gral gyi sku rnams la zhib tu gzigs shing, zhabs drung rin po che bsod nams rgya mtsho'i sku la phyag mdzub gtad nas 'di nga yin zhes gsungs.

AN : p.69.16/ γurban saratai dur ecige yin 17/ süm-e dür olan burqan dotoraca bsowa nams rgyamtsowa yin bey-e yi jiraju 18/ ene bi bui kemen jarliγ bolun,

それから1年たったとき、御父上の仏寺の落慶式をするときこの方もいらして、ズラッと並んだ仏像を詳しく御覧になって、御前ソナム・ギャムツオの像を指差されて、「これは、わたしである」と仰有られた。

D4N : rje gong mas yab la gnang ba'i phyag 'phreng de'i 3/ mtshams 'dzin 'phyugs pa rnams 'chos pa gnang bas kun ya mtshan du gyed.

AN : basa uridu gegen i sümer taiji dur soyorqarsan eriken-ü qaγalta yin 19/ jabsar soliγsan i jasarsan dur bügüdeger γaiqaltubai.

前代ソナム・ギャムツォが御父上に賜ったところの御数珠の境を持ち違えていたのを、〔ユンテン・ギャムツォが〕正されたので、皆驚いた。

(22) D4N : 12b2/ lcags yos kyi lo thu med kyi rgyal pos mjal bar byon pas,

AN : p.69.19/ temör taulai jil dur tümed-ün qaγan p.70.1/ jolγara iregsen dür,

AT : 237v2/ temör 3/ taulai jil tümed-ün qaγan jolγar-a irebei.

鉄の兎の年、トメトの王が御会見にいらして、



(23) D4N : 12b6/ gsol ja zhal dkar gang der 'dus pa'i skye bo mang po zhig la gnang pas, thams cad kyi skom pa sel nus pa'i ya mtshan pa byung.

AN : p.70.1/ joγur un siγajan du cai i soyurqarsan i bügüdeger umdaban qanursan dur eng γaiqal-tubai.

AT : 237v3/ jaγurun caγajang cai ögejü umdan i 4/ qangγaba.

御茶と白い御馳走をそこに集まった人々全てに御与えになったので、誰もが乾きを癒すことができるという希有が生じた。

(24) D4N : 17a4/sog po tsho chen drug gi 'bul ba sogs ni rgyal po chen pos dpya khral bsdu ba bzhin dang, dpal 'byor longs spyod rnam thos kyi bu'i kheng pa 'phrog 5/ nus pa ste,

AN : p.70.2/ mongγol-un jirγuγan yeke qosiγu ulus-un ergüce terigü-ten i yeke qaγan-u sang-un alba quriyaqu 3/ metü ber, coγ olbori yin ed aγurasun yiar bismel tegri yin ner-e yi quliyaqu metü bolursan bui.

AT : 237v4/ mongγol jirγuγan yeke ulus 5/ ergüce terigüten yeke ed aγurasun caγlasi 6/ ügei ergüjuküi.

モンゴル六大部族の贈り物などが、大ハーンが税金を集める如くに〔集り〕、栄光と財産は毘沙門の息子の慢心を奪うことができ〔る如きであっ〕て、

(参考 4) AN : p.70.4/ mongγol ulus tu tsongkaba yin sasin i naγan metü geigülbei.

AT : 237v6/ mongγol dur jongkaba yin 7/ sajin i naγan metü geigülbei.

モンゴル国にツォンカパの教えを太陽の如くに輝かしめた。

(25) D4N : 16a6/ byang phyogs mi'i rje bo sa skyong dga' ldan pa sogs sde b1/ dpon che phra mang po dang, ser 'bras dge gsum gyis thog drangs pa'i chos sde khag rnams kyi gdan 'dren pa dang bcas,

AN : p.70.4/tendece umara jüg-ün kümün-ü ejen 5/ sara malaγatan-u γajar tedkügci noyan terigüten yeke baγ-a noyad ba dgwa ledan sera 6/ 'brasbung γurban ekilen olan keid-ün elcis irejü jalaγsan dur, möngke γajara ögede bolbai.

AT : 237v7/ tendece umara 8/ jüg-ün sara malaγatan-u noyan terigüten 9/ takil-un sera berasbung dge ldan 10/ γurban ekilen olan keid-ün elcis irejü 11/ jalγasan dur,möngke γajara ögede bolbai.

北方の人の王にして、地を司るものガンデンパなどの大小の沢山の諸侯と、セラ、デプン、ガンデン三寺をはじめとする諸の寺の案内の人々と共に

Appendix C :

パクパ聴聞録における教師のリスト (SKKB, Vol. 7, No. 315)

1. slob dpon gNyan 'od srung (286.4.4-287.1.3)
2. slob dpon dge ba'i bshes gnyen Yon tan dpal (287.1.3-6)
3. slob dpon dge ba'i bshes gnyen mChims nam mkha' grags (287.2.1-3)
4. bla ma chos kyi rje'i thugs kyi sras slob dpon Tshogs kyi mchog (288.2.5)
5. Kha che'i pandita chen po Shri tathagatabhadra (288.2.5-3.3)
6. slob dpon dge ba'i gshes gnyen Shang Shung rdo rje 'od zer (288.3.3-4)
7. bla ma dge ba'i bshes gnyen rdo rje 'dzin pa chen po Glo bo lo tsa ba (288.3.4-4.4)
8. rnal 'byor gyi dbang phyug rGa lo (291.1.6-4.2)
9. slob dpon Rin po che skyob pa dpal (291.4.2-3)
10. slob dpon dge ba'i bshes gnyen Nyi ma dpal (291.4.3-292.3.2)
11. slob dpon mngon pa Rin chen rdo rje (292.3.2-4.1)
12. slod dpon dge ba'i bshes gnyen 'Bum pa 'od zer shes rab (292.4.1-293.1.5)
13. slob dpon 'dul ba 'dzin pa Sha kya byang chub (293.1.5-2.6)
15. slob dpon dge ba'i bshes gnyen sDom brtson seng ge zil gnon (293.2.6-3.3)
16. slob dpon 'Bras khud pa (293.3.3-4)
17. slob dpon dge ba'i bshes gnyen sDom brtson dam pa mngon pa ba dBang phyug brtson 'gros (293.3.4-294.1.1)
18. gTsang rong gi slob dpon sngags pa rdo rje 'dzin pa chen po Chos kyi mngon po (294.1.1-2.6)
19. slob dpon dge ba'i bshes gnyen Lha btsun (294.2.6-4.4)
20. dge ba'i bshes gnyen Sangs rgyas 'bum (294.4.4- )



Appendix D :

『ゴル仏教史』におけるパクパ弟子のリスト (NCB, 163a7-3)

man ngag gi bka' babs

1. dKon mchog dpal
2. dGe slong Kun blo

rgyud kyi bka' babs

3. dga' ldan pa bKra shis dpal
4. dga' ldan pa Kun bsod

mgon po'i bka' babs

5. Dam pa Kun dga' grags
6. mnyes pa'i mchos gyog tvi shri Grags 'od
7. Glo chen sangs rgyas sras ri phug pa Dar ma rgyal mtshan
8. phro lung pa Kun smon

Nus pa'i bdag nyid

9. gcung Phyag na rdo rje
10. rgyal po Jin kim

che ba'i bdag nyid

11. shar pa dus 'khor ba Ye shes rin chen
12. shar pa Kun dga' seng ge
13. shar pa 'Jam dbyangs
14. gzhi thog pa Rin chen rgyal mtshan
15. khang gsar ba tvi shri Sangs rgyas dpal
16. gnyan Tshul khrims rgyal mtshan
17. cha gan dBang phyug rgyal mtshan

Appendix E :

パクパ『タントラ目録』

* パクパ『タントラ目録』(SKKB, Vol. 7, No. 177) に対応するプトン仏教史目録部 (西岡, 1983) の番号を付けて示した。ただしこのタントラ目録は、プトンのものと異なり、翻訳者に言及していないので、また筆者の無知のためもあって、identify できないものがいくつか残った。識者の御教示を請いたい。

gnyis su med pa'i rgyud la 【1474】 kyi'i rdo rje'i rtsa rgyud brtag pa gnyis pa / [thun mong ma yin pa'i bshad rgyud] 【1475】 'phags pa mkha' 'gro ma rdo rje gur /[thun mong gi bshad brgyud] 【1476】 dpal sam pu ta thig le'i rgyud phyi ma dang bcas pa / 【1521】 brtag pa gnyis pa'i rgyud phyi ma'i phyi mar grags pa phyag rgya chen po'i thig le / 【1523】 ye shes thig le, 【1524】 de kho na'i sgron ma / 【1525 ?】 gsang ba'i sgron ma / de kho na nyid kyi man ngag [ste thig le'i rgyud lnga] / 【1522】 ye shes snying po rnal 'byor ma'i rgyud / 【1526】 rnyog pa med pa'i a ra lli / 【1527】 rdo rje a ra lli / 【1528】 ri gi a ra lli / 【1545】 mtshan yang dag par brjod pa / 【1546】 dam pa dang po'i rtsa rgyud / 【1547】 dus kyi 'khor lo'i rtsa rgyud bsdus pa / 【1546】 dbang gi don ston pa'i rgyud kyi dum bu / 【1472】 mgon po mngon par 'byung ba'i rgyud / 【?】 gsang sngags kyi spyod pa rgya mtsho mchog tu gsang ba las thod pa brtag pa'i rgyud gsum / 【1463】 mi g-yo ba'i rgyud gsang ba chen po rnams /

shes rab kyi rgyud la 【1477】 'khor lo bde mchog rtsa ba'i rgyud / [bshad pa'i rgyud] 【1479】 mkha' 'gro ma 【1480】 kun spyod / 【1478】 a bhi dha na / 【1481】 rdo rje mkha' 'gro rgya mtsho / 【1483】 he ru ka mngon 'byung / 【1486】 phag mo mngon 'byung / 【1482】 sdom pa 'byung / 【1489】 rnal 'byor ma bzhi kha sbyor gyi rgyud / 【1490】 'bum pa gsum pa las ral ba gyen du brjes pa'i nang nas byung ba'i le'u gcig / 【1529】 sangs rgyas mnyam sbyor rtsa ba'i rgyud / 【1530】 rgyud phyi ma / 【1531】 phyi ma'i phyi ma / 【1539】 zla gsang thig le / 【1532】 rdo rje gdan bzhi / 【1546 ?】 dbang gi don ston / rgyud kyi dum bu / 【1534】 mantra am sa / 【1533】 bshad rgyud chen mo / 【1536】 ma ha ma ya / 【1538】 sangs rgyas thod pa / 【1537】 rdo rje bdud rtsi rnams so /

thabs kyi rgyud la 【1447】 dpal gsang ba 'dus pa'i rgyud 【1448】 phyi ma / 【1447】 rdo rje phreng ba / 【1450】 dgongs pa lung ston / 【1452】 lha mo bzhis zhus / 【1451】 ye shes rdo rje kun las btus pa / 【1456】 gshin rje gshed dgra nag / 【1458】 gzhon nu gdong drug / 【1459】 rdo rje 'jigs byed / 【1464】 rnam par snang mdzad 【/】 sgyu 'phrul dra ba rnams so /

rnal 'byor gyi rgyud la 【1434】 rtsa ba'i rgyud (/) de kho na nyid dsdus pa / 【1435】 rdo rje rtse mo / 【1439】 dpal mchog dang po / 【1436】 khams gsum rnam rgyal / 【1446】 mgon po kun snang / 【1437】 ngan song sbyong rgyud / 【1494】 nam mkha' dang mnyam pa'i rgyud / 【?】 rab tu gnas pa'i rgyud / 【1455】 thams cad gsang ba rnams so /

bla ma chos kyi rje'i zhal snga nas bsgyur ba ni / 【1440, 1453】 rdo rje snyin po rgyan gyi rgyud / 【?】 'dub rab gsal / 【1441】 sku gsung thugs kyi gsang ba rgyan gyi bkod pa'i rgyud / 【1442】 gsang ba nor bu thig le [rnal 'byor gyi rgyud du 'du bar gsal la] / 【1162】 rdo rje sa 'og gi rgyud [bya ba'i rgyud kyi khongs su 'du mod kyi / 'gyur mdzad pa po gcig pa'i phyir / phyogs gcig tu brigs pa'o] //

spyod pa'i rgyud la / 【1428】 rnam par snang mdzad mngon par byang chub pa'i rgyud / 【1119】 'jam dpal rtsa ba'i rgyud / 【1430】 gshin rje gshed khro bo rnam par rgyal ba'i rgyud / 【1431】 rgyud phyi ma / 【1432】 phyi ma'i phyir ma / 【1193】 mi g-yo ba'i rtog pa chen po /

bya ba'i rgyud la rigs gsum so so'i rgyud / rig pa'i lha mo'i rgyud / thun mong gi rgyud gsum las / rigs gsum so so'i 'jam dpal gyi rgyud la 【1120】 dpa' po gcig tu grub pa /

dum bu'i rgyud la 【1121】 'jam dpal gyi zhal nas gsungs pa / 【1122】 'jam dpal gyi dmod btsugs pa / 【1123】 shes rab blo 'phel / 【1128】 shes rab bskyed pa / 【1129】 'jam dpal gho sh 【1130】 ngag gi dbang phyug / 【1132】 'jam dpal la lha mo brgyad kyis bstod pa / 【1124】 'jam dpal yig 'bru gcig pa rnams so /

spyan ras gzigs kyi rgyud la / 【1134】 don yod zhags pa rtsa ba'i rgyud / 【1135】 don yod zhags pa'i rtog pa chen po / 【1140】 thugs rje chen po phyag stong sbyan stong gi rtog pa rgyas pa / 【1142】 thugs rje chen po zhal bcu gcig pa'i gzungs / 【?】 za ma tog bkod pa'i rtog pa rgyas pa / 【1159】 spyan ras gzigs ha la ha la'i rtog pa rgyas pa /

'phags pa me kha la / 【1152】 snying rje mi bshol ba'i gzungs / 【1151】 spyan ras gzigs kyi yum / 【1160】 spyan ras gzigs yon tan bsam gyis mi khyab pa / 【1158】 yid bzhin gyi nor bu 'khor los sgyur ba'i rtog pa chen po / 【1149】 ha ya gri wa'i gzungs kyi dum bu / 【1157】 seng ge sgra'i dam bcas pa'i gzungs kyi dum bu rnams so /

phyag na rdo rje'i rgyud la / 【1429】 phyag na rdo rje dbang bskur ba'i rgyud / 【1188】 kri ya rig pa mchog gi rgyud / 【1190】 dpung pa bzang po / 【1162, 1163, 1164 ?】 rdo rje sa 'og gi rgyud sna 'dres gcig / 【1177】 rdo rje rnam 'joms / 【1178】 de'i bzhad rgyud (/) ri rag khang bu brtsegs pa / 【1179】 rdo rje mi pham pa me ltar 'bar ba rmongs byed / 【1180】 rdo rje snying po'i gzungs / 【1181】 rdo rje phra mo thogs pa med pa zhes bya ba'i gzungs / 【1196】 'phags pa stobs po che'i gzungs / 【1180】 lag na rdo rje bcu'i gzungs / 【1197】 rdo rje 'jigs byed kyi dum bu / 【1182】 'phags pa rdo rje mchu / 【1183】 gnam lcags mchu / 【1184】 lcags kyi mchu / 【1186】 lcags kyi mchu nag po / 【1201】 drang srong gis klul dmod bor ba'i gzungs / 【1187】 klu'i rgyal po sog ma med pa'i rtog pa rgyas pa rnams so /

rig pa'i lha mo rnams kyi gzungs la / 【1218, 1219, 1220, 1221, 1222】 gtsug tor rnam rgyal / 【1226】 gtsug tor dri med / 【1223, 1224, 1225】 gtsug tor gdugs dkar rgyas 'bring gsum / 【1207】 sgrol ma las sna tshogs pa'i rgyud / 【1212】 ku ru ku lle'i

rtog pa / [1227] 'od zer can gyi rtsa ba'i sngags / [1228] de'i rtog pa chen po / [1231] 'phags pa rdo rje lcags sgrog / [1232] skul byed ma'i gzungs / [1395] gza' rnams kyi yum / [1213-1217] gzungs grwa lnga / [1296] 'phags pa be con nag po / [12 86] 'phags pa yangs pa can gyi grong khyer du 'jug pa / [1294] rgyal mtshan gyi rtse mo'i dpung rgyan / [1218-1222 ?] 'phags pa rnam par rgyal ba / [1299] 'phags pa phyir bzlog pa rnam par rgyal ba can ma / [1305] thams cad la mi 'jigs pa sbyin pa / [1302] gzhan gyis mi thub pa mi 'jigs pa sbyin ma / [1314] phyir bzlog pa stobs can ma / [1308] bar du gcod pa thams cad rnam par sbyong ma / [1233] 'phags pa dug sel ma / [1300] mdangs phyir 'phrog pa'i gzungs / [1497] rin chen phreng ba'i dum bu / [1239] 'phags pa rgyal ba can / [P. No. 185] barna sha ba ri'i gzungs / [?] me ltar 'bar ba'i gzungs / [1237] rig sngags kyi rgyal mo sgron ma mchog / [1 234] dbyig ldan ma'i gzungs / [1146] yi ge drug pa'i gzungs / [1309] 'gro lding ba'i rig sngags kyi rgyal mo / [1243] dpal chen mo'i gzungs / [1317] nad thams cad rab tu zhe bar byed pa'i gzungs / [1318] rims nad thams cad rab tu zhi bar byed pa'i gzungs / [1320] mig nad thams cad rab tu zhi bar byed pa'i gzungs / [1307] mig nad rnam par sbyong ba'i gzungs / [1322] gzhang 'brum rab tu zhi bar byed pa'i gzungs / [1316] rig sngags kyi rgyal mo dbugs chen mo / [1323] mi rgod rnam par 'joms pa'i gzungs / [P. No. 397 ?] lha mo dbyangs can ma'i bstod pa / [1246] sangs rgyas thams cad kyi yum / [1298] gtsug gi nor bu'i gzungs / [1297] tsandan gyi yan lag dri ma med pa / [1325 ?] stong 'khyil ba / [1238] lha mo brgyad kyi gzungs / [1 313] de bzhin gshegs pa'i yum gyi gzungs / [1283] byang chug snying po rgyan gyi gzungs rnams so /

thun mong gi rgyud la / [?] ..g gsum bkod pa'i rgyal po / [?] gsang ba spyi rgyud / [1 189] legs par grub pa / [1248] bsam gtan phyi ma / [208-216] gser 'od dam pa / [125 3] 'og min gyi tshe dpag med / [1254] bde ba can gyi tshe dpag med / [1289] chos 6yi rgya mtsho / [1271] dkyil 'khor brgyad pa / [1250] nor bu rgyas pa'i gzhal med khang / [1211] 'jigs pa brgyad laas sgrol ba / [1293] gzungs chen po [1285] gsang ba'i ring bsrel gyi za ma tog / [225] sgo mtha' yas pa'i gzungs / [46] mtshan mo bzang po / [P. No. 472] 'phags pa dkon mchog ta la la / [1326] ye shes ta la la / [1410] ye shes skar mda' / [1292] me tog brtsegs pa / [1422] rig sngags kyi rgyal mo kun nas 'od / [1147] kun tu bzang po'i gzungs / [1290] gser can gyi gzungs / [37 4] 'dus pa chen po'i gzungs / [13] kun tu rgyu ba dang mthun pa dang mi mthun pa / [351] sangs rgyas bdun pa / [1324] bu mang po rton pa / [1262] sangs rgyas kyi snyin po'i chos kyi rnam grangs / [1261] sangs rgyas kyi snying po'i gzungs / [1263] sangs rgyas kyi yan lag dang ldan pa / [1281] sor mo can / [1282] lus kyi dbyibs md zes pa / [?] bde ba bsgrags pa / [1311] mchod pa'i sprin gyi gzungs / [1325] stong ' gyur / [?] kam ka ni'i gzungs / [408 ?, P. No. 782] chos thams cad kyi yon tan bkod pa'i rgyal po / [226]sgo drug pa'i gzungs / [1332] rten cing 'brel bar 'byung ba'i snying po'i gzungs / [?] bdud rtsi snam gyi gzungs / [1390] klu'i rgyal po gzi can



gyis zhus pa'i gzungs / [314] sprin chen po las char dbab pa rlung gi dkyil 'khor zhes bya ba'i le'u (/) klu thams cad kyi snyin po / [374] 'dus pa chen po rin chen .tog / [338] 'dus pa chan po nyi ma'i snyin po / [1272] sangs rgyas bcom ldan 'das kyi mtshan brgya rtsa brgyad pa / [1273] nye ba'i sras brgyad kyi mtshan brgya rtsa brgyad pa'i gzungs sngags dang bcas pa rnams so /

snga 'gyur gyi rgyud la / [P. No. 78] rdo rje phur pa rtsa ba'i dum bu / [P. No. 457, 460 ?] gsang ba snying po / [?] sgyu 'phrul bla ma / [P. No. 459 ?] lha mo sgyu 'ph rul / [P. No. 458] thabs kyi zhags pa / [?] sgyu 'phrul brgyud cu pa rnams so /

'jig rten pa'i rygud la / [1392] tshogs kyi bdag po'i gzungs / [1393] nor bu bzang po'i gzungs / [1397] nor rgyun ma'i gzungs / [1399, 1400] gar mkhan mchog gi rtog pa chen po rnams so //

Appendix F :

パクパの著作タイトル諸資料

パクパの著作年表を第１部第４章第２節に掲げたが、そこでは特に必要な著作以外は、単にサキャ全書の著作番号を挙げたのみであった。サキャ全書の目次のタイトルは、おおよそ各著作の最初に細字で書かれている題名に基づいている。一方サキャ全書には Zhu chen Tshul khrims rin chen によるカルチャクが収められている（SKKB, Vol. 7, No. 321)。このカルチャクに挙げられる題名は、しばしば上の目次の題名と異なっている。Zhu chen は、本文自体が題名を含んでいる場合、それを採用しているが、それがしばしば上の細字のタイトルと異なっているからである。そのほか、Zhu chen によるタイトルには、著作本文の最初の数語を“ …… ma ”という形で標題に組み込んでいる場合も多く、そのようなものが伝統的な著作名となっている。それは『サキャ派年代記』に掲げられる著作リスト（ただしそれがいつごろのリストの転載かはわからない）のタイトルと、しばしば一致する。そこでまずカルチャクに挙げられるタイトル、および著作の初めに含められているタイトルが、サキャ全書目次のタイトルと異なる場合、それらをそれぞれ (a), (b) に挙げた。さらに多くの著作のコロフォンには、“ …… 'di ni ”という形でその著作の内容を簡単に表すようなタイトルの表示がある。これはその著作の位置を知る上で有益なことが多いように思われるので、これを (c) に掲げた。上に言及した『サキャ派年代記』のパクパ伝における著作リストは、各著作を内容によって分類してある点に特色がある。その順序やタイトルは、必ずしも現在のサキャ全書のものと一致するわけではないが、おおまかな構成は対応しているように思われるので、その分類項目名を〔　〕に入れて適当なところに挿入してみた。もちろん、一致しない箇所がかなりある以上、それはパクパの著作全体の仕組みを見通すための目安にすぎない。なお上のZhu chen のカルチャクには、gsan yig dbang gi rgyal po なる聴聞録における異名を何度か報告しているので、それは * SYBG という略号のもとに載せた。この gsan yig が何を指しているかということの検討は後の課題としたい。そのほサキャ全書の目次（略号 KC)、あるいは Zhu chen のカルチャク（略号 PDM）が何らかの情報を記しているときには、必要に応じて * のもとに取り上げた。



〔1. bstod pa dang gsol 'debs kyi skor〕

1. Shes bya rab gsal.
2. Lam 'bras brgyud pa'i phyag mchod. (a) Lam 'bras brgyud pa'i phyag mchod mi 'phrogs ma.
3. rGyud 'grel brgyud pa'i gsol 'debs.
   *(PDM : rdo rje 'chang gi brtag gnyis kyi 'grel pa ku mu ti dang bcas pa'i gsol 'debs)
4. Ba ri ba'i chos skor gyi brgyud 'debs.
5. 'Jigs byed brgyud pa'i gsol 'debs. (c) bcom ldan 'das 'jam dpal khros pa'i bla ma brgyud pa'i rim pa la gsol 'debs pa'i rab tu byed pa.
6. Bla ma brgyud pa'i mtshan 'bum sngags can.
7. Bla ma dam pa la gsol ba 'debs pa'i rab byed la spel ba gong ma. (c) chos kyi rje dpal ldan sa skya pandi ta chen pos mdzad pa'i bla ma la gsol ba 'debs pa'i rab tu byed pa la rnam par spel nas / de nyid la gsol 'debs pa.
8. 'Og ma. (a) gSol ba 'debs pa'i rab byed sku'i spyod pa la spel ba.
9. Bla ma spyi'i bstod pa mu tig phreng ba. (c) bla ma'i bstod pa mu tig gi phreng ba zhes bya ba shloka bcu gcig pa.
10. Chos rje pa'i bstod pa gong ma.
11. Chos rje pa'i bstod pa 'og ma. (c) 'gro ba'i bla ma chos rje rin chen la // cung zad bstod cing gsol ba'i rab byed.
12. Chos spyod bcu pa cung zad rgyas par spel ba. (c) dpal ldan bla ma chos kyi rje thugs brtse ba chen po dang ldan pas mdzad pa'i chos spyod yan lan bcu pa zhes bya ba las / de nyid kyi zhabs rtul spyi bos len pa'i dag tshul blo gros kyi mying dang ldan pas cung zad rgyas par spel ba.
13. Chos spyod yan lag bcu pa.
14. Chos rje pa la bstod pa ri bo rtse lngar bris pa.
15. bSod nams cu gter ma. (a) dKon mchog gsum la bstod pa.
16. Chos rje pa'i mtshan spel ba'i bstod pa. (a) 〔Nos. 16, 17〕 Chos rje pa'i mtshan la spel ba'i bstod pa gnyis.
17. Chos rje pa la bstod pa.
18. Bla ma'i bstod pa gang thugs ma. (a) 〔Nos. 18, 19, 20-1, 20-2〕 Chos rje pa la bstod pa bzhi.
19. Chos rje pa la bstod pa tshigs bcad gnyis.
20. bsTod pa tshigs bcad gnyis.
21. Thogs med sku mched sogs la bstod pa.
22. Chos rje pa la bstod pa gnyis.
23. Thos pa rgya mtsho ma.
24. mChog brgyad kyi bstod pa.
25. Bla ma la thun mong ma yin pa'i sgo nas gsol ba 'debs pa'i 'grel pa. (a)

Bla ma la thun mong ma yin pa'i sgo nas gsol ba 'debs pa gang drin ma'i 'bru 'grel.

26. Bla ma la mandala 'bul zhing gsol ba 'debs. (a) Bla ma la mandala 'bul zhing gsol ba 'debs pa sho dgon gyi slob dpon sbyong nga ba'i don du mdzad pa. (c) bla ma dam pa la mandala dbul zhing gsol ba gdab pa'i man ngag.

27. Bla ma'i rnal 'byor. (a) Bla ma'i rnal 'byor la'o shu'i don du mdzad pa. (c) bla ma'i rnal 'byor gyi man ngag chos rje sa skya pa'i zhal gdams.

28. rTsa ba'i bla ma thun mong ma yin pa'i sgo nas gsol ba 'debs pa. (a) Bla ma la thun mong ma yin pa'i sgo nas gsol ba 'debs pa phyogs bcu dus gsum ma dge slong gnas brtan byang chub bzang po'i don du mdzad pa.

29. Chos rje pa'i rnam thar bsdus pa. (c) bla ma chos kyi rje rin po che bde ba nas bde bar gshegs pas lung bstan pa'i cha zur tsam brjod pa.

30. Chos rje pa'i bstod pa me tog phreng ba. (a) Chos rje pa la rnam thar gyi sgo nas bstod pa me tog phreng ba.

31. Lam 'bras lam skor sogs kyi gsan yig. (c) bla ma brgyud pa'i mtshan.

〔3. Bla med skor〕

32. brTag gnyis kyis bsdus don. (a) dPal kye rdo rje'i bstag pa gnyis pa'i bsdus pa'i don. (b, c) dPal kai rdo rje'i bsdus pa'i don.

33. rGyud kyi mngon par rtogs pa ljon chung.

34. Mangga la yab yum la gnang ba'i bkra shis gyi tshigs su bcad pa.

35. rGyal bu ji big yab yum la gnang ba'i bkra shis kyi tshigs su bcad pa.

36. sGrol ma'i zhal phyag la spel ba'i bkra shis kyi tshigs su bcad pa. (a) dPon ma chen mo la gnang ba'i bdra shis.

37. dPal brtag pa gnyis pa'i 'grel pa dag chung dang spyi don gsal ba.

37-1 (a) brTag gnyis kyi 'grel pa dag ldan chung ba.

37-2 (a, b) dPal kai rdo rje'i spyi don gsal ba.

38. rDo rje gur gyi le 'grel. (b) 'Phags pa mkha' 'gro ma rdo rje gur gyi le'u'i 'grel rnam par gzhag pa.

39. dPal yang dag par sbyor ba'i rgyud kyi rgyal po'i bsdus don.

40. Yig brgya bzla ba'i man ngag. (c) he ru ka'i yi ge brgya ba zlos pa'i man ngag.

41. Bla ma dam pa la mandala dbul zhing gsol ba gdab pa'i man ngag.

42. dPal kyai rdo rje'i mngon rtogs yid bzhin nor bu.

43. Kyai rdo rje'i sgrubs thabs srung 'khor dang bcas pa.

44. mNgon rtogs yang lag drug chung. (c) yan lag drug pa'i mngon par rtogs pa rgyu mtshan dang bcas pa gsal bar brjod pa.

* (KC : kyai rdo rje'i mngon rtogs yan lag drug chung ; PDM : SYBG snyen sgrub yan lag bzhi drug gi mi 'dra ba'i khyad par)



45. bsNyen pa'i grangs tshad kyi zhus len.

46. Dam tshig gsum gyi glu'i rjes la bya ba'i smon lam.

47. Kyai rdo rje'i bdag 'jug gi cho ga dbang la 'jug pa. (b, c) dPal kyi'i rdo rje'i 'khor du bdag nyid 'jug cing dbang blang ba'i cho ga dbang la 'jug pa.

* (PDM : SYBG bdag 'jug dpal 'byung ma)

48. dBang gong ma gsum gyi lag len tshigs bcad ma.

49. dPal kyai rdo rje'i dkyil 'khor du bdag nyid 'jug pa'i cho ga snying po gsal ba.

50. Lam dus kyi dbang rgyas pa blang ba'i lag len.

* (PDM : rgya mtshor go go can gyi don du mdzad pa)

51. Kyai rdo rje lus dkyil gyi sgrub thabs. (c) dpal kyi'i rdo rje'i lus kyi dkyil 'khor sgom pa'i thabs nang gi de nyid gsal ba.

52. Tshogs 'khor bdud rtsi'i bum pa. (a, b, c) dPal kyi'i rdo rje'i tshogs kyi 'khor lo'i cho ga bdud rtsi'i bum pa.

53. De'i lung sbyor. (a) De'i lung sbyor rdo rje gur nas phyung ba.

54. Tshogs 'khor bsdus pa. (c) tshogs kyi 'khor lo'i cho ga.

55. bDud rtsi 'byung ba.

56. bDag med lha mo bco lnga'i mngon rtogs. (c) rje btsun rdo rje bdag med ma lha mo bco lnga'i dkyil 'khor gyi sgrub thabs.

57. bsTod pa rnam dag phreng ba. (c) rje btsun rdo rje bdag med ma'i dkyil 'khor la bstod pa rnam dag gi phreng ba.

58. Dag pa gsum gyi khrid yig. (c) dag pa rmam pa gsum gyi sgo nas rnal 'byor pas lam nyams su blangs pas / 'jig rten las 'das pa'i go 'phangs sbyor bar byed pa'i tshul.

59. dBang gsum pa'i lam.

60. Tshogs sbyor gnyis kyi mngon rtogs. (c) thun mong ma yin pa'i man ngag gi tshogs sbyor gnyis kyi mngon par rtogs pa.

61. 'Pho ba'i rnal 'byor.

62. Khro bcu'i bstod bskul. (c) rdo rje khro bo'i phrin las la // bskul ba'i tshul.

63. Seng ge mtha'i zhus lan. (a) Seng ge mtha'i zhus lan rnam par nges pa. (c) dris pa'i lan rnam par nges pa.

64. dBang phyug 'bum gyi dris lan. (b) rnam par nges pa zhes bya ba. (c) ldan gyi yul du skyes pa'i blo gsal ba'i dge slong dbang phyug 'bum zhes bya bas dris pa la / 'phags pas lan btab pa'i rab tu byed pa.

65. Dus 'khor thugs dkyil gyi mngon rtogs. (c) dpal dus kyi 'khor lo'i thugs kyi dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs.

〔4. bDe mchog skor〕

66. bDe mchog nag po pa'i dbang gi sdom tshig.

66-1 (c) dpal dus kyi 'khor lo'i thugs kyi dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs.

66-2 (c) tshigs su bcad par bsdebs pa.

67. bDag 'jug gi cho ga. (a, b, c) dPal 'khor lo bde mchog gi dkyil 'khor du bdag nyid 'jug cing dbang blang ba'i cho ga.

68. Nag po pa'i sgrub thabs snying po. (a, b) dPal 'khor lo bde mchog gi mngon par rtogs pa sgrub pa'i thabs kyi snying po. (c) dpal 'khor lo sdom pa'i mngon par rtogs pa slob dpon sbyod pa'i rdo rjes mdzad pa'i don nyams su blang ba'i tshul go bde bar bkrol bsgrub thabs snying po zhes bya ba.

69. dPal 'khor lo bde mchog gi mchod pa'i cho ga kun tu bzang po'i mchod sprin.

(c) dpal 'khor lo bde mchog gi sgrub pa'i thabs gyi yan lag // dkyil 'khor gyi 'khor lo mchod pa'i cho ga kun tu bzang po'i mchod sprin zhes bya ba.

70. sByin sreg gi sdom tshig. (c) rgyal ba'i gsung rab gces pa'i mdzod 'dzin y ang dag grub brnyes bla ma brgyud pa las 'ongs pa'i // dngos grub 'gugs byed las kyi mchog rab sbyin sreg cho ga'i rnam gzhag rim pa rab gsal ba.

71. sByin sreg cho ga rgyas pa. (b) dpal 'khor lo sdom pa'i spyin sreg gi cho ga. (c) slob dpon sbyod pa'i rdo rjes mdzad pa'i rjes su 'brangs nas / 'khor lo sdom pa'i sbyin sreg gi lag tu blang ba'i rim pa'i sdom nyi shu bdun pa zhes bya ba.

72. Dril bu lus dkyil gyi sgrub thabs. (a, c) dpal 'khor lo bde mchog gi lus kyi dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs nyung zhing gsal ba.

73. bDe mchog lu hi pa'i lugs kyi sgrub thabs rim pa gsal ba. (a, b) dPal 'khor lo bde mchog gi dkyil 'khor gyi 'khor lo'i sgrub pa'i thabs rim pa gsal ba.

(c) slob dpon rnal 'byor gyi dbang phyug lo hi pas mdzad pa'i gzhung nyams su blang ba'i tshul / dpal 'khor lo bde mchog gi sgrub pa'i thabs rim pa gsal ba zhes bya ba.

74. sGrub thabs bsdus pa. (a) De'i sgrub thabs bsdus pa. (c) slob dpon lu hi pa'i rjes su 'brang ba'i dpal 'khor lo bde mchog gi dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs.

* (PDM : SYBG ngag 'don)

75. bDe mchog gi rgyun bshags. (a) bDe mchog gi rgyun bshags dpal na ro pa las brgyud de 'ongs pa.

76. dKyil 'khor la bstod pa'i rab byed. (c) dpal bde mchog 'khor lo'i dkyil 'khor gyi lha tshogs la bstod pa'i rab tu byed pa.

77. mGo mtshams ma brgyad kyi bstod bskul.

78. Dril bu pa'i dbang gi bya ba bsdus pa. (c) lus kyi dkyil 'khor la brten te dbang bskur ba'i cho ga mdor bsdus.

79. Lus dkyil gyi bdag 'jug. (c) slob dpon rdo rje dril bu pa'i gzhung gi rjes su 'brangs pa / 'khor lo bde mchog lus kyi dkyil 'khor du bdag nyid 'jug cing



dbang blang pa'i cho ga.

80. Rim lnga'i khrid yig. (a, b) dPal 'khor lo sdom pa'i rim pa lnga pa'i man ngag.

81. dPal 'khor lo bde mchog lha lnga'i dkyil 'khor gyi sgrub thabs. (c) dpal 'khor lo bde mchog lha lnga'i dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs slob dpon rdo rje dril bu pas mdzad pa'i nyams su blang ba'i rim pa.

82. Lhan skyes kyi sgrub thabs. (c) 'khor lo bde mchog lhan cig skyes pa'i sgrub thabs / bla ma brgyud pa'i man ngag gis brgyan pa / yan lag bcu pa zhes bya ba.

83. Lhan skyes kyi sgrub thabs. (a) De'i sgrub thabs jo sras phag mchu'i don du mdzad pa.

84. 'Khor lo bde mchog gi bkra shis kha che rin chen rdo rjes mdzad pa la zhu dag kha skong mdzad pa. (a, b) dPal 'khor lo sdom pa'i dkyil 'khor gyi bkra shis kyi tshigs su bcad pa. (c) 'di'i tshig rkang ma mnyam pa la sogs pa rnams kyi zhu dag dang srung ba'i 'khor lo'i bkra shis kyi tshigs su bcad pa kha skong ba.

* (PDM : 'di kha che rin chen rdo rjes mdzad pa la tshig rkang ma mnyam pa la sogs pa rnams kyi zhus dag dang kha skong mdzad pa yin.)

85. bDe mchog gi bkra shis. (a) Jim gyim la gnang ba'i bkra shis tshigs bcad.

86. bKra shis. (a) Go go can la gnang ba'i bkra shis tshigs bcad.

[5. rNal 'byor ma]

87. Phag mo lha so bdun ma'i mngon rtogs. (b) rje btsun ma rdo rje phag mo'i dkyil 'khor gyi 'khor lo'i sgrub thabs. (c) rdo rje phag mo mngon par 'byung ba'i rgyud kyi rjes su 'brang ba slob dpon shri umapataddhis mdzad pa'i lag tu blang ba'i rim pa.

88. Na ro kha spyod kyi mngon rtogs. (c) gsung rab zab mo'i snying po'i tshul // rnal 'byor ma dpal sgrub pa'i thabs /.../ rdo rje rnal 'byor ma mkha' la spyod pa'i sgrub thabs / rje btsun na ro pa'i man ngag dpal sa skya pa las brgyud pa.

89. Na ro kha spyod sgrub thabs. (a) De'i sgrub thabs. (c) dpal na ro ta pa'i rjes su 'brang ba'i mkha' spyod ma'i sgrub thabs.

90. Tshogs 'khor. (a) De'i tshogs 'khor. (c) dpal rdo rje rnal 'byor ma'i tshogs kyi 'khor lo'i cho ga'i rim pa.

91. sByin sreg. (a) De'i sbyin sreg. (c) rje sa skya pa'i man ngag las byung ba'i dpal rdo rje rnal 'byor ma'i sbyin sreg gi cho ga.

92. rNal 'byor ma'i sindhu ra'i dkyil 'khor gyi bdag 'jug. (a, b) dPal rdo rje rnal 'byor ma'i sindhu ra'i dkyil 'khor du bdag nyid 'jug cing dbang blang ba'i cho ga. (c) mkha' spyod dpal gyi dkyil 'khor du // bdag nyid zhugs nas dbang

blang ba'i // tshul 'di /.../ dpal rdo rje rnal 'byor ma'i dkyil 'khor du 'jug cing / dbang dang dngos grub ma lus pa blang ba'i cho ga.

93. Za byed rdo rje mkha' 'gro'i sgo nas sdig pa sbyong ba'i cho ga.

〔6. sGyu ma chen po'i skor〕

94. sGyu ma bde ba chen po'i dkyil 'khor gyi cho ga dbang rnam par rol pa. rnal 'byor gyi dbang phyug ku ku ri ba'i man ngag la brten pa'i gzhung rim pa gsal ba'i rjes su 'brangs pa / dpal sgyu ma chen mo'i dkyil 'khor gyi cho ga dbang rnam par rol pa zhes bya ba.

95. dPal sgyu ma bde ba chen mo'i dkyil 'khor gyi sgrub thabs. (a, b, c) dpal sgyu ma chen mo'i dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs sgyu 'phrul rnam par rol pa zhes bya ba.

96. sGrub thabs bsdus pa. (a) De'i sgrub thabs bsdus pa. (c) ma ha ma ya'i sgrub thabs mdor bsdus pa / slob dpon ku ku ri pa'i man ngag gi rjes su 'brangs (pa).

97. sGyu ma chen mo'i tshogs 'khor. (a, b, c) dpal sgyu ma chen mo'i tshogs kyi 'khor lo'i cho ga zhes bya ba.

〔7. sGrol ma'i skor〕

98. sGrol mo lha bcu bdun ma'i dkyil 'khor gyi sgrub thabs. (c)...phyag 'tshal nyi shu rtsa gcig gi rjes su 'brang ba'i sgrol ma'i dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs / mchims pa'i bla ma gong ma dag gis mdzad pa cung zad mi gsal zhing ma rdzogs par gnas pa las / gsal zhing rdzogs pa.

99. Phyag 'tshal nyer gcig lha mo'i sgrub thabs.

100. rDo rje sgrol ma'i sgrub thabs. (a) Gur gyi rdo rje sgrol ma'i sgrub thabs.

101. sGrol ma'i lus dkyil gyi sgrub thabs. (c) rje btsun ma sgrol ma'i lus kyi dkyil 'khor bsgom pa'i man ngag gi rim pa grub pa brnyes pa'i kha che'i slob dpon nyi ma sbas pa'i zhal las brgyud pa'i gdams ngag.

102. Slob dpon thams cad mkhyen pa'i bshes gnyen gyis mdzad pa'i 'jigs pa brgyad skyobs kyi sgrol ma'i sgrub thabs. 'jigs pa brgyad las skyob pa'i sgrol ma'i sgrub thabs / slob dpon thams cad mkhyen pa'i gshes gnyen gyis mdzad pa rdzogs so // kha che'i pandi ta ta tha ga ta bha dra dang / dge slong 'Phags pas rgya'i yul cang to mkhar du bsgyur ba'o.

103. gNas kyi dbang phyug ma'i sgrol ma'i sgrub thabs.

104. rDo rje gur gyi rjes su 'brang ba sgrol ma'i sgrub thabs. (c) 'phags pa mkha' 'gro ma rdo rje gur gyi rjes su 'brang ba'i rje btsun 'phags ma sgrol ma'i dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs.

105. Phyag drug sgrol ma'i sgrub thabs.



106. sGrol ma lha bcu bdun ma'i dbang chog. (c) rje btsun ma sgrol ma'i dkyil 'khor du dbang bskur ba'i cho ga /... slob dpon nyi ma sbas pa'i gzhung dang / chos rje sa skya pa chen pos mdzad pa'i mdor bsdus pa'i cho ga'i rjes su 'brangs (pa).

107. mDor byas kyi sa bcad.

〔8. gSang 'dus〕

108. dPal gsang ba 'dus pa mi bskyod rdo rje'i dkyil 'khor gyi cho ga dbang rab tu gsal ba. (c) sa skya pandi ta chen po nyid kyis nos pa las thob cing / thob pa bzhin du gsal bar byas pa / dkyil 'khor gyi cho ga dbang rab tu gsal ba zhes bya ba.

109. Sangs rgyas* ye shes zhabs kyi rnam thar dang brgyud pa'i rim pa. (c) gang la 'jam dbyangs nyid kyis rjes bzung ba // ye shes zabs kyi rnam thar dang // bla ma brgyud pa'i rim pa gang yin pa // mthong dang thos tshul.

* (KC : gSang 'dus ; PDM : Sangs rgyas)

110. gSang ba 'dus pa 'jam pa'i rdo rje lha bcu dgu'i sgrub thabs. (b) dpal gsang ba 'dus pa lha bcu dgu'i sgrub thabs rin po che'i phreng ba. (c) bcom ldan 'das 'jam pa'i rdo rje lha bcu dgu'i sgrub thabs // chos kyi rgyal po sangs rgyas ye shes zhabs kyi bkod pa'i kun tu bzang po'i bang mdzod las phyung nas / bsdebs legs pa'i ngag gis rnam par sbel ba'i sgrub pa'i thabs rin po che'i phreng ba zhes bya ba.

〔9. gShin rje gshaed kyi skor〕

111. dPal gshin rje'i gshed dgra nag po'i sgrub thabs bsdus pa. (c) ma lus rgyal ba'i mkhyen rab gcig bsdus pa // bcom ldan mgon po 'jam pa'i dbyangs nyid ni // khro bor gyur pa gshin rje gshed mchog gi // sgrub pa'i thabs kyi rim pa gsal ba.

112. dPal rdo rje 'jigs byed kyi mngon rtogs. (c) bcom ldan 'das rdo rje 'jigs byed kyi sgrub thabs gsang ba las ches gsang ba / gsang ba'i rnal 'byor grub pa zhes bya ba.

113. dPal rdo rje 'jigs byed phyag drug pa'i mngon rtogs tshogs 'khor dang bcas pa. (c) 'jam dpal khros pa rdo rje 'jigs byed kyi // sgrub thabs rim pa rab tu gsal ba.

114. 'Jigs byed phyag drug pa'i sgrub thabs. (c) ya ma nta ka'i sgrub pa'i thabs.

115. 'Jigs byed phyag gnyis pa'i sgrub thabs. (c) dpal rdo rje 'jigs byed phyag gnyis pa sgrub pa'i thabs.

116. Phyag gnyis pa'i sgrub thabs. bcom ldan 'das ya ma nta ka'i sgrub pa'i thabs.

117. dPal chen po'i dkyil 'khor du bdag nyid 'jug pa'i cho ga. (a) 'Jigs byed kyi bdag 'jug. (c) dpal chen po'i dkyil 'khor du 'jug cing // dbang blang ba'i cho ga zhes bya ba.

118. dPal chen po'i sbyin sreg gi cho ga. (c) las kyi mchog rab sbyin sreg gi // cho ga.

119. Zhe dgu ma'i sgrub thabs zhi khro rnam rol. (b) 'jam dpal zhi khro rnam par rol pa'i sgrub thabs. (c)...rdo rje 'jigs byed kyi rtog pa rgyas pa las / sgrub pa'i thabs rgya cher gsungs pa'i don / phyag rgya chen po mchog gi dngos grub brnyes pa'i slob dpon la li ta badzras mdzad pa'i gzhung nyams su blang ba'i tshul bde bar bkrol ba.

120. Rab tu gnas pa'i phyag len mdor bsdus. (a) Rab gnas sam gha mitra'i don du mdzad pa.

121. gShed dmar lha bcu gsum ma'i sgrub pa'i thabs. (c) dpal gshin rje gshed dmar po lha bcu gsum gyi dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs / grub pa brnyes pa'i slob dpon dpal 'dzin gyi rjes su 'brang ba.

122. dPal gshin rje gshed dmar po lha lnga'i sgrub thabs. (c) dpal gshin rje gshed dmar po lha lnga'i dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs / slob dpon rnal 'byor gyi dbang phyug birwa pas mdzad pa'i gsal byed.

123. gShed dmar gyi sgrub thabs 'jigs med rnam rol tshogs 'khor dang bcas pa. (a, b, c) dpal gshin rje gshed dmar po'i sgrub pa'i thabs / 'jigs pa med par rnam par rol pa zhes bya ba.

124. dPal gshin rje gshed dmar po lhan cig skyes pa'i sgrub thabs.

125. gShed dmar lhan skyes kyi sgrub thabs.

〔10. sNgags thun mong〕

126. rDo rje theg pa'i rtsa ltung gi rnam bshad dam tshig rab gsal. (c) rdo rje theg pa'i rtsa ba dang yan lag gi ltung ba'i rnam par bshad pa dam tshig rab tu gsal ba zhes bya ba.

127. Bla ma lnga bcu pa'i bsdus don.

〔11. rNal 'byor rgyud kyi skor〕

128. sByong rgyud nas gsungs pa'i tshe dpag med kyi sgrub pa'i thabs. (c) dus min 'chi ba nges par 'joms byed pa'i // cho ga'i rim pa ngan song sbyong rgyud las // legs par gsungs pa bla ma'i man ngag gis // gsal bar byas pa.

129. Tshe dpag med kyi sgrub thabs zab mo. (a, b) mGon po tshe dpag tu med pa'i sgrub thabs.

130. Tshe dpag med kyi bstod pa padmo'i phreng ba. (c) mngon par bstod cing rab tu gsol ba'i tshig // padmo'i phreng ba rnam par spel ba /.../ bcom ldan 'das tshe dang ye shes dpag tu med pa la bstod pa'i tshig // padmo'i phreng ba



zhes bya ba.

131. 'Od dpag med kyi sgo nas sdig pa sbyong ba'i thabs. (c) rje ba ri lo tsa ba las brgyud pa / chos rje sa skya pa'i man ngag zab mo.

132. Mi 'khrugs pa'i sbyin sreg. (c) mi 'khrugs pa'i sgrub pa'i thabs kyi rim pa gzhan du gsal la / sbyin sreg gi cho ga.

〔12. Bya spyod kyi skor〕

133. Phyag na rdo rje'i sgrub thabs. (c) gsang ba'i bdag po dpal phyag na rdo rje'i sgrub thabs.

134. rDo rje rnam par 'joms pa'i sgrub skor byab srung sbyin sreg dang bcas pa. (c) bdom ldan 'das rdo rje rnam par 'joms pa'i sgrub thabs kyi ris pa rje btsun chen po'i zhal snga nas mdzad du zin yang / shin tu gsal bar phye ba la mos pa rnams kyi don du ... sbyar ba'o.

135. 'Jam dpal gyi sgrub thabs. (c) 'jam dpal gyi sgom thabs.

136. 'Jam dpal dpa' bo grub pa'i sgrub thabs. (c) dpa' bo gcig tu grub pa'i sgrub thabs.

137. Thugs rje chen po dang phyag rgya chen po zung 'jug tu nyams su len tshul.

138. Thugs rje chen po phyag bzhi pa'i sgrub thabs. (a) Thugs rje chen po'i sgrub thabs rdo rje khye'u 'dren gyi don du sbyar ba.

139. Thugs rje chen po'i sgrub thabs. (c) thugs rje chen po bsgom pa'i thabs.

140. Seng ge sgra'i sgrub thabs. (a) Seng ge sgra'i sgrub thabs sgang rar sbyar ba. (c) 'jig rten dbang phyug seng ge sgra'i sgrub thabs mdor bsdus pa rje sa skya pa'i man ngag.

141. rTa mgrin khyung shog can gyi sgrub thabs. (a) rTa mgrin khyung gshog can gyi sgrub thabs tre'i sa car bkod pa.

142. Byams pa'i sgrub thabs. (c) 'phags pa byams pa'i chos skor yan lag dang bcas pa... // bla ma ba ri lo tsa ba'i gdams ngag sa skya pa'i zhal gdams yi ger bkod pa.

143. Mi g-yo ba'i sgrub thabs. (a) Mi g-yo ba sngon po'i sgrub thabs.

144. Mi g-yo ba phyag bzhi pa'i sgrub thabs.

145. Mi g-yo ba'i bstod pa. (c) khro rgyal bstod pa'i rab tu byed.

146. rJe btsun rnam par rgyal ma'i sgrub thabs stong mchod dang bcas pa. (c) rtog pa gnyis kyi rjes 'brangs nas // bla ma'i man ngag gis brgyan pa'i // sgrub thabs.

147. gDugs dkar mo can sgrub thabs gzungs bklag thabs dang bcas pa. (c) rje btsun ba ri lo tsa ba las brgyud pa / rje sa skya pa'i man ngag gtsug tor gdugs dkar mo can gyi bsgom thabs dang bklag pa'i thabs.

148. Ri khrod lo ma can gyi sgrub thabs gzungs chog dang bcas pa. (c) rje btsun ma ri khrod lo ma can gyi sgrub thabs chog dang bcas pa.

149. Lo ma can gyi sgrub thabs. (a) Ri khrod ma'i sgrub thabs.

150. Ri khrod lo ma can gyi bstod pa. (c) rje btsun ma ri khrod lo ma can gyi bstod pa.

151. bSrung ba lnga'i dbang chog gi skor.

151-1 (c) phyogs kyi gtor ma. * (cf. No. 170)

151-2 (c) gza' skar gyi gtor ma. * (cf. No. 171)

151-3 (a) Byur bsal. * (cf. No. 172)

151-4 (a) Dug dbyung. * (cf. No. 173)

151-5 (c) rgyal bar byed pa. * (cf. No. 174)

151-6 (a) dBang chog gi sdom. * (cf. No. 175)

151-7 (a) dbang bskur ba dngos. * (cf. No. 176)

* (PDM : de rnams rgyas pa 'og glegs bam ba pa'i nang na bzhugs kyang 'di nyid kyi sngags rnams la 'dra min mang po byung ba phyi mo mang po la gtugs nas zhus dag nan cher byas tshe 'di ltar byung la / 'og ma ni bka' dang bstun pa'i zhu dag bgyis pa yin pas gang dag dpyad par bya'o)

152*. dBang bskur ba'i cho ga'i sdom tshig. * This numbering is wrong. See No. 151-6.

153. A rog che la gnang ba'i bkra shis. (c) phyogs bcu mun pa rnam par sel ba'i mdo'i rjes su 'brang ba'i bkra shis kyi tshigs su bcad pa rnam par spel ba.

154. rGyal po la gdams pa'i rab tu byed pa'i rnam par bshad pa gsung rab gsal ba'i rgyan. (c) bde bar gshegs pa'i gsung rab ma lus pa'i don bsdus nas nyams su len pa'i tshul ston pa / rgyal po la gdams pa'i rab tu byed pa rnam par bshad pa gsung rab gsal ba'i rgyan zhes bya ba.

* (PDM : 'phags pa'i dngos slob shes rab gzhon nus mdzad pa)155. 'Phags ma 'od zer can ma'i sgrub thabs.

156. 'Od zer can gyi sgrub thabs bstod pa dang bcas pa. (a) Mya ngan med pa'i 'od zer can gyi sgrub thabs bstod pa dang bcas pa.

157. 'Od zer can ma'i sgrub thabs. (a) De'i sgrub thabs bstod pa bcas.

158. sByin sreg. (a, b) Lha mo 'od zer can gyi sbyin sreg gi cho ga.

159. bsTod pa rgyas pa. (a) De'i bstod pa rgyas pa. (c) bcom ldan 'das ma 'od zer can ma mchod pa'i cho ga rgyas par byed pa'i ched du / bstod pa'i rab tu byed pa.

160. sPyan ma'i sgrub thabs. (c) bcom ldan 'das ma sangs rgyas spyan phyag brgyad ma'i sgrub thabs.

161-1 gZa' yum gyi sgrub thabs. (c) gza' rnams kyi yum gyi sgrub pa'i thabs mdor bsdus pa.

161-2 sNgags kyi dag byed*.

* (PDM : zhar la sngags gi dag byed cig kyang ma dpe na byung bzhin bris yod.)



162. 'Dod lha'i bstod pa. (c) 'dod pa'i lha rnams la bstod pa'i rab tu byed pa.

〔13. Gra lnga'i skor〕

163. Rig ma bcu drug gi mchod pa'i tshig mtshan gnyis.

* (PDM : SYBG che brjod dang mchod gar)

164. bSrung ba lnga'i dbang chog gi sdom ring thung.

165. bSrung ba lnga'i mtshams gcod.

166. sGrub thabs. (a) De'i sgrub thabs bsdus pa. (b) bsrung ba lnga'i dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs.

167. sGrub thabs rgyas pa. (a) De'i sgrub thabs rgyas pa. (b) bsrung ba lnga'i dkyil 'khor gyi sgrub pa'i thabs.

168. bsTod pa. (a) De'i bstod pa. (b) bsrung ba lnga'i lha mo la bstod pa.

169. dKyil 'khor gyi lha tshogs la bstod pa. (a) De'i dkyil 'khor gi lha tshogs la bstod pa. (b) bsrung ba lnga'i dkyil 'khor gyi lha tshogs kyi bstod pa. (c) lha mo lnga'i bstod pa ni / slob dpon shanti pas mdzad pa'i bsrung ba'i cho ga na bzhugs la / lhag ma ni 'phags pas sbyar ba.

* (PDM : 'di slob dpon shanti pas mdzad pa la 'phags pas kha skong mdzad)

170. Phyogs kyi gtor ma.

171. gZa' skar gyi gtor ma.

172. Byur bsal ba.

173. Dug dbyung ba.

174. rGyal bar byed pa.

175. dBang bskur ba'i cho ga'i sdom tshig.

176. dBang bskur ba dngos.

176-2 (a, c) dBang bskur ba'i gzungs phyi ma.

176-3 (a, c) bDen pa'i stobs brjod pa.

〔14. dKar chag〕

177. rGyud sde'i dkar chag.

〔15. Chos skyong gi skor〕

178. mGon po'i sgrub yig. (c) dpal rdo rje nag po chen po lcam dral gyi sgrub pa'i thabs.

179. bDud rtsi lnga mchod. (c) rdo rje rgyal po rab khros pa'i // khro bo'i khro bo mnyes byed pa // gsang ba'i mchod gtor rim pa.

180. mGon po'i bstod pa.

181. lCam dral gyi gtor chog. (c) dpal nag po chen po lcam dral gyi gtor ma'i cho ga.

* (PDM : jim gyim la phul ba)

182. bShags pa. (b) dpal rdo rje nag po chen po lcam dral 'khor dang bcas pa la zhu zhing gsol ba.

183. gDong bzhi pa'i bstod pa. (c) dpal gdong bzhi pa la bstod cing bskul ba'i rab tu byed pa.

184. Dzambha la ser po'i sgrub thabs. (c) 'phags pa dzambha la'i sgrub thabs mdor bsdus pa.

〔16. gTor ma〕

185. Phyogs bzhi'i gtor ma.

186. Sa skya pa'i nyin zhag phrugs gcig gi thugs dam gtor ma'i rim pa. (c) dpal sa skya pa'i bla ma dam pa rnams kyis phyag len du mdzad pa'i / gtor ma gtong ba'i tshul.

187. bGegs gtor. (c) cha gsum gtor ma 'bring po'i cho ga.

188. Klu gtor. (c) klu'i gtor ma rdo rje gdan bzhi'i rgyud las byung ba bzhin / chos rje sa skya pas mdzad pa'i phyag len 'Phags pas yi ger bkod pa.

189. Chu gtor. (c) chu gtor ji ltar bya ba'i rim pa / rje btsun sa skya pa'i zhal gdams yi ger 'Phags pas bkod pa.

〔1. bstod pa dang gsol 'debs kyi skor〕

190. bsTod dbyangs rgya mtsho snyan dngags rin po che'i rgyan rnam par bkra ba.
* (PDM : SYBG chos rje sa pan la bstod pa)

191. Thub pa'i stod pa. (c) sha kya'i rgyal po'i yon tan gyi chal bstod cing gsol ba'i tshig.

192. 'Jam dpal la mtshan don gyi sgo nas bstod pa. (c) 'jam dpal gzhon nur gyur ba la mtshan don gyi sgo nas bstod pa / tshigs su bcad pa nyi shu rtsa lnga pa.

193. 'Jam dpal la nye bar bsngags pa me tog gi phreng ba.

194. 'Jam dbyangs la ri bo rtse lngar bstod pa nor bu'i phreng ba.

195. Phyag mtshan ri mo'i bstod tshig spel ba.

196. 'Jam dpal bstan pa'i 'khor lo'i bstod pa.

197. Ri bo rtse lnga so so'i rigs su mthun pa'i bstod pa. (a) Phyag 'tshal du phyin pa'i tshe ri bo rtse lga'i rigs so so dang mthun par bstod pa.

198. A nanda kirti'i don du dpa' bo'i 'khor lo bris pa.

199. 'Jam dbyangs la bstod pa.

200. sKyid grong gi 'phags pa wa ti la mnal lam du bstod pa.

201. Byams pa la bstod pa. (a) Byams pa mgon po la bstod pa.

202. gNas brtan bcu drug la bstod pa.

203. Yan lag bdun pa. * (PDM : yan lag bcu pa)

204. Phyag mchod sdig bshags bsngo ba dang bcas pa.



〔17. mTshan nyid kyi skor〕

205. Sems bskyed kyi cho ga bsdus pa.

206. sKyabs sems bsngo ba dang bcas 'bring du bstan pa. (c) skyabs su 'gro ba dang / sems bskyed pa dang / yongs su bsngo ba ji ltar bya ba'i rim pa.

207. De gsum bsdus pa. (a) De gsum bsdus pa yul skyong mgon po dpal bzang gi don du mdzad pa. (c) skyabs 'gro sems bskyed bsngo ba dang bcas pa bsdus pa.

208. sKyabs 'gro'i rnam gzhag. (a) sKyabs 'gro'i rnam gzhag bo lod kyi don du mdzad pa. (c) skyabs su 'gro ba'i tshul gyi rnam par gzhag pa.

209. sKyabs 'gro sems bskyed dbang bskur gyi bslab bya. (a) sKyabs 'gro sems bskyed dbang bskur gyi bslab bya rgyal po a rog che la phul ba. (c) skyabs 'gro sems bskyed dbang bskur gyi // bslab bya nyung 'dus gsal ba.

210. rGyal po la dgams pa'i rab byed.

211. bsDus don. (c) rgyal po la gdams pa'i rab tu byed pa'i bsdus pa'i don gyi gsal byed.

212. Theg chen gsal ba'i yi ge'i ma mo spel ba'i rab byed.

213. bsDus don. (c) theg chen gsal ba'i bsdus don gyi // gsal byed.

214. Las 'bras gsal ba'i me long. (c) las dang rgyu dang 'bras bu'i rnam par gzhag pa gsal bar ston po / las 'bras gsal ba'i me long zhes bya ba.

〔20. Zhus lan dang springs yig gi skor〕

215. rGyal bu Ji big de mur la gtam du bya ba nor bu'i phreng ba.

216. rGyal bu mang ga la la gtam du bya ba. (c) mngon par mtho ba dang / nges par legs pa'i tshul gnyis gsal bar ston pa'i rab tu byed pa / rgyal bu mangga la la gtam du bya ba bkra shis kyi phreng ba zhes bya ba.

217. rGyal bu no mo gan la spring ba'i rab byed. gtsug lag gnyis kyi tshul gsal bar // ston pa'i rab tu byed pa.

218. rGyal bu ho ko la gdams pa. (c) theg pa chung ngu dang / chen po'i chos kyi rnam par gzhag pa cung zad brjod pa.

219. rGyal bu de gus bho ga la gdams pa. (c) nye bar gdams pa bdud rtsi'i 'byung gnas zhes bya ba.

220. rGyal bu de mur bho ga la gdams pa zla ba'i 'od zer.

221. dPon mo punda ri'i don du mdzad pa bsgrub pa'i rim pa rab tu gsal ba.

222. rGyal sras Jim gyim la spring ba.

223. Jim gyim la spring ba. (a) Jim gyim la spring ba gnyis.

224. A tsa ra la spring ba.

225. dGe ba'i bshes gnyen zhig la bskur ba'i yi ge. (a) dGe ba'i bshes gnyen ldong ston gyi don du spring ba'i yi ge. (c) mchod par 'os pa legs mchod nas // bsngags par 'os pa bsngags pa'i cha tsam zhig // brjod pa

226. Ye shes 'bum la gdams pa bdud rtsi'i thig le.

227. Rig par smra ba grags bzang la spring ba.

228. bDen pa gnyis rnam par nges pa.

229. Zab mo snang ba'i rab byed.

230. Phyag chen nyams len. (a, c) Phyag rgya chen po nyams su len pa'i man ngag.

231. Khrid yig yan lag bdun pa. (a) De'i khrid yan lag bdun ldan. (c) chos thams cad kyi de bzhin nyid mngon du byed pa'i man ngag phyag rgya chen po yan lag bdun dang ldan pa zhes bya ba.

232. Yan lag bdun gyi gtam.

233. Dam chos pad dkar gyi tshig don la gzhan gyi log par rtog pa dgag pa. (c) dam pa'i chos padma dkar po'i chos kyi rnam grangs 'ga' zhig las / phyin ci log tu brtags pa dgag pa'i tshul.

〔18. Tshigs bcad thor bu ba'i skor〕

234. Bu mo rin chen gyis zhus pa'i mdo'i don yang dag par bsdus pa. (c) theg pa chen po'i man ngag ces bya ba / bu mo rin chen gyis zhus pa'i mdo'i don yang dag par bsdus pa.

235. sNying po'i sdom.

236. Thabs la mkhas pa'i sdom. (c) de bzhin gshegs pa thams cad kyi gsan chen thabs la mkhas pa'i mdo'i don bsdus pa.

237. Ting nge 'dzin gyi sdom. (c) ting nge 'dzin gyi rgyal po'i bsdus pa'i don gyi tho yig.

238. Byang chub sems dpa'i sa'i sdom. (c) mdo sde sa bcu pa'i sdom.

239. Sangs rgyas kyi sa'i sdom.

240. Theg pa chen po rgyud bla ma'i bstan bcos kyi bsdus don.

241. sKyo ba'i gtam.

242. Ngan pa'i spyod tshul la khrel ba'i gtam.

243. Theg pa'i rnam dbye bsdus pa.

244. bSam gtan shes rab kyi dris lan.

245. Ka sogs sum cu la spel ba. (c) yi ge'i ma mo la spel nas / tshigs su bcad par sbyar.

246. Yi ge'i sbyor tshul.

247. lDan yul du skyes pa ston pa brtson 'grus kyi dris lan.

248. Byang chub lam gyi snying po. (a, c) Byang chub lam gyi snying po bsgom pa'i rim pa zhes bya ba.

249. Dran pa gso thabs. * (PDM : SYBG lta ba ston pa'i tshigs bcad)

〔20. Zhus lan dang springs yig gi skor〕

250. dBus gtsang gi dge ba'i bshes bsnyen rnams la spring ba.



251. Tsha rong pa la spring ba.

252. sDom brtson zhig la spring ba.

253. Bro gros seng ge la bskul ba'i nyams len mdor bsdus. (a) Zab mo nyams su len tshul mdor bsdus.

254. rGyal bu ji big de mur la spring ba.

255. De la spring ba.

256. Yi gyang jus glegs bam bsgrubs pa la bsngags pa.

257. rGyal bu byang chub sems dpa' la gnang ba'i bka' yig. (c) rab tu gnas pa legs par byas pa'i srung ba'i 'khor lo dang / gser gyi rdo rje rtse dgu pa gcig thugs dam du 'bul.

258. rGyal bu aloga la spring ba. (c) yi ge'i rten du bdag gis rab tu gnas pa legs par bgyis pa'i sna tshogs rdo rje gcig 'bul zhing mchis.

259. Rin chen pakshi la spring ba.

260. Pandi ta lakshima ka ra la spring ba. (a) Bram ze'i pandi ta lakshmi ka ra la spring ba.

261. Shong ston lo tsa la spring ba.

262. Ra dbon la spring ba.

263. Ral gri la spring ba.(a) 'Phags pa ral gri la spring ba.

264. sPyi bo lhas pa bshes gnyen rin chen la bskur ba.

265. Chags lo tsa ba la bskur ba.

266. dBus gtsang gi mtshan nyid pa spyi la spring ba. (c) chos 'khor phyi ma'i dus su dbus kyi mtshan nyid pa spyi la bskur ba.

267. dBus kyi bka' gdams pa spyi la spring ba.

268. sTag lung pa la spring ba.

269. dBus kyi sdom chen pa spyi la spring ba.

270. rGyal bu Ji big la spring ba.

271. rGyal bu ji big la spring ba.

272. rGual bu ji big la spring ba.

273. dPon mo du gal dur mis la spring ba.

274. Du gal dur mis la spring ba.

275. rGyal bu jim gyim la spring ba.

276. Ho ko sogs la spring ba.

277. Grags bzang la spring ba.

278. sTon gzhon la spring ba.

279. Gos dar lnga stong dang dgu brgya bzhi bcu phul ba'i mchod brjod dang sngo ba.

280. Tshe dpag med la bstod pa.

281. mGon g-yag la bsngags pa. * (PDM : SYBG glang po che la bsngags pa)

282. Chang la bsngags pa bdud rtsi'i bum pa.

283. mChod 'os la bsngags pa. (c) mchod par 'os pa legs mchod nas // bsngags par 'os pa bsngags pa'i cha tsam zhig // brjod pa.

[* bstan rtsis]

284. sNga bsdus sgra gcan gza' lnga dang bcas pa'i rtsis gzhi. (c) yan lag lnga bsdus sgra gcan gza' lnga dang bcas pa rnams / tsheg nyung dus bde blag tu rtogs par byed pa / rin po che'i 'od zer dri ma med pa zhes bya ba.

285. Nyi khyim 'pho ba'i nges pa.

286. Dus kyi 'khor lo'i rtsis dus gsal ba'i sgron me.

287. rTsis dus gsal ba'i sgron me'i don yang dag par bsdus pa.

288. 'Dod ma'i dus gsal ba'i rtsis. (c) khams gsum chos kyi rgyal po ston pa bde bar gshegs blhums su zhugs pa la sogs pa'i dus rnams bde blag du rtogs par byed cing / bstan pa'i dus kyi rtsis la phyin ci log tu rtogs pa de dag sun 'byin par byed pa'i gtan tshigs nges par grub pa / gdod ma'i dus gsal bar byed pa zhes bya ba

289. rTsis kyi gtsug lag dang mthun par nges pa.

290. Dhru pa gnyis pa'i rtsis.

291. Lo bdag nyi shu'i rtsis. (a) Lo bdag nyi shu rtsa gnyis kyi rtsis.

292. rTen 'grel rtsis rin chen sgron ma. (b, c) rten cing 'brel par 'byung ba'i gtsug lag gi de kho na nyid nyung dus bde blag tu rtogs par byed pa rin po che'i sgron ma zhes bya ba.

293. rGyal bu Jim gyim gyis chos 'khor ba'i rtsis.

294. Sangs rgyas kyi dus chen bzhi'i ngos 'dzin.

[21. Chos bzhengs pa'i tshigs bcad kyi skor]

295. bDe bar gshegs pa'i gsung rab 'gyur ro 'tshal bzhengs pa'i gsal byed sdeb sbyor gyi rgyan rnam par bkra ba. (c) rgyal po chen po dbang phyug dam pa'i dpal gyis rnam par 'byor pa go pe la gan rgyal po zhes kun du grags pa'i sras kyi dam pa // rgyal po jim gyim zhes bya bas / gsung rab rin po che mtha' dag rin po che gser gyis bzhengs pa'i tshul / tshul bzhin du brjod pa'i rab tu byed pa.

296. Chos rin po che nye bar bzhengs pa'i mtshan byed kyi rab tu byed pa. (c) bsngags 'os bsngags dang bsngo ba yi // rab byed.

297. Dam chos rin po che shin tu rgyas pa'i sde snod bzhengs pa la bsngags pa. (a, b) Dam chos rin po che shin tu rgyas pa'i sde snod bzhengs pa la bsngags pa.

* (PDM : SYBG jim gyim / bzhengs pa po jim gyim yin)

298. Mangga la yab yum gyis rgyas 'bring bsdus gsum dang phal po che bshengs pa'i mtshon byed. (b) chos rin po che nye bar bzhengs pa'i mtshon byed kyi rab tu byed pa. (c) rgyal sras rgyal ba'i gsung rab ji ltar bzhengs tshul dang // bsngo ba'i tshig.



299. Ji big de mur gyis / phal chen gser 'od / stong phrag brgya pa rnams bzhengs pa'i mtshon byed.

300. A rog ches 'bum bzhengs pa'i rab byed.

301. Go pe las rgyas 'bring bsdus gsum bzhengs pa'i mtshon byed. (b) gsung rab rin po che rnam par bkod pa'i mtshon byed. (c) de lta'i don ston byed pa'i tshig sbyor.

302. dGe 'dun bzang po sogs kyis sher phyin rgyas 'bring bsdus gsum bzhengs pa'i mtshon byed.

303. Rin chen dpal gyis 'bum bzhengs pa'i mtshon byed. (a) Rin chen dpal gyis 'bum bzhengs pa la bsngags pa.

[* ]

304. Zin shing gi ston pa btul ba'i tshigs bcad. (a) Zin shing gi ston pa bcu bdun yang dag pa'i rigs pas pham par byas te rab tu byung ba'i tshe sbyar ba'i tshigs bcad.

305. Theg chen slob dpon ma la lam nyams su blang tshul gyi rnam dbye bstan pa.

306. Chos rje pa bde bar gshegs dus dbus gtsang gi dge ba'i gshes gnyen rnams la spring ba.

307. Khro phu lo tsa ba la bskur ba dang / khro phu lo tsa ba la gdams pa.

308. dGe bsnyen dang dge tshul dang dge slong du nye bar bsgrub pa'i cho ga'i gsal byed. (a) Las chob bsdus (pa).

309. dGe bsnyen dang dge tshul dang dge slong du nye bar sgrub pa'i cho ga'i gsal byed. (a) Las chog rgyas (pa).

310. bsNyen gnas kyi gdams pa 'bogs tshul. (c) bsnyen gnas kyi cho ga bslab bya phan yon dang bcas pa.

311. rGyal po yab sras kyis mchod rten bzhengs pa la bsngags pa'i sdeb sbyor danda ka.

* (PDM : SYBG rgyal bu jim gyim sogs la bsngags pa)

312. bsNags 'os la sngags pa'i rab byed.

* (PDM : SYBG hor gyi rgyal rabs lnga pa rgyal po go pe la la bsngags pa)

313. Bod kyi rgyal rabs la bsngags pa'i tshigs bcad.

* (PDM : SYBG jim gyim la bstod pa)

314. Bod kyi rgyal rabs.

315. Lung dang brgyud pa sna tshogs thob pa'i gsan yig.

315-1 (c) dus phyis thos pa'i chos dang bla ma brgyud pa'i dkar chag.

315-2 (b) Lung dang brgyud pa sna thogs zhes bya ba.

316. Slob dpon bsod nams seng ge'i spyan sngar phrin du zhu ba.

317. Grags pa rin chen gyi zhu lan.

318. rGyal bu byang chub sems dpa'i khyu mchog skyong la bka' sgo snang ba.

319. Gur mgon lcam bral gyi rjes gnang.

320. rGyal po go pe la sras dang btsun mor bcas la shing mo yos sogs la gnang ba'i bkra shis kyi tshigs bcad.



Appendix G：

## 諸史料に見られるモンゴルの王統表

以下の表は、第２部訳註25言及したモンゴルの諸皇帝の在位年数を表に表したものである。使用した史料は、『赤冊史』(fols.14a1-15a9)、『王統明示鏡』(GRM, pp. 21-22)、『青冊史』(DNG, Ch. Ka, 26b1-27a7)、『学者の宴』(KGT, Ⅲ, pp. 791.17-801.16)、『新赤冊史』(DMS, 45b5-47a6)、『パクサム・ジョンサン』(PSJZ, Ⅲ, pp. 147-149 = 304b6-305a6)である。参考のために、元史と『エルデニ・イン・トプチ』を掲げておいた。『パクサム・ジョンサン』の３つの史料のうち、最初のものは、モンゴル史料 (Sog po'i deb ther gcig) に、最後のものは、中国史料 (rGya nag gi yig tshang gcig) に基づくとスムパ・ケンポは述べている。しかし現在の段階では、それらが何の史料であるかを比定することはできない。系譜に関しては諸史料の間にかなりの相違がみられるが、煩雑になるので、ここでは在位年数のみに注目した対照表とした。

| | 元史 | HDT | GRM | TNG | DMS | KGT | PSJZ | | | ET |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 太祖<br>Cinggis qaγan | 生没年<br>1162-1227 | 23年間在位 | 23年間在位 | 23年間在位 | 23年間在位 | 1182-1242 | 35年間在位 | 23年間在位 | 23年間在位 | 1162-1227<br>1206-1227 |
| 太宗<br>ögödei | 1186-1241 | 6年間在位 | 6年間在位 | 6年間在位 | *<br>6年間在位 | 6年間在位 | 3年間在位 | 6年間在位 | 13年間在位 | 1187-1241<br>1228-1241 |
| 定宗<br>Güyüg | 1206-1248 | 6箇月在位 | 6箇月在位 | 6箇月在位 | 6箇月在位 | 6年間在位 | | 6箇月在位 | 6箇月在位 | 1205-1248<br>1233-1248 |
| 憲宗<br>Möngke | 1208-1259 | 9年間在位 | 6年間在位 | 9年間在位 | 9年間在位 | 9年間在位 | 6年間在位 | 9年間在位 | 18年間在位 | 1287-1259<br>1252-1259 |
| 世祖<br>Qubilai | 1215-1294 | 1215-1294 | 35年間在位 | 35年間在位 | 35年間在位 | 32年間在位 | 35年間在位 | 46年間在位 | 35年間在位 | 1215-1294<br>1260-1294 |
| 成宗 Temör<br>öljei tü | 1265-1307 | 13年間在位 | 13年間在位 | 13年間在位 | 13年間在位 | 13年間在位 | 14年間在位 | 13年間在位 | 13年間在位 | 1265-1307<br>1294-1307 |
| 武宗 Qaisang<br>Külüg | 1281-1311 | 4年間在位 | 4年間在位 | 4年間在位 | 4年間在位 | 4年間在位 | 5年間在位 | 4年間在位 | 4年間在位 | 1281-1311<br>1308-1311 |
| 仁宗 Ayurbarimid<br>Buyan tu | 1285-1320 | 9年間在位 | 9年間在位 | 9年間在位 | 9年間在位 | 9年間在位 | 4年間在位 | 9年間在位 | 9年間在位 | 1285-1320<br>1312-1320 |
| 英宗 Suddabal<br>Gegen | 1303-1323 | 3年間在位 | ** | 3年間在位 | 3年間在位 | ***<br>3年間在位 | 3年間在位 | 3年間在位 | 3年間在位 | 1303-1323<br>1321-1323 |
| 泰定帝<br>Yisün temör | 1293-1328 | 5年間在位 | 5年間在位 | 5年間在位 | 5年間在位 | 5年間在位 | 6年間在位 | 5年間在位 | 5年間在位 | 1293-1328<br>1324-1328 |
| 天順帝<br>Asukiba | ?-1328 | 40日在位 | 40日在位 | 40日在位 | 40日在位 | 40日在位 | 5年間在位 | 5年間在位 | 3箇月在位 | |
| 明宗 Tortemör<br>Qosila | 1300-1329 | 1箇月在位 | 1箇月在位 | 1箇月在位 | 1箇月在位 | 1箇月在位 | 1箇月在位 | 1箇月在位 | 8箇月在位 | 1329 |
| 文宗 Jayaratu<br>Qusala quturtu | 1304-1332 | 2年間在位 | 在位年記載無し | 5年間在位 | 5年間在位 | 5年間在位 | 4年間在位 | 5年間在位 | 3年間在位 | 1345-1329<br>1329 |
| 寧宗 Rincin bal<br>Erdeni cortu | ?-1332 | 1箇月在位 | 11年間在位 | 1箇月在位 | 1箇月在位 | 6箇月在位 | 1箇月在位 | 1箇月在位 | 1箇月在位 | 1326-1332<br>1332 |
| 順帝 Uqaratu<br>Turun temör | 1333-1370 | 6箇月空位<br>37年間在位 | 48年間在位 | 6箇月空位<br>36年間在位 | 6箇月空位<br>36年間在位 | 1333- ? | ****<br>21，36年間在位 | 36年間在位 | 36年間在位 | 1318-1370<br>1333-1370 |

* オゴタイの名は見えず、チンギス・ハーンの息子ゴダン（Go dan）が即位したことになっている。ゴダンは実際はオゴタイの子で、ハーン位には就いていない。

** ゲゲンとシッディ・パーラは同一人物であるが、この『王統明示鏡』では、別人として在位年数も支持していない。

*** **と同様ゲゲンとシッディパーラを別人としている。

**** オハート・ハーンとトガン・テムールは同一人物であるが、この『パクサム・ジョンサン』では、別人として、前者が21年、後者が36年在位したとしている。

# 文　献　表

## 1. チベット語文献


Kun dga' rdo rje, Tshal pa. Hu lan deb ther : Deb ther dmar po. 1346. Ms. Edited in The Red Annals : part I, Tibetan Text. 40 fols. Sikkim : Namgyal Institute of Tibetology, 1961.

Kun dga' bzang po, Ngor chen (?) (1382-1456). dPal sa skya pandita'i rnam thar gsung sgros ma. No date. In LBLS, Ka, 57a1-67a6 and SKKB, Vol. 9, 30.3.4-36.3.6.

dKon mchog 'jigs med dbang po, 'Jam dbyangs bzhad pa II (1728-1791). mKhas shing grub pa'i dbang phyug kun mkhyen 'jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje'i rnam par thar pa ngo mtshar skal bzang 'jug sngogs. 1758. Ed. Bla brang, 123 fols. Reproduced in The Collected Works of dKon mchog 'jigs med dbang po, The Second 'Jam dbyangs bzhad pa of La brang bkra shis 'khyil by Ngawang Gelek Demo. Vol. 2. GSS, Vol. 22. Pp. 75-319. New Delhi, 1971. * THL, p. 18, n. 34.

----------. bDe bar gshegs pa'i bka'i dgongs 'grel bstan bcos 'gyur ro cog par du sgrub pa'i tshul las ne bar brtsams pa'i gtam yang dag par brjod pa dkar chag yid bshin nor bu'i phreng ba. 1773. Ed. Bla brang, 264 fols. Reproduced in The Collected Works of dKon mchog 'jigs med dbang po, The Second 'Jam dbyangs bzhad pa of La brang bkra shis 'khyil. Reproduced by Ngawang Gelek Demo. Vol. 5. GSS, Vol. 25. Pp. 1-527. New Delhi, 1971. * THL, pp. 209-210.

----------. rJe btsun thams cad mkhyen pa lcang skya rol pa'i rdo rje'i 'khrungs rabs kyi phreng ba gtam du brjod pa ngo mtshar dad pa'i ljon shing. 1776. Ed. Bla brang, 121 fols. Reproduced in The Collected Works of dKon mchog 'jigs med dbang po, The Second 'Jam dbyangs bzhad pa of La brang bkra shis 'khyil by Ngawang Gelek Demo. Vol. 2. GSS, Vol. 22. pp. 321-561. New Delhi, 1971. * THL, pp. 97-98 & note 311.

dKon mchog bstan pa dar rgyas, Brag dgon zhabs drung (1801- ). Yul mdo smad kyi ljongs su thub bstan rin po che ji ltar dar ba'i tshul gsal bar brjod pa deb ther rgya mtsho. 1833. Ed. dGa'ldan chos 'khor gling, 412 fols. Reproduced in The Ocean Annals of Amdo by Lokesh Chandra. Part I. SPS, Vol. 226. New Delhi : International Academy of Indian Culture, 1977. Cf. TOYO BUNKO No. 512-3057. * THL, pp. 168-169 & note 497.

dKon mchog bstan pa'i sgron me, Gung thang (1762-1823). Dus gsum rgyal pa'i spyi gzugs rje btsun dkon mchog 'jigs med dbang po'i zhal snga nas kyi rnam par thar pa rgyal sras rgya mtsho'i 'jug ngogs. 1799. Ed. Bla brang, 278 fols. Reproduced in The Collected Works of dKon mchog 'jigs med dbang po,

The Second 'Jam dbyangs bzhad pa of La brang bkra shis 'khyil by Ngawang Gelek Demo. Vol. 1. GSS, Vol. 21. Pp. 1-555. New Delhi, 1971. * THL, p. 90, n. 294.

----------. Rigs dang dkyil 'khor rgya mtsho'i mnga' bdag rje btsun blo bzang chos kyi nyi ma'i gsung gsum rmad du byung ba'i rtags brjod padma dkar po. 1815. Ed. Zhol, 236 + 406 fols. Reproduced in The Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma by Ngawang Gelek Demo. Vol. 9, pp. 479-949 and Vol. 10, pp. 5-815. GSS, Vols. 9-10. New Delhi, 1969. * THL, p. 154, n. 449.

dKon mchog lhum brub, Ngor chen and Bya bral ba Sangs rgyas phun tshogs. Dam pa'i chos kyi 'byung tshul bstan pa'i rgya mtshor 'jug pa'i gru chen. Ed. sDe dge. Ff.1-129a was written by Ngor chen and ff.129a-228b was enlarged by Sangs rgyas phun tshogs in 1692. Reproduced in Ngor chos 'byung : A History of Buddhism by Ngawang Topgay. New Delhi, 1973. * THL, pp.150-151.

Grags pa rgyal mtshan, Yar klung pa. Chos kyi rje sa skya pandita kun dga' rgyal mtshan dpal bzang po'i rnam par thar pa 'bring po. No date. In LBLS, Ka, pp. 32b1-38b1.

mGon po skyabs, Kung, trans. Chen po thang gur dus kyi rgya gar zhing gi bkod pa'i dkar chag (『大唐西域記』) of sDe snod gsum 'dzin pa Lo chen Theg chen lo (玄奘). No date. Ms., 152 fols. OTANI No. 12459.

Ngag dbang kun dga' bsod nams grags pa rgyal mtshan. 'Dzam gling byang phyogs kyi thub pa'i rgyal tshab chen po dpal ldan sa skya pa'i gdung rabs rin po che ji ltar byon pa'i tshul gyi rnam par thar pa ngo mtshar rin po che'i bang mdzod dgos 'dod kun 'byung. 1629. Ms. 305 fols. * TPS, pp. 154-155; Schuh (1977) pp. 12-15.

Ngag dbang 'jigs med grags pa, Rin spungs pa. 'Jam pa'i dbyangs dngos smra ba'i mgon po sa skya pandita kun dga' rgyal mtshan dpal bzang po'i rnam par thar pa bskal pa bzang po'i legs lam. 1579. In LBLS, Ka, 67b-145a5.

Ngag dbang thub bstan dbang phyug, Chu bzang ba (1736- ). rDo rje 'chang lcang skya rol pa'i rdo rje ye shes bstan pa'i sgron me dpal bzang po'i rnam par thar pa dad pa'i padma rnam par 'byed pa nyi ma'i 'od zer. 1787. Ed. Peking, 151 fols. Reproduced in Nyi ma'i 'od zer / Nauan-u Gerel : Die Biographie des 2. Pekinger lCang skya Qutoqutu Rol pa'i rdo rje (1717-1786) by Hans-Rainer Kaempfe. Monumenta Tibetica Historica, Ab.III, Bd. 1. St-Augustin : VGH Wissenschaftsverlag, 1976. * THL, p. 97, n. 308.

Ngag dbang blo bzang, Klong rdol bla ma (1728-1791). bsTan 'dzin gyi skyes bu rgya bod du byon pa'i ming gi grangs. No date. Ed.Peking, 31 fols. Klong rdol bla ma'i gsung 'bum, Vol. Za. TODAI No. 236. * THL, pp. 202-203.

----------. bsTan pa'i sbyin bdag byung tshul gyi ming gi grangs. No date. Ed. Peking, 20 fols. Klong rdol bla ma'i gsung 'bum, Vol.'A. TODAI No. 237.



* THL, p. 203.

Ngag dbang blo bzang rgya mtsho, Dalai lama V (1617-1682). Gangs can yul gyi sa la spyod pa'i mtho ris kyi rgyal blon gtso bor brjod pa'i deb ther rdzogs ldan gzhon nu'i dga' ston dpyid kyi rgyal mo'i glu dbyangs. 1643. Ed. Zhol, 113 fols. TOYO BUNKO No. 349-2609. * THL, pp. 78-80.

----------. rJe btsun thams cad mkhyen pa bsod nams rgya mtsho'i rnam thar dngos grub rgya mtsho'i shing rta. 1646. Ed. Zhol, 109 fols. In Thams cad mkhyen pa lnga pa chen po'i gsung 'bum, Vol. Nya. TOYO BUNKO No. 95-1056-2.

----------. 'Jig rten dbang phyug thams cad mkhyen pa yon tan rgya mtsho dpal bzang po'i rnam par thar pa : Nor bya'i 'phreng ba. 1652. Ed. Zhol, 52 fols. In Thams cad mkhyen pa lnga pa chen po'i gsung 'bum, Vol. Nya. TOYO BUNKO No. 95-1057.

----------. Za hor gyi ban de ngag dbang blo bzang rgya mtsho'i 'di snang 'khrul pa'i rol rtsed rtogs brhod kyi tshul du bkod pa du ku la'i gos bzang. No date. Ed. Zhol, Vol. Ka, 364 fols. and Vol. Kha, 281 fols. In Thams cad mkhyen pa lnga pa chen po'i gsung 'bum. Vols. Ca and Cha. TOYO BUNKO No. 92-1053-2 and No. 93-1053-2. * THL, pp. 187-188.

----------. rGya bod hor sog gi mchog dman bar ba rnams la 'phyin yig snyan sngags su bkod pa rab snyan rgyud mang. Ed. Zhol, Vol. Dza, 289 fols. In Thams cad mkhyen pa lnga pa chen po'i gsung 'bum. TOHOKU No. 5667. Reproduced in Letters to Various Notables of China, Tibet and Mongolia written by H.H.the fifth Dalai Lama by Kunsang Tobgay. Thimphu, 1975.

Chos kyi 'byung gnas, Si tu pan chen (1699/1700-1774) and 'Be lo Tshe dbang kun khyab. bsGrub rgyud Karma kam tshang brgyud pa rin po che'i rnam par thar pa rab 'byams nor bu zla ba chu shel gyi phreng ba. Completed in 1775. Si tu pan chen kyi bka' 'bum. Vols. Da and Na. (Vol. Da, fols. 1-256 was written by Si tu pan chen ; Vol. Da, fols 257-341 and Vol. Na written by 'Be lo Tshe dbang kun khyab). Reproduced in History of the Karma bKa' 'brgyud pa Sect by D. Gyaltsan & Kesang Legshay. 2 vols. New Delhi, 1972.

'Jam dpal chos kyi bstan 'dzin phrin las. 'Dzam gling chen po'i rgyas bshad : sNod bcud kun gsal me long. 1820. Edited in The Gerography of Tibet according to the 'Dzam-gling-rgyas-bshad : Text and English Translation by Turrell V. Wylie. Serie Orientale Roma XXV. Roma : Is.M.E.O., 1962.

'Jams dbyangs mkhyen rtse'i dbang po. dBus gtsang gi ngas rten rags rim gyi mtshan mdor bsdus dad pa'i sa bon. Edited in mKhyen brtse's guide to the holy places of Central Tibet by A.Ferrari and completed by L.Petech, with collaboration of H.Richardson. Serie Oriental Series XVI. Roma : Is.M.E.O. 1971.

'Jigs med rig pa'i rdo rje, dByangs can sgeg pa'i blo gros alias Gu shri dKa' bcu Blo bzang tshe 'phel. Chen po hor gyi yul du dam pa'i chos ji ltar byung ba'i tshul bshad pa : rGyal ba'i bstan po rin po che gsal bar byed pa'i sgron me. 1819. 162 fols. In『西蔵文蒙古喇嘛教史』橘本光寶 , 1940. * THL, pp. 159-165.

Dam chos rgya mtsho alias Dharmatala. Chen po hor kyi yul du dam pa'i chos ji ltar dar ba'i tshul gsal bar brjod pa padma dkar po'i phreng ba. 1889. Edited in The History of Buddhism in Mongolia. Introd. Sh. Bira. SPS, Vol. 235. New Delhi : International Academy of Indian Culture, 1977. * THL, pp. 165-166.

dPa bo gtsug lag 'phren ba. Chos 'byung mkhas pa'i dga' ston. 1545-1565. Edited in mKhas pa'i dga' ston by Lokesh Chandra. Parts II-III. SPS, Vols. 9 (2)-(3). New Delhi : International Academy of Indian Culture, 1961.

Blo gros rgyal mtshan, 'Phags pa. Chos rje pa'i rnam thar bsdus pa. No date. In SKKB, Vol. 6, 31.3.3-32.1.2. SKKB No. 29.

Blo bzang chos kyi rgyal mtshan, Pan chen bla ma I. Chos smra ba'i dge slong blo bzang chos kyi rgyal mtshan gyi spyod tshul gsal bar ston pa nor bu'i 'phreng ba. Compleated by Pan chen bla ma II in 1720. Ed. bKra shis lhun po , 225 fols. Pan chen bla ma dang po'i bka' 'bum, Ka. TOYO BUNKO No. 107-1168-2. Reproduced in The Authobiography of the First Panchen Lama Blo bzang chos kyi rgyal mtshan by Ngawang Gelek Demo with a English introduction by E. Gene Smith. GSS, Vol. 12. New Delhi, 1969. * THL, p. 196, n. 564.

Blo bzang chos kyi nyi ma, Thu'u bkwan (1737-1802). bShad sgrub bstan pa'i 'byung gnas chos sde chen po dgon lung byams pa gling gi dkar chag dpyod ldan yid dbang 'gugs pa'i pho nya. 1775. Ed. Zhol. Reproduced in The Collected Works of Thu'u-bkwan Blo-bzang-chos-kyi-nyi-ma by Ngawang Gelek Demo. Vol. 2. GSS, Vo2. Pp. 643-784. New Delhi, 1969. * THL, p. 219.

----------. Khyab bdag rdo rje sems dpa' ngo bo dpal ldan bla ma dam pa ye shes bstan pa'i sgron me dpal bzang po'i rnam par thar pa mdo tsam brjod pa dge ldan bstan pa'i mdzes rgyan. 1794. Ed. Zhol, 414 fols. Reproduced in The Collected Works of Thu'u-bkwan Blo-bzang-chos-kyi-nyi-ma by Ngawang Gelek Demo. Vol. 1. GSS, Vol. 1. Pp. 6-831. New Delhi, 1969. * THL, p. 97, n. 308.

----------. Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa : Legs bshad shel gyi me long. 1800-1802. Ed. dGon lung, 12 chaps. TODAI Nos. 90-111. Another ed. Zhol. Reproduced in The Collected Works of Thu'u-bkwan Blo-bzang-chos-kyi-nyi-ma by Ngawang Gelek Demo. Vol. 2. GSS, Vol. 2. Pp. 5-519. New Delhi, 1969. * THL, pp. 154-158.



Blo bzang 'phrin las, Jaya pandi ta (1642-1715). Shakya'i btsun pa blo bzang 'phrin las kyi zab pa dang rgya che ba'i dam pa'i chos kyi thob yig gsal ba'i me long. 1702. Ed. Peking, 4 Vols. Reproduced in Collected Works of Jaya-Pandita Blo bzang 'phrin las by Lokesh Chandra. SPS, Vol. 278. New Delhi : International Acadeny of Indian Culture, 1981. * THL, pp. 200-202.

Tshul khrims rin chen, Zhu chen. dPal sa skya'i rje btsun gong ma lnga'i gsung rab rin po che'i par gyi sgo 'phar'byed pa'i dkar chag 'phrul gyi lde mig. 1736. SKKB, Vol. 7, pp. 310.3.1-343.1.6.

gZhon nu dpal, 'Gos lo tsa ba (1392-1481). dPyod ldan skal bzang yongs kyi mgrin gyi rgyan : Deb ther sngon po. 1478. Ed. Kun bde gling, 486 fols. Reproduced in The Blue Annals by Lokesh Chandra. SPS, Vol. 212. New Delhi : International Academy of Indian Culture 1974. * THL, pp. 146-149.

Ye shes rgyal mtshan, dGe slong rdo rje. Bla ma dam pa chos kyi rgyal po rin po che'i rnam par thar pa rin po che'i phreng ba. 1283. In LBLS, Ka, 145b-169b5.

Ye shes dpal 'byor, Sum pa mkhan po (1704-1788). 'Phags yul rgya nag chen po bod dang sog yul du dam pa'i chos 'byung tshul : dPag bsam ljon bzang. 1748. Ed. 五召当廟, 317 fols. Reproduced in Collected Works of Sum-pa-mkhan-po by Lokesh Chandra. Vol. 1 (Ka). SPS, Vol. 214. New Delhi : International Academy of Indian Culture, 1979. Cf. Sarat Ch. Das ed. Pag sam jon sang :part I. History of the rise, progress and downfall of Buddhism in India ; part II. History of Tibet from early times to 1745 A.D. Calcutta 1908. And Lokesh Chandra ed. dPag-bsam-ljon-bsang of Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor: part III, containing a history of Buddhism in China and Mongolia, preceded by the Re'u mig or chronological tables. SPS, Vol. 8. New Delhi : International Academy of Indian Culture 1959. * THL, pp. 151-153.

----------. 'Dzam gling spyi bshad ngo mtshar gtam stan. 1777. Ed. 五召当廟, 14 fols. Reproduced in Collected Works of Sum-pa-mkhan-po by Lokesh Chandra. Vol. 2 (Kha). SPS. 214. Pp. 943-969. New Delhi : International Academy of Indian Culture, 1979.

----------. mTsho mngon gyi lo rgyus sogs bkod pa'i tshangs gla gsar snyan. 1786. Ed. 五召当廟, 14 fols. Reproduced in Collected Works of Sum-pa-mkhan-po by Lokesh Chandra. Vol. 2 (Kha). SPS. 214. New Delhi : International Academy of Indian Culture, 1979. Also edited in Vaidurya ser po : a History of the dGe lugs pa Monasteries of Tibet and The Annals of Kokonor by Lokesh Chandra. SPS, Vol. 12 (1, 2). Pp. 425-458. New Delhi : International Academy of Indian Culture, 1960.

----------. mKhan po e rte ni panditar grags pa'i spyod tshul brjod pa sgra 'dzin bcud len. Written by Sum pa mkhan po in 1776 and completed by his disciple in 1794. Ed. 五召当廟, 14 fols. Reproduced in Collected Works of Sum-pa-mkhan-po by Lokesh Chandra. Vol. 12 (Na). SPS. 214. Pp. ???-???. New Delhi : International Academy of Indian Culture, 1979. * THL, p. 167, n. 32.

Ye shes bstan pa'i sgron me alias lCang skya hu thug thu Rol pa'i rdo rje (1717-1786). Dag yig mkhas pa'i 'byung gnas. 1742. Ed. Peking, 11 chaps.

Rigs par smra ba Yar klungs pa. Bla ma chos kyi rje dpal ldan sa skya pandita chen po'i rnam par thar pa mdor bsdus pa. 1251. 5 fols.

Shribhutibhadra. rGya Bod yig tshang mkhas pa dga' byed chen mo. 1434. Ms. (gDen sa pa Collection), 290 fols. TOYO BUNKO No. 520-3066. * Macdonald (1963).

Sangs rgyas rgya mtsho, sDe srid. dPal mnyam med ri ba dga' ldan pa'i bstan pa zhva ser cod pan 'chang ba'i ring lugs chos thams cad kyi rtsa ba gsal bar byed pa : Bai dura ser po'i me long. 1692-1698. Ed. Zhol, 419 fols. TOYO BUNKO No. 352A-2621 (=352B-2622). Cf. Satapitaka ed. (SPS, Vol. 12, 1960) is considerably unreliable. * THL, pp. 173-174 & esp. note 515.

bSod nams grags pa. rGyal rabs 'phrul gyi lde mig deb ther dmar po deb gsar ma. 1538. Ms. 103 fols. Reproduced in Deb t'er dmar po gsar ma by Giuseppe Tucci. Serie Orientale Roma XXIV. Roma : Is.M.E.O., 1971.

bSod nams rgyal mtshan, Bla ma dam pa (1312-1375). Bla ma brgyud pa'i rnam par thar pa ngo mtshar snang ba. 1344. In LBLS, Ma, 1a-61a.

----------. rGyal rabs rnams kyi 'byung tshul gsal ba'i me long chos 'byung. 1368. Edited in rGyal rabs gsal ba'i me long : The Clear Mirror of Royal Genealogies by B. I. Kuznetsov. Scripta Tibetana I. Leiden 1966. Cf. Ed. sDe dge, 104 fols. TOYO BUNKO No.507-3052. * Sorensen (1981 ?)

bSod nams seng ge, Go rams pa. sDom pa gsum gyi rab tub dbye ba'i rnam bshad rgyal ba'i gsung rab kyi dgons pa gsal ba. 1463. In SKKB, Vol. 14, 119.1.1-199.3.6.

bSod nams lhun grub, Glo bo mkhan chen. mKhas pa rnams 'jug pa'i sgo'i rnam par bshad pa rig gnas gsal byed. 1527. Ms. TOYO BUNKO No. 43-693. * Jackson (1985) passim.

Lha dbang blo gros alias Sureshamatibhadra. bsTan rtsis 'dod sbyin gter bum. 1592. Edited in Die Berechnung der Lehre : Eine Streitschrift zur Berichtigung der buddhistischen Chronologie verfasst im Jahre 1591 (sic.) von Sureshamatibhadra by Emil Schlagintweit. Abh. der k. bayer Akademie der Wiss., I.Cl.,XX. Bd., III.Abth.,Munich, 1896. Pp. 591-670.



## 2. モンゴル語文語文献

(1) Cakravarti Altan qayan töröl-i uquγulqui Erdeni toli neretü quriyangγui cadig. 17世紀初頭。fols. 1r-54r.

(2) Qad-un undusun-u erdeni yin tobci. Saγang Secen, 1662.
Sagang secen: Erdeni-yin tobci. Monumenta Historica Instituti Historiae Comiteti Scientiarum Reipublicae Populi Mongoli, Tomus I .Facs. I Улаанбаатар, 1958.

(3) Asaraγci neretü-yin teüke. Byamba erke dayicing 1677.
Byamba, Asaraγci neretü-yin teüke. Monumenta historica ,Tomus II , Fasciculus 4, Улаанбаатар, 1960.

(4) Erten-ü qad-un undusulegsen töru yosun-u jokiyak-i tobcilan quriyaγsan altan tobci. Lobsang danjin, 成立年代不明、通称『ロプサンダンジンのアルタン・トプチ』, パリ国立図書館蔵。fols. 1r-244r.

(5) ganga-yin urusqal. Gombojab, 1725.
coyiji tulγan qaricaγulcu tailburilba. γanγa yin-urusqal. öbör mongγol-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 1981.

(6) Altan kürdün mingγan kegesütü Siregetü güüsi Dharma, 1739.
Heissig, W. (ed.) Altan Küüdün Mingγan Kegesütü Bicig, Eine mongolische Chronik von Siregetü Güosi Dharma (1739) . Copenhagen, 1958.

(7) Dörbön oyirod yin teüke. Emci Γabang ses rab, 1737.
Corpus Scriptorum Mongolorum instituti Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Republicae Mongoli, Tomus. 19, Facs. 2-3, Улаанбаатар, 1976.

(8) Dörbön oyiradiyin teüke. Batur ubasi tümen, 1819.
Corpus Scriptorum Mongolorum instituti Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Republicae Mongoli, Tomus.19 Fasc. 14, Улаанбаатар, 1976.

(9) Rab byams pa Zaya pandhidiyin sarayin gerel kemekü tüüji. Radnabhadra, 1691.
mongγol uran jokiyal-un degeji jaγun biliγ orsibai.γutaγar debter pp.1061-1107. öbör mongγol-un arad-un keblel-ün qoriy-a, 1979.

(10) Хаахын шинэ олдсон цаас эрхэмжийн дурсгалт бичиг, Пэрлээ Х, Monumenta Historica Instituti Historeae Academiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongolici Fac I , Улаанбаатар, 1973.

(11) Mongγol borjigid oboγ-un teüke von Lomi (1732) Meng-ku shih-hsi-p'u. Göttinger asiatische forschungen,Bd.1. Otto harrassowitz, Wiesbaden, 1957.

(12) Jirüken-ü tolta yin tailburi üsüg ün endegürel ün qarangγus i arilγaγci of taγγui yin mani. smon lam rab 'byams pa bsTan 'dzin grags pa, 雍正年間成立。

3. 欧文文献.


Aalto, P. Qutur-tu Pañca rakṣā kemekü Tabun sakiyan neretü yeke kölgen sudur. Asiatische Forschungen, Bd. 1. Wiesbaden, 1961.

Ahmad Z. Sino-Tibetan Relations in the Seventeenth Century. Serie Orientale Roma Vol.X. Rome : Is.M.E.O., 1970.

Bawden C.R. The Jebctsun dampa khutukhtus of Urga. Wiesbaen: Otto Harrassowitz, 1961.

----------. "Some Portrates of the Jebtsundamba Qutuɤtu". Zentral Asiatische Studien, 4 (1970), 183-195.

Chandra L. Eminent Tibetan Polymaths of Mongolia, Based on the Work of Ye-shes-thabs-mkhas Entitled bla ma dam pa rnams kyi gsung 'bum gyi dkar chag gnyen 'brel dran gso'i me long zhes bya ba. SPS, Vol. 16. New Delhi : Internatinal academy of indian culture, 1961.

Cleaves, F.W. "The Bodistw a cari avatar-un tyilbur by Cosgi Odsir". Harvard Journal of Asiatic Studies, 17 (1954), 1-129.

Das, Sarat Chandra. "Contributions on the Religion, History, etc. of Tibet". Journal of tha Asiatic Society of Bengal, 1882, pp. 15-75.

----------. "Life of Sum pa mkhan po also styeled Ye shes dpal 'byor the auther of re'umig (Chronigcal Tables)". Journal of tha Asiatic Society of Bengal, 1889, pp.39-84.

György Kara. "Zur Liste der mongolischen Uebersetzungen von Seregetü güüsi". Veröffentlichungen der Societas uralo-altaica. Ed. Annemarie v. Gabain and Wolfgang Veenker. Band 18, Documenta Barbarorum. Festschrift für Walther Heissig zum 70 Geburtstag. Wiesbaden : Otto Harrassowitz, 1983. pp.210-217.

Haenisch, E. Mongolica der Berliner Turfan-Sammlung I : Ein buddhistisches Druckfragment vom Jahre 1312. Abh. der Deutshen Akademie der Wissens. zu Berlin, Klasse für Sprachen, Literatur und Kunst, 1953, Nr. 3. Berlin, 1954.

Heissig, Walther. Die pekinger lamaistischen Blockdrucke in mongolischer Sprache, Materialien zur mongolischen Literaturgeschichte. Wiesbaden : Otto Harrassowitz, 1954.

----------. "Zur Entstehungsgeschichte der Mongolischen Kandjur-Redaktion der Ligdan Khan-Zeit". In Studia Altaica : Festschrift für Nikolaus Poppe. Ural-Altaische Bibliothek, Bd V. Weisbaden : Otto Harraossowitz, 1957. Pp. 71-87.

----------. Die Familien- und Kirchengeschichtsschreibung der Mongolen : Materialien zur mongolischen Literaturgeschichte, Teil I, 16.-18. Jahrhundert. Asiatische Forshungen, Bd. 5. Wiesbaden : Otto Harrassowitz, 1957.

----------. Mongolische Handschriften. Blochdrucke. Landkarten. In cooperation with Klaus Sagaster. Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Bd. 1. Wiesbaden : Steiner, 1961.

----------. Beitraege zur Uebersetzungsgeschichte des mongolischen buddhistischen Kanons. Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen. Philologisch-historische klasse, 3. Folge, Nr. 50. Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht, 1962.

----------. The Religions of Mongolia. London, 1979.

----------. "Ein Quellenbezug der Altan Khan Biographie". 『蒙古史研究』第一輯, 内蒙古人民出版社, 1985. Pp. 185-192.

Jackson, David Paul. "Sa-skya Pandita on Indian and Tibetan Traditions of Philosophical Debate : Tha mKhas pa rnams 'jug pa'i sgo, Section Ⅲ". Diss. Univ. of Washington 1985.

Kaempe, H. R, ed. Nyi ma'i 'od zer / Nauan-u Gerel : Die Biographie des 2. Pekinger lCang skya Qutoqtu Rol pa'i rdo rje (1717-1786). Monumenta Tibetica Historica, Ab.Ⅲ, Bd. 1. St-Augustin : VGH Wissenschagtsverlag, 1976.

Latimore, O. The Mongols of Manchuria. London : George & Unwin, 1934.

Ligeti, Louis. "Review of Qutuɤtu pañcarakṣā kemekü Tabun sakiyan neretü yeke kölgen sudur". Acta Orientalia Hungaricae, 14 (1962) 317-328.

----------. "A propos de la version mongole des 《Douze actes de Bouddha》". Acta Orientalia Hungalicae, 20 (1967) 59-73.

----------. Monuments préclassiques Ⅰ,XⅢe et XⅣe siecles. Monumenta linguae mongolicae collecta Ⅱ. Budapest, 1972.

----------. Les douze actes du Bouddha : Arban qoyar jokiyangɤui üiles de Chos kyi 'od zer, Traduction de Shes rab seng ge. Monnumenta Linguae Mongolicae Collecta V. Budapest, 1974.

Macdonald, A. "Préambule à la lecture d'un rGya Bod yig-tshang". Journal Asiatique, 1963, pp. 83-159.

Nakano Miyoko. A Phonological Study in the 'Phags pa Script and tha Meng-ku Tzu-yün. Oriental monograph Series, No. 7. Canberra : Australian National Univ. Press, 1971.

Pelliot, Paul. "Les 國師 kouo-che ou 《maîtres du royaume》 dans le bouddhisme chinois". T'oung Pao, 12 (1911), 671-676.

----------. "Les systèmes d'écriture en usage chez les anciens Mongols". Asia Major, 2 (1925) pp. 284-289.

Petech, R. China and Tibet in the Early 18th Centurry : History of the Establishment of Chinese Protectorate in Tibet. Monographies du T'OUNG PAO,

Vol. I. LEIDEN : E.J.BRILL, 1950.

----------. "The Dalai-lamas and regents of Tibet : a Chronological Study". T'oung Pao, 47 (1959) pp.368-394.

----------, Preface. dPag-bsam-ljon-bzang of Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor. Part III. Ed. Lokesh Chandra. SPS, Vol. 8. New Delhi, 1959a.

----------. "The Mongol Census in Tibet". In Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson : Proceedings of tha International Seminar on Tibetan Studies -Oxford 1979. Warminster England : Aris & Phillips Ltd. 1980.

Poppe, Nicolaus. The Mongolian Monuments in 'Phags-pa script. Wiesbaden : Otto Harrosowitz, 1957.

----------. The Twelve Deeds of Buddha : A Mongolian Version of the Lalita-vistara. Mongolian Texts, Notes and English Translation. Asiatische Forschungen, Bd. 23. Wiesbaden : Otto Harrasowitz, 1967.

Richardson, H.E. "The Karma-pa Sect : A Historical Note, Part I". Journal of the Royal Assiatic Society, 1958, pp. 139-164.

Sagaster, Klaus. Subud Erike (Ein Rosenkranz aus Perlen) : Die Biographie des 1. Pekinger lCang skya Khutukhtu Ngag dbang blo bzang chos ldan, verfasst von Ngag dbang chos ldan alias Shes rab dar rgyas. Asiatische Forschungen, Bd. 20. Wiesbaden : Otto Harrasowitz, 1967.

Schlagintweit, E. "Die Berechnung der Lehre, Eine Streitschrift zur Berichtigung der buddhistischen Chronologie, verfasst im Jahre 1591 von Sureshamati -bhadra, Aus dem Tibetische übersetzt". Abhandlung der Königlich -Bayerischen Akademie der Wissensch. Phil.-Philol. Cl., Bd. 20, Abt. 3, München, 1897, pp. 591-670.

Schuh, Dieter. Untersuchungen zur Geschichte der tibetischen Kalenderrechung. Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementbd. 16. Wiesbaden, 1973.

----------. "Wie ist die Einladung des fünften Karma-pa an den chinesischen Kaisserhof als Fortführung der Tibetpolitik der Mongolen-Khane zu verstehen ? " In Altaica Collecta. Ed. W. Heissig. Wiesbaden : Otto Harrasowitz, 1976, pp. 209-244.

----------. Erlasse und Sendschreiben mongolischer Herrscher für tibetische Geistliche. Monumenta Tibetica Historica, Ab.III, Bd.1. St.Augustin : VGH Wissenschaftsverlag, 1977.

Sørensen, Per Kjeld. "A XIV. Century Tibetan Historical Work : rGyal rabs gsal ba'i mi long, Author, Date and Sources". M.A.Thesis, Univ. of Copenhagen, 1981 (?).

Stein, R. A. "Mi-nyag et Si-hia, géographie historique et legendes ancestrales". BEFEO, 44 (1951), 223-265.



Szerb, J. "Glosses on the Oeuvre of Bla ma 'Phags-pa, I : On the Activity of Sa-skya Pandita". In Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson : Proceedings of tha International Seminar on Tibetan Studies-Oxford 1979, pp. 290-300. Warminster England : Aris & Phillips Ltd. 1980.

----------. "Glosses on the Oeuvre of Bla ma 'Phags-pa, II : Some Notes on the Events of the Year 1251-1254". Acta Orientalia Hung., 34 (1980), 263-285.

Tucci, Giuseppe. Tibetan Painted Scrolls. Rome : la Libreria Dello Stato, 1949.

----------. The Religions of Tibet. Tr. Geoffrey Samuel. London & Henley : Routledge & Kegan Paul, 1980. (First Published in Die Religionen Tibets und der Mongolei, 1970.)

Vladimircov, B.Ja. Bodhicaryavatara : Cantideva Mongol'skij perevod Chos kyi 'od zera. I. Tekst. Bibliotheca Buddhica 28. Leningrad, 1929.

Vostrikov, A.I. Tibetan Historical Literature. Tr. H. Ch. Gupta. Soviet Indology Series. Calcutta : Indian Studies, 1970. (Originally published in 1962.)

Wylie, Turrell V. "The First Mongol Conquest of Tibet Reinterpreted". Harvard Journal of Asiatic Studeies, 37 (1977), 103-133.

----------. "Khubilai Khaghan's First Viceroy of Tibet". Tibetan and Buddhist Studies : Commenmorating the Alezander Csoma de Körös. Ed. L. Ligeti. Vol. 2, pp. 391-404. Budapest : Akademiai Kiado, 1984.

[Addendum]

Ligeti, Louis. Catalogue du Kanǰur Mongol Imprimé. Bibliotheca Orientalis Hungarica III. Budapest : Société Körosi Csoma, 1942.

## 4. ロシア語および現代モンゴル語の文献


Академия наука СССР. Русско китайские отношения в XVII веке : материалы и документы том.1 1700-1725. Москва: Издательство (Наука), 1978.

----------Русско монгольские отношения 1636-1654 : сборник документов. Материалы по истории русско-монгольских отношений, Москва: Издательство (Наука), 1974.

---------- Русско монгольские отношения 1607-1636 : сборник документов. Материалы по истории русско-монгольских отношений, Москва: Издательство (Наука), 1959.

Дылыкова,С.Д. Их цааз (< Великое уложение>): Памятник монгольского феодального права. XVIIв. Москва: <НАУКА>, 1981.

Златкин, И.Я. История джунгарсково ханства 1635-1758. издание второе, Москва: Издательство (Наука), 1983.

Пубаев,Р.В. (Пагсгм.чжонсан): Памятник тибетской историографий XVII века. Новосибирск: Издательство (Наука), 1981.

Шагдарын,Б. Монгольская историография(XIII-XVIIвв). Москва: Академии наука СССР, 1978.

Coyiji "Siregetu güüsi corji yin tuqai nokuburi ögöleku kedun jüil." 『蒙古史研究』 第一輯 内蒙古人民出版社, 1985. pp.153-160.

Далай,Ч. Монголын бөөгийн морголийн товч тууж. studia ethnografica instituti historica comiteti cientlarum et eduiations 3 altae reipublicae populi mongoli, Toumus I. УЛБ, Улаанбаатар: <ШУАХ>, 1959.

Дамдинсрэн,Д. Монголын уран зохиолын тойм. Улаанбаатар: <ШУАХ>, 1976.

liu jin suwfi. arban yurban-arban doloduyar jayun u mongyol un teuke bicilge. 内蒙古人民出版社, 1979.

Пагва,Т. "Зүрхний тольтын гайлбар" нг судалсан тухай тэмдэглэл. Улаанбаатар: <УХГ>, 1957.

Пүрэвжав,С. Монгол дахь шарин шашны хурангуй тууж. Улаанбаатар: <ШУАХ>, 1978.

Пэрлээ,Х. Монголын хувьсгалын оино үеийн тууж бичлэгийн асуудалд. Улаанбаатар: <ШУАХ>, 1958.

Церенсодном,Д. XIV зууны үеийн яруу найрагч чойжи-одсер. Улаанбаатар: <ШУАХ>, 1969.




## 5. 漢文文献


韓儒林 「青海佑寧寺及其名僧」 『穹廬集』pp.390-415.
「元朝中央政府怎様管理西蔵地方的」 『穹廬集』pp.425-434.

揚建新 「蒙古族傑出的政治家阿勒坦汗」 『蒙古族歴史人物論集』中国社会科学出版社、1981, pp.125-138.

張植華 「略論喝爾丹与西蔵僧俗統治者的関係」 『蒙古族歴史人物論集』中国社会科学出版社、1981, pp.196-212.

王宏鈞、劉如仲 『准噶爾的歴史与文物』青海人民出版社、1984.

呂一燃 「喝爾丹"服毒自殺"説弁偽」 『歴史研究』 6, 1980.12, pp.60-62.

郭鴻林 「反映平定喝爾丹叛乱的歴史圖軸」 『文物集刊』 1985.9, pp.75-79.

盖山林 「呼和浩特市有関平定喝爾丹叛乱的文物」『文物集刊』1985.9, pp.71-74.

陳慶英 史為民 「蒙哥汗時期的蒙蔵関係」 『蒙古史研究』 第一輯 1985年 内蒙古人民出版社

胡斯振 白翠琴 「1257年 釈迦院碑考釈」 『蒙古史研究』 第一輯 1985年 内蒙古人民出版社

汪景祺 『讀書堂西征随筆』 上海書店出版 1984年

昭槤 『嘯亭雑録』 10巻、續録 3 巻嘉慶から道光の間に成立。、中華書局出版 1980年

才旦夏茸 『蔵族歴史年鑒』青海民族出版社 1982年

丁實存 「歴代哲布尊丹巴呼圖克圖傳略」 『學源』 1-2 1947, pp.49-58, pp.55-64.

妙舟法師 『蒙蔵仏教史』 上海 1936年

程廷恒 『呼倫貝爾志略』民国13年

何秋濤 『朔方備乗』 68巻、1859年頃。

祁韻士 『皇朝藩部要略』18巻付表 4巻、道光19年 (1836)
『西陲要略』4巻、嘉慶12年 (1807)

魏源 『聖武記』14巻、道光22年 (1842)

高宗敕 『欽定外藩蒙古回部王侯表傳』120巻、乾隆53年 (1788)

張穆 『蒙古遊牧記』16巻、

蕭大亨 『北虜風俗』1巻、明末

玄奘 『大唐西域記』12巻、大正蔵 51巻

發哈思巴 『彰所知論』2巻、大正蔵 32巻 No.1645

## 6. 邦文文献


青木富太郎「崇徳五年をめぐるダライラマ延請中止について」『江上波夫古稀記念論集：歴史篇』山川出版　1977. pp.375-394.

愛宕松男　「元朝に於ける佛寺道観の税粮優免について」『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』 1961. Pp. 242-255.

石濱純太郎「邦訳 アルタン・トプチ(蒙古年代記)について---外務省調査部第三課發行---」『東洋史研究』 4-4,5. 1939年6月　pp.74-76.

稲葉正枝　「元のラマ僧瞻巴について」『印度学仏教学研究』 11-1, 1963, pp. 180-182.

稲葉正就　「蒙古語古典文法書に及ぼしたる西蔵仏教文法学の影響」『仏教史学』 No. 3 (1953), pp. 260-266.

「元の帝師に関する研究--系統と年次を中心として--」『大谷大学研究年報』17, 1965, pp. 81-155.

稲葉正就・佐藤長　『フゥラン・テプテル--チベット年代記--』法蔵館 1964年.

井邊一家　「喝爾丹侵入当時の外蒙古喀爾喀」　『史淵』　第十九輯、　1938年 pp.226-346.

今枝由郎　「パクパ 'Phags pa 造『道士調伏偈』について」『東洋学報』56-1, 1974年, pp. 41-48.

岡田英弘　「蒙古史料にみえる初期の蒙蔵関係」『東方学』23, 1962, pp. 95-108.

「シャンバ撰（パリンライ編）アサラクチ・ネレト・テウケ--新出の一蒙文年代記---」　『東洋學報』　48-2.批評と紹介, 1965年9月 pp.114-119.

「Cortu Qong Tayijiについて」　『アジア・アフリカ言語文化研究』一、1968年 pp.111-125.

「ドルベン・オイラトの起源」　『史學雑誌』　83-6, 1974年 pp.1-43.

「元朝秘史の成立」　『東洋學報』66-1.2.3.4. 1985年 pp.157-177.

加藤直人　「一七二三年ロプサン・ダンジンの反乱」　『内陸アジア西アジアの社会と文化』,1983年 pp.323-349.

金岡秀友　「蒙古文大蔵経の成立過程」　『仏教史学』 6-1　1957年　pp.41-57.

川上晴　「アブライの勢力拡大：十八世紀カザフスタン史に関する一考察」　『待兼山論叢』史学篇　十四、1980、pp.27-49.

江實　「 Altan tobci について」　『アジア・アフリカ言語文化研究所』2. 1969年　pp.197-203.

小林高四郎 譯註　『蒙古黄金史』 生活出版版 1941年

佐藤長　「近世青海諸部落の起源(上・下)」　『東洋史研究』 32-1,2, pp.78-106, pp.61-88. 1973年

「ロプサンダンジンの反乱について」　『史林』　55-6, 1972年 pp.1-32.

「第三代ダライラマとアルタンハンの會見について」　『東洋史研究』　42-3, 1983, pp.79-109.

芝田栄一　「アルタン・トプチ・ノヴァ研究序説」　『仏教史学』12-3. 1966年　pp.39-54.





「アルタン・トプチ・ノヴァ譯註 (1),(2),(3)」　『仏教大学研究紀要』 49. pp. 1-37 1966年, 51.pp.38-77 1967年, 52.pp.78-134 1968年

立川武蔵　『西蔵仏教宗義研究』第１巻--トゥカン『一切宗義』サキャ派の章--　東洋文庫　1974年.

中野美代子　「帝師八思巴行状校証」『香港中文大学新亜学報』9-1, 1969, pp. 93-119.

『砂漠に埋もれた文字--パスパ文字のはなし』橘新書、橘書房 1971年.

西岡祖秀　『西蔵仏教宗義研究』第２巻---トゥカン『一切宗義』シチェ派の章---,　東洋文庫, 1978年

「『プトゥン仏教史』目録部索引Ⅲ」『東京大学文学部　文化交流研究施設研究紀要』6, 1983年, pp. 47-201.

野上俊静　「元代道・仏二教の確執」『大谷大学研究年報』2, 1943年, pp. 213-275.

「元の宣政院に就いて」『羽田博士頌寿記念東洋史論集』1950年 pp. 779-795.

萩原淳平　『明代蒙古史研究』　同朋社　1980, pp.295-400.

橋本 光寶　『蒙古の喇嘛教』　佛教公論社　1942年

羽田 明　「ガルダン傳雑考」　『石濱博士古稀記念東洋史論叢』, 1958年 pp.459-470.

「ガルダン傳考證」　『東方学會十五周年記念論集』, 1962年 pp.212-232.

「厄魯特考」　『東方學』　10　1955年 pp.120-129.

「再び厄魯特について」　『史林』　54-4　1971年　pp.30-57.

『中央アジア史研究』　臨川　1982年

羽田野伯猷「Tantric Buddhism における人間存在」『東北大学文学部研究年報』9, 1958年, pp. 1-79.

「チベット仏教受容の条件と変容の一側面」『日本文化研究所研究報告』4, 1963年, pp. 1-153.

「チベット大蔵経縁起（その一）---ナルタン大学間寺の先駆的事業をめぐって---」『鈴木学術財団研究年報』3, 1966年, pp. 35-83.

平松敏雄　『西蔵仏教宗義研究』第２巻---トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章---,　東洋文庫, 1982年.

藤島建樹　「元朝『宣政院』考---その二面的性格を中心として---」『大谷学報』46-4, 1967年, pp. 60-72.

二木博史　「白樺法典について」『アジア・アフリカ言語文化研究所』21、1981, pp. 49-73.

「譯註白樺法典（Ⅱ）」　『モンゴル研究』12, 1981a, pp.50-63.

松長有慶　『密教の歴史』サーラ叢書19, 平楽寺書店, 1969年

宮脇淳子　「十七世紀清朝帰属時のハルハ・モンゴル」『東洋学報』61-1/2. pp.108-138.

「モンゴル=オイラット関係史--十三世紀から十七世紀まで--」Journal of Asian and African　Studies, No.25, 1983,　pp.150-193.

「ガルダン以前のオイラット：若松説再批判」『東洋學報』65-1.2, 1984, pp. 91-120.

「十七世紀のオイラット『ジューン・ガル・ハン国』に対する疑問」 『史学雑誌』 90-10, 1981, pp.40-61.

森川哲雄 「ハルハ・トゥメンとその成立について」 『東洋學報』55-2, 1973, pp.32-63.

「オルドス十二オトク考」『東洋史研究』32-3, 1973, pp.32-60.

「トゥメト・十二オトク考」『江上波夫教授古稀記念論集：歴史篇』山川出版, 1977, pp.529-549.

「『四オイラト史記』に見られるアムルサナの事績」『森三樹三郎博士頌寿記念東洋學論集』朋友書店、1979, pp.871-886.

「十七世紀前半の帰化城をめぐって」 『内陸アジア西アジアの社会と文化』 1982年 pp.373-390.

「十七世紀初頭の内蒙古における三人の仏教の高揚者について。」 『蒙古史研究』 第一輯 内蒙古人民出版社 1985年 pp.161-173.

森安孝夫 「チベット語史料中に現れる北方民族」 『アジア・アフリカ言語文化研究所』 14, 1977, pp.1-48.

山口瑞鳳 「顧実汗がチベットに至る経緯」 『岩井博士古稀記念転籍論集』 開明堂 1963年 pp.741-773.

「チベットの暦学」『鈴木学術財団研究年報』10, 1973年, pp. 77-94.

「諸王統明示鏡」『東洋学報』60-1・2, 1978年, pp. 1-18.

「チベット史料の年次計算法」『東洋学報』63-3・4, 1982年, pp. 373-400.

矢野 仁一 『近代蒙古史研究』 弘文堂書房 1925年

吉田順一 「ロプサン・ダンジンの『アルタン・トプチ』に引用されている『蒙古の秘史』について」『東洋學報』 55-1. 1972年 pp.1-34.

「ロプサン・ダンジンの『アルタン・トプチ』と著者不明『アルタン・トプチ』」 『史観』 89.1974年 pp.60-76.

「『アサラクチ・ネレト・イン・テウケ』と『モンゴル秘史』」 『日本モンゴル学会会報』 9 1977年 p.5-17.

若松 寛 「カラクラの生涯」 『東洋史研究』 22-4 1964年 pp.1-35.

「ツェワン・アラプタンの登場」 『史林』 48-6 1965年

「カルムックにおけるラマ教受用の歴史的側面」 『東洋史研究』 25-1 1966年 pp.92-105.

「ジュンガル汗位継承の一経緯」 『田村博士頌寿東洋史論叢』 1968年 pp.647-666.

「センゲ支配期のジュンガル汗国の内乱」 『遊牧社会史探求』 42 1970年 pp.1-16.

「蒙古ラマ教史上の二人の弘法者----ネイチ・トインとザヤパンディタ」 『史林』56-1 1973年 pp.71-98.

「ガルダンシレトゥ・フトゥクト攷----清代の駐京フトクト研究」 『東洋史研究』33-2 1974年 pp.1-33.

「ボグドチャガンラマとココホトのラマ教」 『鷹陵史學』 1 1975年 pp.9-40.

「ロシア史料より見たグシ汗の事績」 『史林』59-6 1976年 pp.42-69.



「アルトゥン・ハーン傳考證」 『内田吟風博士頌寿記念東洋史論集』 同朋社 1978年 pp.519-542.

「アルトゥン・ハーン三世傳考證」 『京都府立大學學述報告・人文』 30 1978年 pp.1-13.

「ジルン活仏小伝----清・チベット関係の一面」 『仏教史学研究』 21-1 1978年 pp.19-45.

「西寧トンコル・フトクトの事績」 『立命館文学』 418-421合併 1980年 pp.318-341.

「ツァガン・ノムンハンの事績」 『京都府立大学学術報告・人文』 32 1980年pp.1-13.

「ザイン・ゲゲン伝考証」 『内陸アジア西アジアの社会と文化』 1982年 pp.391-409.

和田清 『東亜史研究(蒙古篇)』 東洋文庫 1959年

昭和61年3月20日　印刷
昭和61年3月25日　発行　　非売品

西蔵仏教宗義研究（第四巻）
—トゥカン『一切宗義』モンゴルの章—

著　者　福田洋一
　　石濱裕美子

発行者　東京都文京区本駒込2丁目28番21号
　　財団法人　東洋文庫
　　榎一雄

印刷者　東京都練馬区大泉町3丁目34番10号
　　有限会社　日本興業社
　　土田等

発行所　東京都文京区本駒込2丁目28番21号
　　財団法人　東洋文庫

本書は東洋文庫に対する昭和60年度文部省補助金の一部により刊行された。